

共生を拓く日本社会 担当メンバー

津田 葵	〈事業推進者・言語文化研究科教授〉
西口光一	〈留学生センター教授〉
山下 仁	〈言語文化研究科助教授〉
植田晃次	〈言語文化研究科助教授〉
高阪香津美	〈RA (COE)・言語文化研究科博士後期課程〉
呉 恵卿	〈言語文化研究科博士後期課程〉
新庄あいみ	〈言語文化研究科博士後期課程〉
布尾勝一郎	〈言語文化研究科博士前期課程〉
佐藤誠子	〈言語文化研究科博士前期課程〉

目次

まえがき

津田 葵 5

中部地方外国人集住地域における共生への歩み：交流のきっかけづくり

津田 葵・高阪香津美 7

「多文化共生」をめぐる現状と未来：ある韓国系民族学校の事例から

呉 恵卿・植田晃次 67

大阪における多言語表示の実態：まちかど多言語表示調査、外国人へのアンケート調査、行政・鉄道へのインタビュー調査から

佐藤 誠子・布尾 勝一郎・山下 仁 105

メディアが呈示する日本語教室と日本語ボランティア

新庄あいみ・西口光一 147

資料 181

活動記録 217

まえがき

津田 葵

「共生」という概念は日本社会の最近の人口推移をみると一目瞭然である。2004 年末の時点で日本に住む外国人は 197 万 3,747 人を数え、日本の総人口の 1.55%を占めている。そのうち、約 48 万 9,000 人は 19 世紀末前後から日本に居住するオールド・カマーで在日韓国・朝鮮人、在日中国人である。これらの人々にたいして、1970 年代末から日本に来てその後かなり長期間にわたって滞在する外国人の数は増加の一途を辿っている。オールド・カマーの人々とニュー・カマーの人々は日本社会に人口比率の上でも、文化的にも、言語的にも大きな変化をもたらしてきた。

こういった日本社会の変動に目を向け、「COE：言語の接触と混交」津田班は 2002 年末から「共生」をメインテーマとして研究を積み上げてきた。2002・2003 年度は通時的、共時的観点から「日系ブラジル人をとりまく日本社会」に焦点を絞った。2004 年度は「共生を生きる日本社会」であった。このたびはこのテーマをさらに深化し、「共生を拓く日本社会」を掲げる。私たちは日々社会生活を営む上で、ただ受身的に状況を受け入れ生きてゆくのみでなく、ひとりひとりが社会の構成メンバーとしてダイナミックに「共生」を拓く存在となってゆくという姿勢が不可欠であると考えられる。こうした視点からこのテーマを深めたのが本報告書である。

第 1 論文では外国人集住地域をフィールドとし、そこで展開されている共生への歩みを日本人、外国人からのアンケート調査、インタビュー調査などを軸として「現場」の声を収集し、分析を試みた。また、「共生」に向けての取り組み、外国人集住都市会議にみる「共生」の実態と課題を通してハード面、ソフト面の双方的アプローチからみえてきた現状を概観した。第 2 論文では韓国系民族学校に

焦点をあて、参与観察から得られた前回の報告書に加え、アンケート調査を実施し、より総合的に考察を行った。具体的な内容としては、異なる背景をもつ生徒たち自身がどのように自分自身を位置づけ評価しているのか、どのような形で「共生」が実現されているのか、教員はこのためにどのような支援をしているのかなどが中心テーマとなっている。

第3論文は今日の日本社会における多言語化現象に関する問題を取り上げた。外国人に対する言語サービスのひとつである多言語表示がどのように作成され、需要されているのかを多角的に探った。まず、今日の大阪周辺における多言語表示の実態を探るためのまちかど多言語表示調査である。次に、多言語表示を必要とする外国人がどのように多言語表示を需要しているのかをみてみた。最後に表示を発信している行政機関などの意識を明らかにするために、発信者側を対象とした聞き取り調査を実施した。最後の第4論文では、地域の日本語学習支援活動に焦点を定め、多文化共生社会への原動力としての「日本語教室」を新聞メディアに反映された姿として考察した。分析にあたって、全国紙の5紙を扱った。それらの新聞記事から新聞メディアの「日本語教室」の批判的分析を試みて初めてみえてくる「日本語教室」の実態が浮き彫りになったことを論じる。

今、日本社会が直面している多国籍化といった状況は日本人も外国人もともに生きるパートナーとして、互いに支えあう関係が前提となって初めて社会参加を促す仕組みづくりが可能になると考えられる。いいかえると、外国人を私たちと同等の「生活者」として位置づけ、日本社会で自立し、究極的には地域社会の支え手になるということである。

多文化共生への社会的関心が高まり、その概念が社会的にも認知されてきた現在、こういったテーマに関する建設的なインスピレーションをこの報告書を通じて提供することができれば幸いである。

中部地方外国人集住地域における共生への歩み ー交流のきっかけづくりー

津田 葵・高阪香津美

1. はじめに
2. 研究課題の設定：メディアを通してみるB地域の「現場」の声
 - 2.1. 「ご近所の底力」2003年12月11日放送から
 - 2.2. 「ご近所の底力」2004年5月27日放送から
3. その後の動き：B地域の役職者のインタビュー調査から
 - 3.1. 自治会長：山本（仮名）さん
 - 3.2. 民生委員：田中（仮名）さん
 - 3.3. 商店街会長：鈴木（仮名）さん
4. B地域のブラジル人住民のインタビュー調査から
 - 4.1. 食料品店店員：マリア（仮名）さん
 - 4.2. 食料品店店長：パウロ（仮名）さん
5. 「共生」にむけての取り組み
 - 5.1. 地域レベルを超えて：U B J
 - 5.2. 共生サロン
 - 5.3. SASAEDADE 教室
 - 5.4. 日本語教室「つばさ」
 - 5.5. 行政による取り組み
 - 5.6. C公団における共生に向けての諸活動
6. B地域と近隣するD地域における「現場」の声：アンケート調査から
 - 6.1. B地域からの声：日本人住民

- 6.2. D地域からの声：日本人住民
- 6.3. B地域からの声：ブラジル人住民
- 6.4. D地域からの声：ブラジル人住民

- 7. 外国人集住都市会議にみる「共生」：現状と課題
 - 7.1. 地域ブロック3リーダー市からの報告
 - 7.2. 多文化を生きる子ども、子ども関係者からの意見発表
 - 7.3. 外国人の子どもたちのために：パネルディスカッション
 - 7.4. 国の対応と今後の課題
- 8. おわりに

参考文献

1. はじめに

中部地方のA市は平成17年に合併したK町の人口と合わせて、平成17年5月の時点で31万384人を数え、外国人登録者数は2.8%の8,628人である。そのうち、もっとも大きな割合を占めるのがブラジル出身者の3,575人である。

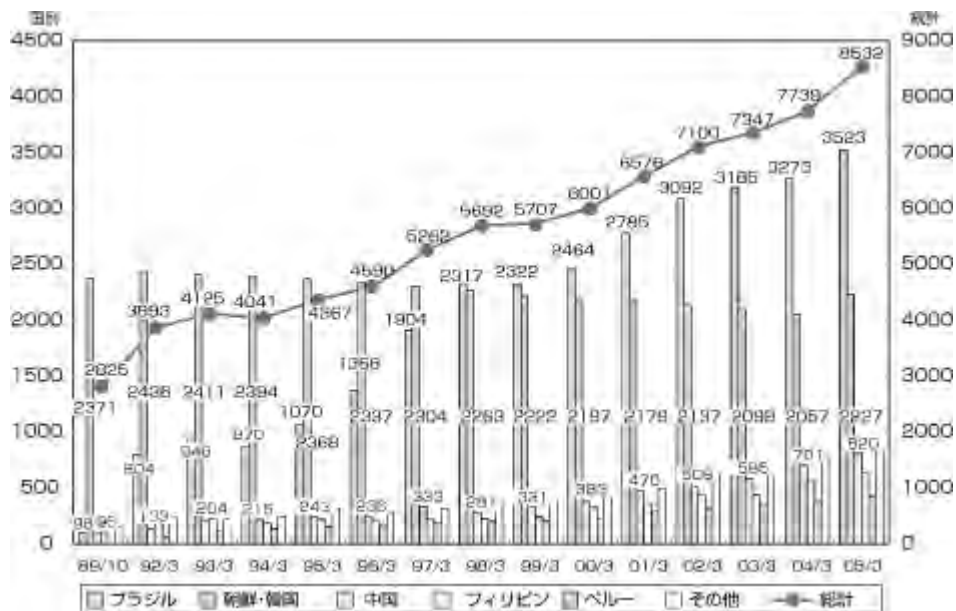


図1. A市外国人登録者数の推移（人）

（「多文化共生のとびら」より引用）

A市の外国人登録者数の3割である2千数百人が西南部に位置するB地域で生活している。彼らのほとんどがその地域にあるC公団に居を構え、その結果、C公団総人口に占める外国籍住民の比率は40%強に達する。その公団は昭和46年に人々が入居し始め、あと3年もすると40周年を迎える。（写真1.参照）

C公団に住む外国籍住民のうち、そのほとんどがブラジルから就労目的で来日したブラジル国籍の人々である。そのため、30棟以上もある団地周辺を歩いてみると日本人が経営する本屋、お茶屋に並んで、ブラジルの食品を扱うスーパー、

ブラジルレストラン、異国情緒的な品物が店頭を飾っている果物屋、居酒屋、外国語で表示されたプレートの精肉店、教会の看板などが目に入り、特有のコミュニティの雰囲気醸し出している。そこはまさに日本にいながらブラジルの生活を手にいれることができる空間となっている。



写真 1. C 公団のある風景（津田撮影）

また、団地住民用の駐車場、ごみ収集所、団地の階段掲示など、すべてポルトガル語と日本語の併記であるのはもちろんのこと、団地近隣の日本人が経営している八百屋でもブラジル人¹客を意識してか、レタス／alfaceという具合に野菜や果物の名称はすべて両言語で表記され、品物が陳列されている。こうした環境下にあるC公団では日本社会の中にうまくブラジル文化が溶け込み、一見、日本人とブラジル人住民との間の共生が進んでいるかのように見える。（写真 2.参照）

¹ この章では、法的・政策的な視点を示すときは「日系人」、就労や生活実態を表すときは「ブラジル人」、両方の意味を持たせるときには「日系ブラジル人」とする。



写真 2. C 公団の掲示板（津田撮影）

平成 18 年の元旦に再び B 地域を訪ねてみると²、エキゾチックな音楽が耳に入ってきた。夜遅くまで就労に勤しみ、新しい年を迎えるにあたってふるさとの音色の響きに一時の心の安らぎを得ているのであろう。ある一面では外国籍の子どもたち数人が視界に入ってきた。筆者らの姿を見つけると、その子どもたちは異国語でのやりとりを止め視線を一瞬こちらにむけたが、すぐにもとのやりとりにもどっていった。お正月であるというのに晴れ着を身にまとうこともなく、家のそれぞれの玄関にしめ飾りをつるしたり、門松を飾ったりするわけでもなく、まわり一面、日本語を介した人と人との多くのやりとりもみられないとなると、人間関係の希薄さとともに異次元での出会いを感じないではいられない。（写真 3. 参照）

この C 公団から少し離れた場所に昔からの民家が立ち並ぶ D 地域がある。C 公団ほど外国人住民が集住していないにしるブラジル人が暮らしている地域である。そこではブラジル人の姿を頻繁に目にするのではないが、C 公団と同様、テナントが募集した貸し店舗にブラジルレストラン、精肉屋、レンタルビデオ店、カポエイラ教室など数軒が入っておりブラジル人コミュニティが形成されている

² このフィールドワークのため、津田は 6 回、高阪は 5 回現地を訪れた。

ことから、彼らの存在を確認することができる。やはりそこも周りとは明らかに異質な様相が広がっており、日本の中の「小さなブラジル」と呼ぶにふさわしい環境がある。



写真 3. C 公団のブラジル人の子どもたち (津田撮影)

本稿ではA市に起こっている現実には焦点をあて、B地域およびD地域を中心とした外国人と日本人住民との共生への姿勢を聴き取り調査（テレフォンインタビュー³も含む）、アンケート調査、外国人集住都市会議で分かち合い、討議された観点を基盤に考察する。同じ生活空間に居住している人々同士がどのようにコミュニティを形作っているのか、そして、どのようなことが壁となっているのか、そのためのとっかかりとは何かといったことを中心に探っていく。

2. 研究課題の設定：メディアを通してみるB地域の「現場」の声

まず、B地域の外国人登録者数の推移を見てみよう。(表 1.参照)1995 年（平成 7 年）にB地域の総人口の 1.4%を占めていた外国人住民は年が進むにつれて、その割合が大きくなり、2005 年（平成 17 年）には 10.7%となっている。100 人い

³ 電話によるインタビューを実施したのは、長時間労働に従事しているブラジル人住民に対し、対面式でインタビューすることが物理的に非常に困難であり、調査協力による調査参加者の負担を少しでも和らげるためである。

れば10人か11人が外国人ということになる。

表 1. A 市、B 地域の人口の推移

西暦 (年)	平成 (年)	総 人 口 (人)	外国人登 録 者 数 (人)	割合 (%)	A市 外国人登 録 者 数 (人)	B地域 外国人登 録 者 数 (%)
1995	7 年	25,682	349	1.4	4,423	7.9
1996	8 年	25,792	498	1.9	4,982	10.0
1997	9 年	25,759	720	2.8	5,363	13.4
1998	10 年	26,009	1,071	4.1	5,729	18.7
1999	11 年	26,023	1,354	5.2	5,839	23.2
2000	12 年	25,788	1,575	6.1	6,156	25.6
2001	13 年	26,065	1,952	7.5	7,000	27.9
2002	14 年	26,069	2,145	8.2	7,182	29.9
2003	15 年	26,006	2,304	8.9	7,521	30.6
2004	16 年	25,937	2,524	9.7	8,084	31.2
2005	17 年	25,864	2,760	10.7	8,964	30.8

(B 地域市民センター情報提供)

それに従って、C 公団における外国人契約戸数も膨れ上がっている。以下の図 2 は C 公団の契約戸数の推移を日本人、外国人別に表している。これをみると、1998 年 3 月末現在の段階では外国人の契約戸数が 381 戸、日本人の契約戸数が 1,345 戸であったが、2005 年 3 月末現在においては、外国人の契約戸数が 709 戸、日本人の契約戸数が 1,017 戸となり、この 7 年間で日本人の契約戸数が減少する一方、外国人の契約戸数はなだらかなカーブを描きながら増加していることがわかる。その背後には公団に入居する場合、先着順、礼金・更新料 0 円、保証人不要というゆるやかな条件 (A 市駅前の看板から引用)、あるいは入居に際してほとんど条件を要求していないということにもよるであろう。そうした理由から

か、平成10年3月末には日本人と外国人の割合は77.9%対22.1%であったのが、平成17年には58.9対41.1%となっている。すなわち、この公団において、外国人は7年間のうちに約2倍に膨れ上がり、全体の40%強を占めていることがわかる。

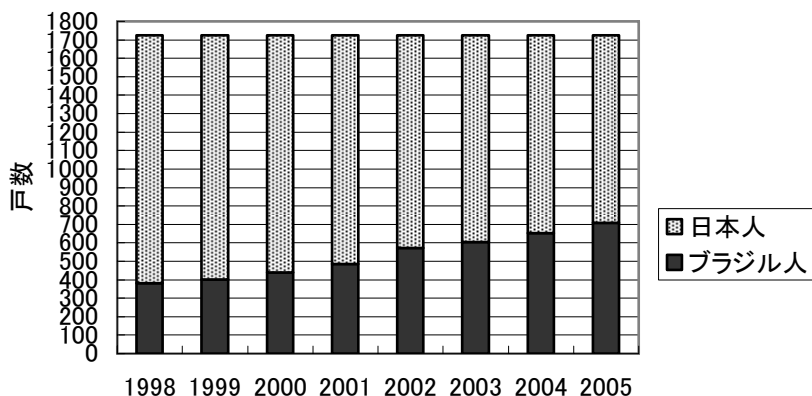


図2. C公団における外国人契約戸数

(URによる情報提供)

こういった人口の推移を背景に、B地域の人々がどのような気持ちを抱いているのかをまず、メディアを通して考察してみる。

2.1. 「ご近所の底力」2003年12月11日放送から

2003年12月に放映された番組をみてみよう。その番組の内容とは、C公団の日本人住民15人とブラジル人住民15人がそれぞれ公団で生活する上での悩みや不満をぶつけあい、双方がともに快適に暮らすためにはどのような方法があるのか、その問題の解決策をほかの地域の取り組みをヒントに導きだすというものだった。まず、ナレーターの声が響いてくる。「外国人の数は2002年の時点で185万人となりました。「騒音」、「ゴミ出し」といった問題で外国人と仲良く暮ら

す妙案は何でしょうか」。この番組での主要なテーマは「どうする外国人とのご近所付き合い」である。まず、司会者が日本人グループに向かって、「どんなことに困っているのでしょうか？」と質問をなげかける。するとすぐに、「騒音」という答えが返ってくる。それに対応して、『うるさい！』と大声で叫ぶ」と日本人グループの出席者が答える。それに対し、外国人のグループからすぐに応答が返ってくる。「そんな言い方は暴力的だ。『お願いします』と言ってくれれば」。こういったマナーの問題で二つのグループがぶつかり合い、考えや思いを固執し、それ以上前に進まない。こうした互いの主張に、「日本に來たのだから日本の習慣を受け入れるべきである」という意見が日本人の年配の男性から出され、この時点では日本人の出演者 15 人全員がこの意見に賛同していた。

ここで、ナレーターの説明が入る。公団の住人は約 4 割が外国人であること、ゴミ出しマナーの悪さ、分別もでたらめ、そのゴミの中に灯油も入っている。そして、散乱したゴミが画面を通して伝わってくる。(写真 4.参照)



写真 4. C 公団のごみ収集所の様子 (津田撮影)

窓から火がついたままのタバコの吸い殻を下に落とす。夜は騒音。深夜に及ぶパーティと日本人側からの発言。日本人はそれに対し、「こらー！」とどなる。ブラジル人は「週日は自動車メーカーや木材工場で息つく暇もなく労働に勤しんでいる。週末になってやっと疲れを癒す。しかし、最近は音楽をかけないようにして

いる」「ゴミの出し方がわからない」と口々に述べる。また、「それぞれ理由があってしている」と説明が加わる。日本人参加者間から非難の声が飛び交う。「おむつ、生ゴミを窓から落とすので注意すると、『わかりませーん』と答える」と続く。そこで、画面中央の大きなスクリーンに外国人に対して実際配布されているC公団のごみ収集日のちらしが映し出された。それをみると、ちらしの下の方に翻訳はついているものの曜日は漢字で書かれ、日付はまるで時刻表であるかのように細かいため、それはたとえ日本人であっても理解するのに非常に困難であるという印象を受ける。C公団の日本人参加者からも「日本人でもわからんですよ」、「ブラジル人ばかりを責めていてもだめやと思います」のように、ゴミ出しの件においてブラジル人住民にのみ責任を押し付けるのではなく、日本人、ブラジル人住民双方の態度を改めるべきであるということに日本人住民も少しずつ気がつき始めてきたようにみえる。

ここで、ナレーションが入る。「100人に聞きました。あいさつをしますか？」という質問に「いつもあいさつをする」という答えは外国人 54%、日本人 22%という数字を挙げる。すると、それを聞いて、外国人の方から「日本人は冷たいわ。私はことばがわからなくても、身振りやジェスチャーでコミュニケーションを行おうと努力しているのに」と苦言を呈する。

そこで、ほかの地域では日本人と外国人住民の共生に際し、どのような取り組みが行われているかが紹介された。双方の対立は愛知県のK市の団地で行われている秘策について司会者によって説明が入る。「まず、みんなが何か一緒にすることによってコミュニケーションが生まれる。あいさつ、団地の一斉清掃である。ところが、外国人が掃除に参加してくれない。そこで、掃除に欠席する人は外国人であれ、日本人であれ、罰金を払う。一律 2000 円。集めたお金で芝刈り機を購入し、地域の人々の益とする。また、もうひとつの秘策として、情報などを掲示板に張り出し、その上で一戸一戸訪ねて、回覧板を手渡しする。そうすることによって、コミュニケーションの機会が増える」。これらの秘策に耳を傾けて、日本人、外国人の両グループは賛成の意を表わす。「一斉清掃の日は 2 回に分けて選択制にしたらい。そうすると出席者も増える」、「罰金というかわりに本来、自分のやるべきことを他の人に任せるのだから、委任料と呼んだほうがよい」などと建設的な意見が出てくる。こうしてお互いを非難する雰囲気から全体がひと

つのゴールに向けて、積極的な意気込みが視聴者に伝わってくる。ここで、ナレーターが絵を見せながら、ある場での日本語教室の場面を紹介する。「教師は地域の住民で、その教え方はダイレクトメソッドを援用している。だから、教える側は必ずしも相手の母語、あるいは第二言語を介在として教えなくてもよい」。そして、器にもったご飯と箸の絵を呈示しながら、「箸でご飯を食べる」と説明し、「学習者はそれをリピートする」という具合に教授法を述べる。「日本語習得の授業時間の休み時間を利用して、自動車の免許証の書き換え、病院への行き方などを質問に答えるかたちで実務的な援助も盛り込む」と司会者が説明する。この場面を紹介すると、ブラジル人と結婚している日本人住民が手を挙げて、「私も日本語をそのようにして教えたい」と積極的な意見を述べる。それに呼応するように、日本人のグループの全員が「私たちもポルトガル語を学びたい」と手をあげる。ここにきて、両グループ間の交流のきっかけづくりのイニシアティブがとられた様子がメディアを通じて刻々と伝わってくる。

次に、同じ地域で生活を重ねて行く中で何かトラブルが起こったときに、どのように対処したらよいかという点に考察を移す。司会者が 12 カ国の人々が居住している地域のことを説明し、その映像が流される。それぞれの国から代表を決め、定期的に会合を開く。その場では、対等に意見が言えることを前提としており、夜の騒音で問題が起きたときは代表者が寄り合い、討議を重ねる。外国人の意見を吸収してルール（きまり）を作る。そして、それに違反したグループに注意する人は問題を起こした人やその家族と同じ国のリーダーが行う。つまり、リーダーが同国出身者同士のみとめ役であると同時に、日本人住民と外国籍住民のパイプ役を果たす。この妙案に対し、スタジオのブラジル人から「リーダーになるのは難しい。負担がかかる」、「ブラジル人同士も十分知り合っていないのに、代表者（リーダー）を選びようがない」といった消極的な意見が出てくる。ここで、同じ仲間が手を挙げて、「恐がらないで！日本語ができる人が通訳をすることによってできるのでは。そして、そうすることによって、そのことはみんなのためになる。いいことづくめではないか」という強い賛成意見が述べられ、最終的には「その案をすぐに実行しよう」ということで、全員合意にたどり着いた。そして、「出会うきっかけづくり隊」と書かれたひとつのプラカードを外国人の代表者と日本人の代表者が掲げ、もう一方の手を差し出し、しっかりと両者が握手を

交わしてめでたしめでたしとなって、この番組が終了となった。

よりよきコミュニティづくりのために、なんらかのルールをつくること、トラブルが起こったときの解消の方法、共に活動することによるコミュニケーションの促進などが今後の課題となった。番組のエンディングに、番組収録3日後にスタッフがC公団を訪れた際の様子が紹介されていた。そこには、「気長にやらなければ」、「少しずつみんな友達になりたい」と話す住民、また、年末の一斉清掃の参加者を募るために各戸を直接訪問しひとりひとりに丁寧に説明する住民の姿があった。

2.2. 「ご近所の底力」2004年5月27日放送から

2004年5月に放映された番組内容は2003年11月の際と比較し、どのような点においてC公団内に変化が生まれたのか、C公団のその後を表わすもので、番組ホームページには以下のように記されている。

住民たちは、妙案に習って日本語教室をスタート。その名も「出会い教室」。日本語だけではなく外国人も日本人に母国語を教え、互いの理解を深めようとしています。しかし、外国人は仕事が忙しかったりして、休みがちな人も増えてきました。そこで、「出会い教室」のメンバーは、団地恒例の春祭りを契機に仲間を増やそうと考えました。今までの春祭りは、日本人向けでしたが、今年からは外国人にも参加してもらおうと実行委員会に呼びかけたのです。ここで「出会い教室」の宣伝をすれば仲間も増えるのではないかとメンバーは考えました。春祭り当日。お客さんは2000人を超え、日本人と外国人が一緒に楽しみました。「出会い教室」のビラもたくさん配ることができました。祭りの後、「出会い教室」にも新しいメンバーが訪れたそうです。（番組ホームページより）

「出会い教室」と名づけた日本語教室や外国籍住民に春祭りへの参加を呼びかけるなど2003年の頃に比べると日本人住民と外国籍住民の交流が少しずつ形として現れてきたことがうかがえる。そこで、次章では番組放映時からさらに一年が経過した2005年、C公団における双方の住民の共生はいかなる状況であるの

か、上述の課題をどのように対処したのかを役職者のインタビュー、一般住民へのアンケート調査を通して考察してみる。

3. その後の動き：B地域の役職者のインタビュー調査から

3.1. 自治会長：山本（仮名）さん

市議員を20年務めた山本さんはB地域に居住して30年になる。まず、メディアで放映されていたときに、目標として掲げた以下の2点について質問してみた。①「年3回の大掃除はいかがですか？」②「日本語教室はうまくいっていますか？」大掃除に関しては地区全体で6月に行ったこと、また、B地域でも10月に行ったが、12月は雨天のため中止になったという回答であった。共益費の中から芝生や植木の剪定をしたことも語ってくれた。②の日本語教室に関しては、その後、2年ほど続いており、受講生は大人がほとんどで20人近い履修者がおり、週1回2時間ほど開催している。毎週土曜日の夕刻6時半ごろから始めているが、寒くなってきたので、11月の時点で来る人も減ってきており、自然解消的になってきたということであった。

次に、自治会の組織と機能について質問した。自治会長の下に30近くある棟それぞれからの代表として「区長」がいる。区長は全部日本人であり、その下にさらに「月当番」と呼ばれる役割がある。たとえば、市役所からの配布物あるいは配りものときは日本人のボランティア（パートの人）から区長へ、そして、月当番へ、そして各戸へ配られる。回覧物や回覧板は各階段の掲示板に掲示する。収集したりするときは各戸→月当番→区長→自治会長という方向で機能している。しかしながら、「市や県の協力で、任意保険、車検などに関して説明会を開いても実際にはほとんど出席してくれない」「その理由は何ですか」という筆者とのやりとりで「まず、時間が合わない。彼らのほとんどは午前7時から午後7時の12時間の勤務交代なので」「回覧板や掲示板に注意が向けられていないため、情報が住民全体に伝わらないので」という答えが返ってきた。

「外国人と日本人との「共生」というとき、現在の状態をどう位置づけますか」という質問に対して、まず、C公団において「住民同士のふれ合いがない」ことが挙げられ、その理由を「C公団の住民は高齢者である日本人と若年層の外国人に明確に二分化されている」と話した。つまり、生活スタイルを含めた国籍の違

いにより、日本人住民とブラジル人住民の間に全く接点がない。さらに、年齢層の違いも住民間のコミュニケーションの有無に大きく反映されているということである。また、自治会長は「公団は共益費を支払うだけで普段の清掃などはする必要がなく、住民が一緒に何かを行うといったわずらわしい生活をしたくない人が住む空間である」といった公団住宅の構造的な性質にも触れた。そして、「一斉清掃のような行事に、ブラジル人だけでなく高齢化する日本人住民の参加も非常に少ないこと、そしてそのために自治会の行事自体が成り立たず、日本人、ブラジル人に関係なく住民間のコミュニケーションがなくなっている」と話した。自治会長はC公団の現時点における「共生」の状況について、さらにこう語っている。「外国人固有のコミュニケーション手段、日常生活の行動パターンが眼前にある。あるところは理解しがたい」というコメントであった。具体的には「たむろする。ローラースケートを夜遅くまでする。ベランダの窓からたばこの吸殻を捨てる。ゴミを捨てる。そういったことは掲示板に書いてあるのに…」と彼らの行動をなかばあきらめている様子が伝わってくる。

自治会長によると、「外国籍の人々の間での組織は以前形成されようとしてそのために動いていたが、実際には長く続かなかった」という。この背後には「日系ブラジル人は家族単位といった結束は強いが、それが横へ向かっては実践されない。つまり、日本式のみんなで協力しあうといった発想がない」という。一方、日本人側は注意したら先方から殴られる。そうすると自然に彼らに近づくな」ということになる。お互いに理解し合い、その上で行動に移し、何かを共にする。そして、それを振り返って評価し、新しい活動（交流）が見えてくるのであろうが、自治会長によると、現時点ではこういった共生への道のりは手探り状態である。

最後に、「地域」と「学校」、「会社」というドメインに関して尋ねた。「地域社会と学校、会社とが連携がとれてはじめてそれぞれがうまく機能すると考えられるが、この点はどうか？」。すぐに以下のような答えが返ってきた。

彼らは時間外に就労する。そうすると、せっかく日本語教室を開設しても出席できなくなる。企業としても努力してもらうべきである。また、市や県を通じて、企業に働きかけてみたい。学校にも働きかけたい。そ

のためにはまず、公団内で「あいさつ運動」をはじめ、お互いに声のかけ合いをする。これがひとつの突破口になると考えているのだが。

3.2. 民生委員：田中（仮名）さん

民生委員となって4年目の田中さんは60代の女性で、この地域に23年の居住歴がある。ここでは以下の4つの質問を中心にインタビューを行った。

- ① マスコミで放映されていた頃と現在と何か変わりましたか。
- ② 民生委員としての役割からみた外国人とのかかわりはいかがですか。
- ③ この地域でのお互いのコミュニケーションについてはいかがですか。
- ④ どのように「共生」が実現できるでしょうか。

①に関して、約1年半前に放映されたテレビ番組の中で、外国籍の人々の「窓からゴミを投げる」という行為が取りざたされていたが彼女は開口一番、「窓からゴミを投げる行為はうんと減った。このことがマスコミに取り上げられたことによって一大成果につながっているのではないか」ということであった。また、そのときにとりざたされた「騒音」に関して、「クラクションも減ったし、音楽も減った」。そのような効果が浮上してきたのも、必要以上に騒いだり、ルールを破るとおまわりさんが呼ばれ、あげくのはては軽犯罪法にひっかかってしまうので、そういったことが彼らのうちで意識化されてきたのかもしれない」との解釈であった。「それではゴミの分別はいかがですか？」という問いに「これはまだまだです」という。「ネットの中に納めない」「ゴミをベランダに並べ、それを放っておくので、カラスが来る。『たばこの吸殻も『ちゃんと踏んで消してから一定の場所に捨てる』べきということが守られていない。『スケボーで遊んでいるときは、子どもたちに『ここでは危険なのでもっと広い公園に行ってください』と注意する。これは日本人の子どもにも同様に注意する。今は日本人同士でもものを言わなくなった。そして、あまりあいさつもしない。声かけがない」とこの地域での一般的な状況の変化を指摘した。「民生委員としての外国人とのかかわりについて」の質問には、以下のような回答がみられた。

児童扶養手当や生活保護の申請のための世話役となっている。そこでみえてくる彼らの姿はうそを平気で言うことである。子どもができたが、実際には法的には結婚していない。また、法的に結婚して子どもができたが、彼にすぐ新しい愛人ができた。それならば、その彼に「あなたとの子どもだから養育費を送りなさい」と言うべきなのにそのことができない。また、親から1年以上遺棄されると児童扶養手当を申請することができるが、実際現実とかみ合っていない。なにげなく、居住しているところに行って観察してみると家族全員の洗濯物が干してあることからすぐにそのうそがばれてしまう。

生活保護に関しても、彼女が言うには「日本人なら親族をすぐチェックする。しかし、外国人登録をしていないからそれを調べることも不可能である。彼らはお金があればすぐ本国に送る。貯金はしない。そして『失業中』と言う。家庭での問題は親が子どもとゆっくり接していない。また、接する時間がないことに起因している」と民生委員は言う。また、「企業は子育て支援に一体、何をしているのか」と嘆く。「この地域でのお互いのコミュニケーション(はいかがでしようか)」という問いに対して次のように答えた。

住人がくるくると入れ替わっているというものの暴言を吐く人は減ってきた。ことばを気軽にかけてくる人も増えてきたと思う。しかしながら、一方ではお互いの意識は以前よりしらけている。日本人住民、外国人住民が互いに公団内で衝突することを少しでも避けようとするあまり、なにか不平・不満を感じていたとしてもそれを口にする人はなく、日本人、ブラジル人住民間のコミュニケーションがなくなった。お互いに心を配る雰囲気よりも、あの人はあの人なのだという氣勢の上がない状態になっているのではないだろうか。たとえば、若い人々に対しては『いずれ向こうへ帰るから』という具合に。また、年頃の娘さんがいる日本人の家庭はこの地域から出て行ったことも事実です。

「みなさんはそのような気持ちを抱いているのか」という問いかけに、「いいえ。

月当番となっている外国人もいるし、老年者の人たちは永住したい希望を持っておられ、また親切な人もいるし」と外国人を一様に扱うことを避けているようにも伺える。「このような状態でどのように彼らとの共生が実現できるでしょうか？」との問いかけに彼女はまず、教育の場を増やすことを力説した。

自分の子どもはまず家庭でしつけを行い、将来のビジョンを家庭のなかで子どもたちに示す必要がある。例えば、父親、母親とはどうあるべきか。そして、学校、地域といった集団の中ではどうか。そこから子どもがどのように自覚させるべきかという答えがでてくる。また、若い人々へのアドバイスとして、日本の文化を保育園や保護者などに紹介し、それを会得してもらう。小さい子どもたちを巻き込んで。この点からも保育園の先生方の働きは非常に重要だと思う。

続けて、こうも述べた。

だから、教育の現場についている人、行政を扱っている人など人数を減らしたらいけない。A市の保育園や幼稚園はポルトガル語と日本語で行っているところもあり、ある面では母親の役割以上のことを果たしている。家庭と園をつなぐ役目であり、また、小学校、中学校では「学力」をつけると同時に「しつけ」を行っているのだから。

「それでは、友人を作りたいとき、外国人の方と仲良くしてそういう関係を築きたいですか？」と聞いてみた。「そのようなことをする根気が今ではもうなくなってしまった」という返事が帰ってきた。「何か心配事がありますか？」という問いに対して、「ここに住んで5、6年の人もいるし、10何年の人もいる。しかし、誰が住んでいるのかわからないことが不安である」ことを挙げた。

3.3. 商店街会長：鈴木（仮名）さん

60歳代の鈴木さんは32年間B地域に居住している。書籍、文房具などの品々を扱う店の経営者である。ここでは、

- ① ブラジル人をどのようにとらえているのか
- ② それに対する日本人の振る舞いはどうか
- ③ ブラジル人とのふれ合いの中で一番印象に残っているのは何か
- ④ 現在、ブラジル人やほかの外国籍の人々との関係はどうか

といった点を中心にインタビューを行った。彼は①の質問に対してこのように口を開いた。

ひと昔前、日本からブラジルに渡った人々は過酷な条件での労働を余儀なくされた。たとえば、さとうきび畑などで。そういった状況と比較すると、現在、ブラジルから渡って日本に来る人は恵まれている。時間給もあるし、ある人々の賃金は高給だし、夏にはクーラーがきいている所で就労している。しかし、自分の経験からいうとある人々は素直ではない。悪いことをしてもそれをすぐに告白しない。逆に、その場に仲間が踏み込んで、その人をかばう。警察に連れて行かれるとすぐに自分の非を認める。

では、「日本人の振る舞いはどうですか？」と尋ねる筆者に向かって彼の答えは以下のようなものであった。

日本人は夜、たむろしているブラジル人をみて、怖い気持ちを抱いている人もいることを聞いている。しかし、この目でじっと人々の行動をみると少し違う。例えば、ゴミ置き場などで、ゴミが散乱しているときに、日本人のおばさん達がそれらを区分けし、整理をしている。ゴミの種類は多様である。冷蔵庫のような粗大ゴミを片付けている場面に出くわしても、日本人の大人も子どもたちもその前をひとごとのように素通りする。しかし、その場にさしかかったブラジル人は「一緒に運ぼうか？」と応援の声を一声かけ、手助けをする。こういった場面に出くわすと、ブラジル人が悪くて、日本人は良いとは一概に言えない。

鈴木さんの話は彼自身の経験からリアルに伝わってくるのであるほどと共感をよぶ。「ブラジル人とのふれ合いの中で一番印象に残っているのは何ですか?」の問いに即座に「二つある」と答えてくれた。

2003 年のワールドカップのときです。そのとき、私は商店街の代表ということもあって、その歴史的な機会を地域ぐるみで観戦しようとひとつのことを企てたのです。それはすべての試合に数百人の住民が同じ場でその経験を共有するために公園に大きなスクリーンを立てました。そして、放映される前に「みんなで一緒になって応援しましょう。観戦中に自分が出したゴミは自分で始末して持って帰りましょう」と全聴衆にマイクを片手に事前に伝えておきました。これは当然のマナーであると考えられるのですが、興奮したあとの現場はたくさんのゴミが散乱していました。自分たちが食べたり、飲んだりした後のカップや包み紙、紙コップなどを捨てた人々の多くは大人たちであったのです。それをみたブラジル人の子どもたちは散乱したゴミを黙々と拾って歩いていました。子どもたちのこの姿を私は忘れることができません。

もうひとつ忘れられないのは、やはりその夜のことである。

最終的にブラジルが優勝したとき、彼らの多くがキレたのです。クラッカーをならし、ブラジルの国旗を窓から出し、大きく揺すって、結果的には道行く人々や車を通行止めのような状態に陥らせてしまったのです。確かにこうした行動は逸脱しており、彼らは周りの人々が見ても救いようのない状況にはまいるでしまいました。

こういった歴史的な出来事の経緯を耳にして、筆者の質問は彼自身のその後の外国人との付き合いが気になり、次のように聞いてみた。「現在、ブラジル人との関係はどうなっていますか?」彼の回答は先の民生委員の田中さんと同様、「住居が入れ替わったり、ひとつの家に何家族も住んでいたりしてはっきりわからないと

ころがある。また、彼らの腕など、体の一部に入れ墨をしていたり、たとえ、こうしたことがブラジルでのひとつのファッションであるとはいっても、日本ではマイナスのイメージがある。そのような気持ちを抱くが、相手は一方的に結婚式の招待状を持ってきたり、『アパートの保証人になってほしい』と依頼してきたり、『りんご狩りに行ってきたので』と言ったりりんごを持参して訪ねてくれる」という答えが返ってきた。

鈴木さんは彼の店をひとつの出会いの場として、ブラジル人たちに解放し、そこで繰り広げられる交わりを通して、お互いに交流を少しずつ深めているようである。ゲームなどのためにコピーをする子どもたちのことを考えて、コピー機のカバーに南米の地図を貼り、特に、ブラジルを赤いマーカーで印を施している。店に入ってきてコピーを頼む前に、ブラジル人の子どもたちは「あつ。これが僕のおじいさん、おばあさんの国だよ」と得意気に言う。そこには笑顔がいつもあり、店主とのコミュニケーションがしぜんと始まる。その瞬間から、心をわって話す姿勢が形成される。最後に鈴木さんが述べたことが印象的であった。「五年で帰国する人、日本に永住する人さまざまであるが、若いブラジル人が国に帰っても日本が第二の故郷となるので、(ここでの思い出が：筆者加筆)よい思い出となるように手助けをしたい。なぜなら、そうすることによって彼らの心のうちではじめて日本での歴史が刻まれることになるから」。

4. B地域のブラジル人住民のインタビュー調査から

日本人住民と同様、B地域で生活する2人のブラジル人住民に対して個別に聴き取り調査を行った。その結果を以下に記したい。

4.1. 食料品店店員：マリア（仮名）さん

マリアさんがC公団に来たのは4年前の2002年2月である。彼女はブラジルにいる病気の夫のためブラジルと日本を行き来しながら、合わせて約13年間日本に滞在しており、「C公団に移り住むまで美濃加茂市、可児市、大垣市などさまざまな地域で生活してきた」という。マリアさんに「この地域に住んでいて良かったと思うところ、また、改善が必要だと感じるところはどこですか」と尋ねたところ、よかった点は「安全で住居が安定していること」、改善が必要な点につい

ては、「窃盗、喧嘩、騒音を立てるなど迷惑な行為をするブラジル人もいること」を指摘した。次に、さまざまな都市での生活経験を持つ彼女に、「この地域が「外国人集住地域」と呼ばれていることを知っていますか、また、そのことに対してどのように感じますか」と質問したところ、「そのように呼ばれていることについては知らなかったが、幸せなことである」と話した。しかしながら、ブラジル人住民の生活態度が悪いためこの地域にあまり良い印象を持っていないようであった。

「この地域での日本人との交友関係についてお話をください」と尋ねると、彼女は「日本人の友人はいない」という。さらに、こう続けた。『おはよう』、『こんにちは』などといったあいさつを交わす知り合いはいるが、どこかへ一緒に外出したりするような友人はいない。ブラジルで私が住んでいた地域は多くの日本人が暮らしていたところで、誕生日にプレゼントを贈るような日本人の友人がたくさんいた。そして、この地域において日本人の友人がいないことについて、「近くの商店街にあるブラジルの食料品店で働いており、週に一度の休みがあるのみでほかの日はすべて朝 9 時から夜 9 時までの 12 時間労働であるため、日本人の友人を作りたくても作れない」と話してくれた。「日本人と一緒にになにかをすること」というような行事に参加しますか」との質問に、「商店街が主催する祭りには学校で子どもたちに配布されるお知らせに情報提供されるため参加しているものの、商店街にある私が勤務する食料品店も出店するため、祭りに参加した日本人住民と交流を深めるということは困難である」と話す。

マリアさんには近くの公立小学校に通う孫がいる。その小学校では毎週土曜日の午前中、外国籍の子どもたちのために日本語教室が開催されている（5.3. SASEDADE 教室参照のこと）。彼女の孫もその教室で日本語を学習しており、彼女は孫を学校まで徒歩で送迎している。そのため、その小学校でどのような授業が行われているのかについてもよく把握しており、先生ともコミュニケーションがとれているようである。「この地域の住民として行政や学校に対して何か望むことはありますか」と質問したところ、学校に対する要望として、「日本の学校全体に対し、少子高齢化社会であり今後日本の労働力の担い手がますます外国籍、特にブラジル人の若者となる中で、日本の子どもたちにも学校教育の中でポルトガル語を学ばせることが必要である」と主張した。そして、行政に対しては、「国

が援助しブラジル人学校にも助成金を出すことで、学費が少しでも安くなることを願いたい」と話した。

彼女は娘家族と同居しているが、「家庭でコミュニケーションをとる際はポルトガル語のみを使用する」という。孫を一人にしておくことはしないと、徒歩で日本語教室に送り迎えをしていることからわかるように、家庭内でのコミュニケーションもしっかりとれているようである。

4.2. 食料品店店長：パウロ（仮名）さん

パウロさんは15年間日本で生活しているブラジル人男性で、岐阜県から3ヶ月前にこの地域に引っ越してきた。その彼に「この地域が「外国人集住都市」であることを知っていますか、それについてどう感じますか」という質問をしたところ、「この地域が「外国人集住都市」と呼ばれていることは知っており、それについては非常によいことだと感じている。しかしながら、ブラジル人コミュニティがあまりにも巨大であるがゆえに、統制がとれていない」ことを指摘する。そして、彼は「外国人が集住している地域であるため、外国人を支援するためのシステムが今以上に必要とされる」ことを付け加えた。「この地域に住んでいて、良かったと思う点、また改善が必要な点はありますか」と聞いた。すると、「この地域に住んでいて良いと思う点は、条件にあった就職先が数多く見つかること、そして、改善が必要だと思うところは就労目的で来日したにもかかわらず、団地に住んでいるブラジル人住民の多くが正社員として就職することを考えていないこと」と話しており、彼はこのことを非常に問題視している。特に印象的であったので、以下、彼のことばを引用したい。

彼らは仕事をするために日本に来ているのだが、あまり仕事をしたくない。そのために、（働いてお金を稼ぐという：筆者加筆）目的を達成できずにいる。彼らはブラジルに帰国を望んでいるのであるが、逆に日本での生活を楽しんでいるというところも感じられ、非常に複雑である。

3ヶ月前に引っ越して来たパウロさんは、この地域での日本人との交友関係についての質問に、「この地域での日本人住民との友人関係はいまだないが、3ヶ月

前まで住んでいた岐阜には働いていた会社で知り合った、一緒にビールを飲んだり遊びに行ったりするような日本人の友人が十数人いた」と語った。この地域で行われている日本人との交流行事については、「いまだ参加はしていないものの、祭りなどの行事に参加することは多くの日本人住民と知り合う機会であり、友人関係も築けること、また、この地域をについて知ることができるだけでなく、ブラジル人住民にとっても日本人住民にとってもお互いの文化を学ぶ場であるため、今後、日本人住民との交流行事にはぜひ参加したい」と意欲をみせた。

パウロさんは現在、妻と二人の子どもをブラジルに返し、単身、日本で生活している。しかしながら、家族が日本で生活している間、彼は子どもたちを日本の学校に通わせており、長女は4年間、次女は1年間、日本の学校で学んだ。「どうして日本の学校で学ばせたのですか」という問いに、「ブラジルに帰国することを考えていたため、日本にいた間は子どもたちに日本語を勉強させたかった」と答えた。家庭での使用言語について尋ねると、「子どもたちは家庭内ではポルトガル語、学校では日本語を用いることで日本語とポルトガル語の違いが明確になり、子どもにとって非常に良かった」と満足そうに話した。そして、さらに以下のように付け加えた。「日本で生活していた頃から家庭ではポルトガル語で会話するように心がけていたため子どもたちがポルトガル語を忘れることはなく、現在通っているブラジルの学校にも全く学年を落とすことなく入学することができた」。

「家族とのコミュニケーションはどのようにしていますか」と尋ねると、「5ヶ月前に一人で日本に再来日したため、家庭でのコミュニケーションは簡単ではないが、妻と子どもたちに対し週に2度、必ず電話をしている。そして、そのことで家族からより大きなエネルギーを得ている」と語った。「子どもとスムーズにコミュニケーションをとるために何が必要だと思いますか」との問いに、彼はすぐに「話をすること、一緒に何かをすることで子どもたちの父親であると同時に友人でいることが大切である」と主張した。彼の回答から家族とのコミュニケーションが十分に取れている様子が伺えると同時に、子どもへの愛情の深さが伝わってきた。

5. 「共生」にむけての取り組み

5.1. 地域レベルを超えて：UBJ

日本とブラジルの社会共存のため、A市のみならずE、F、G市に居住しているブラジル人が中心となって2002年6月に設立した活動グループがあげられる。その名もUnion（きずな）Brazil（ブラジル）Japan（ジャパン）となっている。会員は約40名でその半数は日本人である。月1回集まり、子どもの教育、職場のことについて悩んだり、困難に感じている点をお互いに出し合い、その解決に向けてみんなで考える会となっている。この活動の世話人の一人であるYさんはブラジル人2世で来日12年である。この会はNPO法人として始まり、お互いに情報交換をしたりするうちに、いろいろな活動へと拡がりをもつようになった。たとえば、第1回目のキャンペーン活動として、E市内での道路の清掃を行い、93名が参加した。その後も海の環境問題解決に向けてゴミ拾い、美化運動を主催しおよそ130名が参加した。また、教育の部門として、外国人児童・生徒を対象とした進路ガイダンス、よりよいコミュニティづくりのためのゴミ出し問題、夜の騒音などに関する話し合い、意見交換を継続的に行っている。また、2002年から外部団体が主催した企画に積極的に参加することによってそれぞれのトピック、たとえば上述の教育の部門のうち、学校に行っていない外国籍の子どもたちに焦点をあてた親子同席の進路説明会「学校へ行こう」に積極的に参加している。また、E市の地球市民の会が主催している外国人児童・生徒向けの「先輩たちの行き方に学ぼう」といったテーマでの討論会に協力し、参加してきた。こういった子どもたちの教育的側面に加えて、日本で生活をしていく上で大切な事項について講演会、座談会、会議を行ってきた。例えば、交通事故、国際運転免許証、国民健康保険、労働法、所得税、自動車税、女性の人権問題、防犯セミナー、医療通訳研修会などである。

こういった活動のひとつとして定着化してきたものとして「多文化共生検討会」が挙げられる。この活動は2002年10月からこれまで20数回開催されてきたがM県生活部国際室、M県教育委員会、小中学校教育室、E市教育委員会、E市国際交流教会、H団地第一自治会、I団地第一自治会、I団地母語教室、S日本語教室などが参加団体となって共生に関するテーマについて検討、討議を重ねてきた。また、毎週土曜日、ブラジルの子どもたちや日本の子どもたちにポルトガル語教室を実施し、教育的支援活動も実施している。それに加えて、小学校や中学校にUBJのメンバーが出向いて通訳を行い、日本語、ポルトガル語をもとにし

たコミュニケーション活動にも貢献してきた。UBJはこのような実践活動、教育的活動に加えて、各種のイベントを通してブラジル社会、歴史、サンバ、アシェなどのダンス、カポエイラなどのスポーツなどを紹介、普及する文化活動にも力を入れている。日本とブラジルの二国間の友情の絆をさらに強めるために、日本の文化、言語の習慣を深めたり、反対にブラジルの料理を日本人に伝授したり、日本人にポルトガル語を教えたりといった双方向型の文化交流がますます期待されている。

5.2. 共生サロン

B地域に外国籍市民が増えるにつれて、その地域で生活を送るために日常的な問題点、課題が生じてきた。そういった困難点を解消し、外国籍市民が日本語や日本語の生活習慣などの理解を深め、身近に行政・制度の手続きなどができ、少しでも円滑な生活が営まれるように取り組む拠点として国際共生サロンがC公団に隣接する地に2004年10月に開かれた。まず、ここでの主な活動として、「日本語・生活文化サポート教室」があげられる。この教室ではボランティアが外国人の子どもたちに日本語や日本の文化や習慣を伝授するために活動を行っている。通常、週三回、放課後を利用して、ボランティアによって準備された教材をフルに駆使しながら日本語を勉強したり、七五三の行事、年賀状を書いてみたり、七夕祭りの準備をしたり、おひな祭りを祝ったりしながら日本文化に触れるさまざまな機会を提供している。ブラジル人のほとんどの子どもの親は家庭ではポルトガル語を使っているので、この教室では唯一日本語を介在したものとなっており、そういう観点からも子どもの異文化適応に寄与していると考えられる。そのほか、外国籍住民の大人を対象とした日本語教室、また、日本人住民を対象とするものにはブラジル人やペルー人の母語、母文化に触れるポルトガル語やスペイン語の講座が開催されている。このような共生適応事業を実施することがこのサロンの根幹となっているが、行政・制度の手続き、生活ルールといった実践的な側面に対して相談・助言を行う行政生活相談窓口も設置されている。ここで働いているタチアネ（仮名）さんによると、「彼らにとって市役所からとどいた手紙の内容の解釈はとても困難である。そのまま放置しておくと同じ情報のほうがきが再度配信される。働いているので送り主である市役所まで足を運ぶことができない。そん

な時に彼らはここを訪れてくるのです。それで、相談にのり、次に市役所の窓口を紹介しています」ということであった。通常は4名が働いているが、15名ほどのボランティアの登録があり、支援事業に取り組んでいる。このように、C公団近隣に存在する市役所から届く通知文書を日本語に翻訳し、対処法を詳細に説明するというような施設は異文化環境で生活するブラジル人住民にとって非常にありがたい存在であるといえる。タチアネさんが強調したのは「まず、外国籍の子どもたちにここで日本文化の心髄を学んでほしいですね」ということであった。また、「ここに顔を出してくれるいろんな子どもがいます。ある日、13歳の女の子がボランティアで来てくれました。彼女は両親とも会社で就業しており不登校をしていましたが、ここで活動するようになって、学校へ行くようになりました」ということであった。この事例は「共生サロン」が日本の文化紹介、実践的な支援だけに終わらずいろんな活動を通して、子ども自身が考え、学校に通うといった新しい道を踏み出す契機にもなっていることがわかる。タチアネさん自身、「みなさまの悩みを聴きながら、こちらはどのように対処したらよいかと考えることによって、私自身もいろいろ学んでいます」と話した。こうしたまじめで謙虚なタチアネさんの住民への接し方が、ブラジル人住民の悩みや不安を和らげているのではないだろうか。

5.3. SASAEDADE 教室

この教室は公団近くに位置しているZ小学校の一室を使って、毎週土曜日に行われている。外国人の子どもたちを前にして、ボランティアが中心となり、日本語を教えている。筆者らは数回、この教室に足を運び、参与観察を試みた。先生方はZ小学校教員を含めて11人である。その日は9クラスに分かれて総計70名の生徒であった。外ではサッカーに興じている数人の子どもたちの姿が見える。そばで応援している保護者がいる。体育館では近く開催予定のバザーの準備にみな忙しく働いている。そんななかで、子どもたちはそれぞれ日本語の習得に向けて、レベルアップのための授業を受けている。ある教室の壁に貼られてあったカリキュラムから日本語教室の詳細が伝わってくる。(表2)

別の教室にはひらがな、算数の九九のポスター、漢字の筆順、カタカナなどのリストが掲示されていた。また、助詞を用いた文を作成するときには日本語とポル

トガル語の両言語を用いて指導にあたっていた。例えば、「学校で算数の勉強をします」といった文を詳しく説明したあと、それぞれの生徒がこの文型の日本語を作成するといったプロセスであった。日本語が主に飛び交う中で、イヤリングやマニキュアを塗った爪をいじくりながらポルトガル語をもまじえた会話接触場面が展開されると異国風の雰囲気が伝わってくる。

表. 2 日本語教育カリキュラム

レベル	内容	登録人数
レベル 1	ひらがな	32 人
レベル 2	ひらがな	
レベル 3	ひらがな ひらがな+会話 会話特別 カタカナ+復習	
1 年生	漢字	27 人
2 年生	漢字	
3 年生	漢字	
4 年生	漢字	10 人
6 年生	漢字	
		69 人

授業後にはその日の授業は何をしたのか、問題点、課題は何かといった点を教師同士が意見交換をする反省会が開かれている。その後のインタビューで、「日本語を教えるときにどのようなことに一番工夫をしていますか」という問いに対して、「子どもの学力、日本語能力に応じて、変化に富んだ教え方をしようと努めている」という回答がかえってきた。休み時間をはさんで 2 時間という単位は小学校低学年にとっては少し長いような気がするが、生徒と先生が向き合ってひとつのことに賭ける姿を前にして、筆者までが教える側にも学ぶ側にも心から声援を

送りたい気がした。「将来は何になりたいか」という問いに対する答えが教室の外
の廊下にそれぞれの顔写真とともに掲げてあった。46 人中、一番多かったのがダ
ンスの先生を含む一般の先生 9 人(約 19.6%)、次にサッカーの選手が 4 人(8.5%)、
通訳 1 人(2.1%)という結果にいろいろ感じるどころがあった。このリストをみ
ながら、「教師」という職に一番何を望んでいるの?」とその場で輝く目のひとり
ひとりにこちらから聞いてみたい衝動に駆られた。「通訳」を教育的な側面から解
釈すると「共生」と「通訳」の総計が 21.7%となる。100 人いれば 5 人に一人は
そういう希望を持っているということになる。「一番好きな食べ物はなんですか」
という質問に 11 人(43%)の子どもたちがそろって「カレーライス」をあげて
いた。異文化の環境に身をおきながら、日本人の子どもたちが好きなカレーライ
スを多くの外国籍の子どもたちも積極的に位置づけているということがこのこと
から垣間みられる思いである。

5.4. 日本語教室「つばさ」

B 地域には A 市の拠点校に指定されている小学校があり、そこには外国籍児童
が通常の母学級から離れて取り出し授業をうける「つばさ」と呼ばれる日本語教
室がある。そして、そこでは現在、ポルトガル語ができる 3 名の教員が外国人児
童の指導にあたっている。「つばさ」の教育には、3 つの大きな柱が存在する。ま
ず、日本語指導である。この学校が独自に作成した日本語指導カリキュラムに沿
って、一人一人の能力に合わせて個別に指導が進められている。そのため、それ
ぞれの児童により「つばさ」で日本語指導をうける時間数も異なっている。日本
語指導において、「つばさ」の男性教員は「幼少期で来日する場合よりも、小学校
3 年生くらいで来日した子どもは概念が頭には入っているため、あとはそれをポ
ルトガル語から日本語に置き換えるだけでいいので習得がスムーズにいく」と話
してくれた。ふたつめの柱として、母学級の担任と「つばさ」の教員が週 2 時間、
ティームティーチングで主に理科と算数を指導するといった教科学習も行われて
いる。さらに、週に 1 時間、母文化の尊重という観点から、日本文化や生活指導
だけではなく母国の文化について学ぶ時間も設けられている。

5.5. 行政による取り組み

2005年11月末の時点で外国人市民は59カ国の9,013人にのぼり、A市の2.9%を占め、この10年間で2倍の増加率となっている。その内訳はブラジル人の3,725人を筆頭に、韓国・朝鮮人が2190人、中国人は972人、フィリピン人が667人、ペルー人が467人、その他の国の人々が935人である。外国人登録者のうちブラジル人は4割強を占めている。そして、このうち、公団には平成17年の3月末の時点で709世帯(41.1%)が住んでいる。行政文書のうち納税・保険に関連している情報はそれぞれ日本語とポルトガル語が対となっている。また、FMA局では毎週土曜日、イベント情報や国政調査などのお知らせを数分間にわたってポルトガル語で行っている。また、外国人園児を受け入れている保育園や幼稚園に対して、外国語での対応を考慮して、外国語ができる教師やスタッフを配置するように努めている。小学校・中学校では外国人児童・生徒の受け入れ拠点校を定め、重点的にその子どもたちの指導ができるように外国語ができるバイリンガルの教員、あるいは適応指導員を派遣している。2005年の時点でA市の拠点校は小学校2校、中学校2校となっているが、拠点校以外の学校でも適応のための取り組みを行っている。加配人事は平成16年9月の時点で小・中を含めた7校に9名を派遣している。また、ポルトガル語、スペイン語などの適応指導員を週一回、あるいは週2回、その必要性のある各学校を巡回させ通訳などの必要性を満たすことを目的としている。

また、平成15年からすでに3度、高校進学を希望している中学生とその保護者を対象とした進学ガイダンス・進路指導説明会を行っている。母国とは異なる日本の高校進学システムの違いを説明し、その準備に遅れが生じないように支援策を提供している。また、A市の教育委員会と共催して、国際理解教育活動部会による多言語ブースを設け、中学校・高等学校への進路相談・指導を行っている。また、A市内の七ヶ所で外国人市民対象の日本語教室が開催されている。このうちの6ヶ所では週日の夜、1回につき2時間ずつをあてがい大人を対象としている。あとの1ヶ所では土曜日、児童・生徒を対象としている講座である。一方、日本人側から働きかけて多文化共生社会構築を目的とした取り組みも行われている。まず、日本語教室ボランティア講座が挙げられる。これは日本語学習を支援し、外国人に日本語を教えたい人々の講座である。年1回、3日ぐらいの日程で毎年開催されている。毎回70人ぐらいの日本人が集まるが、その中には引退し

て第一線を退いた後、なんらかの意味で社会に奉仕したい人々も混ざって受講する姿が見られるそうである。また、1991年に設定されたA市の国際交流協会の後援での「にほんごカフェ」があげられる。これはさまざまな国籍の人々と日本語をベースとして語り合いながら、日本語の習得方法、教え方などの情報交換の場を提供していると考えられる。

5.6. C公団における共生に向けての諸活動

「夜遅くまで戸外で騒いでいる外国人の人々」、「粗大ゴミをちゃんと区分したところに捨てない人々」、「窓からなんでも階下に落とす人」といったちょっと困った人々に対する呼びかけをして誰かが何かしなければならぬ。また、学校で何が起こっているのか、生徒の動向、情報交換などもしなければならぬのではないかということで共生会議が発足した。3ヶ月一度、小学校、中学校から校長が、保育園長、幼稚園長、自治会長、地区協議会委員がメンバーとなって定期的に会議が行われている。また、県や市の国際課、地区センターに勤務している人々が委員となつての会議も定期的に開催されている。

また、公団に居住している人々のための春まつり（4月下旬）、夏まつり（8月）にその地区の公園を開放し、バザーを開催している。公団のお祭りを契機としてお互いに国、文化を超えての仲間づくりの場を提供しようとの目的である。平成14年度の春祭り当日は1,500余名の人々で賑わい、テントをはりバザー用に品々を用意する人、材料を準備する人、売る人、買う人という連携プレーもうまくいき、お互いの交流の場になった。従来の春まつりは日本人向けだったが、2003年からは外国人にも呼びかけ、そのスタッフとして一緒に参加することによって公団が一体となつての祭りになった。

また、「ご近所の底力」の中でも紹介されていた一斉清掃もC公団独自で年末に一度、そしてC公団を含むB地域全体で6月と10月に二度、計三度行われている。日本人住民の参加人数が少ないことが懸念されながらも、地道に継続されている。番組放送以降の取り組みには、2003年12月から自治会が主催となつて行われてきた日本語教室「出会い教室」がある。自治会長によると、約20名が参加していたこともあったというが、2004年11月ごろから気候により受講生の参加人数が減り始め、現在では休講となつてしまっている。しかしながら、2006

年の春からは再開されるということである。

さらに、子どもたちのサッカーの上達が期待されるのはもちろんのこと、この地域の子ども、さらには、その子どもの応援に来た日本人、外国人の親が互いにコミュニケーションを図る場を提供することを目的としたサッカー教室が年に1～2回開催されている。A市近隣のプロサッカーチームから指導を受けられるとあって、ブラジル人学校に通う子ども、日本の学校に通う子ども、また全く学校に通っていない子どもも多数参加するという。2004年度は外国籍児童2名を含む30名が申し込みを済ませたが、2005年度は30数名の応募があり、そのうち外国籍児童の数の方が多くなっているということであった。

こういった活動が展開されてゆくうちに日系人から日本人にブラジル料理を教えたり、日本人側から日本語や日本文化を外国人に紹介したりするというように双方向で一緒に学び、楽しむ側面がでてくるとよいきっかけづくりになるのではないだろうか。

6. B地域と近隣するD地域における「現場」の声：アンケート調査から

この章においてはB地域とD地域の住民からの共生にむけての意見を中心にアンケート結果からの分析を行う。質問事項は以下のように3つに分類できる。

- ①地域に関して
- ②学校に関して
- ③家庭に関して

日本人住民に対しては総計 9⁴、そして、ブラジル人住民に対しては総計 13 の質問項目を準備した。調査で用いたアンケートの一部を巻末に添付した。

6.1. B地域からの声：日本人住民

⁴ B 地域、D 地域において行った日本人住民、ブラジル人住民に対するアンケート調査で、地域の性質が異なるため質問項目、および総数に多少違いがある。アンケートの詳細については巻末を参照のこと。

B地域には公団管理事務所を通して、100部配布した。残念ながら、その中で、結果的に収集できたものは4人からのみであった。数量的にも質的にも一人一人の意見は貴重であるので、それぞれ分かち合うことにする。地域に関しては質問1)から質問6)までとなっている。以下、それぞれの分析を試みる。

質問 1) 近年、この地域が「外国人集住地域」と呼ばれていることを知っていますか。あてはまるほうに○をつけてください。(はい・いいえ)

それに対して、日頃、感じておられることがあれば、自由にお書きください。

回答は「はい」に○をつけた人が2名、「いいえ」に○をつけた人が2名という結果である。

「はい」と答えた人は続けて、次のように答えている。

- ・外国人は1つの棟にまとめて入居していただきたいと思っています。
- ・生活習慣の違い、生活時間の違い、ことばが通じないことなどで、共同生活は日本ではできにくいと思っています。
- ・相手を車のクラクションで呼び出すことはやめて欲しい。
- ・時間に関係なく大声で話すことをやめてほしい。
- ・国際化に対して、友好を深めたい。

「いいえ」と答えた人は「日ごろ、この地域について感じていることを以下のよう

- に回答している。
- ・日本人が外に出なくなっており、日本人の子どもが公園で遊ぶ姿を見かけない。
 - ・この地の商店街も殺伐とし、ブラジル人が我が物顔でふるまう。
 - ・従来よりこの地域に住んでいる住民はこの地域より出たがっているのが大半。
 - ・ブラジル系を排除してほしい。
 - ・他地区の知人が「ブラジル村」と呼んでいます。自分でも外を歩くと「ここは外国？」と思うことも。

質問 2) この地域に住んでいて良いと思うところ、改善が必要と思うところなどがあれば教えてください。

- ・以前は住民、地域とも穏やかな住宅環境であったが、現在、ブラジル系住民が住むようになってから、公園、商店街等殺伐とした環境になっている。
- ・ブラジル系住民は一時的な居住のためか、ゴミの分別はしない。テレビ、冷蔵庫等の放置。団地内に迷惑駐車が多い。
- ・夜、昼にかかわらず、公園等に情報交換のためか、たむろし、地域環境最悪。
- ・便利で静かで空気もきれいな街です。最近はゴミ出し問題とか、スラム化していきそうで不安です。もっとそういった事柄をきちんと知らせる方法を考えて欲しい。(悪い人は日本人にもいますが)
- ・便利なところがよい。
- ・近所とのつきあいがない。
- ・ゴミとからすとの共生感が異常に強い。(対策のより高度な方法は完全にネット内にえさになるものを収容する方法、ないしはえさの時間帯は人間がネットの前で張り込む。

質問 3) 上記のことに関して、学校や行政に希望することがありますか。

学校に関して：

- ・子どもがいれば、当然、グローバル化推進のため、共生の必要のため、すべてに参加、コミュニケーションしていく。ただし、言語の違いの国際解決の策が必要。通訳の件。
- ・特にない。

行政に関して：

- ・ブラジル系のみの優遇政策（労働）の廃止。

質問 4) この地域にお互いの家（家庭）を行き来するような親しい外国籍の友人

はいますか。(はい・いいえ)

回答はすべて(いいえ)であった。

(いいえ)と答えた方にお聞きします。機会があれば、友人関係を持ちたいですか。あてはまるほうに○をつけてください。また、その理由を教えてください。

(はい、友人関係を持ちたいです)

- ・今後、世界はひとつの考え方(グローバル化)は必要。対話による互いの立場、考え方、文化、芸術、教育等の違いを乗り越え、理解のため、仲良くする一歩は友人関係を育てることが必要だと思います。

(いいえ、友人関係を持ちたくありません)

- ・生活習慣、マナー、言語等異質、一時的にデカセギにきている人とはかわりを持ちたくない。
- ・外国の友達が欲しいわけではないので。ただ、ご近所同士、あいさつを交わしたり、気軽に言葉をかけあったりといったことはもっとあってよいと思います。
- ・集団でおこなう大掃除など、みながしていても平気で通りすぎる。夜遅くに大きな音をたてるが平気。不法駐車を平気でする。

質問5) この地域で外国籍住民の方と交流する機会がありますか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた方にお聞きします。それはどんな交流ですか。「いいえ」と答えた方にお聞きします。それはなぜですか。

回答は全員(いいえ)であった。その理由として、

- ・時間がない。しかし、ポルトガル語が少しはわかるようになりたいですが。
- ・交流する気にならない。
- ・盆踊り、文化祭以外、もっと小規模なチャンスを多く作る必要があると思う。

- ・言葉の違いが意志に通じてゆくような会話が不自由。

質問 6) 将来、外国籍住民の方と一緒にいう行事（イベント）を計画したり、実施したり、参加したいですか。理由とともにお答えください。

(はい)

- ・もちろん、質問事項の目的達成は早急ですね。近くに外国籍の方が多く、教育、文化、芸術、習慣等学べればいいと思います。
- ・ポルトガル語が少しわかるようになりたい。

(いいえ)

- ・現状のブラジル系の住民は労働従事のみで一時的なものであり、人の出入りも激しい。永住しているほかの都市（神戸、横浜等）とは相違しており、一時的、表面的な行事には参加したくない。

次に「学校」に関する質問である。

質問 7) この地域の学校で日本人の子どもと外国籍の子どもがお互いにそれぞれのことばや文化などを学ぶ機会が提供されていることを知っていますか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた方にお聞きします。それに関して知っている内容を具体的に書いてください。

(いいえ) 3名

(はい) 学校や保育園の授業参観に行く。

最後に「家庭」に関する設問と回答は以下の通りである。

質問 8) 家庭内において、普段、お子さんたちとのコミュニケーションは

とれていますか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた方にお聞きします。なぜ、コミュニケーションがうまくいっているのですか。

(はい)

- ・常に顔を合わせる。

「いいえ」と答えた方にお聞きします。その理由は何でしょうか。

(いいえ)

- ・もう大人だから。

質問 9) お子さんたちとコミュニケーションを十分にとるには何が必要だと思いますか。

- ・食事時間等同じ時間を共有し、会話が必要。
- ・朝の読み聞かせ、食事時間の活用、趣味等共通点の発掘。
- ・愛情と信頼と努力

6.2. D地域からの声：日本人住民

B地域のすぐ隣に位置するD地域に100部アンケートを配布した。B地域に配布した内容とほぼ同じものであるが、回収率は約50%であった(48名の有効回答)。B地域での回答率が2.4%であったのに対し、D地域での回答率がこれだけあがったのは次のような理由によると思われる。この地域に居住している筆者の小学校時代の恩師とその地域の自治会長が、筆者らの研究の意義や目的を聞いて理解してくださり、すでに作成されていたアンケートに近辺の住民へ向けてそれぞれご自分のことばを添付し、組長さんに渡してくださったことによる。このような努力とプロセスが実って、D地域の回収率がB地域と比較すると一段と上がったと思われる。早速、分析に入る。

質問 1) 近年、この地域では「外国人集住都市」と呼ばれていることを知っていますか。

「はい」：43.4% 「いいえ」：54.1%

このことに対して、日頃感じておられることがあれば自由にお書きください。

日頃感じていることに関して、収集したデータを分析した結果、次のような3点が浮上してきた。①現状に対して、②それに対する要望、③施策などの将来的展望である。従って、この枠組みに沿って以下に提示する。

①現状に対して

- ・犯罪が増えているように思う。
- ・スーパーや人の集まるところで、多くの外国籍の方々に会うことが多くなりました。
- ・異様な感じを受けたことがあります。
- ・外国人の運転が荒い。道路標識を見ない。
- ・職場を共にしたことがあるが、日系ブラジル人に違和感はありませんでした。
- ・外国人の人々がたくさんいて仲良くしていくことはいいことだと思います。でも、その人達が全部ではありませんが、なかには車の運転、駐車など非常識と思われることも多くて、恐ろしく感じます。
- ・不良外人が多いのが心配。
- ・車の運転が乱暴で、夜など怖い。
- ・犯罪が多い（一部の人間とは思いますが）。
- ・自動車運転のマナーが悪い。
- ・不法入国、外国人による窃盗、殺人のニュースが多く出るようになった。
- ・あまり良い感じがしない。
- ・その地域に行くとポルトガル語の表示が多い。
- ・グローバル化でやむを得ないと思います。
- ・フランス暴動を想起する。
- ・不良外人：文化が違うのが原因。日本人の心がわかっていない。

- ・異文化に対する尊重：外国人と楽しく生活できるということは結構なことと考えます。

②現状に対する要望

- ・相互のあいさつ、また、必要に応じて会話のできる雰囲気が必要かと思います。
- ・言語、文化の違いからの意志疎通。社会保障。選挙権などの制度の適用の差異。
- ・ストリートチルドレンをなくす。
- ・日本語を学ぶこと。
- ・乱暴運転をしっかりと取り締まってほしい（日本人の若者でも同じケースが多いが…）
- ・ゴミ問題について、ことばが通じない場合があると思いますが、注意されたことを素直に受け取ってほしいと思います。
- ・ブラジル人たちは比較的秩序よく生活し、周囲に迷惑をかけないようにしているようだが、交通ルールの遵守の面で一層の指導が必要と思う（事故が多いようだ）
- ・外国で暮らすことは大変だと思います。できるだけ日本人とコミュニケーションをとる機会を作り、早く慣れてください。

③施策などの将来的展望

- ・安心して交流できる環境づくり。
- ・20年近く居住していることを知っています。交通ルールを守らないとか、問題があるように聞きます。安心して交流できる環境づくりが大切だと思います。
- ・外国人子女の完全就学。

この問いに対して81歳の男性（T氏）は彼が最近体験したことを重ね合わせて、次のように答えていた。彼の体験からの回答としてここに全文を記す。

娘のアパートを朝、訪ねたとき、階段から降りてくるブラジル人と思われる親子3人に会い、思わず「アミーゴ！」（こんにちは！のつもりだった）と叫んでしまった。そうしたところ、彼らは「おはようござい

ます」とほぼ、はっきりとした日本語であいさつを返してくれた。嬉しくなった。もっと多くの言葉を知っていたらと強く思った。

また、T氏はポルトガル語でのアンケートに答えてくれそうな人を求めて、あるところに出向いた。そのときの接触場面をもとにして、以下のように回答してくれた。

この間、彼らのたむろするクラブに行ったところ、数人のブラジル人系の人たちが昼食をとっていた。彼らに思いきって話しかけて、彼らの人柄がよく分かり、また日本語もできる人が多くいるので驚いた。

質問2) この地域に互いの家を行き来するような親しい外国人の友人はいらっしゃいますか。「いいえ」と答えた方にお聞きします。機会があれば、友人関係を持ちたいですか。その理由も書いてください。

この地域に親しい友人がいると答えた人は1人であった。どのように親しくしているかという点に関しては「家庭的交友はないが、親しく連絡をとりあう友はいる（仕事の上で）」ということであった。この1人を除いて、外国人の友人がいないと答えていたが、設問の後半部の「機会があれば、友人関係を持ちたいですか」という問いに対してその回答は次のようである。

「はい」31.2% 「いいえ」58.0%

「はい」という理由：

- ・外国人と接するという事は楽しいことだと思います。
- ・見聞が広がると思う。
- ・同じ地域に住むのだから、親しくなりたい。
- ・習慣や考え方の違いなどを聞きたい。
- ・体験から、そのように思う。
- ・知り合った人が外国人でも日本人でも友達になりたい。
- ・(反省をこめて) 外国人に対して先入観（言葉が通じない。文化が違うので

わかってもらえない)があったが、このような気持ちではいけないと思ったから。

- ・世界観が必要となる時代が来ると思います。
- ・世界が広がるから。
- ・違う国で生まれ違う環境で育ってもこんなにステキな人がいて、こんなに仲良くなれることを実感してみたいと思います。
- ・子どもの頃から国際感覚を身につけてほしいから。いろいろな友達と遊ぶことはとても大切なことだから。
- ・視野を広げたいから。

「いいえ」という理由：

- ・日本人でも友人関係は難しい。共通の趣味でもあれば別だが。
- ・若い人間同士で仲間となっていくようです。
- ・必要性がない。
- ・あまり必要がありません。
- ・今、職場の中で十分です。
- ・理解しあえるのか不明のため。
- ・外国語を知らないから。
- ・自分の身の回りのことに精一杯の状況にある。
- ・ことばがわからない。
- ・ことばの問題
- ・町内でも親しい友人関係をもつのは難しくなっている。
- ・特別な仕事とか教育とかつなかりがなければ、外国人との交流は難しい。
- ・高齢ですので、会話、行動に対応できないと思います。
- ・日本語の細かいニュアンスまでうまく伝わらないと思うから。
- ・ひとりで生活しており、いろいろ不安なことがあります。
- ・ことばが通じない。

一人の回答者はこの問いに関して、「「はい」も「いいえ」も答えられない。自然に任せます」と答えている。また、理由を書いていない無回答者は3名

であった。

質問3) この地域で外国籍住民の方と交流する機会がありますか。(はい・いいえ)

最初の問い「外国人との交流の機会」についての回答率は次のようである。

「はい」：6.2% 「いいえ」：89%

「はい」と答えた方にお聞きます。それらはどんな交流でしょうか。

- ・デイサービスで一緒にになります。
- ・仕事の上で。
- ・職場の中で。

「いいえ」と答えた方にお聞きます。それはなぜですか。

- ・ことばが通じない。(3名)
- ・機会がない。(4名)
- ・必要もない。(4名)
- ・この地域に居住する人たちの連携がないから。
- ・近くに外国人の人はいません。(6名)
- ・高齢のため活動ができない。
- ・そういう場も知りません。
- ・生活上、仕事でも会う機会がない。(6名)
- ・接点がない。
- ・自治会でもそんなに話題を聞いたことがないから。
- ・忙しいから。
- ・近所との交流が精一杯で外国人住民までは無理。
- ・地域への関心が薄いので。
- ・働いていたため交流の機会がなかった。
- ・近所に住んでいない。
- ・イベントなど何もないから。

また、次のように答えているものもいた。

まず、日本人は外国人の文化を知る機会を探すことが必要でしょう。ことばの勉強も市内各自治会には集会場があるのだから。ことばの勉強からまずはじめ、その中から彼らの文化をつかむべきです。歌なんかも聞けるじゃないですか。

この回答は主体が日本人であり、日本人がまず、勉強することが重要であると答えている点でほかの回答と異なっている。

質問 4) 将来、機会があれば、イベントへの参加等、外国籍住民と何か一緒にしたいですか。(したい・したくない) 理由とともにお答えください。

「したい」：33.3% 「したくない」：12.5% 無回答：43.7%

「したい」という理由は次のようである。

- ・日本人よりも、もしかしたら人間らしいかも（今、日本人中年に失望している）ので。
- ・自然に機会があれば、友人になれると思う。
- ・町内の清掃とか祭りとかに呼んでもいいのでは？
- ・まず、NHKのポルトガル語のテキストでことばを勉強する。また、サッカー、柔道、空手。
- ・自然の流れとしてそういった機会が必要となってくる。小さな子どもがいる家庭には特にそういった必要性を感じます。
- ・まず、市や地域の催しに外国人と一緒に入って参加できるような企画をするのがよいと思う。
- ・お互いの国ごとの文化の違いを理解しあい、住みよい社会を作ることの助けになる催しを歓迎する。
- ・イベントから友人関係が生まれれば一番よいこと。
- ・必要に迫ればしたい。

- ・英語圏の人なら、語学の勉強に。
- ・交流の機会に恵まれたら、したい。

「したくない」という理由は以下のとおりである。

- ・老人ですべてのイベントに参加できないので、考えたことがない。
- ・イベントや祭りは好きだが、今は子育てで忙しいから。
- ・ことばの問題があるので。
- ・日本語の細かいニュアンスまでうまく伝わらないと思うから。
- ・肉体的に歩行困難なので。

質問 5) 日ごろ、地域で生活していて学校や行政に希望することがありますか。

この問いに対し、43.7%の回答者が「はい」と答え、以下のように回答した。

「学校」に対して：

- ・今までどおりでよい。
- ・生徒同士が仲良く交流しながら、学習ができるよう万全の注意を払ってやってほしい。
- ・(外国籍の子どもの指導のために) 専任の 2 名の定員はあたりまえである。
- ・まず、ことばをマスターさせるべきで学問はあとからでいい。ことばが不十分だと就職にひびく。
- ・先生も保護者も真剣に人ごとでないことを意識して子どもたちを指導してほしい。
- ・専門のアシスタントをつけるべきです。グループ別の指導とか。
- ・(外国籍の子どもたちのため) もっとたくさんの教師の配置をお願いしたい。
- ・法的なこと、日常生活ではいけないことなどをよく教育してほしい。
- ・日本の文化を教える。
- ・子どもの服装が露出度が高いので、見直してほしい。
- ・各家庭との連携を密にとること。
- ・日本語の指導を十分お願いしたい。

「行政」に対して：

- ・子どもたちが外国人と仲良くなるために行政としてもこのことを推進するべきである。
- ・専任の2名の定員はあたりまえであり、行政もその方向で政府に要望すべきであろう。
- ・もっと日本のルール（制度）を教えてあげてほしい。
- ・地域の住民とのよりよい関係や住みやすい街づくりのため、細かい支援をしていただきたい。
- ・いろいろな角度から見た行政、はっきりとした態度で指導する行政を行ってほしい。
- ・地区別の指導を行ってほしい。
- ・まず、市の職員が住民同士の交流に積極的に参加すべきだと思う。そうした社会づくりが必要だと思う。
- ・外国人が多く住むところではスーパーでの万引き等が多いと聞いているので、悪い行為はしないように指導を望む。親の姿は子どももまねるから。
- ・外人の多い地域では回数、集会など開いてお互いを理解したい。
- ・交通法規をもっと教育すべきと思う。
- ・外国人、日本人ともに何を望んでいるのかを把握し、それに対処する。
- ・乱暴運転をしっかりと取り締まってほしい。
- ・生活習慣、ことばなどを習得する場を作り、地域に溶け込めるように指導してほしい。
- ・市民生活に必要な事項のフォロー。
- ・日本語の指導を十分お願いしたい。
- ・日本の文化を教える。
- ・問題点の実態把握、解決策を地道に迫る。
- ・ゴミ出しルール、交通規則の習得に対する指導。

6.3. B地域からの声：ブラジル人住民

まず、ブラジル人の女性によるアンケート結果を以下に提示する。このアンケートの回答は6年前からC公団に住んでいるリビア（仮名）さん、27歳女性のものである。

1) 地域とのコミュニケーション

この地域が「外国人集住地域であることを知っていますか、またこのことに関してどう感じますか」との質問に、「C公団を含むB地域が「外国人集住地域」と呼ばれていることを知っている」と答えており、そのことに対して「B地域やこの近隣で起こる高い犯罪率のせいでこのB地域が「外国人集住都市」という名称で呼ばれていることについて非常に残念に思う」と記述している。

「C公団に住んでいて良かった点はどんなところですか」と尋ねると、「立地条件、アパートの家賃が安い。仕事を移っても、住居を変える必要がない」と回答しており、住居の利便性が目立った。

次に、「日本人住民と交流しているか、また、またどのような交流であるか」について質問した。「職場である工場で多くの日本人と知り合い友人になっており、友人とは一緒にレストランで食事をしたりする」と回答している。しかしながら、このブラジル人女性は「職場では多くの日本人の友人がいるのだが、この地域の日本人住民との交流はない」と回答している。その理由について、「一般化することはできないが、この地域の日本人は犯罪のせいで外国人を受け入れることに非常に消極的であるよう」とアンケートの中で述べている。「日本人と一緒に行動する計画したり、開催したり、それに参加したりしたいですか」との質問には、「たとえば、「お祭り」というようなみんなが参加できるような行事は常に催されていて、私たちは参加することが習慣になっています。でも、それ以外では地域の人とあまりコンタクトをとるといことがありません」とし、彼女が前向きに日本社会に溶け込もうとする様子が伺える。しかしながら、コミュニケーションの相手が個人となると、そこにはブラジル人住民側のリビアさんだけではなく日本人住民側の努力も必要不可欠な要素となってくる。

2) 学校とのコミュニケーション

「この地域のある小学校で外国籍児童・生徒のために特別に日本語や日本文化を学ぶ機会が与えられていることを知っているか」との問いに、彼女は「知っています」と回答し、これに対し「Z小学校には通訳やポルトガル語を話す先生がいて、外国籍の子どもたちに必要なサポートをすべて与えてくれている」、「Z小学校は外国人の子どもたちに対して十分なサポートをしているので、これ以上望むことはない」と答えている。彼女には8歳になる男の子がおり、「現在はポルトガル語を読んだり、書いたりする文字教育の段階であるためブラジル人学校に入れているが、ポルトガル語での文字教育が終わればいずれ日本の学校に通わせたい」と述べている。

3) 家庭内でのコミュニケーション

「家庭で用いられている言語はなんですか」との問いに、家庭では彼女から子どもに向けて、また子どもからこの女性に向けても、「双方向においてコミュニケーションにはポルトガル語を用いる」としている。これは「日本語が少ししかわからないということとは関係なく、常にポルトガル語で話すようにしている」と答えているように、子どものポルトガル語能力を維持するために彼女が家庭内で意識して行っていることである。また、「家庭でのコミュニケーションが密であるかどうか」について尋ねると、「家庭では子どもたちと十分にコミュニケーションがとれている」と回答し、その理由を「生活をともにしていること、同じ言語を話していること、一体感があること、そして、もっとも重要なことは家庭が非常に愛情に満ち溢れているということ」と答えている。

6.4. D地域からの声：ブラジル人住民

また、ブラジル人住民に対しては、恩師であるT氏がD地域にあるブラジル人の経営する店やその周辺にある彼らの自宅を個別に訪問しアンケートへの回答を依頼した結果、ブラジル人住民4名のデータを収集することができた。4名のうちアンケート用紙に連絡先を記していた3名にフォローアップインタビューの協力を依頼したが、返答はなかった。アンケートには、以下の男性4名が回答して

いる。

ホドリゴ（仮名）さん、37歳：5年前に来日、何年前からこの地域に居住しているかは不明。

チアゴ（仮名）さん、29歳：12年前に来日、1年前からこの地域に居住。

ホナルド（仮名）さん、19歳：5年前に来日、3年前からこの地域に居住。

ジョゼ（仮名）さん、31歳：12年前に来日、5年前からこの地域に居住。8歳と5歳の子どもがいる。

質問 1) この地域に住んでいて、良かったと思う点、改善すべきだと思う点がありますか」

良かったと思う点：

- ・静かであること（チアゴさん、ジョゼさん）
- ・ブラジル人が多く住んでいるので、互いに助け合うことができること（ホナルドさん）

改善すべきだと思う点：

- ・数は少ないけれど、日本人住民がブラジル人住民に関して偏見を持っていること（ホナルドさん）
- ・何か起こったら、すぐに外国人住民のせいにするところ（ジョゼさん）

質問 2) この地域の住民が開催する日本人との行事に参加する機会がありますか

- ・参加する（ジョゼさん）
- ・イベントがあることを知らないなので、参加していない（チアゴさん）
- ・ブラジル人住民に参加をよびかけるためにポルトガル語で情報提供がなされているので、ブラジル人住民にも祭りに参加する機会が開かれている（ホナルドさん）

質問 3) 日本語を勉強していますか、また、それはなぜですか

全員が「はい」であった。その理由として、

- ・日本でより快適に生きるために、日本人と毎日コミュニケーションをとる中で会話を練習している（チアゴさん）
- ・空手の先生をしながら、日本語での会話を勉強している（ホドリゴさん）
- ・日本でより生活しやすくするために、工場の中で会話しながら日本語を覚えている（ホナルドさん）
- ・必要だと思うから、工場で会話しながら日本語を覚えている（ジョゼさん）

質問 4) この地域の住民として、行政に期待することはありますか

- ・もっと外国人側の習慣も日本人に理解が進めばと思う（ジョゼさん）

質問 5) あなたは日本に永住したいですか、それとも将来的にはブラジルに帰国を予定していますか。

- ・家族や友人がいるので、ブラジルに帰国を望みます。（Hさん）
- ・日本という国と文化が好きなので、日本に住みたいです。（Iさん）
- ・日本での生活に慣れたので、日本に住みたいです。（Jさん）
- ・いつかブラジルに帰国したいです。（Kさん）

C公団での聴き取り調査にもあったように、一部のブラジル人の行為がブラジル人全体の行為であるかのように日本人住民に捉えられていることが、ブラジル人住民を不愉快にさせていることがこのアンケート結果からも明らかになった。そういった日本人住民のネガティブな姿勢に対し、ブラジル人住民は交流イベントに積極的に参加したり、日本人とコミュニケーションをとることで日本語を覚えたりする中で、地域の中に溶け込もうとする様子が伺える。

アンケート回答者のうちジョゼさんのみに子どもがいるため、学校とのコミュ

ニケーション、および家庭におけるコミュニケーションに関する項目に回答していたのは 1 件のみであった。それによると、「子どもとコミュニケーションをとっていますか、またそれはどれくらいの時間ですか」という質問に、「子どもとのコミュニケーションは一日 6～7 時間と十分とれており、日常的に日本語とポルトガル語の両言語を用いる」と回答している。学校に関して、「子どもを日本の学校化ブラジル人学校のどちらに通わせていますか、またその理由を教えてください」。その理由として、「日本の学校のほうがより教育システムが整っている、そして、ブラジル人学校よりも学費が安い」ということを挙げている。子どもたちの母語保持に対して、「子どものポルトガル語を保持することについてどう思いますか、また、そのために家庭でなにか行っていることはありますか」の問いに、「子どもたちとは家庭でコミュニケーションをとる際にはポルトガル語を用いるため、ポルトガル語を忘れるということはない」という。さらに、その対策として「家庭ではポルトガル語の勉強も行っている」と母語保持に熱心な様子が伝わってきた。これだけでは学校とのコミュニケーションについては言及できないが、少なくとも家庭でのコミュニケーションは円滑であることがわかる。

7. 外国人集住都市会議にみられる「共生」：現状と課題

外国人集住都市会議はニュー・カマーとよばれる南米日系人を中心とする住民が多く居住している都市の自治体がイニシアティブをとって開催されてきた。平成 13 年度に設立され、外国人の集住地で顕在化しつつある多様な問題を討議し、その問題の解決に向けて取り組んでいる。現在の座長都市は A 市であり、2005 年 11 月 11 日、A 市で 5 回目が開催された。この度の都市会議には 17 都市が参加した。A 市のほかに、太田市、大泉町（群馬県）、飯田市、上田市、磐田市、富士市、浜松市、湖西市、鈴鹿市、伊賀市、美濃加茂市、可児市、大垣市、豊橋市、豊田市、岡崎市である。県別にみると、群馬県、長野県、静岡県、三重県、岐阜県、愛知県となり、東海地方がその 3 分の 2 を占めている。この章ではこの度の A 市で行われた会議の概要を記述し、多文化共生社会の現在とこれからについて考察を行う。

7.1. 地域ブロック 3 リーダー市からの報告

この度の会議は「未来を担う子どもたちのために」が主要テーマとして取り上げられた。そのテーマの設定理由は外国人が抱える問題のうち、重要かつ最も緊急性が高いのが子どもであり、そういった問題を解決することは近い将来の共生社会実現を促進することにつながっているからである。まず、このテーマに関して、地域ブロック会議を開催し、それぞれの地域ブロックから、活動状況などの報告があった。発表に際し、17都市を3地域①愛知・三重、②群馬・静岡、③長野・岐阜に分け、子どもに焦点をあてて研究を進めてきたこと、その研究成果、現場の実態を見据えた取り組みなどに関する説明であった。この度の調査はA市を中心としているので、上記の3地域の①ブロックの報告に密接に関係しているが、この章では外国人集住都市全般を見渡すことによってその全体像にも触れてみたい。したがって、まず、会議において報告されたことの要約から始める。

7.1.1. 群馬・静岡地域ブロック

まず、不就学の児童の実態、そして、子どもの居場所づくりが取り上げられた。ことばの違いをまず乗り越えること。外国人学校と日本人学校との密接なかかわりが大切であること。国と地方自治体の窓口はそれぞれの役割があるはずだが、まず、それをはっきりさせることが先決である。また、外国人は税金を払うが、権利はない。市民権はどうなるのか？ オールド・カマーとの関係は？ 社会保険の未加入問題などまだまだ問題が山積みになっている。家庭生活という側面にもいろいろ問題がみられる。本来なら、家族が一緒になってテーブルを囲んで食事をするのが当然の姿であるが、一人で食事をとっている（孤食と呼ばれているそうであるが）状況もある。

7.1.2. 長野・岐阜地域ブロック

浜松宣言を心にとめながら、それぞれの地域の実情を勘案し、検証してきた。教育に関する支援という側面から教育体制の整備がまず叫ばれる。外国人の子どもたちの教育にあたってそれを明白に指導要領に盛り込むこと、そして、その指導案を教育現場で実践してゆくことが肝要である。JSL（Japanese as a Second Language）効果も現場で生かせる。そのための教員の研修も大切である。教育特区としての群馬県で行われている多文化教育は小学校・中学校だけでなく大学

でも実践できる。ことばのカベは地方自治体のみにまかせておくのではなく、国のレベルでの取り組みを行うことによって国として施設を設置したり就学期の子どものケアが望まれている。高校のレベルでの受け入れ体制もまだ十分ではない。認定制度のような形がよいのかもしれない。また、外国人学校への支援に関しては、財政面で日本人学校（一条項学校）と同じように認める方向に持っていった方がよいと思われる。実態とデータからみる傾向と違っている場合もある。たとえば、ある学校は公式的に何かを共生のために掲げているのに、実際はすでにそれが形骸化してなくなっていたり、逆の場合もみられる。こういうことを含めて、国としてもっと教育体制づくりを真剣に考えていかねばならない。

7.1.3. 愛知・三重地域ブロック

この件に関して、インタビュー調査、およびアンケート調査を行った。中学卒業後の子どもたちが何を考えているのか、進学をしない中卒者たちは何を考えているのか。高校卒業後の現状、ブラジル人学校など現状をみながら課題を探る。13歳のときに来日し、現在22歳で仕事に就いている男性は「自分が希望した仕事ではない。転職を希望しており、将来、日本に住みたい」。しかし、目的をもって社会体験をしているのかといえそうではないようにも感じられる。外国人の犯罪が多発しているが、保護者がしっかり子どものしつけを考えねばならないのではないか。雇用主からのインタビュー調査からは引き続き日系人を雇用してゆきたいがことばの問題が難しい。母国語のマニュアルを作っているがそれでも十分とはいえない。日本語が話せるようになることが大切だ。両親がたどってきた道のくり返しではなく、生徒が持っている潜在力をもっと引き出したい。そして、彼らを何のために受け入れてきたのかを雇用主として常に念頭に入れておきたい。人生設計から切り離して、職業については話せないからだ。また、若年層の人数、登録者数といった基礎データをもっと収集してゆき、数字的にも内容を把握し、説得力を持って国に語りかけてゆくことも大切である。子どもを取り囲む教育は企業との連携、学校でのPTA、地域でのネットワークを視野に入れて行ってゆくべきである。企業はその雇用者に対し、何をしているのか？これを見直すための課題のひとつでもある。

7.2. 多文化を生きる子ども、子ども関係者からの意見発表

当日の会議の第二部の前半は外国人生徒の中2のH子、日本で教育を受けた日系青年の大学院生T子、そして、子どもが日本の学校に通っている2児の母親Jさんからの話に耳を傾けた。H子は家族とともに来日して9年目である。3年間のブラジル人学校を経て、小学校2年生から公立学校へ通学している。一番ありがたかったことは困ったことをすぐに相談することができる先生(外国人相談員)が学校にいてくれたことであつた。また、学校との橋渡しをしてくれた母のサポートが大きかった。オーストラリアに行く機会が与えられ、異国での体験から自分の位置づけができた。学校での教科は社会、理科、数学が得意である。

T子は15歳で来日した。彼女は日本での日々を振り返って、現在、今、日本の大学院で勉学しているのはよい先生との出会いがあつたことを体験をまじえて語った。次に日系人は来日するとき、多くの場合、親が先に来る。あちらでは祖父、祖母がいる。その後、呼び寄せで子どもも日本にやってくる。家族が一緒になってもコミュニケーションの側面からは中途半端のポルトガル語、スペイン語、日本語となる。そして、子どもたちはいろいろ困難を背負う。学校での教育は日本語教室、国際学級のみの問題ではなく学校全体の問題である。

最後にJさんが演壇に立った。彼女は上述の通り、日本の学校に子ども(2人)が通っている母親で日系2世である。今、一番悲しいことは子どもの勉強をみてあげることができないことだ。ことばの面だけでなく、数学の割り算の仕方も違うのでこれも教えることができない。日本とブラジルではそれぞれ固有の学校の教育システムがある。たとえば、ブラジルでは各学年を終える時に進級テストがある。2月に始まり、12月に学内暦が終了する。日本の学校はブラジルに比べて設備が整っている。カリキュラムがちゃんとしている。安全面もしっかりしている。コミュニケーションの面では家庭では日本語を使用しているので、ポルトガル語が話せない。今、このことを後悔している。浜松市には18,000人の外国人が住んでおり、そのうち15歳以下は3,500人を数える。その人たちは地域での生活者であり、地域との共生を生きようとしている。その場合、家庭、学校としてのしくみ、地域としてのサポートといった連携がいつそう望まれる。

7.3. 外国人の子どもたちのために：パネルディスカッション

続いて、関係者を含めた円卓会議が行われた。スピーカーは①外国人の子どもにかかわってきたNPO法人、子どもの国代表のIさん、②日系ブラジル人子ども関係者のJさん、③外国人集住地区学校長のKさん、④文部科学省国際教育課長のLさん、⑤A市の市長Mさんである。話の内容は 1) 子どもについての現状と課題、2) 国・自治体・地域社会に望むことが中心となっている。以下、それぞれのスピーカーが分かち合ったことを記す。

7.3.1. 子どもの教育についての意識の二極化：Iさんの話から

Iさんは愛知県豊田市多文化共生推進協議会委員、文化庁親子参加型日本語教室委員など 1998 年から今日に至るまで外国人の子どものために活動してきた。彼女の目から見た外国人の子どもの現状は一時期に比べると定住化傾向にあるが、定住化を決めた人と将来の展望が定まらない人の間で、精神的に不安定な子どもが増えてきたことである。課題としては親が就労にいそしんでいるため、親子がともに過ごせる時間的余裕がないこと、子どもの受け入れ体制に地域差、学校差があること、サポートの基盤が弱いことなどが指摘された。国に対しては外国人の子どもに就学の義務がないので、学校での指導が日本人の子どもと比較すると消極的になるきらいがあるので、外国人の子どもの義務教育化を要望したい。また、それに加えて、日本語教育、多文化教育を充実した方向になるよう求めたい。自治体への要望として、外国籍児童・生徒に支援のしくみづくりを市へ、また県に対しては市町村の連携を強化させること、地域差をなくすこと、高等の受け入れ体制を充実させることが述べられた。地域社会に目を向けること、ボランティアがほとんどいないところもあるし、会社との連携もほとんどないので、保護者会や授業参観なども仕事の都合で出席できない。また、正社員としての雇用もほとんど実現していないのが現状であるということであった。

7.3.2. 外国人の子どもたちへもっと注意を向けてほしい：Jさんの要望

Jさんは日系ブラジル人3世で1991年に来日。現在S市のブラジル人学校で教える。まず、日本語やポルトガル語を学ぶことは楽しいと子どもたちが感じるような取り組みが必要である。アイデンティティに悩む子どもがたくさんいるが、なぜ、日本にはいろんな国からやってきた人が暮らしているのか、といったこと

を日常生活の中で子どもに分かち合うことが大切である。学校に通っている子どもはブラジル本国の教育レベルと比較すれば日本のブラジル人学校も課題もあるが、日本の学校に通っている子どもたちと比べて、学校を楽しんでいる感じがする。不就学の子どもの実態について、なぜ、そうなのか、なぜ、不就学に至ったのかといった点を考察する必要がある。外国人の子どもたちに日本の学校の先生方はもっと目も心も向けてほしい。教員の研修のなかに外国人児童・生徒のことについて考えたり、討議したりする時間を取り入れてほしい。大学でも、外国人児童・生徒のことに関する話し合いの場を設け、こういった課題の場に取り込んでほしい。障害をもつ子どもへの適切な指導、虐待を受けた子どもの心のケアといった観点からの配慮も大切である。通訳ということはことばがわかることが条件であるが、こういった精神的な心の営みに関して、対応する場合もあるので、通訳として働いている人に対する研修制度も必要ではないか。

7.3.3. 外国人児童に対する教育政策の実施：Kさんが望むこと

KさんはA市の外国人児童・生徒受け入れ拠点校のひとつである小学校の校長の職にある。その小学校の全児童 301 名中、外国人児童は 73 名である。そのうち 67 名がブラジル人児童で、ペルー人 4 名、ボリビア人 2 名となっている。日本語指導担当教員 3 名、適応指導員 4 名を中心として外国人児童の支援を行っている。日本人児童・外国人児童が在籍学級にいて学者しているが、日本語教室「つばさ」では約 50 名の外国人児童が取り出し授業を受けている。日常言語は問題ないが学習日本語となると難しく中学校に進学しても学習についていけない生徒が多くなってきている。保護者への支援も子どもへの学習支援と同じくらい大切であるのでそういった観点からの十分な人的配置を望みたい。子どもが就学・進学する上での保護者のための情報を多言語で提供するシステムを自治体に望みたい。就学前の児童に対するオリエンテーションも保護者に対して実施することも重要である。高校まで進学できる体制作りが肝要である。その場合、進学制度の改善、高校での支援体制なども視野に入れて検討を重ねる。外国人児童担当者への研修制度の確立も早急に取りくまねばならない。外国人の人権を遵守するように啓発することによって、子どもが通学する学校での諸行事に有給休暇をとって参加できるように自治体へ働きかけ、それを制度化してゆくことが先決であろう。

7.3.4. 外国人の子どものための教育施策案について：Lさんからの提言

先述したように、Lさんは現在文部科学省国際教育課に配属されており、国として今、何が必要とされているかを鑑みながら施策を講じていることを強調された。外国人の子どもについては就学義務はないが、公立学校の義務教育を受けたい児童には無償で受け入れており、教科書の無償配布が就学援助等は日本人児童と同様、教育の機会を保障している。そうした支援をスムーズに推進してゆくために以下の6項目を挙げることができる。①日本語指導等に対応できる教員の配置、②母語が駆使できる人材派遣、③JSL(Japanese as a Second Language)の教材・カリキュラム開発、④外国人児童・生徒の支援事業の実施であり、こうした施策案を現実化させるために、概算要求が必至となる。また、⑤外国人学校に関しては学校法人の特定公益増進法人として増加すること、⑥大学入学資格をより弾力化すること、各種学校設立認可基準を緩和することなどが検討されている。

7.3.5. 子どもを取り巻く総合的な社会的環境改善に向けて：Mさんからの提起

1990年に出入国管理および難民認定法が改正され、それを契機に日本で暮らす外国人の子どもたちの数は4倍近くに増加した。しかしながら、そういった子どもをとりまく環境は整備されていないというのがMさんの意見である。教育の面でも、親の就労の観点からも、居住形態や社会保障などもそうである。そして、結果的に子どもたちにとって家庭環境も万全ではない。こういった問題は学校現場だけで解決されることなく、地方自治体、ボランティアなどが支援を行っているものの、子どもを取り巻く総合的な社会的環境の改善が急務である。まず、外国人に関する施策を担当している各部門が結集して共生推進会議を設置する。その会議が有効に機能するために、必要と考えられる案を企画するための人材の充実を図る。多文化共生の指針や計画を策定し、それらを有効に機能させる。また、NPOを育成し、自治会などとも協力しながら、地域でともに暮らす仲間として子どもたちを含めた外国人を受け入れる環境づくりが現在、求められている。一方、国や都道府県においては、教育の場におけるハード面での改善が急務である。学習指導要領に外国人児童・生徒の教育方針を盛り込むこと、日本語指導の

カリキュラム作成、不就学の子どもたちがすぐに、いつでも把握できるようなシステムづくりといった教育体制の準備があげられる。ソフト面では外国人児童・生徒教育の専任教員の充実、外国人学校の法的地位を確立してゆくこと、また、財政的支援などが挙げられる。

7.4. 国の対応と今後の課題

親の都合で日本で暮らすようになった子どもたちはアイデンティティの問題、勉学の問題、ことばの壁といった側面から、日本での滞在が長期化するにつれて、母国に帰るか、日本にずっととどまるかといった将来の見通しも不可能になっている。こうした状況を鑑みて、Mさんは講演の中で、この度の外国人集住都市会議が「外国人の子どもたち」をメインテーマにして討議の場を設けたことは「時宜に適ったことだ」と述べた。まず、日系人の子どもたちの問題は親の就業行動と密接にかかわっていること。収入を最大にするために長時間の労働に励み、結果として、子どもたちに犠牲を強いる。家庭での対話といった場もなくしてしまう。経済的には安定した状況なら有料の外国人学校に子どもを送る。しかし、母国への送金や賃金が抑制されると無料の公立学校へ子どもを移す。2つの学校を行ったり来たりする子どもは精神的にも落ち着かない。ことばの面にも影響を与える。日本語にしても母語にしてもいずれも中途半端になる。その結果、不登校になったり、就業もしなくなるケースもでてくる。一方、第一世代の親世代が子どもに対して、家庭の場でも、教育の場でも夢をもたせて、しっかりとした教育の基盤を持たせることは将来、母国と日本の架け橋となり、受け入れ国の日本にも大きな貢献をすることになる。こういった第二世代効果を眼中に入れての取り組みが期待されている。これは親世代のみに焦点をあてるのではなく、第二世代、そして、その後の世代の人々に対して、自治体や地域社会、さらには国がどのような政策をとろうとしているかといった課題と密接にかかわってくる。地域において、子どもたちとともに考え、彼らに動機付けを与え、希望を持たせることは具体的な実践においてはじめて実を結ぶ。そういったことを実現するためには、家庭、学校、企業、地域社会といった連携が必要である。そして、こういったことを機能させるための人材が今、求められている。子どもの教育、そして、外国人の親の発想転換を促すことである。

1989 年以来、政府は「専門的・技術的労働者は可能な限り、積極的に受け入れるが、いわゆる単純労働者については慎重に検討する」という外国人政策を維持している。1990 年 6 月には改正「出入国管理および難民認定法」が施行された。こうしたなか、日本社会における外国人政策をめぐる議論の中心はどこまで受け入れの範囲を拡げるのかという点に終始していた。しかし、2004 年 10 月の外務省海外移住審議会の答申、2005 年 4 月の経済財政諮問会議「21 世紀ビジョン」などにおいては地域での外国人との共生のための施策がいかに重要であるかということを書き及している。この外国人集住都市会議においても、この度の議論を踏まえて、内閣府に対し、外国人の就労・社会保障、外国人登録、子どもの教育など最重要な側面を盛り込んだ「規制改革要望」を提出し、それに対する回答を関係省庁に促すことが適切であると思われる。地域における外国人政策を大きな柱として位置づけ、「日本人住民と外国人住民が、お互いの文化や価値観に対する理解と尊重を深めるなかで、健全な都市生活に欠かせない権利の尊重と義務の遂行を基本とした真の共生社会（多文化社会）の形成⁵⁾」に向けて努力することが肝要である。

8. おわりに

このたびの研究は外国人集住都市のひとつ A 市の地域、またその近隣地区の現実を道具立てとし、発見的手法によって現状を点検しようと試みたものである。外国籍住民が増加し続け、彼らの居住範囲も全国各地へと広がりを見せる昨今、より多くの地域でみられる事例に目を向けることこそが日本社会の現実を網羅的に把握することにつながると考えられる。そこで、このたびの研究は外国人集住都市として位置づけられていながらも依然として体系的な研究が行われていない A 市の C 公団、および B 地域近隣の D 地域に研究対象を移行し、そこで生活をともしする日本人住民と外国籍住民の間にみられるコミュニケーションのありように注目することで、C 公団にみられる現段階での共生の様子と今後に向けての課題を探ってみた。ここから明らかになったことは、外国人住民は朝から夜遅くまで共働きの生活を送っており、地域での社会生活を欠いている結果、日本人側

⁵⁾ 当日配布された資料より引用。

からすれば彼らは「見えない存在」になっているということである。実際、第6章でみたように、「近年、この地域は外国人集住都市と呼ばれていることを知っていますか」という問いでも、半数以上の回答者（54.1%）が「知らない」と答えている。また、「知っている」と答えた人に対して、「機会があればその人（々）と友人関係を持ちたいですか？」という問いに対して、「いいえ」と答えた人が約6割（58.0%）であった。その理由は「その必要性がない」、「理解しあえるのか不明のため」、「自分の身の回りのことに精一杯である」、「ことばがわからない」といった意見にみられる。

共生へのきっかけづくりはまず、異質なものに開かれた心でお互いを「知る」ことから始められる。そこから、お互いを「支えあう」概念が生まれる。そして、「支えあう」ということは「調べあう」、「触れあう」、「癒しあう」、「つむぎあう」、「学びあう」、「広めあう」という概念と交差していると考えてもいいのではないだろうか。「共生」に対してどのような活動のニーズがあるのかをまず、「調べあう」、春祭りで食事をともにすることによって「触れあう」、生活福祉を相談する子育て支援を通して「癒しあう」、ボランティア交流会を通して「つむぎあう」、新しい言語や異文化理解のための研修、教育実践を通して「学びあう」、さまざまな諸活動を伝えることによって「広めあう」ということであろう。地域住民として、子どもを含む全住民がこのような6つの概念を軸にして、生活基盤を築いてゆくことが現在、もっとも望まれていると考えられる。

事実、外国人は地域で「顔の見えない存在」になっているので、日本人側にも的確な事実が伝わりにくい現状がある。それゆえ、今回のアンケートでも間接的に聞いたことや明白な手段でチェックしないまま、マイナスイメージの外国人の姿を自分の心の中に引きずり込んでいることが明らかになった。たとえば、「犯罪が増えているように思う」、「交通ルールを守らないとか問題があるように聞いています」、「不良外人が多いのが心配」といった意見である。インタビューとアンケートに答えてくれたT氏は、はじめ「外国人と直接向き合うまでは『恐ろしい』」と筆者に語っていた。この時点では上述の回答者となんらかわらなかった。しかしながら、T氏は「外国人たちと会ってみると自分の考えが正しくなかったことがわかった。勇気をもって外国人に向けて声かけをしたら、彼らがすぐに反応してくれてうれしくなった。もっと自分が彼らのことばを知っていたらよかったの

に」と心残りに思った。そして、「彼らとのコミュニケーションを積極的に進めてゆくために、ポルガル語を学習したい。そうなれば自然と自分の世界が広がるから」と心の変化を筆者に分かち合ってくれた。T氏の述べていることは自分の体験を振り返り、そこから納得して行動に移らなければ、いつまでも世間的な空想の世界からあらわにされた流言に自分自身が振り回されてしまうことになるということを物語っている。真の意味での共生の達成は第7章で考察した外国人集住都市会議において提起された政府・行政レベルでのスローガンに触発されて行動を起こすのみではなく、地域社会の構成メンバーのひとりひとりの能動的な参加、教育現場、職場における連携から生まれる意識の変革、それに向けての絶えざる努力に負うところが多い。この目的を達成するためには外国人を巻き込んで日本人と彼らの双方向からの歩み寄りが必須であり、こういった最初のステップを足がかりとして地域住民の共生がより現実的なことになるのではないだろうか。

謝辞

私たちのこのたびの研究に関して多くの方々からお力添えをいただいたことを心から感謝いたします。ことのほか、異国で就業に励み、時間的にも余裕がないにもかかわらず、全面的に協力を惜しまなかったブラジル人の方々、A市のC公団に直接、間接的に携わっていらっしゃる役職者の方々、D地域でのアンケート調査に絶大なる助けの手を貸してくださった自治会長、T恩師に感謝の意を表したいと思います。

参考文献

- 池上重弘編(2001)『ブラジル人と国際化する地域社会』明石書店
異文化間教育学会編(1989)『異文化教育3；異文化間教育とコミュニケーション』
アカデミア出版会
金子勇(2003)『都市の少子社会：世代共生をめざして』東京大学出版会
駒井洋編(2002)『国際化のなかの移民政策の課題』明石書店
_____(2003)『多文化社会への道：グローバル化する日本と移民問題』第6巻
明石書店
自由人権協会編(1997)『日本で暮らす外国人の子どもたち一定住化時代と子ども

の権利』明石書店
財団法人アジア・太平洋人権情報センター編(1998)『問われる多文化共生－教育・地域・法制度の視点から』解放出版社
津田葵(2005)「共生を生きる日本社会－21 世紀 COE 研究プロジェクトから」『適塾 No.38』 pp.26-32 適塾記念会
手塚和彰(2005)「外国人問題にどう対処すべきか－外国人受け入れへの日本の課題」『外交フォーラム No.202』 pp.10-15 都市出版社株式会社
NHK総合テレビ「ご近所の底力」2003 年 12 月 11 日放送

参考ホームページ

NHK総合テレビ「問題解決ご近所の底力」
<http://www.nhk.or.jp/gokinjo/after/part6.html> 2006 年 1 月 15 日
自治体国際化協会ホームページ
<http://gakubee2.web.infoseek.co.jp/yokkaichi/yogou.htm> 2006 年 1 月 15 日
法務省入国管理局ホームページ
<http://www.moj.go.jp/PRESS/050617-1/050617-1.html> 2006 年 1 月 15 日
四郷地区歴史めぐりホームページ
<http://gakubee2.web.infoseek.co.jp/yokkaichi/yogou.htm> 2006 年 1 月 15 日付
四日市市国際共生サロンホームページ
<http://www.miesc.ne.jp/yia/salon/salontop.htm> 2006 年 1 月 15 日付
四日市市議会会議録平成 14 年 9 月議会
<http://www3.city.yokkaichi.mie.jp/KAIGIROKU.nsf/> 2006 年 1 月 15 日付

「多文化共生」をめぐる現状と未来 ーある韓国系民族学校の事例からー

呉惠卿・植田晃次

1. はじめに
2. 調査の概要
3. 分析1：生徒に対する調査
 - 3.1. 学校について
 - 3.2. 友達について
 - 3.3. 学校生活について
4. 分析2：教員に対する調査
 - 4.1. 学校について
 - 4.2. 生徒について
 - 4.3. 「民族学校」と「共生」について
5. B中学校の現状と未来：「民族教育」と「多文化共生教育」の間で
6. おわりに：「多文化共生教育」に向けて

1. はじめに

最近、「ニュー・カマー」たちの実態が日本社会における「共生」という観点から考察され始めている。本研究者らは、最近増えつつある「ニュー・カマー」が直面している状況や実態を効果的に把握し、今後の方向性などを予測するためには、かつて「ニュー・カマー」であった「オールド・カマー」について新しい視野から考察する必要があると判断し、これについて調査を行ってきている。彼(女)らは、ホスト社会である日本社会と多くの面において摩擦あるいは葛藤を経験しながら、現在は様々な形で「共生」を実現しているからである。本研究者らはこのテーマと関連し、日本社会における「ニュー・カマー」や「オールド・カマー」、そして少数の日本人がともに学校生活を送っている韓国系民族学校に焦点をあてて、それぞれ異なる背景を持つ生徒や教員たちが互いにどのような共生しているのか、具体的にどのような方策を日々実践しているのか、学校側は異なる背景の生徒たちあるいは教員たちが「共生」を実践するようにどのように配慮しているのか、意識的な努力以外に無意識での心がけというのはどのようなものなのか、などについて社会言語学的、エスノグラフィック的研究を行っており、その一部を報告書としてまとめている(呉・植田 2005)。

様々なエスニック・グループにおける「共生」という概念を考える際、最近注目を浴びている在日ブラジル人の研究やいわゆる「日本人残留孤児」などの研究における「問題」あるいは「テーマ」とされていることがら、例えば、世代間による言語の断絶、子どもの教育、「民族」とアイデンティティ、ホスト社会とのコミュニケーションのとり方などには、「オールド・カマー」がすでに足掛け1世紀かけて辿ってきたものが少なくない。時代や社会的・歴史的背景の差異はあるだろうが、学際的分野において「ニュー・カマー」への注目が高まる中、「オールド・カマー」の経験を念頭に置くことは、ある面で不可欠であり、「ニュー・カマー」、「オールド・カマー」、またホスト社会である日本社会にとってもこれは意味のあることであると思われる。つまり、「オールド・カマー」の現状・問題を現時点でもう一度考えることは、「ニュー・カマー」の問題を考える上で避けて通ることができない、非常に重要なことであるといえよう。

本研究者らは、多文化・多言語の「共生」が重要な課題として浮かび上がっている日本社会において、「オールド・カマー」と「ニュー・カマー」の接点となっ

ている、ある韓国系民族学校に焦点をあてて、学校生活の中で「共生」がどのように現れ、表明されているのかについて調査を行ってきた。さらに、「民族学校」あるいは「民族教育」というのは、画一的・排他的なものではなく、周囲との相互作用によって日々変化し続けるものであることをエスノグラフィック的研究方法によって明らかにした。つまり、今まで排他的視線にさらされていた「民族学校」が、実は多くの面において日本社会との架け橋的役割を果たしてきたという点についても触れた。

しかし、多様でポジティブな活動や努力にもかかわらず、この学校には「共生」というキーワードと関連していくつかの課題があるということについて、以前の報告書で指摘している。本報告書ではこれと関連して、今後この「民族学校」が解決しなければならない課題にはどのようなものがあるのかについて一緒に考えていきたい。

本報告書では参与観察から得られた発見に加えアンケート調査の分析に重点を置いている。匿名という形で実施されたアンケート調査では、生徒や教員両方において、より生々しい声が出てくると期待されたからである。次章では、今回実施したアンケート調査の概要について記述する。

2. 調査の概要

分析に入る前に、本調査のフィールドとなっている民族学校について簡略に紹介しよう。現在日本では、4校の韓国系民族学校が運営されている。そのうち、3校が「1条校」、1校が各種学校である。児童・生徒の属性から見ると、前者は主として在日韓国人が、後者は駐在員等の子ども等、主として韓国本国からの児童・生徒が中心を成す。本稿はA府内にある「1条校」の韓国系民族学校であるB中学校をフィールドとするものである。同校は幼稚園から高等学校までを持つ学校法人Cに属し、すでに半世紀以上の歴史を持つ。創立当初は中立系であったが、1970年代から韓国系の学校として運営されている。学校法人Cでは、生徒の大多数は在日韓国人が占めているが、韓国本国からの生徒や日本人生徒も在籍している。これら3つの異なる背景を持つ生徒が混在しているが、いわゆる「ダブル」の生徒もあり、国籍や姓名のみを以って、一概にこの枠組みに当てはめるのは難しい。教職員について

も、在日韓国人が中心であるが、「派遣教師」と呼ばれる本国からの教員のほか、日本人教職員も在職している（同校の概要の詳細については、呉・植田 2005：11-14 を参照のこと）。

本稿は学校法人 C のうち、B 中学校を対象として、2004 年 12 月から 2005 年 1 月に渡り、観察・アンケート・聞き取り調査によって行った研究報告の一部である。呉・植田（2005）で、すでにその一部を示したが、本稿はそれに続くものであり、一連の調査のうち、主としてアンケートに係る部分についての報告である。

アンケートは、生徒や教員それぞれの属性や学校生活の中で感じていることなどについて、（1）生徒、（2）在日韓国人・日本人教員、（3）「派遣教師」、（4）校長の 4 つの対象別に実施した（すべてのアンケートは、校名等を××とした上で本報告書末に収録）。

「生徒」の内容は、以下のように、大きく分けて、学年、性別、「国語¹」授業での所属クラス、母語といった生徒自身に関する項目、各グループの生徒間の相互交渉の様子やイメージ、民族学校や学校生活といった学校に関する項目、学校や家庭での言語使用に関する項目の 4 つについてのものから成る。

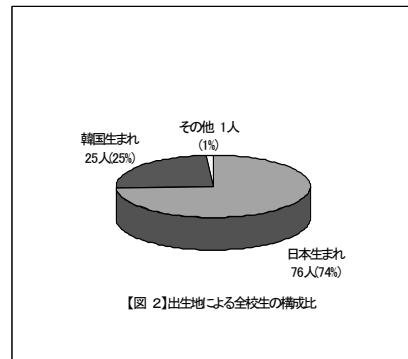
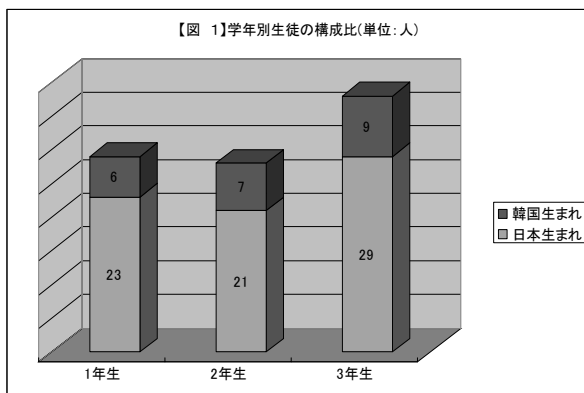
回答用紙は日本語版と韓国語版をそれぞれ作成し、生徒自身にいずれかを選んでもらい、適宜使用した。実施にあたっては、呉が質問などに備えて巡回しつつ、教員の協力を得て授業終了後に教室で生徒に回答してもらい、即日回収した。

本アンケートは、B 中学校の全クラスを対象とし、102 名から回答を得た²。このうち韓国語版による回答は 18 名であった。前述のように、生徒を属性によって単純に 3 つのグループに分類することは難しいために、「日本生まれ」・「韓国生まれ」・「その他」に 3 分して考察した。これらの属性・学年別

¹ 韓国語を指し、クラスは習熟度別に、本国班・高級班・初級班に分かれている。なお、本稿での言語呼称は B 中学校での一般的な呼称に従う。

² B 中学校は各学年に 2 クラスずつ、全部で 6 クラスから成っている。1 クラス当たりの人数は一定ではなく、本国からの転入や帰国などによって随時生徒の異動がある。調査当日は、出席した全校生から回答が得られた。

生徒の構成比、出生地による全校生の構成比は【図 1】【図 2】の通りである。分析にあたっては、回答の不備などがある7名分を除く95名分を用いた。また、「韓国生まれ」の生徒の滞日歴は1年以下から3年以上とさまざまであるが、2年以下が7割弱を占めている。



「在日韓国人・日本人教員」および「校長」については日本語版、「派遣教師」については韓国語版を作成して用いた。これらはそれぞれ「生徒」へのアンケートの実施日に回答を依頼し、後日同校を訪問して回収した。B中学校の全教員を対象とし病気療養中の1名を除く10名中、8名(うち「派遣教師」は1名)から回答を得た。属性・世代別(在日韓国人の場合)の回答数は、<表1>の通りである。

<表1> 教員の属性・世代別構成

		2世	2.5世	3世
校 長	在日韓国人	0	0	1
	日本人	1	1	1
教 員	日本人	4		
	派遣教員	1		
計		9		

これを見ると、日本人教員が半数を占め、民族学校としてはやや多くを占めているように見えるが、幼稚園から高等学校まで学校法人C全体で見ると

き、必ずしも日本人教員のほうが多いというわけではない。

3. 分析1：生徒に対する調査

本報告書では、生徒に対して実施したアンケート調査の結果から、以下の項目について記述・分析を試みる。

- ① 生徒たちは、この(民族)学校についてどのように思っているのか。
- ② 生徒たちは、自分と同じ背景を持つ子ども・異なる背景を持つ子どもに対してどのように評価しているのか。また、ホスト社会の主な構成員である日本人および、この民族学校において本国となる韓国の人々についてどのように評価しているのか。
- ③ 生徒たちは、学校生活の中で現れる様々な「障壁」をどのようにして乗り越えているのか。

質問③の場合、前回の報告書で詳しく取り上げているが、観察によって得られた情報をより詳しく見るためにこの質問項目を設けた。

3.1. 学校について

各種資料や学校関係者から得たインタビューのほか、本研究者らはこの学校の主人公である生徒たちが「民族学校」であるこの学校に対してどのように思っているのかを調べるために、入学する前にこの学校に対してどのような印象を持っていたのか、そして今はどのように思っているのか、どのような理由でこの学校への入学を決めたのか、誰が決めたのかなどについて質問を行った。

まず、「入学する前の学校に対する印象はどうだったか³」という質問に対して、日本生まれの生徒は、「韓国人が多く韓国語をしゃべる学校」と答えたものが多く、次に「楽しそうな学校⁴」と答えた生徒も多かった。韓国系民族学校なので、「韓

³ 回答の引用にあたっては、用字・表記などを調整したり、要約した部分がある。

⁴ 「珍しい学校」や「すごいところ」という答えも、「楽しそうな学校」と関連があると判断し、この範疇に入れて集計した。

国人」や「韓国語」が一番先に頭に浮かんでくるのは当然かもしれない。また、「楽しそうな学校」というのは、韓国語がしゃべれて韓国人たちと付き合えるという意味で、ある面で「すごくて」「珍しい」、だから「楽しい」という連想が働いたのではないと思われる。ここでの「韓国人」というカテゴリーは、エスニック的背景と関係なく、すべての生徒によって使われているが、これは韓国から来た「ニュー・カマー」の「韓国人」だけではなく、この学校のメインである「在日韓国人」も含まれている。生徒たちの用語の使い方からみると、この学校では「在日韓国人」というカテゴリーは「韓国人」というカテゴリーに含まれている。また、生徒たちは、この学校に入学する前に、(周りの日本社会では一般的ではない)「言語」あるいは「文化」を習得しながら楽しく生活する学校という、ポジティブなイメージをほとんど持っていた。そのほか、「普通の学校」や「分からない・覚えていない」と答えた生徒も多かったが、小学校からすでにこの民族学校に通っていた生徒の場合は、この学校はある面で自分たちにとっては慣れ親しんだ「普通の学校」と思われており、特に考えたこともないのだろう。また、「特定のスポーツが強い学校」という答えも見えたが、この特定のスポーツと関連した答えは、日本人と推定される生徒に多く見られる。

一方、韓国生まれの生徒の場合、「学校のことを知らなかった」という答えが多く、「韓国の学校」あるいは「韓国語で授業を行う学校」という答えが比較的多かった。日本の学校の状況について詳しい事情が分からない韓国からの生徒の場合、この民族学校は日本にある「韓国の学校と似たような学校」とであると、漠然な印象を持っていたのだろう。

次に、実際入学してからはどのように思っているのかを調べるために、「日本の学校や他の民族学校などと比べてどんな点が違うと思うか」と聞いてみた。これに対して、日本生まれの生徒の場合、「韓国のことばや文化に力を入れている」など、「韓国語」や「韓国の文化」と関連した答えが一番多かった。その次に多い答えは「みんな仲がよい⁵⁾」というふうに、人間関係の濃密さについて言及した生徒が多かった。これは「生徒の数が少ない」という答えとも相互関連している。

⁵⁾ この回答の中には「先輩たちが優しい」や「いじめがない」、「どんな人でも受け入れられる人々がいる」という答えが見られた。

つまり、「生徒の数が少ないので、互いに興味をもって仲良く助け合おうとする」というふうにも解釈できるからである。そのほか、「給食にキムチが出る」や「教科(目)が多い」、「行事が多い」、「日韓両方の友達ができる」との答えも見られた。

まとめると、生徒から見たこの学校と日本の学校との違いは、「韓国語・韓国の文化」に重点を置きながら「少人数」で「仲良く」学校生活を営んでいる学校、「給食の時間にキムチ」も出るし、「行事や教科」も多い学校となっている。入学する前に持っていたイメージにそれほど大きな食い違いは見られないが、「日本の子もいる」という回答が1人見られた。これは、韓国系民族学校なので韓国からの駐在員の子どもかあるいは在日韓国人だけ通うのが当たり前で、「日本人の子」がいるということは普通ではないという意識が働いていたのだろう。

次に韓国生まれの生徒の場合、「韓国語や韓国文化を重視する」という答えが一番多かった。特に3年生の場合、これと関連した答えが殆どを占めている。その次に、「少人数」や「分からない」という回答が多く、全般的にポジティブな答えが殆どとなっている。面白いのは、日本生まれの生徒の中では、「給食にキムチが出る」という答えが何人か出たが、韓国生まれの生徒の中では1人もこのような答えが見られなかったことである。「韓国人の学校だし、キムチを食べるのは当たり前」という意識が働いているのかもしれない。

以上からみると、学校に対しての評価においては、在日韓国人を含めた日本生まれの生徒と韓国からの生徒の間に、それほど大きな食い違いというものは見られなかった。

どのような理由でこの学校に入学(あるいは転校)を決めたかという理由に対して、日本生まれの生徒の中で一番多かった答えは、「韓国語・韓国文化が勉強できるから」と、「韓国語」と「韓国の文化」に関連したもので、ほぼ半数を占めている。その次に、「特定のスポーツのために」と答えた人が多く、「分からない」あるいは「無回答」も多かった。「特定のスポーツのために」と答えた生徒は、ほとんどが日本人生徒で、この学校では{「日本人生徒」＝「特定のスポーツ」}という公式が成立するほど、特定のスポーツと関わっている。これから見ると多くの生徒、特に在日韓国人の生徒は自分たちの母文化である「韓国語」・「韓国の文化」を勉強したいという意図からこの学校を選んでいることが分かる。そのほか、「日本の学校でいじめを受けたため」にこの学校に入学したという答えもあった。ま

た、「家族や親戚が通っているため」、「知り合いに勧められたため」、など自分の周りから影響を受けて入学した生徒も多く見られた。まれではあるが、将来「韓国の大学に行くために」この学校を選んだという答えもあった。「親が韓国人だから」という答えも見られるが、これは「親」が「韓国人」だから「自分も韓国の学校に行くことが当たり前」というように響く。

次に韓国生まれの生徒の場合、答えはそれぞれであるが、「いずれは帰国する予定なので、韓国語を勉強する必要がある」「日本と韓国の両方のことばと文化が習得できるから」など、エスニック・アイデンティティの自覚から、あるいは将来の必要性のために韓国語・韓国文化を習得する必要があるからと答えた生徒が多かった。また、転校して間もない（と推定される）生徒の場合、「日本語が分からないから」とか「韓国人が多いから」という答えが見られた。日本に来て時間があまり経っていない生徒の場合、日本語の問題で日本の学校に行くことができず、この学校を選んだのであろう。また、この生徒の場合、慣れない環境でよく分からない言葉を使う日本の学校より、より慣れている環境で自分の母語が使える「民族学校」で勉強したい、というのがこの学校への入学を決めた大きな理由であろう。

「誰が入学を決めたか」という質問に対して、日本生まれの生徒では、「父母が決めた」が38名、「自分が決めた」が32名、その他などである。「父母が決めた」と「自分が決めた」はほぼ同じ程度を占めている一方、韓国生まれの生徒の場合、「父母が決めた」が18名、「自分が決めた」が2名で、入学に関する決定権はほとんど父母側にあるという結果が出た。その理由としては、中学生段階で駐在員等の親について来日した子どもとしては、日本の学校事情などに詳しくなく、よって入学に関して親が決める場合が多いと思われる。また、親としてもいずれにせよ将来韓国に帰国することを前提として来日しているので、自分の子どもが母語や母文化である韓国語を保持できるような学校を探して下した結論であろう。

以上をまとめると、生徒たちが入学する前に学校に対して持っていた肯定的イメージは入学後も続いているということが分かる。入学を決めた大きな理由である韓国語・韓国文化の習得やその他(特定のスポーツ)も学校側で力を入れて取り組んでいると判断しており、これからみると生徒たちは学校生活に、ある程度満足していることが分かる。

3.2. 友達について

3.2.1. 生徒間における対人関係

円満な学校生活を営むにあたって、友達の役割は非常に大きい。様々な背景を持つ生徒たちが集まっているこの学校で、生徒たちの学校生活に大きく影響すると思われる友達について調べるために、親しく付き合っている友達はどのような背景を持っているのかを聞いてみた。

本研究者らは、学校で「一番仲のいい友達を5人挙げるとすると、そのうち日本人生徒・韓国から来た生徒(以下、韓国人生徒)・在日韓国人生徒はそれぞれ何人か」という質問を自由記入式で聞いてみた。

まず、日本生まれの生徒が親しく付き合っている友達を平均で表すと、〔在日韓国人生徒(2.8人) > 日本人生徒(1.4人) > 韓国人(0.8人)〕の順であった。上でも紹介したようにこの学校の場合、在籍している生徒のエスニック的属性からみると、在日韓国人生徒は全生徒の60%以上を占めている。最近韓国から来た駐在員の子どもの数も増えつつあり、30%以上を占める場合もあったりする⁶。また、最近になって、主として特定スポーツを目的として入学した日本人生徒は、10%前後であるとみられる。生徒の構成比からみると、親しく付き合っている友達の中で在日韓国人が一番多いのは納得ができる。しかし、10%前後にしかならない日本人生徒の場合、人数からその3倍もある韓国人生徒より2倍も多い割合で、親しく付き合っている友達として選ばれている。これからみると、この学校での生徒の人間関係に影響しているのは「ことば」やそれを含めた総体としての「文化」であると思われる。つまり、本国からの生徒というよりも、ことばや習慣が理解しやすいほうを友達として優先しているのである。

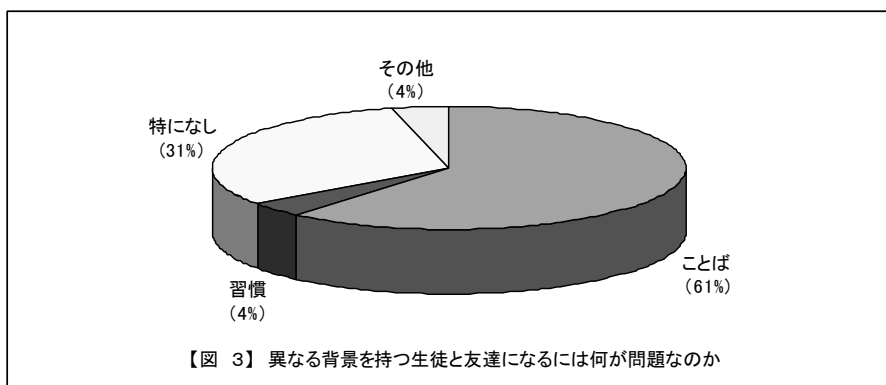
次に韓国生まれの生徒が親しく付き合っている友達は、〔韓国人(2.4人) > 在日韓国人(1.7人) > 日本人(0.7人)〕の順番となっている。ただし、上記の日本生まれの生徒の場合では、〔在日韓国人 > 日本人 > 韓国人〕といった傾向は学年ごとに一致を見せていたのが、韓国生まれの生徒の場合、学年ごとによって不規則な分布を見せている。例えば、1年生では〔在日韓国人(3.0人) > 韓国人(1.4人) > 日本人(0.6人)〕の順になっていたのが、2年生では〔韓国人(2.3人)

⁶ この学校の教員によると、時期によっては30%以上を占める時もあるという。

> 日本人(1.5 人) > 在日韓国人(1.2 人)]の順になっている。つまり、1 年生・2 年生の場合、親しく付き合っている友達として「韓国人生徒」を選んでいる生徒はそれほど多くない。それが 3 年生では、[韓国人生徒(3.5 人) > 在日韓国人生徒(1.1 人) > 日本人生徒(0.3 人)]となっており、とりわけ 3 年生で韓国人と答えた生徒が多かった。これは下記のイメージ調査の回答からも垣間見ることができる。つまり、3 年生の韓国生まれの生徒では、「気楽だ」など、韓国人生徒に対する評価が高く現れている。これは後ほど紹介する、日本生まれの生徒から出てきた、韓国人生徒に対する不満の声、つまり「自分たち(韓国人生徒)だけでしゃべる」という否定的評価とも脈を一にしている。この調査結果からみると、上記の[韓国人(2.4 人) > 在日韓国人(1.7 人) > 日本人 (0.7 人)]の順番は、必ずしもこの学校内で一般的あるいは共通した現象であると見られないかもしれない。しかし、韓国人生徒が占めている割合がそれほど多くないということを見ると、やはり韓国生まれの生徒は同じ背景を持つ生徒との付き合いが比較的多いというのは否定できないだろう。

ここでもう 1 つ記述しておかなければならないことがある。どこで生まれたのか、言語的・文化的習慣などの違いが生徒の人間関係にどのように影響しているのかを調査するために、本研究者らは「日本人」「韓国人」「在日韓国人」というカテゴリーを用いている。しかし、生徒たちは学校の中で「日本人」「韓国人」「在日韓国人」といったエスニック的側面にはそれほど注意を払っていないように思われる。調査を実施した際のエピソードを 1 つ紹介すると、親しく付き合っている友達をエスニック別属性ごとに分けて書いてくださいという質問を前にして、生徒たちの中からざわざわという騒ぎ声が聞こえた。どのような内容なのかを聞いてみると、「〇〇ちゃんは日本人？在日なの？」「〇〇ちゃんって在日なの、それとも駐在員なの？」といったものがほとんどであった。つまり、普段は学校で友達のエスニック背景などほとんど意識していなかったのである。

次に、「異なる背景を持つ生徒と友達になろうとすると、一番難しいのはどんな点だと思うか」という質問に対しては、全学年の 61%の生徒が「ことば」を選んだ(【図 3 参照】)。また、「特にない」と答えた生徒も 31%を占めているが、日本語と韓国語の両方がうまく出来る生徒の場合、「特にない」と答えた可能性がある。



特記すべき点として、韓国生まれの生徒の方が「ことば」の面で難しさを感じていないと答えているが、これは日本滞在歴が長い生徒の間でこのように答えた場合が多かった。先の参与観察のとき、韓国生まれで2歳のとき来日してからその後も続けて日本に滞在している生徒がいたが、この生徒の場合、日本語・韓国語の両方が完璧に話せるいわゆる「同時発達バイリンガル」であった。このような生徒の場合、「ことば(日本語)」の面における難しさは殆どない。この生徒ほどではないが、例えば小学校5年生のときに来日して5年経っている生徒や3年ほど経っている生徒の場合でも、「ことば」の面では特に難しさを感じていないと答えた。また、来日して間もない生徒で日本語能力に問題がある生徒の場合、前回の報告書でも触れたように、担任教師などが放課後に日本語指導をするなど、「ことば(日本語)」の壁を早く乗り越えるように陰で力を注いでいるのも、上記の答えに貢献していると思われる。

一方、日本の生徒でも「ことば」と答えたものが多いが、この場合の「ことば」は日本語と韓国語の両方が想定できる。つまり、相手(韓国からの生徒)の日本語能力が低いのでうまくコミュニケーションが出来ず、友達になるのに難しさを覚える場合もあるが、韓国からの生徒が同じ韓国人同士のグループで流暢な韓国語を使いながら遊んでいる場合、韓国語が出来ないので遊び仲間に入れず、それが親しい友達となるのに障壁になるということも想定できるのである。

ここで、少しでも考えたいことがある。上記のアンケート結果によると、韓国生まれの生徒の中で日本滞在歴も長いし、日本語能力にも全く問題のない3年生

の生徒の間で、いわゆる「グループ化」現象が顕著に現れているということである。本研究者が観察を行っていた際も、特に3年生の韓国生まれの男子生徒が、食事の場合でも遊びの場合でも、特にグループ化の傾向が著しかった。

以上から見ると、様々な背景の生徒たちが共に学校生活を送っているこの学校で、生徒たちが友達と付き合うにあたって一番大きな「壁」として感じているのは「ことば」である。実際、学校側でもこの「ことばの壁」を無くすために、不断的の努力を続けている。前回の報告書でも記述したように、「ことばの壁」を乗り越え「共通の場」を探るために、生徒や教員は日々あらゆる方法を動員している。また、日本語・韓国語の両言語が話せる生徒たち⁷は、この側面で大きな貢献をしている⁸。

3.2.2. 生徒間における対人イメージ

「それぞれ異なる背景を持つ生徒に、どんなイメージを持っているか」を聞いてみた。まず、日本生まれの生徒から在日韓国人生徒に対しては、「おとなしい」、「やさしい」、「みんな仲良し」、「良い友達」、「明るい」、「面白い」、「とても楽しい」、「近寄りやすい」、「親しみやすい」、「気が合う」、「同じ民族なので仲良くしたい」など、「性格・態度」の面での評価が非常に高かった。また、日本人生徒の場合、「日本人・韓国人の間にいるので、分からないことがあったら教えたりする」「日本語・韓国語の両方が話せるのですごい」「日本語が通じるから良い」「日本人のような感じ」など、ことばや習慣の面において日本人と韓国人の架け橋的な存在として高く評価している。特記すべき点として、この項目で否定的な答えが一切見られなかったことが挙げられる。日本生まれの生徒の場合、在日韓国人生徒であれ日本人であれ、在日韓国人生徒に対して非常に強い親近感を抱いていることが分かる。

次に日本生まれの生徒が韓国人生徒に対して持っているイメージとしては、「韓国語の発音がうまく(勉強になる)」「面白い」「良い友達」「おとなしくてい

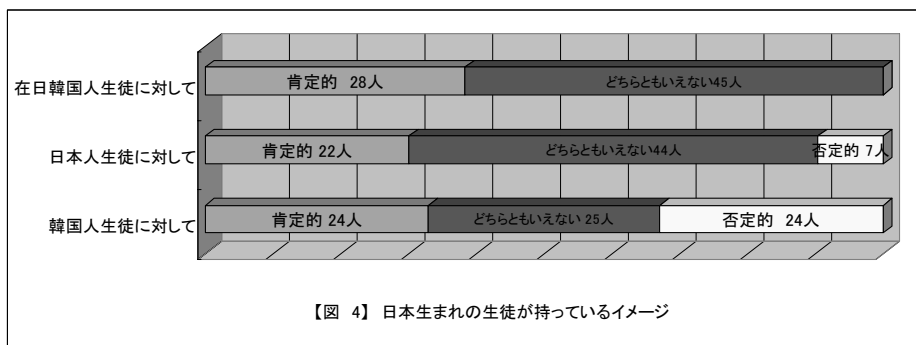
⁷ 例えば、韓国語が上手に話せる在日韓国人生徒や日本滞在歴が長い韓国人生徒など。

⁸ これについては、下記の日本人生徒から在日韓国人生徒に対するイメージにも現れている。

ろいろと教えてくれる」「頭がよい」「熱心に勉強しそうだ」「日本語を一生懸命に勉強している」「明るい」「話してみたら意外に話が合う」「同じ民族」「積極的」という評価が得られた。韓国語と関連して発音の勉強も出来るし、韓国についていろいろ教えてくれる点、明るくて日本語も一生懸命に勉強しようとする、勉強が出来るという点など、他のグループの生徒に比べて特に「ことば(韓国語能力)」と「勉強」の面で非常に高い評価が出ている。一方、「ことばが通じないので近寄りにくいし、親しく出来ない」、「声が大きい」「性格がきつい」「自分たちだけでしゃべっている」など、「ことば(日本語能力)」と「性格・態度」について否定的な評価を出している。

日本生まれの生徒が日本人生徒に対して持っているイメージは、「面白い」「大好き」「おとなしくて思いやりがある」「良い友達」「日本の学校に通っていたので話しやすい」「明るい」「気楽だ」「近寄りやすい」「元気だ」など、「性格・習慣」に関して評価が高い。しかし、在日韓国人生徒への場合に比べて、否定的な答えも多い。例えば、「性格がきつい」「気が強い」「態度が悪い」「マナーがない」「うるさい」といった「性格・態度」面に対する評価、そして「特定のスポーツをする目的以外は どうしてこの学校に来たのか分からない」「韓国語を学ぶのに不満を感じているようだ」など、民族学校なのに特定のスポーツだけを目指してこの学校に通っている点、ことば(韓国語)の習得に熱心ではない、という点においては否定的な評価をしている。

上記の答えを、「肯定的」「どちらともいえない」「否定的」の側面で分けて数値化したのが次の【図 4】である。



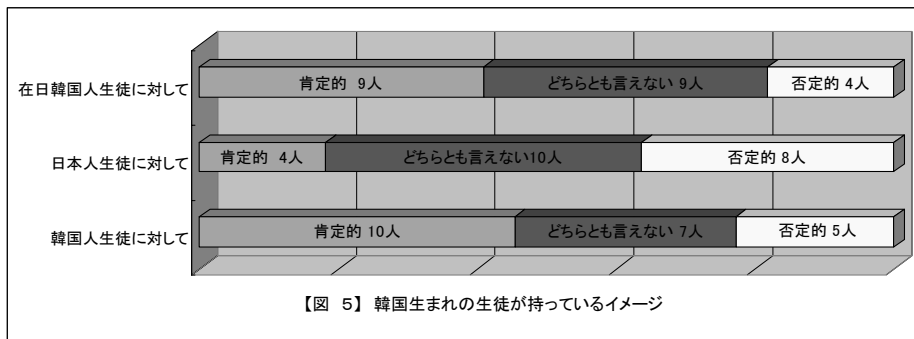
次に、韓国からの生徒は自分のグループを含めてそれぞれについてどのようなイメージを持っているかを調査した。まず、在日韓国人生徒に対して持っているイメージをみると、「親切で悪態をつかない」「おとなしい」「仲良くしたい」「親しみやすい」など、「性格・態度」の面で非常に評価が高くなっている。特に「親しみを覚える」のように「親しい存在」としてのイメージが強い。これと関連して「あまり知らなかったが、少しずつ分かるようになってうれしい」という答えも出ている。一方、「韓国語より日本語の方がうまくて、少し違和感がある」、「韓国語が流暢にしゃべれない」など、(在日)韓国人なのに韓国語がうまくしゃべれない、と韓国語能力の面については厳しい評価を出している。また、「韓国を無視する時もある」という答えも見られた。

韓国人生徒から同じ韓国人生徒に対して持っているイメージは全般的に肯定的傾向を見せている。特に、「親しみを感ずる」「(韓国語が通じるので)気楽だ」「同じ仲間同士」「一緒に過ごして楽しい」など、同じことばと同じ文化的・社会的背景を持っているので気楽に感じる存在というイメージを持っている。また、「礼儀正しくて頭が良い」という答えも見られた。

一方、「まだ日本語が分からない」「マイナス志向」「幼稚だ」など、日本語能力や「態度・性格」の面では否定的評価をしている。

最後に、韓国人生徒から日本人生徒に対して持っているイメージをみると、「親しみを感ずる」「面白い」など、「性格」面で評価している。また、「日本人と友達になれてうれしい」など、異文化を体験できるということへの評価が高かった。しかし、これらの答えはすべて3年生から出たもので、日本居住歴が11年にもなる生徒がいるなど、全般的に長い滞日経験を持つものが多かった。一方、「マナーが悪い」「むかつく」「あまり親近感を感じない」「自由奔放」など、「性格・態度」の面や、「ことばが違うので不便だ」「韓国語が分からない」など、ことばに関連した面では非常に否定的なイメージを表出している。特に、低学年(1年生・2年生)で否定的イメージがより強い。全般的に韓国人生徒の人数が少ないので一般化は出来ないが、これからみると来日してから一定の期間が経過した生徒の方が、滞日期間が短い生徒に比べて否定的なイメージが弱いといえよう。

上記の回答を、「肯定的」「どちらともいえない」「否定的」の側面で分けて数値化したのが【図 5】である。



上記の【図 4】で表示した結果からみると、日本生まれの生徒は、〔在日韓国人生徒(28人) > 韓国人生徒(24人) > 日本人生徒(22人)〕の順で肯定的評価をしている。しかし、否定的な面に対する評価をみると、〔韓国人生徒(24人) > 日本人生徒(7人) > 在日韓国人生徒(0人)〕となっており、韓国人生徒に対して非常に厳しい評価を出していることが分かる。これからみると、同じ民族的背景を持っており韓国語が出来るという面では評価をしながらも、「ことばや習慣」の壁などから全般的に否定的評価をしていると考えられる。

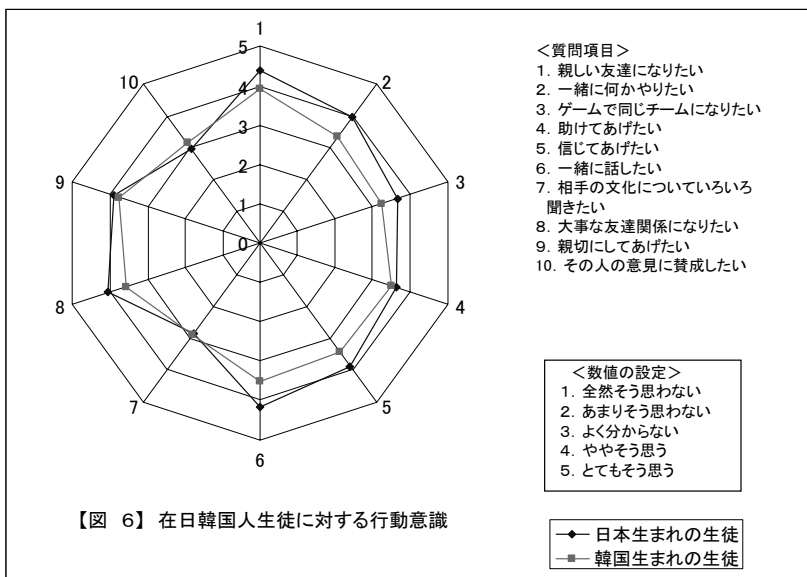
一方、韓国生まれの生徒は、【図 5】で示したように、同じ民族的背景を持っている「在日韓国人生徒」、そしてことば・習慣において共通している「韓国人生徒」に対してより肯定的に評価している。

3.2.3. 生徒間における対人行動意識

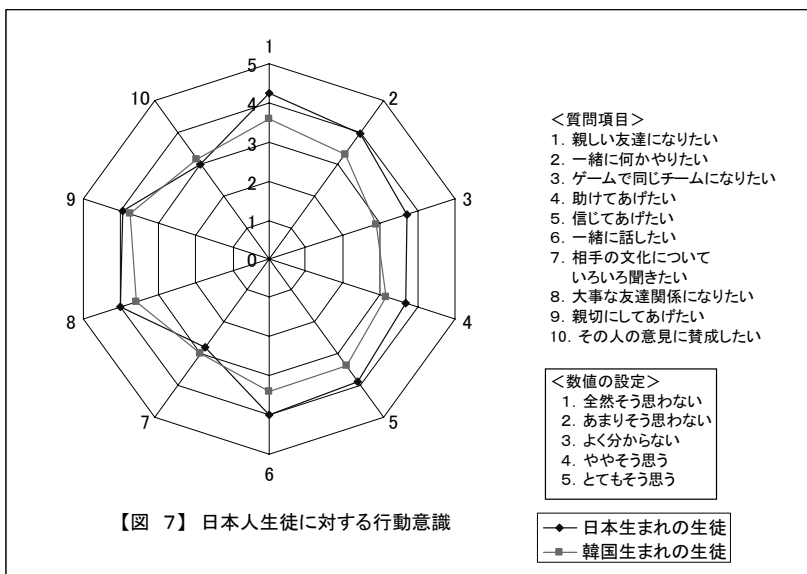
また、このような対人イメージが、実際そのグループの生徒たちとの、行動・態度の面においてどのような相関関係を持つのかを見るために、SD尺度によって調査を行った(【図 6】～【図 8】)。

下記の【図 6】の質問項目 7 番の「相手の文化についていろいろ聞きたい」の場合、今回の調査で回答をした生徒のほぼ全員が低い数値を見せている。

以上の結果からみると在日韓国人生徒に対して、韓国生まれの生徒は日本生まれの生徒に比べて、一緒に行動をしたいという意識行動の面で低い数値を見せている。つまり「親切にしてあげたい」し「助けてあげたい」のであるが、「一緒に何か」をするという面ではやや躊躇を見せていることが分かる。

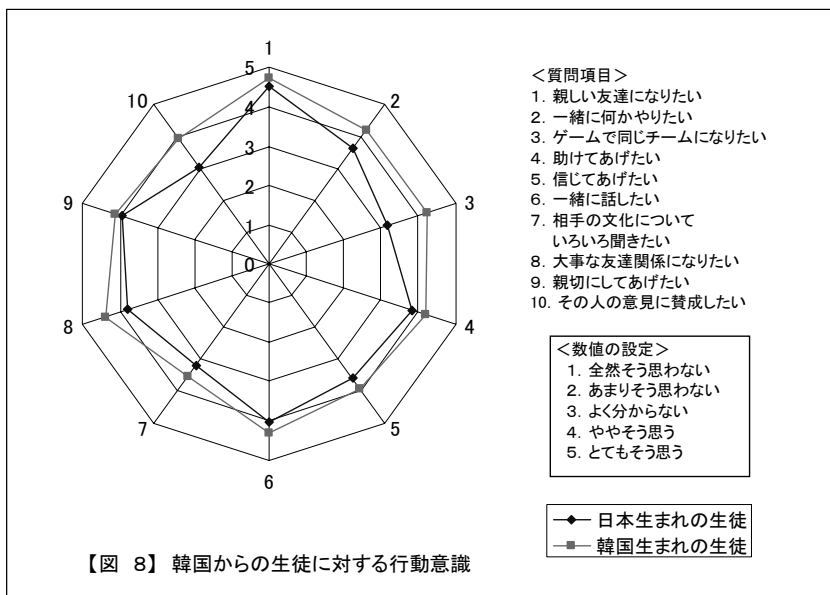


次に、日本人生徒に対する行動意識についてみてみよう(【図 7】)。



【図 7】も上記の【図 6】とあまり変わらないタイプを見せている。つまり、日本生まれの生徒は日本人生徒に対して全体的に高得点を、韓国生まれの生徒もほぼ数値3以上は記録しているが、日本生まれの生徒に比べてやや低い得点を挙げている。上で述べた7番の場合は例外にしても、9番の「親切にしてあげたい」と10番の「その人の意見に賛成したい」という項目以外は、やや明らかな差異を見せている。また、1番の「親しい友達になりたい」と3番の「同じチームになりたい」の場合、上記の在日韓国人生徒の場合に比べて低い数値となっている。これからみると韓国生まれの生徒は、日本人生徒よりは在日韓国人生徒の方に親近感を持っており、一緒に行動したいという意識がやや高い。また、全般的に3以上の数値を記録する中、3番の「同じチームになりたい」という質問に対しては3以下の「あまりそう思わない」に近い数値となっている。

それでは、この学校の生徒たちは韓国から来た生徒に対してどのような行動意識を持っているのだろうか。下記の【図 8】から分かるように、韓国生まれの生徒は韓国人生徒に対して全般的に高い点数を、日本生まれの生徒は韓国人生徒に比べてやや低い点数をそれぞれ与えている。



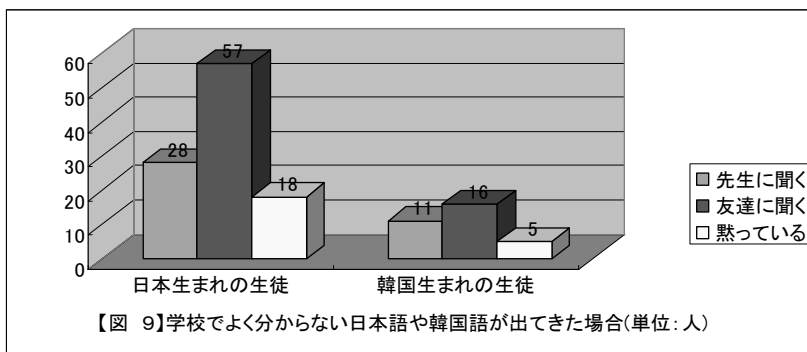
【図 8】では、日本生まれの生徒・韓国生まれの生徒ともに 3 以上の高い数値を記録している。在日韓国人生徒や日本人生徒のものと比べてみると、1 番の「親しい友達になりたい」という項目は、どちらの生徒からも最高値を記録している。特に、韓国生まれの生徒では 4.72 を記録するなど、とても「友達になりたい」という意識が見られる。一方、親しい友達にはなりたいたが、一緒に行動したいという態度は日本生まれの生徒の場合、低い数値を見せている。特に 3 番の「同じチームになりたい」という項目では、かなり大きな格差を見せている。しかし、6 番の「一緒に話したい」という項目などは再び数値 4 の高い点数を記録している。これからみると、日本生まれの生徒は韓国からの生徒に対して、親しい友達となっていていろいろ話してみたいと思っているが、一緒に行動したい仲間としては思っていないということが分かる。

【図 6】から【図 8】は、この民族学校の生徒は言語や習慣において同じ背景を持っている生徒に対して、親近感や仲間意識が高いということを物語っている。特に、韓国から来た生徒の場合、同じ韓国人生徒に対して親近感や仲間意識が非常に強くなっている。

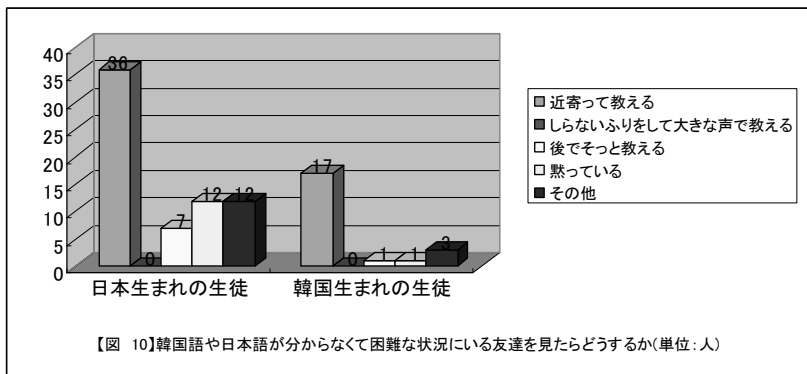
さらに本研究者らは、それぞれの生徒が持っている対韓国人イメージ・対日本人イメージはどのようになっているかもみるために SD 尺度による調査を行った。この調査の回答結果の場合、いくつかの項目においてやや違いが見られる。つまり、日本生まれの生徒は韓国人に対して「気が強く」「荒っぽい」が「暖かい」と評価している。一方、韓国生まれの生徒は日本人に対して「親切で」「穏やか」であるが、「冷たい」と評価している。

3.3. 学校生活について

上記の【図 3】からも分かるように、異なる文化的・言語的背景を持つ生徒が共に学校生活を送る中で生ずる一番大きな問題は「ことば」である。普段の学校生活の中で、生徒たちは「ことばの壁」をどのように乗り越え、一緒に暮らしているのだろうか。本研究者らは、学校でのコミュニケーションと関連して、学校でことばの問題が生じたとき、つまりよく分からないことばが出たりしたとき、それぞれの生徒はどのように行動しているのかを聞いてみた。その答えは以下の通りである(【図 9】)。



この結果からみると、日本生まれの生徒も韓国生まれの生徒も「友達に聞く > 先生に聞く > 黙っている」の順となっており、「友達に聞く」が両方にもっとも多い。日本生まれの生徒の方が「友達に聞く」という面でやや高い割合となっているが、その理由としては、先生よりは友達の方が気楽で身近な存在であるということが挙げられる。もう1つの理由としては、よく分からないことば—この場合は韓国語—が出た場合、先生よりも韓国語が上手な在日韓国人の生徒や韓国からの友達の方がより詳しいということが想定できる。一方、韓国からの生徒の場合、よく分からないことば—この場合は日本語—が出てくると、「友達に聞く」場合が多いが、「先生に聞く」場合も多い。この学校では来日して間もない生徒に対して担任などの教員が放課後に日本語を指導したりすることについて前で述べたが、それが大きな理由となっていると思われる。



また、「ことばの問題で困難な状況にいる友達を見つけたらどのようにするか」という質問に対しては、上記の【図 10】のように「近寄って教える」が両者において一番多かった。

以上、学校・友達に対してこの学校の生徒はどのように思っているのか、学校生活で難関—例えばことばなどの壁—が生じた場合、それをどのように乗り越えているのか、などについてアンケート調査の結果に基づいて分析を行った。まとめると、生徒たちは民族学校であるこの学校に対して、入学前・入学後ともに高く評価している。「すごく楽しそうな学校」と答えたある生徒のように、日本の他の学校とは構成員やカリキュラム、学校の行事などが異なるこの学校を、「異文化としての母文化」が体験できる楽しい学校として認識している。しかし、「この学校の高校に進学する予定なのか」という質問については「まだ決めていない」などの答えも少なくなかった。異なる背景を持つ生徒に対する意識調査では、明らかなグループ化の傾向を見せており、同じ背景を持っている生徒に対して全般的に肯定的評価が高かった。特に、韓国からの生徒の場合、韓国人生徒に対する親近感や仲間意識が非常に高くなっているが、ことばや習慣などの面でこの学校ではマイノリティである同じ韓国人生徒に対して強い連帯感を形成しているように思われる。また、知らないことばなどが出た場合、高い割合で教員より友達に頼っている。そして、ことばの問題で困難を感じている生徒を見つけると、多くの学生が「近寄って教える」など、積極的に助け合う態度を示している。

4. 分析2：教員に対する調査

本章では、教員に対して実施したアンケート調査の結果から、以下の項目について記述・分析を試みる。

- ① 教員たちは、この（民族）学校について、すなわち教育目標をどのように認識しているのか、また、その実現のためにどのような方策が採られていると考えており、実際にどのような活動が行われているのか。
- ② 教員たちは、異なる背景を持つ生徒が円満な学校生活を送ることができるようにどのように日々努力しているのか、特にノウハウなどはあるの

かどうか、実際学校生活の中で異なる背景を持つ生徒に対してどのように捉えているのか。

③ 教員たちは、「民族教育」と「共生」の関係をどのように捉えているのか。

これらの結果を前章の、生徒に関する調査結果と照らし合わせることによって、同校における「共生」の現状と課題を検討する。

教員アンケートについては、対象数が少ないこともあり、おもに質的な側面について取り上げる。もちろん、ここで得られた結論が全ての現状を言い表しているとはいえないかもしれない。しかし、たとえ数は少なくとも、同校の現状を照射している、ある意味では生々しいデータであり、昨年の報告である呉・植田(2005)とあわせ見ることによって、同校での「共生」の実情により肉迫することができると考える。

4.1. 学校について

4.1.1. 教育目標とその実現のための方策

B中学校では、教育目標として「自分に誇りを持てる人 社会に役立つ人 世界にはばたく人 創造力にみちた人になろう」ということばが掲げられている(同校ホームページ:2006年1月26日接続)。また、教育方針としては、「在日韓国人としての自覚と矜持を持ち、21世紀に活躍する国際人の育成」ということが挙げられている(呉・植田 2005:11)。

これらが実際にどのように捉えられ、その実践のための方策がどのようなものであると考えられているかを検討するためにそれを問うた。

まず、「B中学校の教育目標とその実現のための方策は何か」という質問を行った。これに対して、上記の教育方針に沿った、「民族としての誇りを育てる」、「在日韓国人としての自覚と責任を持たせる」というエスニック・アイデンティティ形成に関する回答が見られた。また、「日本にある韓国の民族学校として創立以来の伝統を受け継ぎ、民族教育を行い、ひいては国際人を育成する」や「互いの違いをみとめ、共に生きる国際人の養成」といった、日本社会における在日韓国人としての国際人の育成という位置づけをするものも見られた。

これらをまとめると、「在日生徒における民族的自我の確立。特に韓日間におけ

る国際的意識の養成、日本社会における共生意識の養成」という回答に見られるように、従来からの民族意識涵養というコンセプトと、日本社会の中の在日韓国人、ひいては「国際人」の養成ということが意識されているといえる。

ここで興味深いことは、日本人教員は4名中3名が、民族意識涵養について挙げているのに対し、在日韓国人教員のほうは、回答を得た3名のうち、2名からは無回答であったことである。ここからは、民族学校という場においては、民族意識に関する観点はいわば当然視されるからか、在日韓国人教員には意識的には捉えられていない傾向があるのではないかということが推測できる。民族学校においては、日本人教員はいわばマイノリティであるがゆえに、結果として、「民族学校なのだから」というように、「民族意識涵養」という要素をより強く意識する傾向があるのではないかと考えられる。

校長からは、「狭義では『在日韓国人の民族教育』、広義では『他の民族も含めた多民族・多言語・多文化共生教育』」という回答が得られた。この回答は、教員の認識を包括しており、ここでいう「狭義」のすなわち従来型の民族教育像を持ちつつ、「広義」の定義のすなわち「多民族」・「多言語」・「多文化」・「共生」などのキーワードに表されるような、変化する社会的状況に対応した包括的な教育像が模索されつつある現状が見える。

次に、教育目標実践のための方策については、「韓国のことばと文化に対する基本的知識と理解力を養う・教える」「行事などでは、『국어⁹』を使い、韓国の記念日には講話を持つようにする」「民族教科や在日の歴史・環境の学習。日・韓・在日の混在する教室における相互交流」「中学では週3時間の韓国語の時間を必修科目として設けている。その他、学校行事などに民族色を出している」などの「狭義」の民族教育についての回答がほぼすべてを占めている。校長からは「韓国語・英語などの言語教育と、歴史・舞踊など、文化の教育」という回答を得られたが、母語保持と母文化継承以外に「英語」という、他の回答とはやや異なる側面にも触れている。

ここでは、「狭義の民族教育」の目標・方針についての方策は見られるが、「広義の民族教育」における方針・目標に関する方策には触れられていないことに注

⁹ 「国語」を意味するもので、ここでは「韓国語」を指す。

目したい。つまり、「狭義の民族教育」にあたるものへの意識はきわめて高い。それは、呉・植田（2005：26）で指摘したように、生徒へのアンケート項目の「日本の学校や他の民族学校などと比べて、どんな点が違うと思いますか」という問に対して挙げられた回答 — 「韓国の言語や文化に力を入れている」、「カリキュラムの一貫として韓国語や舞踊がある」 — からも、かなり高いレベルでの方策が採られていることが裏付けられる。

しかし、「広義の民族教育」、あるいは「共生」というものを念頭においた場合、「多言語・多文化共生教育」とは具体的に何を意味し、それを実現するためには何をすべきかということに対しては、明確な回答が見られなかった。

4.1.2. 「学校内での共生」のための活動

前項の問に関連して、実際には、「共生」のために取り組まれている学校の活動はいかなるものなのか具体的にみるために、「異なる背景を持つ生徒たちが学校生活を営むために、学校が実際に行っている活動として、とくにどのようなものが挙げられるか」という問を設けた。その結果、「おもに駐在員子弟の子どもらに対する日本語補習授業、韓国語の習熟度別のクラス編成」「放課後の言語教育」「教員の韓国語習得への注力」といった、言語の相違による障壁を取り除くためのものが多く指摘された。

このように、日本生まれの生徒、韓国生まれの生徒の両者についての言語教育の問題が重視されている。確かに同校において、先に見た教育方針や現状から、3章でも触れたように言語に関する問題に注目されがちであるのは当然の帰結である。また、これは生徒へのアンケートで、異なる背景を持つ生徒と友だちになる際の困難さとして、「ことば」が約6割に達していたこととも対応する。これらを「共生」という文脈に置いて見た場合、言語の不通による諸問題がとりわけ意識されており、生徒を助けるレベルの「共生」実現のために努力する教員の姿勢が見える。さらに、「文化というものの幅の広さについて考えさせる話などを多くする」「在日の歴史の授業や韓国の楽器・舞踊など、文化に直接触れることのできるように授業の設定をする」など、韓国の文化・歴史に関する回答もあった。これらも基本的には、「狭義の民族教育」のレベルからの活動であると考えていいだろう。

実際、この学校の教員たちは「異なる背景の生徒間にグループ化が見られるか」という質問に対して、殆どが「グループ化は存在する」と回答した¹⁰。つまり、教員たちは「学校内の共生」を脅かす「グループ化」の傾向について認識しており、その防止のために様々な工夫をしているのである。また、「グループ化」の形としては、「『在日韓国人・日本人生徒』と『本国の生徒』とグループ化する傾向があり、「民族性よりも同じ文化的背景を持つ人に多くの共感を覚える」と認識している。

このような問題を解消するために、「行事における縦割り・混在班の編成による活動」、「校外学習・宿泊行事」など、背景の異なる生徒たちが自然に交流しあえる場を作るなど、様々なアイデアで「学校内の共生」を図っている。実際、同校は登山や林間学校などをはじめとする、学校行事を多く行っている。構成が少人数であることから、これらが濃密な人間関係の形成に寄与し、3章の生徒のアンケート調査からも明らかになったように、生徒間の人間関係のネットワークにも影響を与えているものと思われる。

4.2. 生徒について

B中学校における「共生」を考える際、同校においては、異なる背景を持つ生徒の混在という点がもっとも大きい特徴であり、同校での「共生」について考える際のひとつのキーとなる。それに関して、生徒の側からどのように捉えているのかということは、すでに3章で考察した。本節では、教員の側からこれをどのように捉えているのかについて、異なる背景を持つ生徒たちの「イメージ」、「様々な背景を持つ生徒を受け入れることの長所・短所」、それらによる「相互影響」、そして、「『グループ化』とその原因」、「異なる背景を持つ生徒たちに対する取り組み」などを明らかにするために質問した回答を分析する。

¹⁰ 例えば、「(以前は)本国からの生徒は積極的に在日韓国人・日本人と接しようとしていたが、最近ではグループ化している」「韓国から来た生徒は他生徒との交流に対しては消極的である」など。

4.2.1. 異なる背景を持つ生徒へのイメージ

生徒について分析するにあたって、在日韓国人、本国からの韓国人、日本人の生徒たちそれぞれのイメージを尋ねてみた。教員の属性とも関連させながら、以下、分析してみよう。

まず、在日韓国人教員から在日韓国人の生徒に対しては、「外国人の意識がない外国人・日本国籍を持たない日本人」「昔に比べると、日本人生徒とあまり差がなくなってきた」というように、日本人生徒との意識などの近似化が挙げられた。また、「自覚、誇り」というイメージが示されたが、これは「自覚、誇り（が高い／ある）」と解釈できよう。さらに、本国からの韓国人生徒に対しては、「一昔前の日本人学生」「儒教的」「全般的に礼儀正しい」というように、「性格・態度」の面でやや高く評価している反面、「ゴミをそこら辺にポンと捨てたり」といった「生活習慣」の面での異なりについて、否定的な評価をしている。これ以外に「特になし」とした回答もあった。さらに、日本人の生徒に対しては、「特になし」とするものが多かったが、「歪んだ国際感覚(を持っている)」という厳しい評価をしているものもあった。ここでの「歪んだ」とは、「韓国人の民族学校に入学したにも拘らず、韓国語や韓国の文化・歴史などに興味希薄で、とりたてて積極的にこれらに関心を持たずにいる」生徒が一部に存在するということを指しているのではないかと解釈した。

次に、日本人の教員から在日韓国人の生徒に対するイメージとしては、「日本人とそれほど変わらない」というものがある一方、「民族学校の『主流派』」「メジャーな存在」、また、在日韓国人は韓国人でも日本人でもないというようなイメージがありがちだと前置きした上で、同校の生徒については「やはり韓国人」というイメージを持っているという回答など、「韓国人性」を意識した回答が見られた。さらに、本国からの韓国人生徒に対しては、「荒っぽいところがあるが、エネルギー」「基本的には礼儀正しい」「ひとなつっこい」「まじめで優秀」といった「性格・態度」の面で高く評価しているが、「騒ぎ方やふざけ方などの限度をわきまえない」「程度・限度の線引きが日本人と違う」「最近、だらしなくて不真面目」「日本および日本語に対する興味の希薄」などの面ではかなり否定的な評価をしている。これは、上記の在日韓国人教員による肯定的評価とは対照的である。また、父母の仕事の都合で短い期間で帰国する生徒がいるからか「腰掛的存在」

というイメージの回答もあった。さらに、日本人の生徒に対しては、「特別の事情で入学してきた『特殊な存在』」「ことばの壁を乗り越えるという意味があまりない」というように、やや否定的に評価している。ここにいう「特別の事情」とは、主として特定のスポーツをやるためにという意味である。

最後に派遣教員からのイメージを見てみよう。在日韓国人の生徒に対しては、「難しい状況の中でも楽しく堂々と民族学校に通う生徒で、けなげで誇らしい」と高く評価する反面、本国からの韓国人生徒に対しては「日本の美しい文化よりは悪い方を先に学ぶ」と懸念を示している。そして日本人の生徒に対しては、「基本的に民族学校というものに対して愛着や意識がない」「ほとんど韓国語を勉強することへの意欲がない」と、在日韓国人教員や日本人教員同様に、非常に厳しい評価をしている。とりわけ、いわゆる「在日同胞」に「民族教育」をする熱情を持って韓国から赴任してきた派遣教員としては、「民族教育」とは無関係に思われる日本人の生徒の存在に厳しい評価をしているというように解釈できよう。

これらをみると、全体的には、教員の持っているイメージは、3章で検討した生徒間の場合と同様に、自らの背景と生徒の背景の間にある程度相関関係を持つように見られる。

4.2.2. 異なる背景を持つ生徒を受け入れることの長所・短所

創立の理念としては在日韓国人のための学校であるB中学校において、韓国からの生徒や日本人生徒といった、異なる背景を持つ、いわば「異文化」生徒を受け入れることにはどのような長所・短所があるのであろうか。それぞれについて問うてみた。

まず、短所としては、「日本人を受け入れることによって、民族学校としての位置が不安定になる」「『韓国の民族学校』という建学理念に対して、日本人生徒が一定数を越えて増えてゆくのは理念に反する」といった、「日本人生徒」を受け入れることへの懸念が強く表わされた。また、「目に見えない断絶感などで、一つになるのが難しい」「異文化は刺激にもなるが、時に『対立も生む』ゆえに、長所にも短所にもなりえる」という回答があったが、「それぞれ異なる背景を持つ生徒に、どんなイメージを持っているか」、「異なる背景を持つ生徒と友だちになるには何が問題なのか」、「異なる背景を持つ生徒に対する行動意識」に関する生徒へのア

ンケートの分析（3 章参照）と照らし合わせると、主として韓国からの生徒を念頭における回答であると判断される。そして、「本国・在日韓国人・日本人の韓国（語）・日本語力の差が大きいと、授業や行事などで全員が同じだけの理解を得ることが難しい」というような、言語の問題についての指摘があった。

次に、長所としては、「早い時期に異文化に触れることによって、文化や考え方の違いを認め、理解することが出来る」「在日生徒の意識喚起」といった、「異文化」生徒を受け入れることに積極的な回答、また、「学校の財政的側面」に貢献するという現実的な問題への指摘もあった他、「生徒間で、他人をやさしく受け入れる心の広さが育つ」というような、「共生」というキーワードの概念をまさに言い当てるかのような回答も見られた。

全体的に「異文化接触による摩擦・葛藤」という側面については否定的評価をしかし、「異文化体験ができる」という側面では肯定的評価をしている。異なる背景の生徒が共に暮らす環境では確かに「摩擦・葛藤」が起るのは当然であろう。しかし、このような環境こそ、生徒たちが「多言語・多文化共生」を学び・実践する「場」として活用でき、今後「共生」を目指す日本社会においても1つのモデルとなる可能性を拓くのではないか。

ここで注意を引くのは、短所として、「日本人生徒の受け入れによる民族教育理念の揺らぎ」を問題とする回答は、すべて日本人教員から出された懸念であったことである。これに類する回答が、在日韓国人教員からは今回のアンケートにおいては、見出せなかったこととは対照的である。これについては、4.1. で触れた、教育目標に関する問でも、日本人教員のほうから民族意識涵養という要素をより強く意識する回答が得られたことと相通ずる。日本人教員のほうが、民族学校における日本人教員という位置づけから、従来の、すなわち「狭義の民族教育」観に、より強く縛られている傾向が見出せるものである。

4.2.3. 異なる背景を持つ生徒の相互影響

3 章の生徒へのアンケートで明らかになったように、言語の問題は相互交渉の中で、もっとも重要なものであると捉えられている。本項では、異なる背景を持つ生徒間の相互影響について、教員はどのように捉えているのかのをみるため、「言語面」と「言語以外の面」に分けて回答を依頼した。

まず、言語面では、「在日韓国人・日本人生徒が、本国から来た生徒の使う韓国語を覚え、その単語を使うようになる」「(本国からの生徒の) 日本語の習得において受ける影響が大きい」「互いに教えあい刺激になる」など、それぞれが韓国語・日本語の習得でいい影響を与え合っていると肯定的に評価している。これは、生徒へのアンケートから見られたように、ことばの壁を克服する際、友だちがもっとも大きな作用を果たしているという結果とも符合する。また、「生活の場面で、コミュニケーションの必要が生じるため、互いの言語を理解する努力をしている」という回答からうかがえるように、好むと好まざるとにかかわらず、相互交渉の場が日常的に生じることにより、いい意味での「衝突」の場が作られていることもプラスの影響関係を後押ししているのであろう。

言語以外の面では、「判断できないことを一旦保留する心のクッションが出来る」といった心理的側面の影響も指摘されており興味深い。また、「韓国にない『日本のマナー』を教えてあげていたりする」というように、「習慣」の面での相互理解の促進にも寄与している様子が読み取れるが、ここでいわれている「マナー」とは、「文化」としての「マナー(manner)」が想定されていると判断した。

また、言語の面、言語以外の面の両者に対して、「分からなさに対する寛容、分からないことに耐える我慢強さ」といったコミュニケーション上の影響も肯定的に評価されていた。

しかしながら、言語以外の面について、「(本国から来た生徒の) 在日韓国人についての理解不足、(在日韓国人生徒側の理解不足もあって) それぞれに誤解がある場合」があることや、「文化や育った環境が異なって、互いに理解不能」という否定的な回答も少数ながら見られた。

これらを分析すると、まず言語面では、主として韓国からの韓国人生徒から、その他の生徒が受ける、韓国語の使用促進やモチベーションの高揚が指摘されている。また、それよりはやや弱いレベルではあるが、韓国からの韓国人生徒も日本語に対して、日本生まれの生徒から影響を受けているようである。つまり、韓国生まれの生徒と日本生まれの生徒と一緒に学校生活を送ることによって、「ことば」の面では肯定的な刺激を互いに与えている。言語以外の面についてみると、おおむね言語面での問題の解決がその他の問題の解決につながり、また、「衝突」によって相互の理解が深まるという観点が示されている。

4.3. 「民族学校」と「共生」について

これまでB中学校において、学校・生徒について、教師がどのように見ているかを見てきた。同校に限らず、近年さまざまな場において、「共生」ということばが用いられる。しかし、その内容としてイメージされているものは、そのことばを使う主体によってかなりばらばらなものである。本節では、「民族教育」と「共生」の関連を念頭に置き、民族学校の教員はこれらをどのように認識しているのか、また両者の関係をどう捉えているのかを「『共生』像」、「『共生』のための課題と実践」、そして「『民族教育』と『共生』の関係」にそれぞれ分けて分析したい。

4.3.1. 教員の持つ「共生」像

本項では、教員の持つ「共生」という語のイメージをみるため、「『共生』について何か考えたことがあるか」を尋ねた。これについては、大部分の教員が「ある」と答え、「共生」について考えたことがあると自己認識していることがわかる。具体的な内容は、「異文化を理解する柔軟さ・心の広さ」、「異なる歴史・文化などに対する相互理解と交流・尊重」、「違いを個性ととらえ、その個性を互いに認め助け合い、差別する心を許さない社会(あらゆるものへの機会均等)」、「異なる背景・文化を持つもの同士が、お互いを認め理解すること」などであった。実のところ、ここに共通するのは、いわば一般にイメージされる「共生」像で、学校教育において象徴的にしばしば用いられる表現である。また、「モデルとしては、アメリカ市民社会、つまり民族性を維持しつつ、市民権(権利としての国籍)を獲得する」、「米国でも実現できていないが、互いの民族性や文化を尊重する意識が確立した環境」という回答もあった。これらにおいては、「『共生』を実現する主体は誰なのか」ということについて、「日本社会」によりその積極性・主体性を求めているという姿勢が見出せる。

校長への設問では、その有無について直接問うものではなく、「民族教育において『共生』ということばがひとつのキーワードとなると思われます。これに関して、どのようにお考えでしょうか」という問を設け、より具体的に「民族教育」と「共生」との関係について問うた。その結果、「民族教育というものはとすると、排他的なものになりがちであるが、今後の民族教育においては多文化共生教育が重要な課題になると思う」という答えを得た。

以上からみると、「民族教育」に携わっている教員たちも、「民族教育」と「共生」の関係を明確に結びつけず、模索中であることが垣間見られる。つまり、これからの「民族教育」が「多文化共生教育」を目指すべきであるという認識では共通しているが、まだ抽象的なレベルに留まっており、具体的な方向性を持つまでには至っていないと思われる。

4.3.2. 「学校内における共生」の課題と実践

「学校内における『共生』を実現実践するための課題についての質問に対して、『民族教育』と大上段に構えるのではなくて、自然な関係で(学校行事と一緒に楽しむとか)交流できればと思う」、「とてもいい方法というのはなく、地道に相互理解に向かえるようにこつこつ論していかなければならない」といった、身近なところからの課題解決がより大きな「共生」の実現へとつながるという回答が得られた。やや具体的なものとしては、「人権教育・人間中心の教育に基づいた他文化¹¹理解教育の強化」、「互いの言語・歴史・環境に対する深い理解を促す教育活動の活性化」や「相互に交渉が必要な場面設定(行事など)」といった、学校側の活動に関する課題が提起された。この他に、「社会の受け入れが差別なく、豊かにならなければならない」といった、日本社会の「共生」に向けての課題に触れている回答もあった。しかし、上記の回答は学校内での具体的方策としての「共生」案ではなく、教員の『多文化共生』像のような漠然な考え方が提示されているように思われる。

また、「学校内で使われる言語を一本にする」という主旨の回答が見られたが、学校運営面での便利さを図るためには同じ言語を使ったほうがいいという発想から出た答えだろう。しかし、このような回答は、日本語にせよ韓国語にせよ多様性が出発点となっている「共生」とは逆の方向性を持つのではないかと思われる。

これらをまとめると、同校の教員たちは「共生」のための課題について概念的レベルでの認識は共通している。しかし、一般的な「共生」の概念とは相容れないような回答もみられた。

次に、これらの課題に対して、どのような実践が行われているのだろうか。ク

¹¹ 「多文化」ではなく「他文化」(回答のママ)。

ラス内での「共生」実現のためのノウハウについて、言語面と、言語以外の面に分けて聞いてみた。まず、言語面では、「積極的な多言語指導」「日常生活の多言語使用」が見られたが、「とくにない」とする回答も少なくなかった。言語以外の面については、「背景に応じたグループ編成を望んでも敢えて混在班を編成して活動させ、成果を報告させる」、「差別なく同じように全員に接する」などがあった。意識的に混在班を編成するという方策には、好むと好まざるとに拘らず、「共生」の現場としての同校で、長年に渡って培われてきたものが現れているかのようである。

4.3.3. 「民族教育」と「共生」の関係

最後に、「教員自身には『民族教育』と『共生』はどのように関連付けられているのか」尋ねた。この質問に対して、「『民族教育』の側から『日本社会』にもっとアピールする場を持てればよい」、「『民族教育』を固守すると、日本社会における『共生』は難しくなると思う」、「一つのモデルとなりうと思うが、現状では少し難しい関係にある(韓民族だけならそうでもないかもしれないが)」といった、「民族教育」の問題点を指摘する回答が得られた。これからみると、「民族教育」はひとつのモデル・ケース的側面を持つが、その実現はなかなか難しいと捉えられている面があるといえよう。また、全般に、現在の「民族教育」の持つ「排他的」な性格 — それには社会的・歴史的な経緯があるにせよ — があり、変革の必要性がある部分を持つと考えられていることが見える。

また、「『民族教育』は、共生を阻害するものではなく、むしろ支援するものである。それゆえに、『民族教育』の消滅は、健全な共生社会の実現を不可能にする、あるいは遅らせる」といった、「共生」を実現するためには「民族教育」は必要であるという主旨の回答が多く見られた。同様に、「自分のルーツを正しく認識できない以上、『共生』はありえない。日本社会で、在日韓国人が存続するには、『民族教育』は不可欠」といった回答もあったが、特に在日韓国人教員の中からこのような内容の回答が多かった。これからみると、{「民族学校」での「民族教育」＝「アイデンティティ教育」}として捉えられている傾向が共通していることが分かる。また、「在日韓国人がなぜいるのか、どんな制限があるか、などを知り、誇りを持って生きる力に変えるものになる」といった、いわば昔からの「民族教育」

の姿勢を堅持している意識が見られる。

これらをまとめると、従来の「民族教育」の見方を「共生」へ敷衍して、「民族教育」自体がそのまま「共生教育」であると漠然と考えられており、ここには旧来からの「民族教育」観が見られる。つまり、従来の「民族教育」の核心だった「アイデンティティ教育」がそのまま「共生」であると認識されており、本来「共生」が持つより広い枠組みや、その具体的な内容はあまり考慮されないまま、「民族教育」という概念が「共生」にスライドされ捉えられているのである。

5. B中学校の現状と未来：「民族教育」と「多文化共生教育」の間で

4章で教員のアンケート調査を分析・考察したが、本章ではその結果に基づいて「民族教育」と「多文化共生」について考察・記述したい。上でも述べたように、「民族教育」と「共生」の関係に対する質問で、日本人教員からは『「共生」のためには民族教育側で日本社会に向けて積極的に発信しなければならない』とか『「民族教育」を固守した場合『多文化共生(の実現)』は難しいだろう』という意見が出た半面、この民族学校の「主催側」である在日韓国人教員からは、『「民族教育」は『共生』のための必須要件であり、『共生』を支持するものである。従って、『民族教育』が消滅すると『共生社会(の実現)』は不可能である』という指摘が出た。同じ学校の教員の中でも「民族教育」に対する視点が、教員のエスニック的背景によって異なって現れているのである。前者は、「民族教育」は「排他的」「防衛的」なもの(あるいは、態度の堅持)であり、これを固守し続ける場合、真の「共生」は不可能であるという側面を強調した反面、後者では「民族教育」というのは「共生社会」を実現するための「基本」であるという側面を取り上げている。

「民族教育」は「排他的」「防衛的」なものなのか、それとも「共生的」なのかなぜ「民族教育」に対する相反した異見が同じ学校の教員の中で現れたのか。これを考えるために、まずこの学校ではどのような「民族教育」を重点的に実施しているかについて考察し、この現状は本研究者らが考えている「多文化共生教育」とどのような関係にあるかを見てみよう。

まず、この学校で実施されている「民族教育」は、「母語保持」と「母文化の継承」による民族的アイデンティティの確立にその重点が置かれている。特に「母

語保持」の場合、韓国政府から派遣された教員によってレベルに対応した韓国語教育が行われており、レベルの違いはあってもきちんとした「母語保持教育」が行われている¹²。「歴史教育」の場合、1条校として文部科学省の定めた授業時数を満たすために、深化した歴史教育は行われていないのが事実である。しかし、この学校の目標である「在日韓国人としての自覚と誇りを持つ子どもの育成」は、本研究者らの観察によると、ある程度達成されていると思われる。

それでは、この学校での「民族教育」は「多文化共生」と相互排他的な関係にあるのか、それとも相互協力的関係にあるのか。次に本研究者らが考えている「民族教育」像と「多文化共生」像について述べ、現在この学校で行われている「民族教育」はどのような地点を歩んでいるのか考えてみたい。

「民族教育」と「多文化共生教育」に対する単一の模範的定義は今のところ存在しないが、本研究者らは次のように「民族教育」と「多文化共生教育」について定義したい。まず、「民族教育」はこのB中学校でも実施しているように「各自の民族的背景などを理解し、これに対する自覚を認識した上で、健全なる民族的アイデンティティを確立する」教育で、おもに「自己(self)の(民族的)確立」に重点が置かれている。これに対して「多文化共生」とは「様々な言語的・文化的・人種的背景などを持っている人々が共に生きる」ことで、「多文化共生教育」とは「自己／自分の民族文化」に対する認識を確立した上で「他者(others)／他民族の文化」に対しても相互的視点から認識を持つ」教育である。言い換えると、「多文化共生教育」とは違いを認めることから出発し、その違いを土台として「自己」と「他者」への理解を広める教育である。このような観点からみると、各自の民族的背景を理解しそれを保持するための「民族教育」は「多文化共生教育」の第一歩であり、在日韓国人教員が回答したように必須要件である。

しかし一方で、「多文化共生教育」は「自己」の確立だけに留まらずもう一歩進むことが前提となる。つまり、「自己／自民族」に対する認識の上で「他者／他民族」と交流する「相互的視点」を要求するのである。このような前提に立って

¹² これは本研究者らの意見で、実際派遣教員の間では「十分な母語保持教育はされていない」と認識しているようであった。しかし、「母文化のことばの継承・維持」という側面からみると、韓国語が完璧に駆使できなくても第2言語としての「母語

教員の回答結果をみると、日本人教員は、現在の「民族教育」が「自己の確認・確立」だけに集中してしまい、「外の世界」への発信が適切に行われていない、つまり「他者」に対する認識に欠けていると評価している。一方、在日韓国人の教員は、{「民族教育」＝「多文化共生教育」}という考え方では一致しているが、「多文化共生教育」が何を意味するものなのかについては漠然として、はっきりしていなかった。校長の場合、現在行っている「民族教育」を「狭義の民族教育」として、「多文化共生教育」を「広義の民族教育」としてそれぞれ分けて、「民族教育」は現在進行形で、「多文化共生教育」は実践的課題として提示している。

以上の教員の観点をまとめると、「民族教育」は「多文化共生教育」の基礎であるが、現在はその視点が「自己」に限定され、「自己」を維持・固守するという面では「排他的」視点を持つ、しかし、「民族教育」は本来「多文化共生教育」的なものである、その方向に向かうべきである、ということになるだろう。つまり、方向性については認識を共にしているが、マイノリティである「自己」の存在がまだ確立されず揺れている状況なので、これが確立されるまではマジョリティである「他者」への発信は後回しにするしかないということだろう。「共に生きる人材の育成¹³」を実現することを望んでいるが、現在の不安定な状況では「同化」あるいは「吸収」されてしまうのではないかという一抹の不安が「態度」の変化を迷わせているのではないか。つまり、「多文化共生教育」を実現するためには、「外から内へ」に加え、「内から外へ」発信する「相互的側面」が要求されずでに認知もしているが、積極的に足を踏み出すには今までの「警戒的」「防御的」態度が躓きになってしまい、よって現在進行形と実践的課題の間に空洞化現象が生じているのである。

ここで、記述しておきたいのは、本研究者らが述べている現象は、あくまでも「潜在的認識」の問題であり、「実践的・行動的」側面ではないということである。実際、この学校は前回の報告書にも述べたように、様々な面において日本社会との協力的共生が行われている(詳しくは呉・植田 2005:26 参照)。また、昨年は「2005 年日韓友情の年」を迎え、実に多方面で目覚しい活躍を見せたのである。

保持」はしっかり成し遂げられていると本研究者らは判断した。

¹³ この学校の『ニュース・レター』より。

6. おわりに：「多文化共生教育」に向けて

本報告書では、B中学校の異なる背景を持つ生徒間における「共生」の実態とこれに関する学校の取り組みについて、前回の報告書に続きおもにアンケート調査の結果に基づいて考察を行った。今回の報告書ではさらにこの学校で実施している「民族教育」の現状について述べ、将来の実践的課題である「多文化共生教育」とはどのような関係にあるのかについても考えてみた。まとめると、今までの「民族教育」は、「エスニック・アイデンティティ」の保持教育に重点が置かれ、主にその視点が「自己」に向けられていた。一方、「多文化共生教育」とは「自己」に対する認識の上で「他者」と交流する相互的視点を持つ。つまり、「民族教育」は一元的な側面が強いが、「多文化共生教育」は多元的側面を有しているといえよう。

最近、「民族教育」の行方について考えるための座談会などが多く開かれているが、金敬得他(1995)でも議論されているように、新しい時代に向けての「民族教育」像はまだ定まっていないのが現状である。「多文化共生教育」の概念は、方向性を模索中の「民族教育」の将来に向けて、1つの可能性を示唆するのではないだろうか。

参考文献

- 呉恵卿・植田晃次(2005)「韓国系民族学校における「共生」－実践的な取り組みを中心として－」『言語の接触と混交－共生を生きる日本社会』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」 pp.7-30
- 金敬得他(1995)「＜座談会＞民族教育の行方」『ほるもん文化 5 在日朝鮮人民族教育の行方』新幹社 pp.11-39

謝辞：本稿を成すにあたって、B中学校の校長先生、教務主任先生、また、その他の教職員の皆様からひとかたならぬご協力とご援助を得ました。そして、ご協力くださったB中学校の生徒たちにも心から感謝します。

大阪における多言語表示の実態
—まちかど多言語表示調査、外国人へのアンケート調査、
行政・鉄道への聞き取り調査から—

佐藤 誠子・布尾 勝一郎・山下 仁

1. はじめに
2. まちかど多言語表示調査
 - 2.1. まちかど多言語表示調査の概要と調査結果
 - 2.2. ドメイン別の特徴
 - 2.3. 多言語表示はだれからだれへ提供されているか
 - 2.4. 表示の問題点
 - 2.5. 大阪周辺における言語表示の類型
 - 2.6. まちかど多言語表示調査のまとめ
3. 外国人へのアンケート調査
 - 3.1. 外国人へのアンケート調査の概要
 - 3.2. 外国人へのアンケート調査の結果
 - 3.3. 外国人へのアンケート調査結果のまとめ
4. 行政・鉄道への聞き取り調査
 - 4.1. 聞き取り調査の概要
 - 4.2. 国・国土交通省近畿運輸局の取り組み
 - 4.3. 大阪府の取り組み
 - 4.4. 大阪市の取り組み
 - 4.5. 鉄道各社の取り組み
 - 4.6. 行政・鉄道への聞き取り調査のまとめ
5. おわりに

1. はじめに

日本に滞在する外国人¹の数は増加し続けている²。それに伴い、日本社会の多民族化と多言語化が進行している。「共生を拓く日本社会」というテーマを取り扱うにあたり、本稿では日本社会における多言語化現象の一つである多言語表示³を取り上げ、日本社会がどんな多言語社会を作り上げようとしているのか、そして、その多言語社会が果たして外国人のためになっているのか、という問題について考察する⁴。

現在、日本では様々な言語を目にすることが多くなっている。中でも地図や標識に複数の言語が同時に用いられている多言語表示は日常生活においても至る所で目につくようになった。多言語表示は外国人に対する言語サービスの一つであり、河原（2005）は、言語サービスを「外国人が理解できる言語を用いて、必要とされる情報を伝達すること」と定義している。多言語表示が今日どのように作成され、受容されているのかという問題を多角的に探るため、執筆者らはまちかどにおける多言語表示調査に参加し、外国人に対するアンケート調査および行政機関・鉄道会社への聞き取り調査⁵を行った。

以下では、まずまちかどでの多言語表示調査の概要とその結果を紹介し、大阪府周辺における多言語表示の実態を概観する。次に、先行研究ではあまり触れられてこなかった「受信者側の声」を聞いてみる。つまり多言語表示を必要とするであろう外国人を対象にしたアンケート調査の結果を記し、現在の大阪の多言語

¹ 本稿では、中長期滞在者を「外国籍住民」、観光などで来ている人を「短期滞在者」とし、両者を総称して「外国人」と示す。

² 2004年における外国人入国者数は675万6830人である。そのうち外国人登録をしているのは総人口の1.55%にあたる197万3747人であり過去最高を記録する。今後この記録は更新されていくと予想される。

³ 本稿では「表示」を地図、案内板、掲示板、警告、道路標識などを示すものとして扱う。

⁴ この問題は、本COE研究プロジェクトの言語班において羅・山下が昨年取り上げた、地方自治体が提供するサービスが外国籍住民にうまく受け入れられているかという問題意識に通底している（羅/山下2005参照）。

⁵ 以下、「行政・鉄道への聞き取り調査」とする。

表示がどのように受容されているのか、それらが有効に利用されているか、また有効に利用されていないのならば解決策はあるのかという問題を検討する。さらに「発信者側の声」にも耳を傾け、行政機関や鉄道会社側が多言語表示についてどのような政策をとっているか、その現状や今後の方針を聞き取り調査により明らかにする。最後に、これら三つの調査結果をもとに今日の多言語表示のあり方と問題点、その解決策、そして今後の課題を考察する。

2. まちかど多言語表示調査

まちかど多言語表示調査は、多言語化現象研究会の代表である庄司博史氏の呼びかけにより、2005年6月より大阪府周辺地域で行った調査である。これは2004年12月から2005年3月にかけて東京周辺で行われた移住連⁶の差別ウォッチウォークにならって行ったものであるが、移住連の調査が外国人に対する差別に注目していたのに対して、まちかど多言語表示調査は、それに加えて外国人コミュニティにおける多言語表示にも観点を広げている。調査方法は、複数の調査者が調査票とカメラを持って「まちかど」を歩き回り、どこに、どのような情報が、どの言語で表示され、何が多言語化されていないかをチェックするものであった。

バックハウス（2005）によると言語表示は大きく分けて公的表示と私的表示の二つに分類される。公的表示とは道路標識や地名表示など行政側や公的企業から提供されるものであり、政府や地方自治体によって意識的に計画され、掲示されるものである。私的表示とは広告看板や店名表示などであり、個人や私企業によって提供されるものであるが、まちかど多言語表示調査においてはこれら二つを考慮して言語表示を調査した。調査の着眼点は、以下の五つである。

- ① 外国人のための便宜をはかる表示
- ② 外国人への禁止、警告表示
- ③ 日本人に対して外国人への注意、差別を喚起するもの
- ④ 日本人に対して外国人との共生、協同をうながすもの
- ⑤ 外国人(エスニックコミュニティ)の同郷者

⁶ 移住連：移住労働者と連帯する全国ネットワーク

<http://www.jca.apc.org/migrant-net/Japanese/whatsnew/s-watch/index.html>

2.1. まちかど多言語表示調査の概要と調査結果

まちかど多言語表示調査は2005年6月19日から11月23日までに計5回行った。調査者は多言語化現象研究会のメンバーらによって構成されているが、その都度いくつかのグループに分かれて複数の地域で実態を調査した⁷。では、それらの調査場所の概要と調査結果を順に記述しよう。

第1回目は、2005年6月19日（日）に大阪市中央区のみなみ周辺（島之内町・宗右衛門町・日本橋電気屋街・南海難波駅）で実施した。



写真1 ピクトグラムを用いた表示

この調査は移住連の差別ウォッチウォークにならって、大阪周辺でも実施してみようという予備的な調査であった。最初に調査を実施した島之内町というのは1980年代後半からアジア系の外国籍住民が増え続けている地域であり、隣接する「みなみ」と呼ばれる歓楽街で働く外国籍住民の居住地となっている。ここでは、行政からの表示よりもむしろ住民が住民に対して発信した多言語表示が目立った。宗右衛門町というのは特にアジア系の飲食店が多く存在しており、歓楽街「みなみ」として知られている地域である。ここでは、島之内町とは異なり、住民が住民へ発信した多言語表示よりも、むしろ歓楽街を利用する人たちを対象にした多言語表示が多かった。他方、日本橋電気街は多くの外国人が訪れる観光地である。そのため、ここでの多言語表示は観光客を意識したものが多く見られた。南海難波駅は関西空港への交通の要所であるため、外国人を対象にした多言語表示が多いのではないかと予想していたが、それらは予想に反して少なかった。

第2回目の調査は、2005年7月24日（日）に大阪市鶴橋駅周辺（駅北側付近・駅南側付近）で実施した。

⁷ 本稿の執筆者のうちこの調査に参加したのは布尾（5回）と佐藤（4回）である。

鶴橋駅周辺は在日コリアンのオールド・カマーが集住する地域であり、コリアンタウンとして知られる。ここではオールド・カマーらが日本語で生活を送っているためか、朝鮮語⁸による表示は意外に少なかった。とりわけ、公的表示は皆無であった。一部ニュー・カマー向けと思われる看板などもあったが、それらですら日本語が中心であり朝鮮語はその翻訳として付属している程度であった。近鉄の鶴橋駅では、駅の出口やトイレなどで4言語の表示が多く認められたものの、JR鶴橋駅では2言語表示が多かった。ここでの表示は明らかに日本語が中心となっていた。なお、このころから、調査者はピクトグラム的重要性に気づくようになり、ピクトグラムを調査項目の一つに取り入れるようになった。

第3回目は、2005年9月9日（金）にJR京都駅周辺（京都駅南側・八条口商店街・京都駅ビル・京都駅前バスのりば・京都駅地下街・中央郵便局・ハローワーク・下京区区役所・駅前繁華街）で実施した。



写真 2 ふりがな付き表示の例

ことが確認された。また、特に観光客の利用が多い駅の北側は、バス停や観光地図など、公的表示に2言語表記（日・英）と4言語表記が多く認められた。一方、

京都市は、年間 54 万 4000 人（2004 年）の外国人観光客が訪れる一大観光地である。そのため、全体的に外国人観光客を意識した取り組みがなされている。2005 年 1 月からは停留所などの表記を4言語（日・英・中・朝⁹）にした洛バスを運行したり、バスルートマップを作成したりしている。JR京都駅でもJR鶴橋駅などと比べ、乗り換え案内などの英語表示が充実しているこ

⁸ 本稿では朝鮮半島で使われている言語という意味で「朝鮮語」を用い、その省略として「朝」と記す。

⁹ 以下で「4言語」という場合はこの「日・英・中・朝」を指す。

駅の南部ではレストランや広告などの私的表示が多いためか、多言語表示化が遅れていた。また、町中でも、住居表示が日・英・中・朝の4言語で表示されていることを確認することができた。ただし、観光客を重視する反面、外国籍住民を意識した表示は全体的に少ないようであった。

第4回目の調査は神戸で行った。2005年10月10日(月)に元町と三宮周辺(阪急・地下鉄・JRの三宮駅・駅北側付近・駅南側付近)で実施した。

神戸は明治以来の国際都市である。阪神大震災時に外国籍住民への情報提供のあり方が問題になったこともあり、長田区などでさまざまな取り組みがなされている。街の案内板が4言語で統一されているほか、駅の南側、神戸港側のフラワーロードやその他の観光地に4言語の表示が多く見られた。とはいえ、駅の北側では、東門街の一部にニュー・カマー向けの朝鮮語の表記が見られたほか宗教施設(モスク・シナゴグ・ジャイナ教寺院)を除いて、日・英以外の表示はほとんど見られなかった。

そして、第5回目は2005年11月23日(水)に大阪の梅田周辺(JR大阪駅・地下鉄梅田駅・阪急梅田駅・地下街・駅北側付近・駅南側付近)で実施した。

この調査場所は、JR大阪駅・阪急梅田駅・地下鉄梅田駅など、鉄道各社のターミナル駅が集中する大阪の中心地である。4言語表示はJR大阪駅や、地下鉄東梅田駅などで見られたほか、駅の商業施設でも散見された。ただし、周辺の商店街などでは、外国籍住民を対象にしていると思われる表記は、「防犯カメラ設置中」という表示を除いてほとんど見られなかった。わずかに一部でタイ語表記のレストランなどが確認されたのみであった。

2.2. ドメイン別の特徴

以上の5回の調査から得られた結果を、鉄道、銀行、バス、役所のドメイン別にしてその特徴を挙げてみよう。

鉄道 = JR、阪急は出口情報・トイレなど、一部の情報のみ4言語で表示されているが、大半の表示は日本語と英語のみである。阪神は2言語のみであった。一方で、近鉄は乗り換え案内、精算機・トイレの案内などで4言語表示を多用している点が際立っている。

銀行 = 日本語中心だが、ATMなどで英語の併記がある。三菱東京UFJ銀行の

ATMでは日・英・中・朝・葡の5言語である。

バス＝観光客用のみ4言語（日本橋・京都）だが、その他は日本語・英語の2言語併記が主流である。

役所＝京都市下京区役所はほとんど日本語にふりがなつきのものである。ただし、外国人登録の窓口を示す表示は英語・朝鮮語の併記である。（新宿区の外国人登録窓口では日・英・中・朝・葡の5言語が併記されている。）神戸市役所市庁舎の庁舎案内とエレベーター連絡案内の表示は日本語・英語・中国語（簡体字・繁体字）・朝鮮語の4言語である。

2.3. 多言語表示はだれからだれへ提供されているか

ここでは、多言語表示がだれからだれへ提供されているのかという問題について考えてみよう。最初に考えられるのは、行政・公的企業から外国人へ提供されている多言語表示である。その一例としては、道路標識や鉄道やバスなどの交通機関で見られる表示が挙げられるだろう。次に考えられるのは、外国籍住民が自分達のコミュニティへ向けて提供している表示である。金（2005）バックハウス（2005）が述べているように、外国籍住民によって提供される多言語表示は、その使用者の存在を示すものとなり、一種の縄張りのような役割を果たす表示にもなりうる。また、私企業が日本人へ向けて提供している多言語表示が挙げられる。これはレストランや服飾店の看板表示に見られる多言語表示であり、ファッション性や装飾性を重視したものである。最後に考えられるのは、日本人住民から外国籍住民、短期滞在者へ向けられた多言語表示である。その例としてはポジティブな「顧客」としての外国人、つまり短期滞在者へ向けられた「歓迎光臨」の表示ばかりでなく、ネガティブな「よそ者」としての外国籍住民へ向けた警告の表示やあからさまな差別意識が示された表示もある。

2.4. 表示の問題点

次に、5回の調査を通して見られた表示の問題について考えてみよう。問題点としては以下の4点が挙げられる。第一は、必要な情報の多くが日本語でしか表示されていないという点である。駅のホームやエスカレータなどで見られる非常停止装置の表示がその一例である。急を要する場合に日本語の表示しかなければ、



写真 3 差別的な表示の例

日本語を理解するのが困難な人はどうしたらよいのだろうかという疑問が浮かぶ。第二に、中途半端な多言語表示がなされており、なんの役にも立っていないという点も指摘したい。たとえば、駅構内や交差点などで見られる地図の中には「現在地」のみが多言語で表示されており、そのほかの場所は多言語表示でないものがある。現在地がわかったとしても、目的地がわからなければ意味がない。第三としては、差別表示の問題を取り上げておきたい。5 回の調査の中でも、わずかではあったが外国人を差別する表示を確認することができた。たとえば、「防犯カメラ設置中」という表示が多言語表示されていたが、この種の表示は外国人を潜在的な犯罪者と

みなしたものであり、外国人に対する差別や偏見を助長するものになりかねない。また、表記上の誤りがあるという問題点も挙げられる。外国人が必要とする情報を正確に伝える表示でなければせっかく多言語表示されていたとしても無駄なものになってしまうだろう。

2.5. 大阪周辺における言語表示の類型

表示がどの言語でなされていたかという点からみると、大阪周辺の言語表示は以下のように六つに分類できる。

- ①日本語（かな・漢字）のみの表示
- ②日本語にふりがな（あるいは、ひらがなのみの表記）の表示
- ③日本語・英語（ローマ字）の2言語による表示
- ④日本語・英語・中国語・朝鮮語の4言語による表示
- ⑤外国語のみの表示
- ⑥ピクトグラム（絵）を用いた表示

類型別の言語表示数は調査の対象ではなかったが、印象としては、やはり①日本語（かな・漢字）の表示が多かった。ついで③日本語・英語（ローマ字）の2言語表示が多く、駅構内や観光地には④日本語・英語・中国語・朝鮮語の4言語表示が目立っていた。また、⑥のピクトグラム（絵）を用いた表示は駅構内などで言語を伴わずに表示されているものが多く見られた。

2.6. まちかど多言語表示調査のまとめ

大阪周辺の多言語表示の実態を探る過程で、まず場所によって表示に用いられる言語が異なることがわかった。駅周辺では基本的に日・英の2言語表示が多く、駅構内の主要な場所や観光地では日・英・中・朝の4言語表示が多く見られた。



写真 4 駅構内での4言語表示

また、場所だけではなく、表示を作成する側によってもその仕方が異なるということもわかった。とりわけ鉄道各社の表示の仕方は多様であった。京都市下京区役所内では、ふりがなをふった日本語（あるいは、ひらがなのみの表記）の表示が多く見られたが、それ以外の場所ではふりがな付きの日本語表示はあまり見られなかった。

また、多言語表示の問題点を幾つか発見することもできた。では、果たして多言語表示の受け手である外国人はこのような表示をどう受け止めているのだろうか。日・英の2言語表示で十分なのか。それとも日・英・中・朝の4言語表示が必要なのだろうか。また、ピクトグラムの表示は彼らの理解の助けとなっているのか。これらの問題については次節で扱うことにしよう。

3. 外国人へのアンケート調査

まちかど多言語表示調査の結果を踏まえ、私たちは外国人が多言語表示をどのように受容しているかを明らかにするためにアンケート調査を実施した。この調査の目的は、多言語表示の「受信者」である外国人が現在の日本社会における多言語表示をどのように受けとめ、問題を感じているとすればそれがどんなものであり、どのような解決策があるのかを尋ねる点にある。つまり、日本に来ている外国人の「生の声」を通して、今後の改善策を考えてみようという調査である。

多言語表示に関する研究は先述した移住連の調査のほかに、言語景観から在日コリアンの言語使用についての調査を行った金（2005）、東京都 23 区が多言語表示の実態を東京都の施策を通して検討した Backhaus(2005)が挙げられる。しかし、先行研究では多言語表示を作成する側、行政側の取り組みを検討することはあっても実際に多言語表示を受ける側の声を聞いたものはなかった。また、これまでの研究の多くは、「言語」に中心をおいていたが、本アンケート調査では、まちかど多言語表示調査でその存在が明らかになったピクトグラムについての認知度をも問うことにした。また、これまでの調査は、おもに日本語と英語、場合によっては朝鮮語を含めるといった限られた言語による調査であったが、本調査では 12 の言語でアンケートを作成することによって、できるだけ多くの協力者に自分の母語で答えられるようにした(アンケートは巻末参照)。これらの点に、本アンケート調査の特徴とその意義を認めることができるだろう。

3.1. 外国人へのアンケート調査の概要

では、アンケートの内容について記すことにしよう。アンケートで尋ねるべき設問内容としては、次の五つの問題を設定した。

- ① 大阪のまちかどにある多言語表示の認知度
- ② 日本語表示でのふりがなの有無による理解度、日・英 2 言語表示での理解度、日・英・中・朝の 4 言語表示での理解度
- ③ 一番理解しやすい言語での表示の必要性（その言語と母語との対応）
- ④ ピクトグラム（絵）の理解度
- ⑤ 多言語表示改善の必要性とその改善策

さらに、回答者の個人情報として、⑥国籍 ⑦母語 ⑧年齢 ⑨性別 ⑩在住

地および在住年数を尋ねた。

五つの設問内容についてやや詳しく見てみると、①は導入部である。多言語表示の認知度を尋ねることによってこのアンケートの内容を知ってもらい、かつアンケートをスムーズに記入してもらうために立てた設問である。②は、本アンケート調査の中心である。果たして外国籍住民や短期滞在者が日本語だけの表示をどの程度理解できているのか、その理解度はふりがながついているとどの程度増すか、さらには英語が加わるとどのように変化するか、といった問題を調べるための設問である。朝鮮語と中国語について尋ねたのは、大阪の、特に駅周辺において4言語表示が存在していたことがその背景にある。③は、多言語社会にとって必要な言語が何であるかを調べるための設問であり、彼らにとって一番理解しやすい言語が何であるかを尋ねてみた。回答者の個人情報として彼らの母語についても尋ねているため、この設問によって一番理解しやすい言語が彼らの母語であるかどうかを確認できる。④はピクトグラムが外国人にとってどの程度有益であるかを解明するため、その認知度を尋ねたものである。⑤は具体的に、彼らに日本の多言語表示の改善策について尋ねた部分である。

これらの内容を適切な日本語の設問にすることによって、まず日本語版アンケートを作成した。その後、この日本語版をもとに11名の翻訳協力者（本稿の執筆者を含む）に依頼し、12言語のアンケートを作成した。12言語とは、アラビア語、インドネシア語、英語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ドイツ語、日本語、フランス語、ベトナム語、ポルトガル語、ロシア語（50音順）である。翻訳にあたっては、「その言語で表現しやすく」「わかりやすく」「受け取る方に対して失礼な聞き方にならないように」適宜表現を調整してもらった。

調査の実施日と実施場所は以下の通りである。2005年11月19日、23日、26日、12月10日は大阪梅田（ヨドバシカメラ前、駅前）、12月8日、9日、16日は大阪大学吹田キャンパスで実施した。また、執筆者（佐藤）の知り合いである日本語学習教室に通う外国籍住民に協力を得たものや、執筆者（布尾）が居住する大阪大学の留学生の学生寮で実施したものもある。基本的には梅田や吹田キャンパスで本稿の執筆者である3名が一人ひとり、外国人と思われる人に声をかけてアンケート調査の協力を依頼した。アンケートに答えてもらう際、12言語で作成したアンケートを12のポケットのついたファイルの中に入れ、そのポケットの上

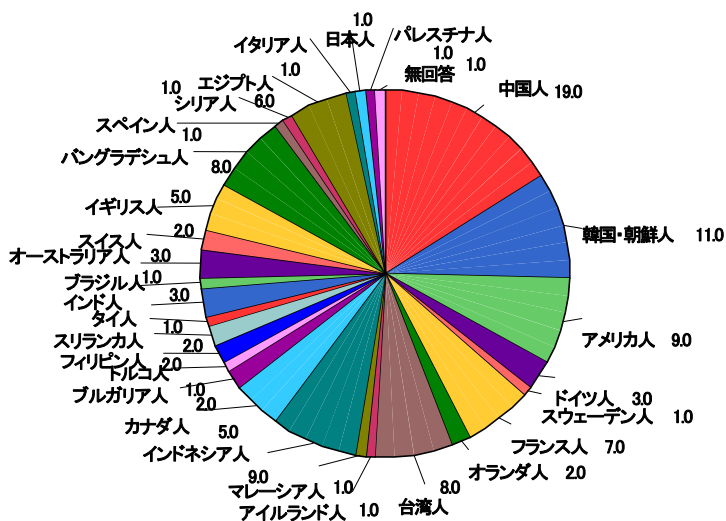
にそれぞれの言語の国旗のマークを付けてそれらの言語のアンケートがあることを知らしめ、そのうち一番理解しやすい言語を選んでアンケートに答えてもらった。また、その際の使用言語は日本語と英語であった。つまり、アンケートを依頼する際、アンケートの内容に関して不明な点がある場合、あるいは簡単な会話をする場合はおもに日本語か英語を用いた。

3.2. 外国人へのアンケート調査の結果

アンケート調査では 121 名から回答を得ることができた。しかし、アンケート回収後、ベトナム語版アンケートに誤りが見つかったため、その 3 名の回答者からの回答は以下の分析から除外した。つまり、118 名の回答が有効回答となる。

<アンケート回答者の属性>

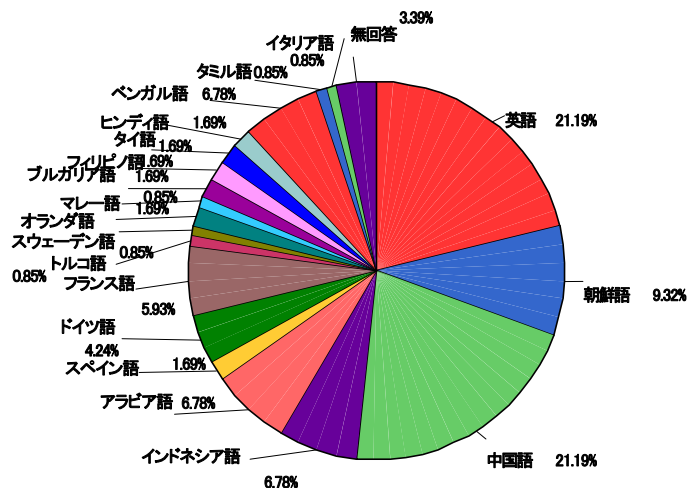
回答者の国籍に関しては、30 カ国・地域の外国人から回答を得ることができた。



<図 1 国籍>

その分布は、図1に示したとおりである。予想以上に多くの異なる国籍を持つ人にアンケート調査を行うことができた。また、日本には実に多くの異なる国籍を持つ人が滞在しているという事実が明らかになった。ただし、図1をみると、その中でもやはり中国人や韓国人が比較的多いことが確認できる。

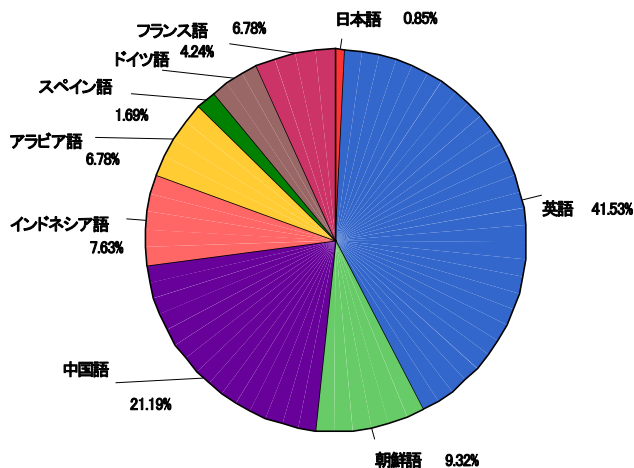
次に、母語に関する結果を見てみよう。母語として挙げられた言語は20言語であり、国籍ほどではないにせよやはり多様であった。図2にその分布を示す。



<図2 母語>

すでに見たように、国籍に関しては中国籍や韓国籍の回答者が多かったため、母語に関しても中国語・朝鮮語とする人がもっとも多いのではないかと予想した。ところが、図2が示すように、英語を母語とする人も中国語を母語とする人と同様に多いことが判明した。

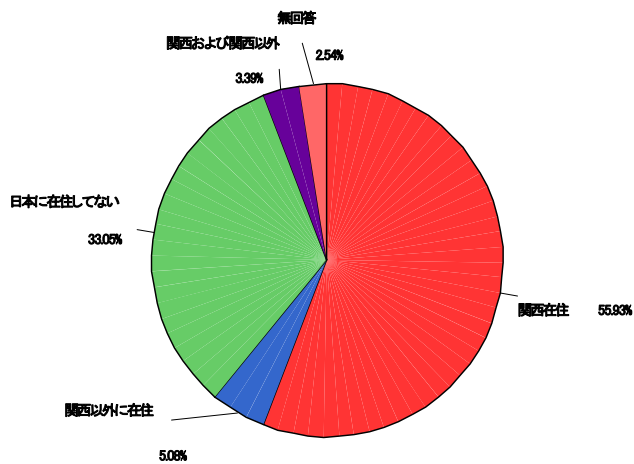
次にアンケートで使用された言語がどのような割合になったかを見てみよう。図3を参照されたい。



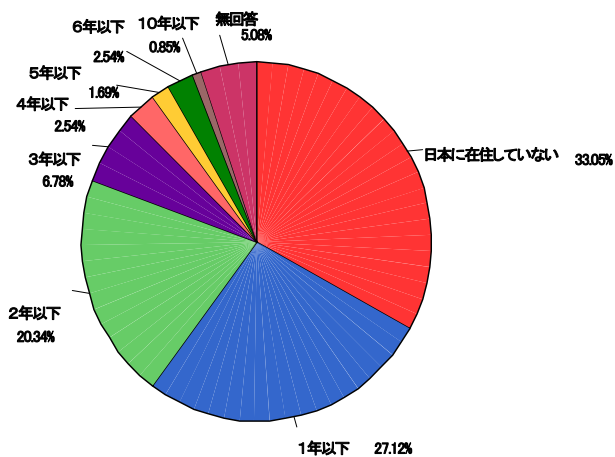
＜図 3 アンケートの言語＞

今回の調査では、12 言語のアンケート用紙を準備したが、実際に使用された言語は 10 言語であった。（図 3 ではベトナム語を除いているため 9 言語となっている。）図 3 からわかるように、118 名のアンケート回答者の内の約 4 割が英語を選択している。つまり、母語がアンケートの言語に含まれていない場合は、そのほとんどが英語のアンケートを選択したことになる。この結果は英語の地位の高さを物語っているものといえるだろう。とはいえ、この 41.53% という数値を高いと見るか、それほどでもないかと解釈するかは微妙な問題と言えるだろう。

次にアンケート回答者が外国籍住民なのか短期滞在者なのか、また滞在期間がどれくらいであるかを見てみよう。図 4 に示したように、関西地域、関西以外の地域を合わせて、日本に在住している人は約 3 分の 2 を占め、旅行者など日本に住んでいない人は約 3 分の 1 であった。また、図 5 にあるように、約 3 分の 2 の日本在住者のうち長期的に日本に在住している人は少なく、約 5 割近い人が滞在期間 1 年以下あるいは 2 年以下であることも明らかになった。



<図 4 住所>



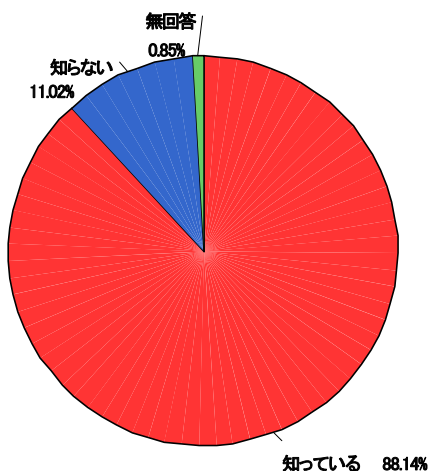
<図 5 在住年数>

その他の属性では、性別に関しては男性が72.03%、女性が24.58%(無回答3.39%)であり男性の比率が多かった。これは、調査者が男性2人と女性1人であったため女性に声をかけづらかった部分もある。また、大阪大学吹田キャンパスで金曜日の昼にモスク付近で調査を行った際、アンケートの協力者の多くがイスラム教徒の男性であったこともこの結果に影響を及ぼしているに違いない。

年齢に関しては21～30歳までが53.39%で5割以上を占め、続いて、31～40歳までが25.42%、20歳までが5.93%、41～50歳までが5.08%、51～60歳までが4.24%(無回答5.93%)であった。これは、年齢別にみた外国人入国者数では20歳～40歳代が多いという事実を反映しているものである。

以下では、アンケートの設問にしたがって、このアンケート調査の結果を記述することにしたい。なお、アンケートの設問内容は太字にして記した。

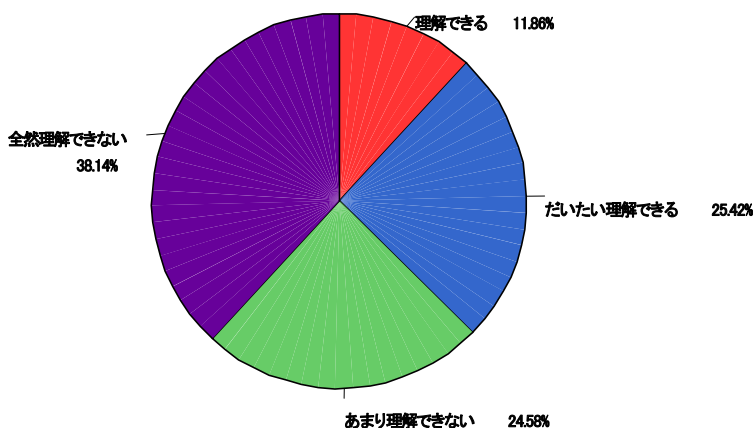
1. 大阪の街角の表示が日本語以外の言語で書かれている場合があることをご存知ですか。



<図 6 多言語表示の認知度>

図6は、多言語表示を認知しているかどうかを尋ねたものである。図6が示すように、回答者の内の約88%の人が大阪の多言語表示に気がついていたことになる。「知らない」という人の多くが短期滞在者であったけれども、その中には、関西在住の回答者も含まれていた。

2. あなたは、日本語だけの表示（漢字・かなのみの表示）で理解できますか。



<図7 日本語が理解できる>

設問2は、ふりがなのついていない日本語だけの表示で理解できるかどうかを尋ねた設問である。図7を見てみると、「あまり理解できない」と「全然理解できない」と答えた人が3分の2を占めている。ここでは、この理解度と「住所」との相関関係を調べてみた。表1を参照されたい。

表1が示しているように、日本に在住している人のすべての外国人が、日本語だけの表示を理解できているわけではなく、むしろ「あまり理解できない」、「全然理解できない」という人の方が多いことが明らかになった。日本に中長期的に

滞在する人であっても、日本語を十分理解できていない外国人の比率はかなり多いようである。

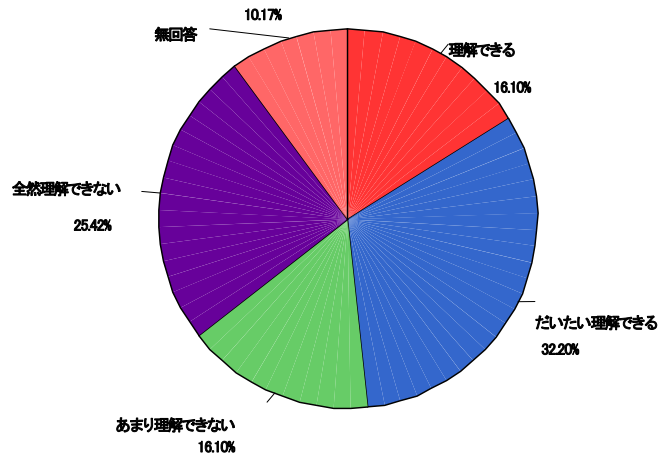
＜表 1 日本語の理解度と住所＞

度数	住所					合計
	関西在住	関西以外に在住	日本に在住して ない	関西および関 西以外	無回答	
日本語で理解できる	9	2	1	1	1	14
だいたい理解できる	19	1	7	1	2	30
あまり理解できない	20	2	6	1	0	29
全然理解できない	18	1	25	1	0	45
合計	66	6	39	4	3	118

3. 2. で b. c. d. と答えた方にうかがいます。その表示にふりがながあったらどうですか。(b:「だいたい理解できる」 c:「あまり理解できない」 d:「全然理解できない」以下同様)

設問 3 は、ふりがなのついた表示の有用性について尋ねた問題である。設問 2 で明らかのように、日本語だけの表示で「理解できる」と答えた人は約 3 分の 1 であったのに対し、ふりがながあれば「理解できる」と答えた人は全体の約半分に増えている。また「無回答」の 8 人は設問 2 で日本語が理解できると答えた人であるため、それを加えると、回答者の半数以上はふりがながあれば理解できるということになる。

この結果は、今後の「多言語表示」のあり方に大きな示唆を与えているように思う。「多言語表示」という言葉で想定されるのは、日本語とさまざまな「外国語」の併記であるが、外国人の半数以上が「ふりがな」がついていれば理解できるのであれば、今後「ふりがな」の多用を検討しても良いだろう。



＜図 8 ふりがな付きの日本語が理解できる＞

次に、日本語ばかりでなく、英語や中国語、朝鮮語が用いられている表示が理解できるかという問題に移ろう。設問4と設問5は以下に記す通りであり、それぞれの結果については次ページの図9及び図10に示した。

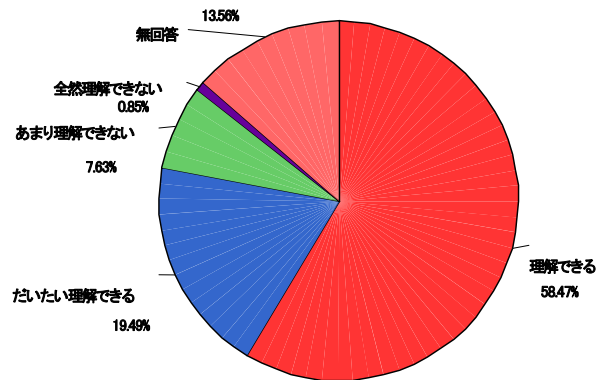
4. 2. で b. c. d. と答えた方にうかがいます。

その表示に日本語のほかに英語が使われていたら理解できますか。

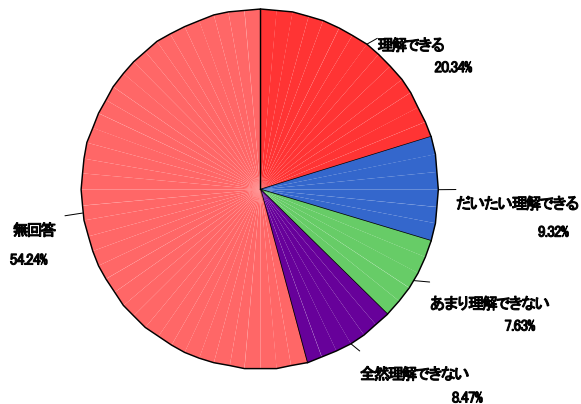
5. 4. で b. c. d. と答えた方にうかがいます。

その表示に英語だけでなく、中国語、ハングルが使われていたら理解できますか。

図9に示されているように、4分の3以上の回答者が、英語が使われていればその表示を「理解できる」と答えている。無回答の人を含めるならば、日本語と英語の表示があれば、約92%の人が「理解できる」ことが明らかになった。



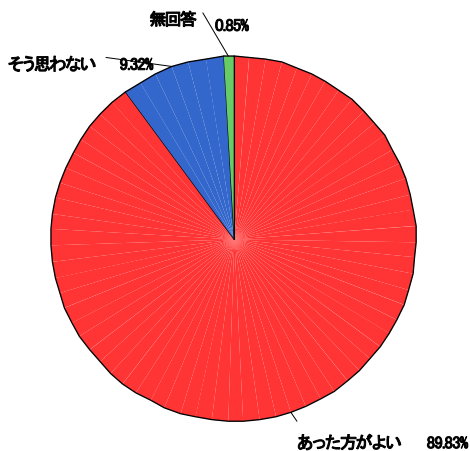
<図 9 英語があれば理解できる>



<図 10 日・英・中・朝があれば理解できる>

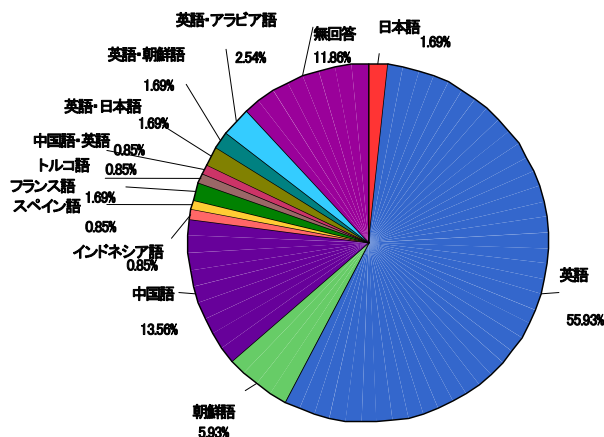
図 10 を見てみよう。この設問は現在の多言語表示の実態を踏まえ、日・英・中・朝で表示されていればその理解度が増すかどうかを尋ねたものであった。ここで「無回答」が多いのは、設問 4 において「理解できる」と答えた人が多かった(49/69 人) からである。ところが設問 4 で「理解できる」と答えた人を除いても無回答者が 20 名であり、「全然理解できない」という回答が設問 4 に比べて増加している点は無視できない。つまり、設問の内容が回答者にうまく伝わらなかった部分もあったようである。この点はアンケートの設問作成の課題である。とはいえ、中国語・朝鮮語を母語とする回答者のうち、英語があれば「だいたい理解できる」とした 9 名は、中国語・朝鮮語が加わることによって「理解できる」と答えていた。このことから、中国語・朝鮮語を母語とする人にとっては日・英・中・朝の表示が理解の助けになっていることがわかる。では、一番理解しやすい言語の表示について尋ねた設問 6 と設問 7 の結果を見てみよう。

6. あなたにとって一番理解しやすい言語の表示もあった方が良いと思いますか。



<図 11 一番理解しやすい言語の有無>

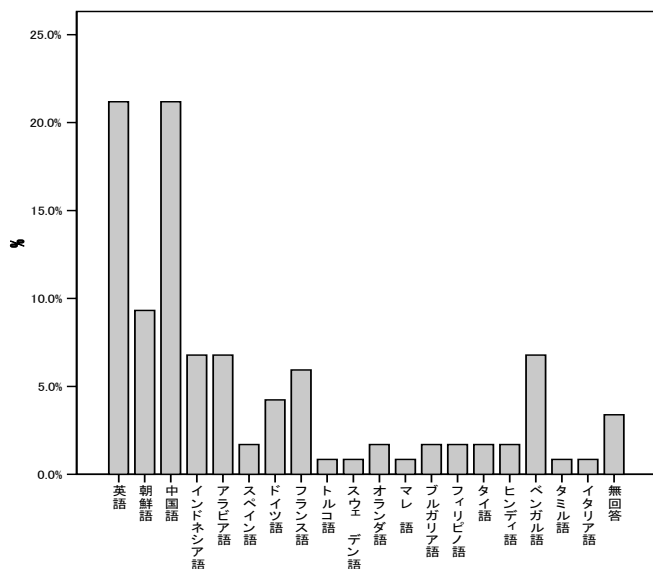
7. その言語は何語ですか。



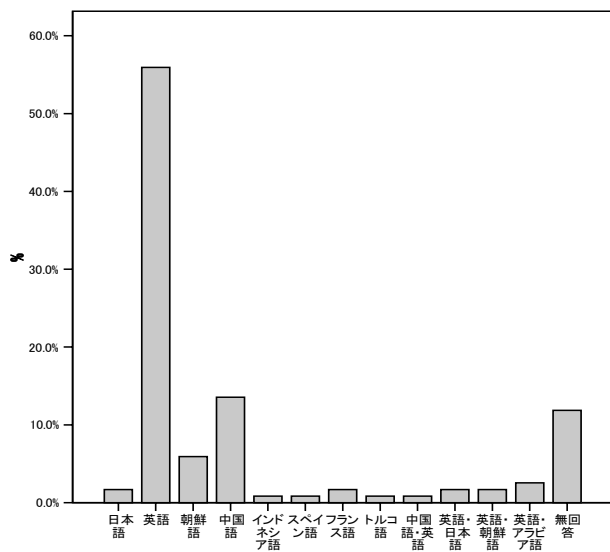
<図 12 一番理解しやすい言語>

図 11 と 12 を見てみると、自分の一番理解しやすい言語での表示があった方がよいと回答した人は全体の約 90%であり、約 56%の人が英語での表記を希望していることが読みとれる。このことから、英語は「理解できる」言語であるばかりではなく、「事実上の共通語」として受け入れられていることがわかる。

ここでは、この設問で選択された言語と母語の関係を見てみたい。次ページの図 13 と 14 を参照されたい。図 13 は回答者の母語を示したものであり、図 14 は設問 7 において「一番理解しやすい言語」として選択された言語を示している。この二つのグラフを比較するならば、設問 7 においては、英語が母語ではない人たちも「一番理解しやすい言語」が英語であると答えていることがわかる。たとえばベンガル語を母語とするある回答者は、設問 7 に答える際に、「ベンガル語(母語)は小さい言語だから、日本で理解する人は少ない。わたしは英語が好きなわけではないが、英語と答える」と話していた。



<図 13 母語>



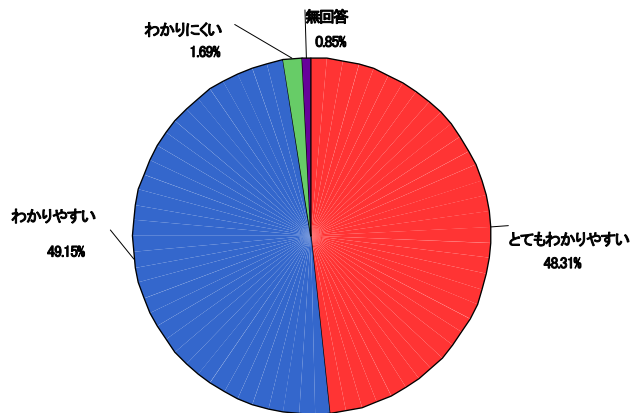
<図 14 一番理解しやすい言語>

他の回答者からも、英語を「事実上の共通語」として受け入れる発言があった。しかし、その一方で英語を母語とする人の中に日本における表示に英語は必要ないという人もいた。「ここは日本なのだから、日本語を学習して日本語を理解できるようにするべき。実際自分達の国の表示には日本語はない。なので、それに比べたら日本の多言語表示は見習うべきものだ」という理由からだった。

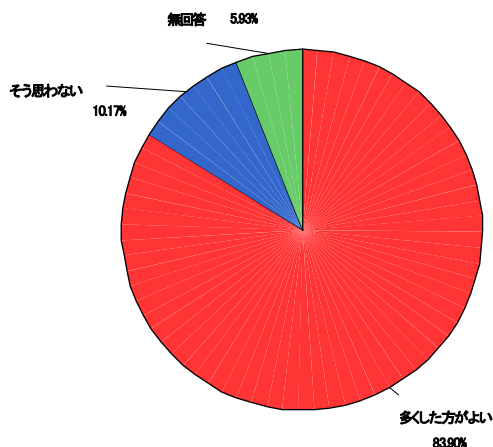
また、母語を英語・朝鮮語・中国語とする人はそれぞれの母語をあげているケースが多いこともわかる。これは、現在の多言語表示のあり方を反映した「現状追認」とも受け取れる。またこの結果は、日本において自分たちが自分自身のことを「マイノリティの中のマジョリティ」とみなしていることの表れともいえるだろう。

設問8は、「言語」とは言えないが、まちかど多言語表示調査でその重要性が明らかになったピクトグラム（絵）に関する設問である。

8. 日本で使われているピクトグラム（絵）についてうかがいます。ピクトグラム（絵）はわかりやすいですか。もっと多くの方が良いと思いますか。



<図 15 ピクトグラムのわかりやすさ>

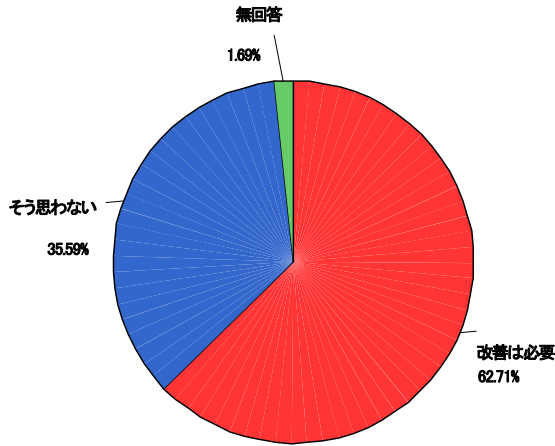


<図 16 ピクトグラムを多くした方がよい>

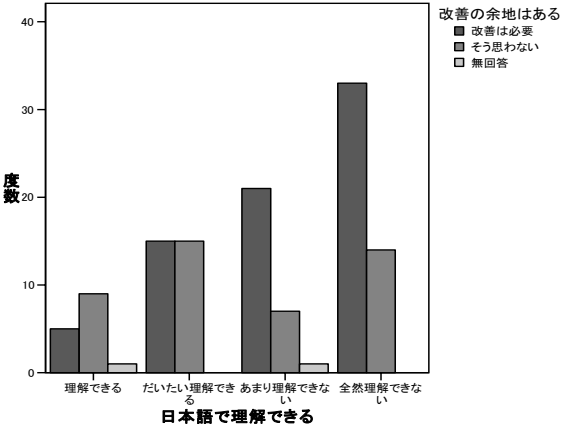
図 15 はピクトグラムのわかりやすさを聞いたものであり、図 16 はピクトグラムをもっと多くした方が良いかどうかを聞いた結果を表したものである。図 15 で示されているように、日本で使われているピクトグラムが分かりやすいと答えた人は約 98%であった。このことは、言語だけの表示が理解できない外国人にとって、ピクトグラムがいかに有益であるかを物語っているだろう。この結果も、「ふりがな」の重要性と同様、今後の多言語表示のあり方を考える上で大いに参考になると思われる。

では最後に、日本の多言語表示が改善されるべきかどうか、そして、改善するとしたらどんな点を改善すべきかを尋ねた設問9と設問10の結果を記述することにしたい。次ページの図 17 を見ると、約 63%の回答者が、改善が必要であるとしていることがわかる。この結果を等閑視することはできないだろう。また、図 18 は日本語の理解度と改善の必要性の相関関係を捉えたものである。図 18 から、改善が必要と答えた回答者の多くが、日本語の表示を理解できないと答えた人であることが読みとれる。

9. 日本の表示は改善の必要があると思いますか。



<図 17 改善の必要性>



<図 18 日本語の理解度と改善の必要性の相関>

設問 10 は、次に示すように、改善が必要と答えた人に対して具体的な改善策を尋ねたものである。この回答は自由回答であるため、以下では「表示そのものについて」、「表示の場所について」という 2 項目に分類し、得られた回答をありのままに記す。

10. 9で「a. はい」と答えた方にうかがいます。どのように改善したら良いと思いますか？

<表示そのものについて>

- ・ もっと絵を増やすべき
- ・ 道路標識を改善すべき（運転するときにわかりにくい）
- ・ 特に電車のドアの表示を改善すべき（どこに着いたのかわかりにくい）
- ・ 誰にでも通じる表示を増やすべき
- ・ 非言語のものなので絵はとても役に立つ
- ・ コストを有効にすべき
- ・ 案内画面のある機械を改善すべき
- ・ 日本の漢字の表示を多くして欲しい
- ・ 英語の方向指示表示を改善して欲しい
- ・ 京都のようにもっと地図を増やして欲しい
- ・ 主要な外国語を書いた方がいい（英語・中国語）
- ・ 英語をもっと増やして欲しい
- ・ 英語による説明を増やして欲しい
- ・ 基本的な英語と絵を使うべき
- ・ 英語でもっとわかりやすくするべき
- ・ もっと表示を増やすべき
- ・ 絵の下に英語で説明を書くべき
- ・ 方角を示す表示を設置すべき（東・西など）
- ・ すべての漢字の上にふりがなをつけて欲しい
- ・ 色々な言語で表示をすべき

- ・ 駐輪禁止の表示を改善して欲しい
- ・ 英語はいらない
- ・ 同じ表示に中・日・英を書く
- ・ 英語で書かれる必要もある
- ・ 言語による表示は英語を使うべき
- ・ もし、法律上で定められた用語があるのならば使うべき

＜表示の場所について＞

- ・ 表示を設置する場所を改善すべき
- ・ 目につきやすいようにすべき
- ・ 特に田舎の駅を改善すべき
- ・ JR 駅を改善すべき（特に小さい駅）
- ・ 大きな町では問題はないが、小さな町での英語の使用を改善すべき
- ・ あらゆる場所に表示を設置するべき

3.3. 外国人へのアンケート調査結果のまとめ

3.1. で述べた五つの設問内容に即してアンケート調査の結果をまとめておこう。まず、①「大阪のまちかどにある多言語表示の認知度」に関しては、約 88%の回答者が多言語表示に気付いていた。②「日本語表示でのふりがなの有無による理解度、日・英 2 言語表示での理解度、日・英・中・朝の 4 言語表示での理解度」については、日本語だけで理解できる人が約 37%、ふりがながあれば理解できるという人が約 58%、英語があれば理解できる人になると約 92%になり、さらに中国語・朝鮮語があると理解できる人は約 84%という結果になった。（最後の設問は、その趣旨がうまく伝わらなかったことによる。）③「一番理解しやすい言語での表示の必要性（その言語と母語との対応）」に関しては、約 90%の人が一番理解しやすい言語での表示を必要と感じており、約 56%の人は、一番理解しやすい言語として英語を挙げていた。④「ピクトグラム（絵）の理解度」は非常に高く、約 97%の人が理解できるとしていた。そして、⑤「多言語表示改善の必要性とその改善策」に関しては、約 63%の人が改善することが必要であるとしており、具体的な改善策としては、「英語を増やす」、「ピクトグラムを増やす」、あるいは「設置場所を改善する」といった意見を聞くことができた。

また、今回のアンケート調査を通じて、実に様々な国籍を持つ外国人が大阪に來ていることがわかった。アンケート調査に協力してくれた 120 名ほどの外国人は 30 もの国や地域からきた人々であり、彼らの母語は 20 言語に及ぶことが明らかになった。このことは日本社会における多民族化、多言語化の実情を如実に表している。また、大阪のまちかどの表示を、彼らがどのように受容し、どのような表示を求めているのかという生の声を聞くことができたことは意義深いと思う。彼らの中にはこのアンケート調査の重要性を指摘してくれた人もいた。

用意した 12 言語のアンケートのうち使用されたのは 10 言語であったが、理解しやすい言語がアンケートの言語に含まれない場合は英語のアンケートで回答していたことから、多くの人が英語を理解していることがわかった。また、日本語のふりがなと英語の表示があれば、回答者の 9 割以上が「理解できる」「だいたい理解できる」としていた。この結果はある程度一般化でき、日本語にふりがながふっており、さらに英語の表示があれば、その内容は非常に多くの外国人に理解してもらえらるというだろう。ピクトグラムに関する質問では、約 97% の人が「わかりやすい」と答えていた。改善策の提案も踏まえるならば、少なくとも言語表記の面では、ふりがな付きの日本語と英語の表記を充実させ、特定の言語に束縛されないピクトグラムを増やすことが効果的であり有効と考えられる。

また、大阪において事実上の標準となっている日・英・中・朝の 4 言語表示は、中国語・朝鮮語を母語とする人々にとっては、理解の助けになっているようである。行政や公的企業が提供するこの 4 言語表示が現実の需要とそれほどかけはなれてはいないということがこのアンケート調査で確認できた。

しかし、日本語のふりがなと英語の表示、日・英・中・朝の 4 言語表示があればそれで十分なのであろうか。確かに、約 92% の人が日本語のふりがなと英語の表示があれば理解できると回答していた。それゆえ、英語が「事実上の共通語」であることは否めない。とはいえ、12 種類のアンケートを作ってみると、実際に英語のアンケートを使用した人は全体の約 42% に過ぎなかった。つまり、もしも最も理解しやすい言語や母語があれば、そちらの言語を用いたことになる。自分の理解しやすい言語や母語があれば、英語よりもそちらを優先させたのである。とすれば、そんな大多数の外国人にとっても、英語にばかり頼った表示が、彼らの多様なニーズにあっていると切り切ることはできないのである。

4. 行政・鉄道への聞き取り調査

では、ここで行政・鉄道への聞き取り調査について記述しよう。2005 年 12 月 23 日の多言語化現象研究会において、本稿の執筆者のうち佐藤と布尾がまちかど多言語表示調査および外国人に対するアンケート調査の中間報告を行ったところ、複数の参加者から「受信者側の意識調査だけではなく、多言語表示の発信者側の意見も聞くべきだ」という指摘を得ることができた。私たち執筆者もその必要性を感じていたため、追加的に発信者に対する聞き取り調査を行うことにした。以下では、多言語表示の発信者である行政機関や鉄道会社各社に対して行った聞き取り調査に基づき、それぞれの政策や多言語表示に対する意識について述べておきたい。

4.1. 聞き取り調査の概要

調査の対象として、行政機関からは大阪における多言語表示に関する政策を担っている国土交通省近畿運輸局、大阪府、大阪市を選び、それぞれの多言語表示の担当部署の担当者に話を聞いた。また、民間企業側の取り組みや意識を知るため、まちかど多言語表示調査でも取り上げた鉄道会社各社に調査への協力を依頼した。具体的には、西日本旅客鉄道（JR 西日本）、近畿日本鉄道、阪急電鉄、京阪電気鉄道、阪神電気鉄道、南海電気鉄道の 6 社を対象にした。

この聞き取り調査は 2006 年 1 月の中旬から下旬にかけて実施し、行政に対しては、電話とインタビューによる聞き取りを行った。インタビュー調査を実施するため、1 月 19 日に大阪府（土木部交通道路室道路整備課交通計画グループ）、1 月 23 日に国土交通省近畿運輸局（企画振興部観光振興課）、1 月 25 日に大阪市（ゆとりとみどり振興局文化集客部企画調査課・計画調整局開発企画部都市デザイン課）を訪問した。大阪府、大阪市については佐藤と布尾が、国土交通省近畿運輸局については布尾がインタビュー調査を行った。

鉄道会社については、上記の 6 社の広報担当者に電話で依頼を行い、その後書面や電子メールで質問事項を送付したところ、京阪電気鉄道には電話での聞き取り調査を行うことができ、阪急電鉄からは書面で回答を得ることができた。他の

4 社については、時間の制約もあり、回答を得ることができなかった¹⁰。

4.2. 国・国土交通省近畿運輸局の取り組み

ここでは、国の政策、および国土交通省近畿運輸局の取り組みについて、近畿運輸局への聞き取りの結果に基づいて記述する。

多言語表示に関する国の政策としては、2006 年 4 月 1 日に「通訳案内業法及び外国人観光旅客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律の一部を改正する法律」（通称「外客誘致法」）が施行されるとのことである。この改正法では、外国人観光客へのサービスの一環として、多言語による情報提供の必要性も取り上げられており、国土交通大臣が指定する路線について、鉄道会社などは、多言語表示など、外国人に対する情報提供についての計画を提出する義務が課されることになる。関西では、関西国際空港―京都など、外国人観光客の利用の多い路線が対象になると考えられる。

国土交通省では現在、改正されるべき「外客誘致法」施行の前に、情報提供に使用される言語などの具体的なガイドラインをまとめる作業を行っている。ガイドラインではできるだけ多くの言語での情報提供が望ましいとしながらも、案内標識については、現時点での草案においては以下のようにになっている。

案内標識により情報提供を行う場合には表示するスペースに限りがあるため、日本語に加え、代表的な国際言語である英語と、視覚により情報伝達が可能なピクトグラム の 3 種類を用いた情報提供を行うことを基本とする。

ここでは、日本語以外に英語とピクトグラムによる表記が基本とされているが、まずは全国一律のガイドラインであることを考慮に入れる必要がある。すなわち、これはあくまで「基本」であり、国土交通省近畿運輸局では「関西では 4 カ国語表記が浸透しつつある。（日本語・英語以外にも：筆者註）プラスアルファで、地

¹⁰ 現時点でも回答を待っている状態である。たとえ今後、いくつかの回答が得られたとしても、残念ながらもはやその結果をこの報告書に反映させることはできない。

域の実情に応じ、その他の言語を表示する方がよい」（企画振興部観光振興課）という立場を取っている。ただ、政府からの資金援助がないため、事実上義務化される英語とピクトグラム以上の対応については、鉄道会社などの自主性に任せるほかはなく、「個別の実情に応じて、アイデア・意見をお話しして、ある程度のお願いをしている」（同）状況である。

4.3. 大阪府の取り組み

次に大阪府の動向について、聞き取り調査の結果をもとに概観する。大阪府は2005年4月に策定した大阪府観光戦略プログラムの一環として、「公共交通機関の多言語表示推進」をテーマに掲げている。外国人の声を聞くため、関西国際空港の出国ゲートでのアンケート調査や、来日して間もない留学生に協力を仰ぎ、実際に鉄道駅で乗り換えをしてもらって困難を感じた点を聞くなどの実態調査を行っている。その結果、「サインに連続性がない」「商業広告と同じ設置場所にある」「文字が小さく、情報量が多い」など、外国人観光客に対する情報提供の問題点を明らかにしている。

府はまた、2005年8月に「観光交通ホスピタリティ推進会議」を発足させ、外国人観光客への交通情報の提供の改善についての検討を進めている。この会議は行政のほか、有識者、鉄道・バスなどの交通事業者、その他観光業の代表者などで構成されており、業界を横断する形での取り組みを目指している。

案内標識などの多言語標識については、大阪府は基本的には国土交通省が策定中のガイドラインに足並みを揃えている。ただ、大阪府の地域性として、外国人観光客の約7割がアジアからの客である（2002年度）という点も考慮し、日・英・中（繁体字・簡体字）・朝などの多言語表示を、優先度の高い路線などから段階的に整備するよう、鉄道会社などに働きかけていく方針だとしている。

現時点では大阪府が関与するための法律的根拠がないため、コーディネータ役に徹するしかないのが実情である。だが、大阪府も出資する大阪モノレールの「彩都線」延伸（2007年開業予定）に際しては、多言語表示の取り組みなどを「先頭に立ってやりたい」（土木部交通道路室）と話している。

4.4. 大阪市の取り組み

では次に、大阪市での聞き取り調査を基にその取り組みについて見ていこう。大阪시는、1997年に「大阪市案内表示ガイドライン」を策定した。このガイドラインでは、言語表記に関する基本原則として、「案内表示は、原則として日本語表記にローマ字・英語表記を併記するものとする」と、日本語のほかに英語を用いることを定めている。また、「多くの外国人の訪問が想定される施設・場所では、原則として案内表示に多言語表記を用いるものとする」としている。ここで想定されている多言語としては、「原則として中国語、ハングルを他の言語に優先し、表記する」と定めている。これは、大阪市には東アジアからの観光客が多いこと、そして在日朝鮮・韓国人が多いことなどがその背景にあるという。まちかど多言語表示調査でも明らかになったが、実際、大阪市内の地図などの案内表示や地下鉄谷町線東梅田駅の案内表示などにはこの4言語による表記が採用されている。

言語以外の方針としては、ピクトグラムの採用がある。国土交通省と交通エコロジー・モビリティ財団が2001年に策定した「標準案内用図記号ガイドライン」などを基準として、大阪市独自のピクトグラムも追加している。

市では、2002年から案内表示ガイドラインの改訂作業を進めており、それが最終的な詰め段階に入っており、「できるだけ4言語を採用していく」（計画調整局開発企画部都市デザイン課）方針だとしている。

そのほかの取り組みとして、大阪の中心的な繁華街である梅田・JR大阪駅周辺に関しては、「梅田ターミナル地域サイン整備連絡会」を通じて、地下街や鉄道会社各社などと協議して共通の案内表示のひな形を作成している。さらに、今後は「ガイドライン的なものを作りたい」（同）と話している。また、梅田・JR大阪駅周辺では、2006年3月までに、4言語に対応した歩行者向け案内表示を増設する方針とのことである。

4.5. 鉄道各社の取り組み

鉄道各社の多言語表示の取り組みは、各社でばらつきがある。以下、聞き取り調査をすることができた阪急電鉄と京阪電気鉄道の事例について述べていこう。

阪急電鉄では、2004年度から日・英・中・朝の4言語表示の整備を始めた。主要駅や乗換駅などの「出入口」「改札口」「きっぷうりば」「トイレ」を対象に、順

次整備を進めている。また、日本語・英語の2言語表記に関する取り決めとしては1994年に定めた「駅設備サインマニュアル」で、表示に使用する言語として日本語以外に英語も併記することが原則となっている。また、JIS（日本工業規格）に対応したピクトグラムの使用も進められているとのことである。

京阪電気鉄道は、国土交通省のガイドラインをもとに2002年に出版された「公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック」を参考にして、独自の「サイン管理マニュアル」を作成した。これは、日本語と英語とピクトグラムを使用した表示が基本で、天満橋駅をモデルとして、順次入れ替えを進めている¹¹。同社では、「英語とピクトグラムで、かなりの外国からのお客様の案内はカバーできるだろう」（お客さまサービス事業部企画課）と考えている。また、4言語表示については①案内サインの面積の大きさが限られているため文字が小さくなり、かえって分かりにくくなる、②中国語・ハングルの誤字のチェックが難しい、などのデメリットを指摘してくれた。

4.6. 行政・鉄道への聞き取り調査のまとめ

国土交通省や大阪府・大阪市への聞き取り調査から、様々なレベルでの取り組みが始まっていることがわかった。とりわけ、外客誘致法の改正により、一部の路線が対象とはいえ、交通事業者に対して英語とピクトグラム使用の努力義務が課されるという点は意義深い変化である。また、大阪府も、鉄道会社・バス会社・観光業者などを招き横断的な会議を主催するなど、自主的な取り組みを見せている。大阪市も1997年の段階で案内表示ガイドラインを策定するなど、独自の政策を採っている。大阪府と大阪市がそれぞれ、日・英・中・朝の4言語の表記を目標としていることもわかった。このことは、2.のまちかど多言語表示調査で実際に4言語表示が多く観察されたことを裏付ける事実だと言えるだろう。

他方、鉄道会社への聞き取り調査により、各社それぞれの取り組みの実態や、多言語表示の必要性に対する意識を知ることができた。今回の報告書では詳細な

¹¹ 京橋駅では日・英・中・朝の4言語表記がなされているが、これは2002年に日韓が共催したサッカーのワールドカップに先だって行われたものである。この当時、京阪電気鉄道はまだサイン管理マニュアルを作成していなかった。

記述を断念せざるを得なかったが、多言語表示にはプラス面だけではなく、実際にはコストや、煩雑になって見にくくなるなどのマイナス面もあり、単純に「多言語化表示が万能」とは言えない側面も浮かび上がってきた。また、今後は、大阪府の調査などから明らかになったように、交通事業者間の連携も重要な要素になるであろう。例えば、関西国際空港で見られた中国語（繁体字）が、大阪市内へ向かう鉄道に乗った途端、見あたらなくなるなどの例は1企業では解決できない問題である。

最後に、今回の聞き取り調査を通じて明らかになった政策の一面性について触れておきたい。「外客誘致法」という法律の名称がそれを象徴しているが、とりわけ国土交通省・大阪府の現在の取り組みが、「外国人観光客」を中心とする発想になっている点である。現在の日本社会で「外国人」について考えるとき、優先すべきは観光客に対するサービスではなく、むしろ中長期的に滞在し、日本社会の一員となっている外国籍住民に対するサービスであろう。

聞き取り調査をした範囲では、国土交通省近畿運輸局・大阪府の担当者のいずれからでも、長期的に日本に滞在する外国籍住民にも配慮したいとする姿勢は伝わってきた。だが、多言語表示の整備自体が国の「外客誘致法」という政策の枠組みに沿って動いている以上、限界はあるだろう。

また、行政側が推進する「多言語表示」の中に「ふりがな」が含まれていない点も、観光客中心の発想の証だと言える。日本語がある程度理解できる外国籍住民の姿はその視野に入っていない。その意味では、3.のアンケート調査で見られたような、「ふりがながあればだいたい理解できる」人が多いという結果は、新鮮みを増すように思える。

このふりがなの問題は、行政が多言語表示を考えるにあたって、「日本人は日本語、外国人は外国語」と分けする固定観念に囚われていることを物語っているとも言えよう。この点に関しては、国土交通省近畿運輸局や大阪府だけでなく、独自に案内表示のガイドラインを作成している大阪市にしても同様である。

5. おわりに

今回の三つの調査を通じて、大阪周辺の多言語表示の実態を知るとともに多言語表示の受信者側と発信者側双方の意見を聞くことができた。まちかど多言語表

示調査で実態を把握することにより、大阪周辺の多言語表示が六つの言語表記に分類されることがわかった。外国人へのアンケート調査からは、多くの外国人が表示を理解する際に、日本語のみの表示よりも日本語にふりがなのある表示の方が、さらには日本語と英語による2言語の表示の方が理解しやすいと思っていることやピクトグラムが彼らの表示の理解を大いに助けているということがわかった。また、現在の言語表示に十分に満足しているわけではなく、改善の必要性を感じている人も多いという結果も得られた。他方、行政・鉄道への聞き取り調査からは、案内表示ガイドラインを作成するなどして、それぞれが多言語表示の取り組みを行っていることを知ることができた。外客誘致法改正に伴い、日・英・ピクトグラム使用の努力義務が一部の対象とされる交通業者に対して課されるということ、日・英・中・朝の4言語表記を目標にし、少なくとも2言語表記を試みているということもこの調査から得られた情報である。特に、国土交通省・大阪府の取り組みが「外国人観光客」を対象にしたものであるということも明らかになった。

次に、これら多言語表示の問題点について考えてみたい。3.の外国人へのアンケート調査において、自分の理解しやすい言語によるアンケートがあればそれを選択していた人がいたように、自分の最も理解しやすい言語による表示があればそれにこしたことはない。それが理想とする表示の姿であろう。しかし、受信者である外国人も気付いていたように、それは現実的に不可能である。このことは、発信者側である行政や鉄道への聞き取り調査からも明らかになった。コストの問題、煩雑になって見にくくなるなどといった理由から単純に表示を多言語化すればいいとは言い切れない。とすれば、2.のまちかど多言語調査で見たように日・英の2言語表示、あるいは日・英・中・朝の4言語表示という現状のままでいいのだろうか。また、4.の聞き取り調査から得られたように、日・英・ピクトグラム表示の義務付けを行うだけでいいのだろうか。また、最終的に4言語表示を目標にしているのだろうか。確かに、コスト面を考えるとこれ以上言語を増やすことは容易なことではないだろう。情報をわかりやすく伝えるということを考えれば、4言語で限界かもしれない。しかし、ここに存在する問題を軽視してはならないと思う。それは、外国人は英語があれば理解できる、あるいは、観光客としての外国人だけを考えて、英語のほかに中国語・朝鮮語を準備しておけばよいと

されることの危険性である。確かに3.の外国人へのアンケート調査からは約92%の人が英語があれば理解できるという結果を得られた。あるいは、表示に使用する言語として母語以外の言語、つまり英語を挙げている人も多かった。しかし、実際には約90%の人が表示に一番理解しやすい言語の表示を希望し、約56%の人が英語を一番理解しやすい言語としていながらも約31%の人が朝鮮語・中国語・インドネシア語・スペイン語・トルコ語・フランス語・アラビア語などの言語を挙げているということは無視できないだろう。また、実際に英語のアンケートで答えた人は全体の約42%に過ぎなかったという点も見逃してはならないだろう。また、これはアンケート調査の問題点でもあるのだが、今回のアンケート調査では声を聞くことのできなかった外国籍住民もいるということ、つまり、日本社会との交流がうまくできていない外国籍住民の声を聞くことができなかったため、彼らにとって必要な言語表示について知ることができなかったということも考慮しなければならないだろう。

また、表示の発信者側への聞き取り調査より、外国籍住民よりも観光客としての外国人、「お客様」としての外国人を優先して言語表示を作成している点も指摘したい。これは、中長期滞在している外国人、つまり外国籍住民が日本社会の一員となっているということに対する認識の薄さを露呈する結果ではないだろうか。多言語表示は言語サービスの一つである。外国籍住民にも日本人住民と平等に情報を得る権利はあり、その権利の前にある壁が言語の問題である。その言語の問題をクリアして初めて外国籍住民は情報を得られるのである。彼らの存在は今日の日本社会でもはや無視できないものになってきている。その彼らに配慮した対策をとるべきであろう。

では、これらの問題の解決策としてどのような表示が提案できるのだろうか。今回の調査を通じて得られた情報をもとに考えられる現実的な表示の有り方を提案したい。一つ目にふりがなの活用を挙げたい。3.のアンケートで約半数以上の人がふりがなつきの日本語であれば理解できるとしている点、また、コストの問題を考えた場合、ふりがな付きであれば少なくとも翻訳者の問題を考える必要性がなくなるという点を考えると有効な策といえるのではないだろうか。また、ふりがなつきにすることによって、外国人だけではなく、漢字を習得していない子供や習得する機会を与えられなかった人たちにも理解でき、「ユニバーサル・デザ

イン」という観点からも利点があるだろう。ふりがなについては行政側も念頭においていなかったことが聞き取り調査から明らかになった。それだけに、今後の積極的な取り組みが期待される。

そして、二つ目に、ピクトグラムの活用を挙げたい。3. のアンケート調査で約98%の人がわかりやすいとしている点からその必要性を言うことは容易であろう。現に、4. の聞き取り調査においても多くのところでピクトグラムの有効性を把握し、活用しようとしていることがわかった。ピクトグラムは言語を介さないという点でどんな人でも情報を得られるという利点がある。ピクトグラムもまた外国人だけではなく子供や高齢者といった受信者の域を広げる役目を果たすものになるだろう。しかし、言語を介さないという利点の一方で、言語と比較すると意味の伝達という面で限界があることも否めない。そのため、全国で統一されたわかりやすいピクトグラムを考え、普及させる必要性がある。この点では、4. で述べたような国土交通省や交通エコロジー・モビリティ財団などの取り組みに期待したい。

以上、多言語表示について考察してきたが、これを少し敷衍して、日本の多言語社会のあるべき姿について考えてみたい。まちかど多言語表示調査や行政・鉄道への聞き取り調査などから、「日本人は日本語、外国人は外国語」と区別する考え方が根強く存在していることがわかった。それらを踏まえて考えるならば、ふりがな以外にも、日本語自体をわかりやすくした「やさしい日本語」の導入といった発想も重要なのではないだろうか。

「やさしい日本語」とは1995年の阪神淡路大震災時に多くの日本語に堪能ではない人が情報不足から非常に困難な状況に陥っていたということから、研究グループによって「災害時に使う外国人のための日本語案文—ラジオや掲示物などに使うやさしい日本語表現」として作成されたものである。一般のニュースや新聞はほとんどわからないが、日本語で日常的な簡単な会話ができ、ひらがなやカタカナで簡単な文が読める程度の日本語力がある人を想定して考案されている。また、日本における多文化共生の一つのあり方を考えれば、日本語母語話者と非母語話者が歩み寄って共に創り上げるという意味で、新庄・服部・西口（2005）において取り扱った「共生日本語」に通じるものになるだろう。

最後に今後の研究課題を取り上げたい。今回の外国人へのアンケート調査にお

いてできるだけ多くの言語に翻訳をしようと考えたが、翻訳協力者が見つからなかった言語も存在した。そのため実際に翻訳されていない言語での回答を希望する人もいた。その点を解決し、より多くの外国人の声を聞いてみるものが課題となる。また、外国籍住民の集住地域でのアンケート調査を試みたいと考えている。

今回の調査からも明らかになったように、現時点で、様々なレベルでの取り組みがなされていることは確かである。4. の聞き取り調査において、国土交通省近畿運輸局や大阪府が鉄道会社の個別の取り組みを調整するコーディネータの役割を担い始めていることもわかった。大阪市も案内表示の増設など独自の取り組みを行っている。また、外客誘致法の改正により、実際に鉄道会社などがどのような対応を見せるかも、注目していくべきだろう。その意味で、過渡期にある多言語表示の行方を追うためにも、今後も継続的な調査が必要だと言える。調査者らが行政機関に聞き取り調査を行った際、「ぜひ、情報を提供し合いたい」という言葉をもらったが、今後の調査を行政機関などの取り組みに、そして日本の多文化共生社会の実現に貢献できるものにしたいと考える。

謝辞：

本稿のまちかど多言語表示調査に情報を提供してくださった、多言語化現象研究会の庄司博史氏をはじめとする参加者の皆様、外国人へのアンケートの翻訳を協力してくださった9名の翻訳者の皆様、アンケートに答えてくださった121名の外国人の方々、行政・鉄道への聞き取り調査に協力してくださった国土交通省近畿運輸局、大阪府、大阪市、西日本旅客鉄道、近畿日本鉄道、阪急電鉄、京阪電気鉄道、阪神電気鉄道、南海電気鉄道各社の担当者の方々に深く御礼を申し上げたい。本稿が今後の「共生を拓く日本社会」のための様々な取り組みに役立つことができれば幸いである。

参考文献

- 河原俊昭編著 (2004) 『自治体の言語サービス—多言語社会への扉を開く—』 春風社
- 河原俊昭/山本忠行編 (2004) 『多言語社会がやってきた—世界の言語政策 Q&A—』 くろしお出版

- 河原俊昭 (2005) 「外国人への言語サービスとは何か」『日本語学』vol. 24 pp34-43
明治書院
- 金美善 (2005) 「言語景觀にみえる在日コリアンの言語使用」真田信治・生越直樹・
任榮哲 (編)『在日コリアンの言語相』pp. 195-224 和泉書院
- 金美善 (2005) 「多言語景觀からみた多言語情報の現状」口頭発表資料 多文化共
生フォーラム
- 新庄あいみ/服部圭子/西口光一(2005)「共生日本語空間としての地域日本語教
室一言語内共生を促進する新しい日本語活動とコーディネータの役割」津
田葵・真田信治 責任編集『言語の接触と混交ー共生を生きる日本社会』(大
阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」報告書 大阪
大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科) 大阪大学 21
世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」編集・発行、pp. 57-86
- 東京都(2003)『外国人にもわかりやすいまちの表記に関するガイド』
- 日比野純一 (2005) 「日本の多言語景觀」真田信治・庄司博史 (編)『事典 日
本の多言語社会』pp. 63-65 岩波書店
- 平野桂介 (1996) 「言語政策としての多言語サービス」『日本語学 vol. 15
pp. 65-72 明治書院
- ペーター・バックハウス (2005) 「日本の多言語景觀」真田信治・庄司博史 (編)
『事典 日本の多言語社会』pp. 53-56 岩波書店
- 法務省入国管理局編 (2005)『出入国管理 平成 17 年版』インパルスコーポ
レーション
- 松田陽子 (2005) 「日本の多言語景觀」真田信治・庄司博史 (編)『事典 日
本の多言語社会』pp. 245-248 岩波書店
- 羅曉勤/山下仁(2005)「外国籍住民が抱えている生活問題についてー大阪府下
の地方自治体に対するアンケート調査および外国籍住民に対するインタビ
ュー調査をもとにした考察」津田葵・真田信治 責任編集『言語の接触と混
交ー共生を生きる日本社会』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インター
フェイスの人文科学」報告書 大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・
言語文化研究科) 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの
人文科学」編集・発行、pp. 87-115

Backhaus, Peter(2005) *Signs of multilingualism in Tokyo-A Linguistic Landscape Approach* Dissertation zur Erlangung eines Doktors der Philosophie im Fachbereich Geisteswissenschaften der Universität Duisburg-Essen

参照したホームページ

移住労働者と連帯する全国ネットワーク

<http://www.jca.apc.org/migrant-net/Japanese/whatsnew/s-watch/index.html>

(最終アクセス:2006. 1. 31)

メディアが呈示する日本語教室

新庄あいみ・西口光一

1. はじめに
2. 地域日本語教育の展開
3. 調査対象資料と分類作業
 - 3.1 基礎資料
 - 3.2 調査対象資料
 - 3.3 調査対象資料の分類
4. 新聞記事の中の「日本語教室」
 - 4.1 「日本語教室」に通う「外国人」
 - 4.2 「日本語教室」と「外国人」
 - 4.3 「日本語教室」に参加する「ボランティア」
 - 4.4 「日本語教室」と「ボランティア」
 - 4.5 「日本語教室」で何が起こるか。
5. 「日本語教室」の役割・意義は何か
6. 「日本語教室」の風景
 - 6.1 「日本語教室」の周辺
 - 6.2 外国人物語や外国人が関係する事件等の中の「日本語教室」
 - 6.3 日本人が語る日本語教室体験
7. 考察
8. おわりに

1. はじめに

2004年の統計によると、日本における外国人登録者数は197万人¹を超え、全人口の1.55%を占める数となった。その数は前年に引き続き過去最高の数値を示している。また外国人登録者数を10年前の1994年と比較すると、61万9,736人(45.8%)の増加で、ここ10年のうちに日本社会の多言語・多文化化が急速に進んでいることを示している。

さまざまな理由で日本に在住するようになった外国人のうち、公的な形で日本語教育や生活適応指導が受けられるのは、難民等ごく一部の者に限られている。その他の外国人の大部分は何の正規の日本語教育を受けることもなく日本で暮らし始めることとなる。そして、「日本語ができない」ために、さまざまな生活上の不便が発生したり、一般日本人との間でトラブルが生じたり、公的な場所やサービスへのアクセスができなくなったりする。在住外国人のこのような状況を見て、かれらの日本語学習等を支援しようという趣旨で始まる活動が本稿の研究対象である地域の日本語学習支援活動である。こうした活動の場は、通常、地域の「日本語教室」と呼ばれ、その活動にかかわるボランティアな市民は一般に「日本語ボランティア」と呼ばれている。

山田(2003)は、異なる言語・文化的背景を持つ人々が一つの場に集い、そして互いに学びあうことによって、多文化共生社会に必要な志向・行動のための資質・能力を日本語教育は養成することが期待されると述べる。この視点の背景にあるのは、日本人と外国人の間に生じる力関係の固定化への危惧である。また、田中(1996)は、「日本語教室」に外国人の主体的な参加がないまま、外国人の日本語学習等を支援するという性格が持ち続けられるなら、そこに、社会の中で教える側、ケアする側の日本人、教えられる側、ケアされる側の外国人という力

¹ 本節に挙げた数字は2005年6月発表の入国管理局資料(<http://www.mo.j.go.jp>)を参照した。外国籍登録者を国籍別にみると、韓国・朝鮮籍607,419人、中国487,570人に続いてブラジル286,557人、フィリピン199,394人、ペルー55,750人である。また傾向としては、韓国・朝鮮籍は減少しているのに対し、中国籍、ブラジル籍、フィリピン籍、ペルー籍は年々増加し続けている。査証別では、主に日系人の査証である定住者は250,734人、日本人の配偶者は257,292人を数える。

関係を固定させてしまいやすいと述べている。そして、「日本語教室」のあり方として、日本人と外国人が共に教え学ぶという性格を持つ「コミュニケーションスペース」という対話の場を提案し、そのような場が共生の空間となり得ると指摘した。この「コミュニケーションスペース」を、西口（2004）は「在住外国人と市民ボランティアが交わり、作業や対話をし、相互に啓発し合う場」と広く捉え、地域の日本語教室は多文化共生社会におけるコミュニケーションの練習の場ではなく、地域の住民同士が交わる現実社会のコミュニケーションの場として機能する「日本語教室」について論じている。つまり、地域の日本語学習支援活動は「日本語教室」に留まらず、足元から実現される多文化共生社会へと日本社会を導いて行く、日本人市民と外国人市民が合同した市民活動に変わり得る性質を持つのである。

このように日本語教育学においては、従来から、地域の日本語学習支援活動がクリティカルに（冷厳かつ批判的に）議論されているが、新聞やテレビなどの一般のメディアでは、こうした活動はどのように紹介されているのであろうか。一般のメディアは、その名の通り一般の人々が当該の対象を知るための重要なメディアあるいは最初のメディアである。それゆえ、一般の人々の当該の対象、本研究では日本語学習支援活動に対する当初のイメージは、一般のメディアによる対象の表象に大きく依存するものと考えられる。メディアが発信する地域の日本語学習支援活動の様態は、同活動の今後のあり方にも大きく影響を与えるものと予想されるところから、それを客観的に捉えておくことは重要であろう。しかし、そうした研究はこれまで行われていない。そこで、本研究では、広く一般の人々が情報を入手するメディアの一つである新聞を調査対象として、そこに描かれている「日本語教室」の姿を明らかにする。

2. 地域日本語教育の展開

外国籍住民の増加に伴い、1980年代から90年代にかけて日本語の学習機会を持たない外国人の日本語学習支援という趣旨で、日本語教室が全国各地で盛んに開設された。教室の運営主体は地方公共団体や国際交流協会から市民ボランティアによる運営までさまざまである。当初は、学習指導形態として「教師対学習者集団」という「教室型」タイプが採用されるケースが多く、ボランティアに日本

語教育能力試験に合格している等の基準を設ける教室も少なからずあった。しかし活動の広まりや地域性への対応から、一般の主婦や会社員等が自主的に集まり、マンツーマンや小グループ形態で生活のために必要な日本語を教える等、個々の状況に合わせた日本語学習支援活動が各地で行われるようになった。現在では、後者の形が主流になっている。また、こうした活動で培った経験の共有や日本語指導方法等の情報交換等を目的として、日本語教室のネットワーク化²も進んだ。公的な日本語学習保障のない外国人の支援を趣旨として始まった地域の日本語学習支援活動は、活動が多様化するのにつれ、経験を重ねた市民ボランティアたちが、活動全般に関する不安や悩みを共有するようになったことから、より大きな活動のビジョンを形成するために、各活動を有機的に繋げようとする方向へと展開した。やがて、地域の日本語学習支援活動を一層展開するための能力や資質を持ったコーディネータを求める声が高まり³、文化庁は、2001年度からの3年間にわたり「地域日本語活動の充実事業」の中核として「地域日本語教育指導員（コーディネータ）研修」を実施した。同事業は、社団法人国際日本語普及協会（略して、AJALT）に委託され、年間約30箇所の地域でコーディネータ研修会が開催された。そして研修を受け、日本語学習支援活動に必要な知識等を身につけたボランティアが各地で育つとともに、ネットワーク化も一層進んだことから、現在では地域日本語教育⁴への行政の支援体制が一応整備され、活動の様態も「市民ボランティア主導の市民ボランティアによる活動」という形で一定の様態が共有されるようになったといえる。地域日本語教育は、ある種の安定期に入ったといえる。

本研究では、一般のメディアで表象される地域の日本語学習支援活動を捉える

² ネットワーク化により地域の日本語学習支援活動が円滑に進めることができる領域として、情報交換、研修、交流の場、広報の4点が挙げられている（文化庁 編（2004）：pp. 37-40）。

³ 文化庁が1994年度から2000年度までの7年の間に全国8カ所の地域において実施した地域日本語教育推進事業の報告書には、多くの地域でコーディネータの必要性が要望や提言として出されている。

⁴ 「地域日本語教育」という用語は、具体的な日本語教室や日本語学習支援の活動を指すのではなく、社会が対応を迫られている課題を指す言葉として使用している。

という趣旨から、2003 年 1 月から 2005 年 12 月までの最近 3 年間の新聞記事を研究対象とした。この時期は「地域日本語教育指導員研修」の最終年度にあたり、先に述べたように、行政の支援体制が整備され、具体的な支援活動に一定の形が形成されてきた時期である。

3 調査対象資料と分類作業

3.1 基礎資料

2003 年 1 月から 2005 年 12 月までの 3 年間の全国紙 5 紙（朝日・読売・毎日・産経・日経）を調査対象とした。具体的な作業に当たっては、ネット上で利用可能になっている新聞検索データベース⁵を用いた。そして、地域の日本語学習支援活動に関する記事を有効に検索するために、「外国人」、「日本語教室」、「ボランティア」という 3 つのキーワードを設定した。キーワード毎の総検索数及び各紙の検索結果は表 1 の通りである。

表 1. 各キーワードの検索結果: 記事の全数

	合計	朝日	読売	毎日	産経	日経
外国人	39370	10726	11413	10311	3374	3546
日本語教室	369	132	102	119	8	8
ボランティア	59868	20059	20806	17106	1536	1133

いわゆる「日本語教室」とよばれる地域の日本語学習支援活動は、在住外国人の日本語学習等を支援しようという趣旨で始まる活動である。その多くはボランティアの形態を取るが、ボランティアが必須条件である活動ではない。しかし、「日本語教室」を語るとき、「外国人」は必須のキーワードとなってくる。ここで図 1 の全体集合をみると、本研究が分析対象とする「日本語教室」のうち「外国人」を含む記事は d と g が該当する。このような視点から、d と g を取り出すために、以下の 2 種類の方法を用いて表 1 で検索された新聞記事を再度検索した。

⁵ 具体的にはniftyの新聞検索データベースを利用した。

検索1：「外国人」、「日本語教室」、「ボランティア」という3つのキーワードが全て含まれる記事の検索（図1のg）。

検索2：「外国人」と「日本語教室」という2つのキーワードは含むが「ボランティア」は含まない記事の検索（図1のd）。

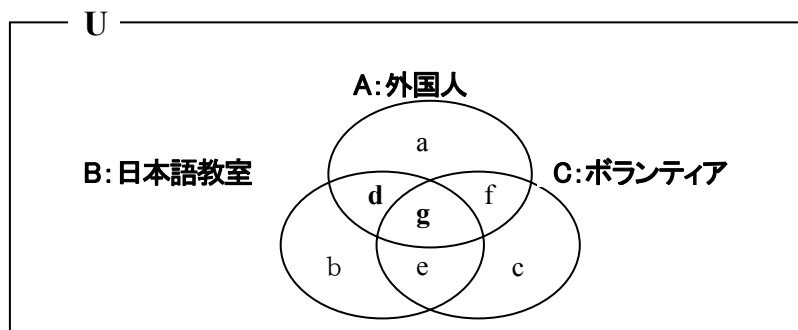


図1. 外国人、日本語教室、ボランティアのカテゴリ集合

以上の2つの検索の部分集合の結果は、表2に示す通りである。

表2. 検索1と検索2の検索結果

	合計	朝日	読売	毎日	産経	日経
検索1: 外国人 and 日本語教室 and ボランティア	127	45	37	44	0	1
検索2: 外国人 and 日本語教室 not ボランティア	124	40	39	42	2	1
合計: 検索1 + 検索2	251	85	76	86	2	2

なお、検索1と検索2の本研究の中心的なキーワードとなる「日本語教室」の周辺記事(図1のbならびe)も念のために検索した。まずbは、「日本語教室」を含み、「外国人」と「ボランティア」を含まない記事である。その結果は日経の4件のみであり、内容は中国帰国者に関する記事等であった。次にeは、「日本語教

室」と「ボランティア」を含み、「外国人」を含まない記事である。その結果は33件⁶検索された。その大部分は、「日本語教室」についての記事ではなく、具体的な一人物の記事の中で「日本語教室」と「ボランティア」が登場するものと、外国において「ボランティア」として「日本語教室」を開いたというような記事等であった。

一方、「日本語教室」関係の記事の出現件数に、漸増傾向や漸減傾向があるかどうかを確認するために、半期（6ヶ月）ごとの記事の件数を調べた。結果は以下の通りである。

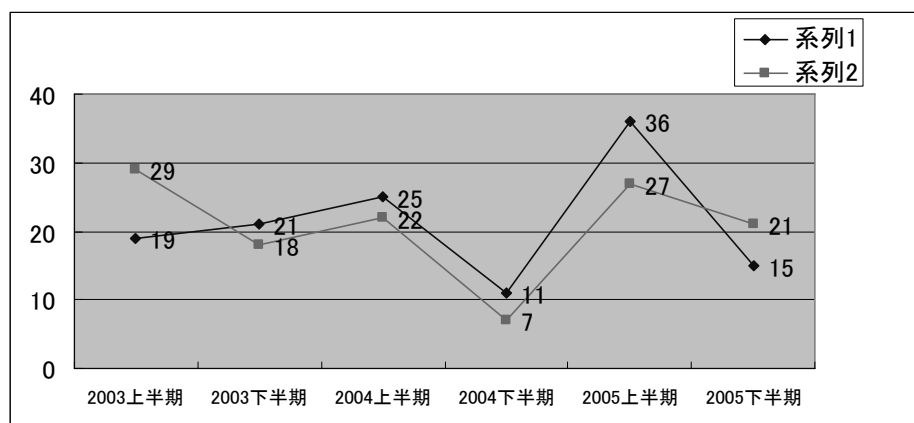


図2. 「日本語教室」に関する記事の傾向⁷

この件数では、2004年後半で該当の記事が少なく、2005年前半で該当の記事が多いことが示されているが、一貫した漸増・漸減などの傾向は見られない。

3.2 調査対象資料

251件の基礎資料を概観したところ、学校等で行われている児童・生徒を対象

⁶ eの内訳は朝日12件、読売10件、毎日9件、産経0件、日経2件である。

⁷ 系列1は検索1の結果を、系列2は検索2の結果を示す。

とした日本語教室について書かれている記事が多数あった。またその一方で、営利目的で行われている日本語学校を日本語教室と呼んだ記述が若干あることが明らかになった。そこでこうした記事を資料から除外することにした。その結果、成人を対象とする日本語教室で、営利目的ではないものについて書かれた記事144件を得た。これら144件の「日本語教室」⁸の記事を概観すると、「日本語教室」を4つのタイプに分類することができた。

1. 「**個人教室**」：一人のボランティアが教室を開いている。
2. 「**ボランティア教室**」：市民ボランティアが〇〇会を結成して定期的に教室を開いている（1対1あるいは小グループスタイル）。
3. 「**公的教室**」：自治体や国際交流協会が主催している（教師/教室スタイル）。
4. 「**外国人による教室**」：外国人が主催/主導。

こうしたカテゴリーにより記事を分類すると、下の表3のようになる。

表3. タイプ別「日本語教室」の件数

	合計	「個人教室」	「ボランティア教室」	「公的教室」	「外国人による教室」	不明
件数	144	2	87	46	1	8

この4つのタイプのうち、複数の市民ボランティアが一つの活動として外国人の日本語学習を支援していると考えられる2と3の「日本語教室」を含む記事を本研究では主に扱うが、なかでも2の市民ボランティアによる「日本語教室」が主な分析対象となる。それは2の「日本語教室」こそが、地域住民による（外国籍住民を含めた）地域住民のための日本語学習支援活動であると考えられるからである。

⁸ 本研究における「日本語教室」には、日本語読み書き教室や識字教室／識字学級を含む。

3.3 調査対象資料の分類

本研究では、前述のように2の「ボランティア教室」を主な分析対象とし、補足的に3の「公的教室」を扱うが、それについて検索された記事を、分析の便宜のために、以下のように2分類した。

- (1) まさに日本語教室がテーマになっている記事
- (2) 日本語教室は第一のテーマではないが関連で記述されている記事

この2分類と先の「ボランティア教室」と「公的教室」をかけ合わせると表4のようなマトリックスを得ることができる。本研究ではボランティアによる地域日本語学習支援活動を主な研究対象とするので、「ア」と「イ」の記事が主たる調査対象となる。

表4. 「ボランティア教室」と「公的教室」の記事分類

	ボランティア教室	公的教室
日本語教室を中心とした記事	ア	ウ
日本語教室が中心ではない記事	イ	エ

144件の記事のうちの残るものは、以下のように分類することができた。

- オ. 外国人を主人公とした物語や外国人関係の事件等で日本語教室が言及されている記事
- カ. 日本人が語る日本語教室体験についての記事（主に投書）
- キ. 募集記事
- ク. 「個人教室」及び「外国人による教室」⁹についての記事

⁹ クについて、1. 「個人教室」に該当する記事は、朝日新聞の（「教会の国際社会 悩みも相談（つながる 熊本とアジア：3）／熊本2005.01.05 西部地方版／熊本 31頁 熊本版」、読売新聞の（「ぐんま言葉の風景」（5）第2の日本語、楽シインネー（連載）＝群馬 2003.01.08 東京朝刊 32頁」及び4. 「外国人が始めた教室」に

このような分類に基づいて、各種の記事と出現件数を調べた結果は、表5のようになる。表を見ればわかるように、朝日、読売、毎日の3紙の間では記事の種類分布は概ね類似している。

表 5. 分類した記事総数

	合計	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
朝日	51	15	14	0	16	0	2	3	1
読売	51	15	10	3	16	1	1	4	1
毎日	41	13	12	3	6	0	1	5	1
産経	1	0	0	0	0	1	0	0	0
日経	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	144	43	36	6	38	2	4	12	3

以上で、本研究で扱う調査対象資料の確定作業を終えた。次節からは資料の分析に入る。

4. 新聞記事の中の「日本語教室」

本節では「ア」及び「イ」のデータ計79件の新聞記事を対象として「日本語教室」の諸側面がどのように描かれているかについて明らかにしたい。

4.1 「日本語教室」に通う「外国人」

新聞に描かれる外国人は「地域に在住する外国人」や単に「外国人」と称される他に、特定の集合を示す二つのタイプの「外国人」が顕著に現れる。一つは、いわゆる外国人労働者であり、もう一つは日本人男性の配偶者である。

まず、前者について言うと、「外国人」は「労働者」という属性で取り上げられることが多い。例えば「移住労働者」(3件)、「外国人労働者」(2件)、「出稼ぎ労働者」(2件)、「単純労働者」(2件)、「国境を越える労働者」(1件)、「南米から

該当する記事は、毎日新聞の「団地に日本語教室 裾野の外国人住民、日常会話や漢字学ぶ＝静岡」2004.04.22 東京朝刊 32頁)である。

の労働者」(1件)があり、他にも「低賃金の外国人」(1件)、「就労目的で来る外国人」(1件)といった労働者であることを示す言葉が使用されている。また「技術習得のために福岡の企業で働く外国人」、「自動車部品工場で働いているブラジル人」等のように、仕事内容を説明する文などもみられた。そのような言及のある記事は、79件中の18件にのぼる。

次に、後者の日本人の配偶者について書かれている記事は23件である。そのうち具体的に、「外国人花嫁」(2件)、「外国人の母親」(2件)、「外国人妻」(1件)、「外国人ママ」(1件)、「嫁いできた外国人」(1件)等のように表現されているケースもみられた。これらの表現が一般的に熟しているか否かは別として、少なくとも公的な性質を有する新聞メディアとしては不用意に頻繁に使われている印象を受ける。ちなみに夫が外国人で妻が日本人のケースは1件のみであった。

では、上記のような属性を持った外国人たちはどのように記事のなかで登場するのであろうか。それは共通して何らかの「悩み」や「苦労を背負った/苦労を経験した」人として描かれる。記事の中では具体的に「言葉の壁」(15件)という表現を用いて日本人との間のコミュニケーションが困難である状況が描かれるほか、取材して聞いた話や外国人の声を引用したエピソードを交えて外国人の「厳しい背景」や「困難な状況」を紹介している。次に挙げるのは、その一例である。

県の調べでは、県内に住む外国人は、昨年12月末現在で1万2779人。中国人が最も多く、フィリピン人、韓国・朝鮮人と合わせて全体の8割近くを占める。過半数は女性。お見合いで「国際結婚」して来日したものの、日本語が出来ない、という人も多い。ボランティアらの話によると、夫と話すのに電子辞書を使っている女性もいるという。また男性では、安い賃金で単純労働についている人が少なくない。(朝日「(まなぶ学ぶ)教えて知る、日本語 ボランティア先生頑張る 育成講座様々／福島県」2005.10.20 東京地方版／福島 26頁)

愛知県豊橋市の県営岩田住宅では、全650戸の4割が日系ブラジル人世帯だ。垣内オズワルドさん(50)は「母国での住宅資金を稼ぎに来たが、戻っても仕事がないのでしばらく日本にいたい」という。(朝日「(人の時代に向けて:5 未来を選ぶ)重み増す外国人労働 受容へ問われる覚悟」2005.08.21 東京朝刊 6頁)

「日本人と結婚して来日した」、「日本語や日本文化がわからない」、「安い賃金で働いている」、「母国へ帰りたくても帰れない」など、「日本語教室」の記事の中では、その登場人物の外国人たちの背景や属性は、かれらが抱えている問題が焦点化されて描かれる。

「日本語教室」に参加する外国人の姿をまとめると、外国人はブルーカラーの労働者や日本人男性の配偶者であり、かつ、何らかの問題を抱えている人たちと描かれていることがわかる。しかしながら、実際の教室の状況をみると、「日本語教室」に参加する外国人はさまざまな背景を持った人たちである。筆者らがこれまで関わったり、観察した「日本語教室」の参加者を振り返っても、そこにはブルーカラーの労働者も、ホワイトカラーの労働者も、また留学生や留学生の家族、日本人男性の配偶者だけでなく日本人女性の配偶者の顔があった。いわゆる「外国人労働者」や「外国人花嫁」といわれる人であっても、国では教師であったり、会社員であったりした。「日本語教室」に参加する外国人はいつも決まった属性を持つとは限らない。加えて、「日本語教室」に参加する全ての外国人が苦しさに耐えてきた人ばかりではない。さまざまな背景を持った外国人たちが集う「日本語教室」の様子は、新聞から窺うことのできない一側面である。

4.2 「日本語教室」と「外国人」

次に、外国人の「日本語教室」での様子がどのように描かれるのかという点に注目する。次に挙げるのは、山形で生活する日本人男性の配偶者「五十嵐さん」を紹介する記事である。

91年に国際結婚で韓国から来た五十嵐貞心(チョンシム)さん(46)＝上市市仙石＝は、上山の教室開設時の受講生だ。国際結婚への偏見と言葉の壁から周囲になじめず、孤独感に耐えていたころ。月3回の授業や、スタッフと受講者が家族ぐるみで参加する花見や芋煮会など、教室内外の交流が支えだった。(毎日「山形戦後60年：第1部 足元からの平和・特別編／下 十数年の手探りの活動／山形」2005.04.08 地方版／山形 21頁)

韓国出身の五十嵐さんが日本で生活するなかで、孤独感に耐えていたとき、「日

本語教室」が支えであったという。このように、五十嵐さんの辛い経験が語られながら、五十嵐さんの「居場所」としての「日本語教室」が登場する。このような外国人の「居場所」としての「日本語教室」は他の記事からも垣間見ることができる。例えば、東京で3年暮らしたが友達が一人もできなかったというタイ出身の女性は、「日本語教室で気持ちの分り合える外国人と知り合えて安心した」と語る（朝日「脱孤立「日本語から」NPOが教室（街・ふくおか）」2003. 11. 22 西部朝刊 35 頁）。この女性にとっての「日本語教室」もまた、孤独から脱出するきっかけを与えてくれた場所である。

これらの記事の「日本語教室」に参加する外国人においては、「日本語教室」に参加することを起点として、不安や孤独を感じていた日常に明るい光がさしている。日本で苦勞をしていない外国人が週1回の日本語教室を貴重な日本人との交流の機会として楽しんでいるという話や、日本語教室に参加することで悲しい思いをしたという外国人の話は一度も記事に登場していない。

4.3 「日本語教室」に参加する「ボランティア」

「日本語教室」に参加する「ボランティア」はどのような属性や背景を持つ者として描かれるのであろうか。全ての記事に共通して、ボランティアとして日本人が登場する。今回の分析対象となった記事を見るかぎり、外国人が日本人のボランティアと一緒に活動している教室は1件¹⁰しかない。新聞記事では、日本人を「ボランティア」（17件）と呼ぶ他に、「先生」（8件）、「講師」（6件）、「教師」（2件）、「日本語ボランティア」（7件）、「ボランティア講師」（4件）、「ボランティア先生」（1件）、「ボランティア指導員」（1件）、「ボランティア家庭教師」（1件）といった表現で呼ばれている。つまり、「ボランティア」は「近所に住む〇〇さん」以外に、ボランティアで日本語を教える「先生」あるいは「講師」という属性を伴って紹介される。また社会的な属性としては、主婦、学生、会社員、（元）教師などと書かれ、外国人の場合のように「労働者」と呼ばれるケースは

¹⁰ 4.2 で取り上げた韓国出身の五十嵐さんが、ボランティアで日本語指導を始めたことが紹介されている（毎日「リフレッシュ」ボランティアで日本語を指導・五十嵐貞心さん（44）/山形」2003. 10. 12 地方版/山形 23 頁）。

ない。

また「ボランティア」の経験が紹介されるときの特徴としては、その人の海外経験、外国や外国人が関係したエピソードと一緒に語られることが多い。

リーダーの長沼さんは、大学の英語学科を卒業後、商社に勤め、結婚退職してから近所で英語を教え始めた。さまざまな国際交流団体に属し、外国人の友人も多い。
(読売「[ほのぼの@タウン]2月26日=多摩」2004.02.26 東京朝刊 33 頁)

「ボランティア」の学歴や職業等を紹介している例は多くはないが、紹介されるときはいずれも外国に関するエピソードが併せて取り上げられていた。また、この「ボランティア」の属性と同じく、「ボランティア」を始めるにあたっての動機が紹介される記事も多くはない。しかし、紹介される場合は、その大部分が、「日本語を教えたい」「外国人と友達になりたい」「外国人のために何かしたい」というような素朴な参加動機のみ紹介している。次の例のように、市民運動の経験が「日本語教室」の活動に結びついたと書かれた記事は、この一例のみである。

中学校の教師だった養父さんが識字運動にかかわるようになったのは、福岡県教職員組合の役員をしていたころ、部落問題に出合ったのがきっかけでした。そうして、運動が縁となって一九七一年、大阪に移り、大阪市内の中学校で教べんを執りながら、識字学校で教えます。やがてフィリピン人母娘と出会い、強制退去をめぐる裁判の支援に携わるなかで、外国人を対象に、日本語の読み書き教室を開く必要性を感じるようになる。それが、九一年の「旭区日本語読み書き教室」(現・旭区にほんご教室)開設へとつながっていきます。(読売「[日時計]人と人 言葉が結ぶ 識字運動草分けの養父さんが本」2004.08.02 大阪朝刊 26 頁)。

4.4 「日本語教室」と「ボランティア」

さまざまな動機から参加する「日本語教室」のなかで、「ボランティア」の様子は具体的にどのように紙面に紹介されるのであろうか。

日本語教室の会場となっている同市上田公民館では、外国人1～3人ごとに日本人1人が付き、広い部屋のあちこちで熱心に指導している。主婦が中心で日本語教育の専門家ではないが、指導の中で信頼関係を築いている。互いの家庭でパーティーを開いたり、「子どもが学校でもらう『お知らせ』が読めずに困っている」「役所に出す書類を書くのを手伝って」といった悩みを聞くなど、生活に密着したサポートを続ける。(毎日「みんな集まれ:日本語交流室「じよい」 外国人の相談相手にも／岩手」2005.03.29 地方版／岩手 22 頁)

集まったボランティアの講師はすべて素人。薮井さんは「外国人を前に萎縮(いしゆく)してしまったり、教科書通り進まなかったりと、つまずいてばかりだった」と苦笑する。しかし、「一方通行の教え方では上達しない」と、設立当初から導入したマンツーマンの会話形式が、次第に効果を発揮し始めた。双方が完全に納得できるまでコミュニケーションをとることで、生徒の語学力は向上。ボランティアたちも「ともに学ぶ」楽しさを覚えていった。(毎日「共生ネットワーク:市岡国際教育協会日本語教室(港区)／大阪」2005.06.23 地方版／大阪 25 頁)

上に挙げた記事から示されるように、「ボランティア」の人たちは日本語の教え方について悩みながら、教科書等を使って外国人に日本語を「指導」している。外国人とは教室の外にも付き合いが広がっている場合も見受けられる。また紙面上に描かれた教室の様子からは、日本語を教えることに熱心で、そのことに楽しさや喜びを感じている「ボランティア」の姿が多くの記事において読み取れる。このように、熱心に日本語を教えている「ボランティア」は「日本語教室」に参加した感想を次のように語る。

教える一人、日野市の主婦杉下セイ子さん(58)は「日本語を教えながら外国の方々から、それぞれの国の伝統行事などを教えてもらえるので、テレビや新聞のニュースとは一味違う身近な外国を感じられる。自分の世界が広がりました」と笑顔を見せる。(読売「[ほのぼの@タウン]2月26日＝多摩」2004.02.26 東京朝刊 33 頁)

「オアシス」の世話係を務める堺孝子さん(57)は「最初は、日本になじめず暗い顔をしていた人が、来るたびに明るくなっていくのが喜び」とやりがい話す。(読売「虹の会」日本語教室、盆踊りやアジア各国の文化紹介＝奈良」2005.07.07 大阪朝刊 34 頁)

新聞の中の「日本語教室」に参加する「ボランティア」は、日本語教育の専門家ではないものの、目の前にいる外国人に試行錯誤しながら熱心に日本語を教えている。そして、外国人に日本語を教えることや参加する外国人を通して生の外国を感じることにやりがいや楽しさを感じている。

このように、「日本語教室」に参加することで喜びを感じている「ボランティア」の姿は、苦しい経験を経てきた外国人が「日本語教室」に参加することで喜びを得た姿と並行して描かれている。

4.5 「日本語教室」で何が起こるか。

次に、「外国人」と「ボランティア」の「日本語教室」の一コマを、新聞はどのように描くのだろうか。次の記事は、外国人の背景が書かれるとともに、「日本語教室」について語るフィリピン出身の女性の声を引用した記事である。

フィリピン出身の女性(37)は4歳の女の子を隣に、10カ月の男の子を抱いて参加。2歳の子は日本人の夫に預けてきた。年間31回の授業のうち休んだのは2回だけだ。外国人が交流できる教会のような場所は近くにはなく、ふだんは家族以外と話す機会もあまりない。教室では、同じ国の人にも会えるのがうれしいという。「日本語の勉強が好き。うちの中がすごく忙しい。でも2時間だから行きます。だんなさんが言った。すごく日本語が上手になった」(朝日「日本語教室よりどころ 増穂町で外国籍住民対象に3年目／山梨」2004.04.06 東京地方版／山梨 31 頁)

女性は、普段の日常生活では家族以外の人との接点が少ないという。しかし「日本語教室」の時間だけは違う、「日本語教室」では、女性は日本人だけではなく同じ国の人にも会うことができる。また日本語が好きになること、夫に日本語が上手になったと言われたことが、夫と日本語で話をする 것과循環している

様子が窺える。週に2時間しかない「日本語教室」は、日本で生活するなかで、孤独を感じていた外国人女性が他人と繋がりを持つ場となり、女性の心のよりどころとなった場所として描かれるのである。一方で、「ボランティア」の日常のコマとしての「日本語教室」はどのように呈示されるのであろうか。

「これは何ですか」教材の絵を指さし、優しい笑顔で、外国人に話しかける。自宅を開放して日本語教室を主宰。話題は旅行やファッションにも及び、授業というより、友人同士のおしゃべりを楽しんでいるようだ。来日2年目のチェコ人女性は、「望んでいた先生に出会った感じです」と満足そうだ。外国との出会いは27年前にさかのぼる。知人宅のパーティーで外国人に振る舞った日本料理が好評だった。「外国語を話せなくても、気持ちは十分に通じ合う」と実感した。以後、外国人との交流の輪に積極的に加わるようになり、身近なボランティアとして日本語指導に取り組むようになった。会を発足させたのは1995年7月。県国際交流協会との共催で、日本語を教える活動を始めた。2002年4月に同協会とは離れて独自に活動を開始。知人らを通じて、日本語を教える会員や受講生も増えた。教室の多くは会員の自宅のため、家庭的な雰囲気での授業には定評がある。会全体での受講生数は年間80～90人に上り、受講生の出身国も世界30か国近くに達した。中でも、増穂町に住んでいた日系ペルー人女性との思い出が印象に残る。「地元の教師を紹介する」と言っても、甲府市の自宅まで4年間通い続けてくれた。最後の授業では、「日本の文化や日本人の考え方がよく理解出来た」という内容の作文を書いてくれた。「講義を通じて、心を通わせることが出来た時の充実感は最高です」と笑顔で語った。(読売「[支える・地域から] 山梨日本語ボランティアの会会長 望月敏子さん75＝山梨」2005.03.29 東京朝刊 33頁)

外国人との交流に積極的であった望月さんが「日本語教室」を始めたのは10年前に遡る。「外国語を話せなくても、気持ちは十分に通じ合う」と感じていた望月さんは、日本語ボランティアをするなかで出会った印象的な日系ペルー人の女性の話をする。その女性が書いたという「日本の文化や日本人の考え方がよく理解できた」という言葉と、望月さんの「講義を通じて、心を通わせることが出来た時の充実感は最高です」という言葉からは「日本語教室」で起こる

コミュニケーションが強調される。女性が日本の文化や日本人の考え方を理解することができたことは、日本人である望月さんを理解したことでもある。それは望月さんが「心を通い合わせた」ときの例として引用された外国人の声である。望月さんの語る気持ちが十分に伝わりあった「日本語教室」での経験は、「日本語教室」に参加する外国人と日本人との間に生じたエピソードとして描かれる。同様に、「日本語教室」で起こるコミュニケーションは言葉を変えて何度も語られる。「言語はコミュニケーションのほんの一部。悲しいことやうれしいことを共有する人間交流こそが大切」（朝日「国際交流に言語は一部」 ボランティア講座開講／奈良県 2005. 08. 29 大阪地方版／奈良 28 頁）などである。

外国人とボランティアの日常の一コマとして描かれる「日本語教室」は、かれらにとって印象深い特別な時間として描かれる。そこには、「日本語教室」に参加することで日本語が嫌いになった外国人は登場しない。日本の文化や習慣についてとうとうと話をするボランティアに戸惑う外国人の姿もない。「外国人が同じ出身国の者と出会える場、外国人が日本人の家族との会話に必要な日本語を身につける場」、「外国人と言葉を越えたコミュニケーションをする場」など、「日本語教室」の数時間は、参加する外国人にとっても、またボランティアにとっても喜びと希望に溢れた時間として描かれるのである。

5. 「日本語教室」の役割・意義は何か

在住外国人の日本語学習等を支援しようという趣旨で始まる「日本語教室」は、どのような役割や意義があるのだろうか。残念ながら、「日本語教室」を取り上げる記事の多くは、個人のエピソードやボランティア募集の記事で文章が完結する記事が多く、その役割や意義にまで言及した記事は少ない。そのなかで、次に示すのは、外国人の参加者が語る「日本語教室」の役割である。

一昨年7月に来日した中国残留孤児2世の本田利昭さん(41)、春佳さん(39)夫妻は「最初は全く日本語が分からず、言いたいことが言えないのでノイローゼになりそうだった。有料の日本語学校に行くほど余裕はないから、大変助かる」。(毎日「[Y

OU館]手作り日本語教室、好調――福岡・香椎浜小「よるともの会」 2003.07.17 西部夕刊 1頁)

「日本語教室」の中には、外国人の参加者に場所代やコピー代等に充てる費用のためお金を請求したり、日本人のボランティアも外国人もお金を払ったりする形式の「日本語教室」もあるが、基本的に無料で活動しているところが多い。この記事が示すように、経済的な理由で日本語を学びたくても学ぶことができない人にとってはボランティアが担う「日本語教室」はありがたい存在のようである。ボランティア運営のため、「無料」であるという点が「日本語教室」の利点といえるが、ボランティアの人たちに日本語学習支援を含めた外国人の支援を任せたりでいいのかという問題を提起した記事もみられた(10件)。次に挙げる記事は、「日本語教室」を地域全体の中で考え、地域の中での「日本語教室」の役割や意義について問いかける記事である。

厚木市で認可保育園と学童保育室を運営しているNPO法人「ViVi」(又木京子理事長)は、外国人を対象に開いていた日本語教室を発展させ、2月から新たにNPO法人「多文化とまちセンター」(設立準備担当・秋間恵美子さん)を発足させる。多様な国の人が安心して共に暮らせる街づくりなどを目指しており、秋間さんは「子育て支援など生活一般でのさまざまな課題解決のための拠点にしたい」と意気込んでいる。日本語教室は昨年4月、言葉もよく分からないまま、異国での子育てに不安を持つ外国人の母親から「子ども連れでも日本語の勉強をしたい」という希望が寄せられたため、ベビーベッドやおもちゃを置いて開設した。この中で、外国人は公営住宅の申し込みや保育園の入園手続きなど“書類・申請社会”の日本では「初歩」の段階からつまづいていることや、学習環境の不備から中学校卒業後の進学をあきらめたベトナム籍の子どもがいるなど、外国人への支援が十分機能していない実態を痛感した。このため、秋間さんは子育て支援はもとより、居場所や仲間作り、通訳・翻訳システム作り、行政窓口とのパイプ役などの必要性を強く感じ、今回、同センターを設立することにした。秋間さんは「行政の支援は、欲しい人に届いていない状態。問題提起をしながら、地域での多文化共生が言われる今、この活動を広げたい」と話した。2月1日午後1時半から、同市水引2のViViで設立総会を開く。活動安定や交流拡大な

どのために会員(個人・入会金2000円、年会費3000円)や賛助会員(同・同、1口1000円)などを募集している。(毎日「外国人の生活、すべて応援——来月、厚木にNPOともだちセンター／神奈川」2004.01.25 地方版／神奈川 25 頁)

秋間さんは「日本語教室」で出会った外国人が抱える困難から、「行政の支援は、欲しい人に届いていない状態。問題提起をしながら、地域での多文化共生が言われる今、この活動を広げたい」と考えたという。そこには、「日本語教室」での経験を通して知った外国人の抱える問題を社会問題の一つとして捉え、その解決のために活動を広げたいと考える秋間さんの様子が窺える。

これまでに示してきたように、「日本語教室」は外国人の日本語学習だけでなく、居場所となり、よりどころであり、ボランティアがやりがいを感じる場所となっていたが、それらはいずれも「日本語教室」の中で起こった出来事の紹介に留まっていた。しかしながら秋間さんのように、ボランティアの経験を通して感じた問題を地域に、そして日本社会に提起しようという姿が描かれることもある。この秋間さんの声は、読者に問題の所在は何かという点を問いかけているようにもみえる。

そもそも秋間さんが問題提起する要因となったのは、「日本語教室」で知り得た外国人の状況からであるが、この視点は他の「ボランティア」の体験としても紹介されている。

4年前、ボランティアで設立。月6回のレッスンでは、日常生活での会話を重点的に行う。家庭や就職の悩みを授業後に打ち明ける生徒もあり、教室を通して在住外国人の苦労も見えてくるという。日本で暮らす外国人には「制度・心・言葉」の3つの壁があるといい、「言葉を教えるだけでなく『心の壁』も何とか取り払ってあげられたら」と話す。(読売「[人ひと近江]日本語教室を主宰、金網蓉子さん 在住外国人の手助けを＝滋賀」2004.02.04 大阪朝刊 26 頁)

教室は中国残留孤児とその家族が対象だった。「友だちができない」「アルバイトでもいいから働きたいのに、面接さえ受けられない」——。日本語は話せても、業務日誌が書けず、退職した人もいる。「外国人の置かれている状況にショックを受けた。日

本語を教えることで少しでも助けになれば」と語る。(毎日「ひと・人・交差点:伊丹ユネスコ協会日本語教室講師・永瀬美佐子さん／兵庫」2005.02.27 地方版／兵庫 28頁)

「ボランティア」の目を通して外国人に関する問題が語られるときには、その問題に気が付いた「ボランティア」がかれらを支援したいと考えるようになったというエピソードが付け加えられる。そこに見えてくる日本人と外国人の関係性は、「支援する人(日本人) / 支援される人(外国人)」という構図である。そしてこの関係性は交替することなく新聞で用いられ、「日本語教室」の日本社会における役割として読者の目に映るのである。もちろん、多くの読者に日本社会における外国人の現実と向き合わせる点は「日本語教室」が新聞に描かれることによってもたらされる「日本語教室」の役割と意義の一つともいえよう。しかしながら、そういった副次的な役割とともに、決まって記事に描かれるのは外国人を支援する「日本語教室」である。メディアに描かれる「日本語教室」の役割と意義は外国人支援という点が強調されるのである。

6 「日本語教室」の風景

最後に、「日本語教室」が主な話題の一側面として紹介されるとき、どのような描かれ方をするのかについてみていきたい。

6.1 「日本語教室」の周辺

在住外国人を支援する目的で始まった「日本語教室」では、日本語学習支援という活動が紹介される。しかし、79件の記事を概観していると、いわゆる「日本語の授業」という活動以外も記事に紹介されている例がいくつかみられた(10件)。

次に挙げる記事は、「日本語教室」の中のイベントについて紹介する記事である。

彦根市内で日本語教室などを開設している「ボランティア日本語教室スマイル」(富川和代代表)が、同市本町1丁目の西地区公民館で切り絵教室を開いた。ボランティアと市内に住む外国人20人ずつが参加し、交流した。スマイルのスタッフがあらかじめ

め「彦根きり絵研究会」の会員から手ほどきを受けて実施した。参加者の国籍はインドネシア、韓国、中国、ベトナム、オーストラリアで、ほとんどが切り絵は初めての体験。チューリップの図柄をコピーしたA4判の紙を黒の厚紙のうえに置いて切り抜き、思い思いの色紙を使って鮮やかなチューリップを仕上げていた。(朝日「切り絵で外国人と交流 彦根市／滋賀」2004.02.26 大阪地方版／滋賀 29 頁)

「日本語教室」のなかで、「切り絵教室」が開かれたことが紹介されている。切り絵教室に参加した外国人はみな切り絵をするのが初体験だという。切り絵は、茶道のように日本を代表する文化の一つに挙げられることから、「日本語教室」における日本を理解するためのイベントとして行われたのであろう。「日本語教室」では、このように文化を理解しようという目的で行われるイベントが行われる。次の記事では外国人による外国語や料理教室の紹介である。

県の海外派遣事業に参加した人たちが、奈良に住んでいる外国人を少しでも支援したいとの思いから観光案内や交流会を開いたのが始まり。継続的な活動して、90年に日本語教室を始めた。現在、日本語教室の生徒たちが母国語や家庭料理を教える講座も開かれている。(朝日「大和中央自転車道4 橿原市:下(週刊まちぶら通りをゆく)／奈良」2005.01.17 大阪地方版／奈良 31 頁)

平日は主に日本語教室などが行われるが、週末は、一般市民らを対象にして、外国人に母国の文化や習慣を話してもらう交流会や、外国映画の上映会なども開く。同市内には約七千八百人の外国人が住んでいるが、四月の開設以来のべ四千人以上の外国人が利用した。(読売「[たまり場]八王子市国際交流コーナー 外国人とふれあう拠点に＝多摩」2005.01.20 東京朝刊 33 頁)

「日本語教室」で、外国人が主体となって開かれる母国語や家庭料理を教える講座が開かれたり、外国人に母国の文化や習慣を話してもらう交流会や外国映画の上映会等が開かれたりしている。これらのイベントはいわゆる「異文化理解」や「国際理解」といった言葉で表される、外国の文化等を理解するための講座である。

切り絵教室においても、外国人による料理教室においても、「日本語教室」において日本語学習と並列に行われるイベントとして、日本文化や外国の文化等を理解するための講座が紹介されている。それは「日本語教室」が持つ日本語学習以外の「教室」である。「日本語教室」は市民が言葉だけではなく文化も学ぶ場所として描かれるのである。

6.2 外国人物語や外国人関係の事件等の中の「日本語教室」

3.3 で示したキーワード分類のなかで「オ」に該当する記事は、外国人物語や外国人関係の事件等の中で「日本語教室」が描かれる記事である。本節ではこの「オ」に該当する記事を取り上げ、外国人の物語や外国人が関係する事件のなかでの「日本語教室」について分析する。

キーワードの「オ」に該当する記事は全部で2件（読売1件、産経1件）のみである。まず読売の記事は広島で起こったペルー人による小学生女兒殺人事件の記事である。

広島市安芸区の小1女兒がペルー国籍の男に殺害された事件の影響で、同区周辺に住む外国人が、不当解雇や入居拒否など差別を受けている可能性があるとして、法務省広島法務局が来年1月、緊急の無料相談所を開設し、実態把握に乗り出す。ペルー人ら約200人が集まる25日のクリスマス会などでチラシを配って参加を呼びかけるという。人権侵害が確認されれば、雇用主や家主に対して是正勧告を行う。県国際交流室によると、安芸区や近隣の海田町に住む外国人から、「事件後に突然解雇されたり、アパートを追い出されたりした」「子どもが学校でいじめを受けている」などの悩みが、民間団体を通じて寄せられているという。このため同局では、外国人向けの日本語教室などが開かれている海田町南つくも町のひまわりプラザに、来年1月22日午後1時30分～4時の間、無料相談所を開設、人権擁護委員や通訳ら5人が被害状況を聞き取って、同局職員による調査を行うことを決めた。（読売「女兒殺害事件で外国人差別？ 法務局が無料相談所 海田で来月開設＝広島」2005.12.24 大阪朝刊 23頁）

この記事は、地元に住んでいたペルー人が起こした殺人事件の影響から、地域

に外国人差別が生じることを危惧し、法務省広島法務局が「日本語教室」に外国人向けの無料相談所を開設したという記事である。この記事からは「日本語教室」は外国人の多く集まる場所、また外国人が支援される場所として一般的に認識されていることが読み取れる。また「オ」以外で外国人の事件に関連した記事として「日本語教室」が取り上げられている記事が「イ」に1件該当したのでここで補足的に取り上げたい。その記事は愛知県の日系ブラジル人が多く居住する団地にサッカー教室ができたことを紹介する記事である。

団地内ではかつて、騒音などを巡って日本人との摩擦が絶えず、港署によると01年には月平均31件の110番通報が寄せられた。しかし、住民や行政が話し合う場を作り、日本語教室で交流を進めたりした結果、今は110番はほとんどない。(朝日「ブラジルの子にサッカーの「輪」 港区の団地で教室【名古屋】」2003.04.18 名古屋タ刊 8頁)

この記事からみえてくる「日本語教室」は、団地内の日本人と外国人との間の摩擦を解消させるために開設された場所ということである。先に挙げた広島の記事は、元々あった「日本語教室」に外国人に関する問題の解決のために無料相談所が設けられ、次に挙げた愛知の記事では、外国人に関する問題の解決のために「日本語教室」が開設された。つまり、外国人が語られる記事を通して、日本社会の中の外国人問題を解決する一つの方策としての「日本語教室」の存在を読者は気づくことになるのである。

「オ」に該当したもう一つの記事は、人口が減少傾向にある日本社会をテーマにした記事であり、そのなかで「外国人労働者」を取り上げている。そして、「外国人労働者が風景を変える」という切り出しで、日系ブラジル人の集住地区として有名な町である群馬県大泉町を紹介している。そして日系ブラジル人労働者のひとりとして、「大泉日伯センター」代表の高野さんが紹介される。

外国人労働者が風景を変える「昨日、日本に着いたばかりですが、いい働き口はありますか」「今すぐなら埼玉県北部の機械工場から求人があります」「日本人にまじって働くのですか」「そこは日系ブラジル人だけを同じ作業班に集めているの

で、言葉の心配はありません」東京から約二時間の群馬県大泉町。町の中心部を貫く国道沿いに事務所を構え、日系人らの相談に乗っているのは「大泉日伯センター」代表の高野祥子である。十三歳で故郷・鹿児島からブラジルへ渡った日系一世で、五十九歳。平成元年に夫の光男(68)と来日。今は娘二人を加えた家族四人で、日系人らに職場を紹介し、借家などの日常生活の相談に応じている。ポルトガル語しか話せない日系二世、三世らが頼りにする存在だ。富士重工業や三洋電機をはじめ、大小さまざまな工場が集まる大泉町は、町民四万二千三百五十四人の約15%、六千三百五十六人が外国人登録者(平成十五年四月現在)という全国一の「外国人過密地帯」。高野の来日ももともと、職を求めているものだった。知人から「職場が豊富」と聞いて同町に来了。確かに就職は容易だったが、日本語をすっかり忘れていたハンディも大きかった。「同じ工場で働いていたパキスタン人やイラン人が日本語を覚え、先に昇給・昇進していった。それが悔しかった」翌年、改正入管法の施行で日系人の入国条件が大幅に緩和され、専門的・技術的分野以外でも、就労が可能になった。ブラジル、ペルーなどから日系人が続々と押し寄せ、高野は平成三年、日本語教室を開設した。(産経「2【待ったなし 人口減少時代】第1部「2006年を前に」(3)」2005.01.06 東京朝刊 1頁)

高野さんの「日本語教室」は、高野さんが日本語によるコミュニケーションが十全ではなかったために、日本語を覚えた他の外国人が昇給していったことが悔しかったという体験から開設するに至ったことが紹介されている。そして高野さんは、現在、「大泉日伯センター」の代表として他の日系人に頼られる存在となっていることも紹介される。「日本語教室」は、高野さんが困難な状況を乗り越え、日本での成功を掴むための場所でもある。つまり、ここでも「日本語教室」は外国人が問題を解決するために日本語を勉強する場所、外国人が支援される場所として描かれる。

以上に挙げた記事はいずれも、外国人に関係した問題性とそれを解決するために何かの役割を担う「日本語教室」という側面が描かれていた。それは4.5で明らかにしてきた「日本語教室」で何が行われているかについて述べられていた記事と同じ描かれ方である。たとえ「日本語教室」の中身が描かれてはいない記事であっても、「日本語教室」という言葉について語られるとき、その語られ方は共

通性を持つようである。

6.3 日本人が語る日本語教室体験

新聞では読者が投書という形で自分の体験を記事にすることができる。2.2.2で示したキーワード分類のなかで「カ」に該当する記事である。分析対象である記事の中では4件の投書記事（朝日2件、読売1件、毎日1件）が該当する。そのうち3件が日本人のボランティアによる日本語教室での体験、1件は外国人が語る日本語教室での体験を綴った投書である。まず、日本人のボランティアの日本語教室体験を次に挙げる。

毎週1回、ボランティアで外国人の方たちに日本語を教えている。先日、ピンチヒッターでフィリピンの女性を担当することになった。日本人男性と結婚、来日して2年。3歳になる男の子のママでもある。資源回収施設で週に4日ほど、パートの仕事をしているとのことだった。この日、彼女は小学校低学年でよく使う国語のノート1ページに、マス目いっぱい大きな、きれいな字で作文を書いてきていた。仕事の大変さ。どうしたらお金持ちになれるのか。今でも少しずつ、フィリピンにいる家族に仕送りしているが、もっとたくさん送りたい。子育てや時間に追われて、日々、ストレスがいっぱい。温泉へ行つてのんびりしてみたい。公園でゆっくり「葉っぱ」を眺めてみたい、とも。母国では見られない秋の紅葉の美しさに、彼女も魅せられているのだろう。けれども、「疲れて、頭も心も真っ白」。どうしたらいいのだろう、と最後は結んでいた。助詞の使い方や語彙(ごい)に未熟なところはあるが、あふれんばかりの彼女の気持ちピンピンと伝わってきた。彼女にそう言うと、「わたし、もっと日本語勉強します」と笑顔を見せてくれた。きっと彼女の苦労は報われる、と思った。(東京都多摩市 曽原美佐子 主婦・56歳) (朝日「日本語教室で(ひととき)」2004.11.29 東京朝刊 23頁)

上に挙げた投書では、「日本語教室」に通う、日本人男性の配偶者でフィリピン出身の女性の話が紹介されている。それは、子育てや仕事に疲れた女性が書く作文を日本人のボランティアが読んだときのエピソードである。日本語の文法に未熟さが見られるものの女性の気持ちが伝わったことを「ボランティア」が女性に

伝えると、「もっと勉強します」という声が帰ってきた。日常を忙しく過ごしながらも、女性が見せる日本語学習への意欲をボランティアは伝えたいのであろう。この投書と同じく、他の「ボランティア」からの投書も同じようなエピソードが語られる。日系人の女性が「日本語教室」に通う動機として、日本語が原因で起こったトラブルが紹介される。

もしも電車に乗って運良く席に座っている時、急に「どいてください」と声をかけられたらどう思われますか。しかも相手はどう見ても日本人にしかみえないとしたら。誰でも怒りますよね。でもちょっと待って下さい。これは南米から来た日系の方が経験したことです。本当は「少し席を詰めて下さい」と言うつもりが、日本語が十分に理解できていないのでそんな言葉になってしまい、けんかになったそうです。私はボランティアで外国人に日本語を教えています。この話は私たちの教室に通う、同じく在日日系人の女性から聞いた話です。彼女が日本語を学ぶ気になったのもこの話がきっかけのようです。(朝日「日系人の言葉、思いやる心を(声)」2004.11.18 東京朝刊 14頁)

上記の記事では、「ボランティア」がある日系人が体験した電車のなかでのトラブルを紹介している。この話を知った別の日系人の女性は、そのトラブルが日本語を勉強する気にさせたという。この話を聞いて、「ボランティア」は、日本人と見た目があまり変わらないために日系人に起こるトラブルを「日本語教室」で知ったと語り、「遠い国から来て一生懸命働いている人々がいるということを心に留めて、見かけだけで判断することのない思いやりのある世の中になればと思います。」と結んでいる。

もう一人の「ボランティア」が書いた投書もまた、「日本語教室」で出会ったインドネシアの青年の日本語学習の様子を紹介し、「授業の合間に彼らの母国の歴史や文化、生活について話し合い、よい交流となっています。こうしたささやかな国際交流が、世界平和の一步となることを願っています。」と綴っている(毎日「[みんなの広場] 日本語指導通じ国際交流図る＝無職・松本好三・77」2004. 01. 07 東京朝刊 4頁)。

「ボランティア」の投書では、日本人が「ボランティア」として日本語を教

える場所である「日本語教室」が描かれる。そしてそこに参加する外国人は「日本語教室」で一生懸命日本語を勉強している人たちであり、「ボランティア」は熱心に外国人に日本語指導している。そして「ボランティア」たちが外国人の幸せや世界平和を願う気持ちを持つようになった場所が「日本語教室」なのである。では、一方で「日本語教室」に参加する外国人はどのように「日本語教室」と「ボランティア」を描くのであろうか。

私は三か月前に来日し、現在、札幌市で会社勤めをしています。これまで日本語は独学だけで、学校などで正式に習ったことはありません。私がこちらで本格的に始めた日本語学習を大きく支えてくれているのが、無料同然で受講できる日本語教室です。一般的に、外国人が現地で言葉を学ぶ際は、大学の留学生コースや語学学校に入りますが、いずれも高額で、学費を稼ぐため、アルバイトに追われる留学生も多いと聞きます。一方、私が通っている教室は、授業料が一回100円、一学期1500円と非常に安く、経済的に助かっています。二、三人の生徒をボランティアの先生一人が担当し、学習効果も高いものです。でも、私が最もありがたいと感じているのは、ボランティアの先生方の熱心さです。私がよく理解していない時は、英語を使ったり、漢字で筆談したりして、骨を折ってくれます。外国人に日本を好きになってもらおうという気持ちがとても強いのです。お陰で、大学の留学生コースに入らなくても、順調に日本語の勉強が続けています。外国人に、ボランティアでこれほど親切にしてくれる人たちは、他国には、それほどいないと思います。熱心な人たちから、その国の言葉を手軽に学ぶことができれば、その国への興味はより深まるでしょう。日本には、多くの外国人が訪れ、生活の場としています。各地でこうした取り組みを、さらに進めていただきたいと思います。(35 中国) (読売「[気流]LOOKにつぼん ボランティアの語学教室に感謝 会社員・鄭彬」2004.06.21 東京朝刊 11 頁)

投書をした男性は、ボランティアの「日本語教室」はお金に心配することなく日本語の勉強ができる場所と紹介する。そして、ボランティアでありながら熱心に日本語を指導してくれる親切な日本人について語り、各地で同じような取り組みが進むことを願っている。男性が描く「日本語教室」は経済的に負担のかからない日本語学習の場である。また、その「日本語教室」を支えている

熱心な「ボランティア」に感動したという気持ちを伝えている。

いずれの投書においても、日本人は熱心に日本語学習をする外国人を描き、外国人は熱心に日本語を教える日本人を描いている。そこからみえてくる「日本語教室」は日本語学習の場という側面だけである。つまり、投書のなかで描かれる「日本語教室」は熱心な「ボランティア」が熱心に日本語を学習する外国人を支援する日本語学習の場なのである。

7. 考察

本研究では、地域の日本語学習支援活動が扱われている新聞記事を分析対象とし、新聞メディアがどのように「日本語教室」を描いているのかという点を明らかにしてきた。しかし、新聞が描く「日本語教室」像が明らかになるにつれ、更にもう一つの「日本語教室」である、紙面に描かれない「日本語教室」像が顔を見せ始める。

本節では、新聞で描かれた「日本語教室」に対比する形で、新聞では全く、あるいはほとんど描かれなかった「日本語教室」についても試みに列挙してみる。これらは筆者らの経験や観察を基にして「あり得る事項」として挙げたものである。

新聞が描く「日本語教室」	新聞が描かない「日本語教室」
1 ・「労働者」または「日本人男性の配偶者」という属性の外国人参加者。 2 ・外国人参加者は「日本語力」が十分でないために、苦労した過去の経験がある。	・「労働者」または「日本人男性の配偶者」以外の外国人の参加者。 ・外国人参加者が「日本語教室」に参加する以前に、日本で経験した楽しかったこと。 ・日本語学習以外の目的で「日本語教室」に参加する外国人。 ・「日本語力が十分でない」ために、「日本語教室」で苦労した経験。あるいは、日本人参加者との間で起こった問題や葛藤。

- | | | |
|----|---|--|
| 3 | ・「ボランティア」をするのは日本人参加者である。 | ・「ボランティア」をする外国人参加者。 |
| 4 | ・日本人参加者は「先生」である。 | ・「先生」ではない日本人参加者。 |
| 5 | ・日本人参加者の属性は「主婦、学生、会社員、元教師など」である。 | ・「労働者」や「配偶者」としての日本人参加者。 |
| 6 | ・日本人参加者の外国や外国語に関するエピソードで語られる属性や動機。 | ・日本人参加者の外国や外国語に関するエピソード以外で語られる属性や動機。 |
| 7 | ・日本人参加者は熱心に日本語を教える。 | ・日本語を教えること以外のことを熱心にする日本人参加者。 |
| 8 | ・外国人参加者は熱心に日本語を勉強する | ・日本語を勉強すること以外のことを熱心にする外国人参加者。 |
| 9 | ・外国人参加者が体験した辛い経験は「日本語教室」に参加することで解消される。 | ・「日本語教室」に参加することで解消されない外国人参加者が体験した辛い経験。
・「日本語教室」に参加することで外国人参加者に起こった辛い経験。 |
| 10 | ・外国人参加者が日本語を勉強することで、配偶者と日本語で話すことに喜びを感じる。 | ・配偶者が、外国出身の妻もしくは夫の母語を勉強すること。外国人参加者が自分の母語を配偶者が使ってくれたことに喜びを感じることに。 |
| 11 | ・日本人参加者は「日本語教室」で外国人参加者と出会い、外国の文化や習慣などを知る。 | ・「日本語教室」での日本人の参加者同士の出会い、またその相互から学ぶこと。 |
| 12 | ・日本人は「日本語教室」で外国人の苦しい経験などを知る。 | ・外国人が日本人参加者の背景や苦しい経験などを知る。 |
| 13 | ・日本人参加者は「日本語教室」に参加することで、やりがいや喜びを感じる。 | ・日本人参加者は「日本語教室」に参加することで、怒りを感じることに。 |

- | | | |
|----|--|---|
| 14 | ・日本人参加者は「日本語教室」に参加する外国人参加者について語る。 | ・日本人の参加者の、他の日本人参加者に対する批判的な視点。 |
| 15 | ・「日本語教室」は外国人が無料で勉強ができる場所である。 | ・日本語学習が必要な外国人のための、公的な日本語学習機会の必要性。 |
| 16 | ・「日本語教室」は外国人が生活に必要な情報を得る場所でもある。 | ・必要な情報が外国人の目に届きにくい状態にあること。
・必要な情報が手に入れにくい状況にいる外国人。 |
| 17 | ・「日本語教室」は外国人を支援する場所である。 | ・現状が続くと、外国人が支援される側であり続けること。 |
| 18 | ・「日本語教室」の周辺では、日本文化や外国文化を理解する講座が開かれる。 | ・日本のなかに従来から内在する多様性について理解すること。 |
| 19 | ・「日本語教室」に参加すると、日本人あるいは外国人の参加者と出会うことができる。 | ・「日本語教室」は「日本語教室」以外の日本人や外国人へと繋がる場所であること。 |
| 20 | ・「日本語教室」に参加する日本人と外国人の間には言葉を越えたコミュニケーションが生じる。 | ・「日本語教室」に参加する日本人と外国人の間のコミュニケーションの齟齬。 |

前節までの分析を概括的にまとめて対照表とした本リストを見ればわかるように、「日本語教室」について書かれた記事は、4.5 で挙げたような一部の例外を除いて、「日本語教室」を一面的に捉えている。その捉え方は、「日本で生活するなかで困難を抱えている『外国人』が『日本語教室』に参加し、『ボランティア』の熱心な日本語指導を通して日常生活に明るさと希望を取り戻す」というものである。また、「日本語教室」周辺で種々の行事があったとしても、根本的な外国人参加者と日本人参加者の関係性については、「学習者」あるいは「支援される人」と「指導者/学習支援者」あるいは一般的に「支援者」という二元論的構図をどの記事も免れていない。

本稿の1節で紹介した山田（2003）や田中（1996）らの指摘は、そのような一

面的な見方や関係性の固定的な見方に対して警告を発したものである。しかしながら、新聞の記事ではそうしたクリティカルな見方や見解が呈示されることは一度もなかった。

8. おわりに

地域の日本語学習支援活動が何からの志のある市民の自発的な行為があつてこそ成り立っていることは、言うまでもない。一般的なマスメディアの一つである新聞としては、そうした市民の志や行為をないがしろにすることができないことは想像に難くない。また、市民活動の育成の観点からも、活動に参加する市民ボランティアの生き生きとした様子やボランティア活動の楽しみや喜びが描かれ、その一方で、クリティカルな論評は差し控えられることも理解できないわけではない。しかしその一方で、一般の読者が気づかないクリティカルな観点を呈示することもメディアの重要な役割であると思われる。そのような意味で、今回調査対象とした記事の大部分が、「支援する日本人と支援される外国人の記事」として、あるいは「当たり障りのない文化的な記事」として地域の日本語学習支援活動を呈示されているのは、メディアのもう一方の役割である批判精神を忘れたものであるとも言えるのではないだろうか。

また、さらに検討すると、地域の日本語学習支援活動という事象取材した記者が、そもそも対象をクリティカルに捉える視点を持ち得ていただろうか、という疑問が出てくる。この点については、時折伝えられるテレビでの「日本語教室」についての報道においても同様の疑問を感じる。

いずれにせよ、そうした批判精神が欠如した記事が流布することが、地域の「日本語教室」についての一面的な見方や「日本人支援者」と「外国人被支援者」という二元的な見方を維持することに一役買っていることは、マスメディアは認識するべきであろう。また、批判精神のある読者は、現状のようなマスメディアの報道から、対象や問題の本質を見抜く目を持たなければならない。そして最後に、日本語教育学の専門家も、自らが関わっている事象の社会的な重要性をなお一層認識して、専門家の立場からクリティカルな観点を一般に向けて発信する努力が必要であろう。

参考文献

- 田中 望(1996)「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之(編)『日本語教育・異文化コミュニケーション』pp. 23-27. 凡人社
- 西口光一(2004)「「とよなかにはんご」に期待すること」とよなかにはんごさっし編集委員会『とよなかにはんごのあゆみ 1999～2003』p. 17-21. 財団法人とよなか国際交流協会
- 文化庁 編(2004)『地域日本語学習支援の充実 共に育む地域社会の構築へ向けて』独立行政法人国立印刷局
- 山田 泉(2003)「日本語教育の文脈を考える」岡崎洋三・西口光一・山田 泉(編著)『人間主義の日本語教育』pp. 209-226 凡人社

新聞資料検索に使用したホーム・ページ

<http://www.nifty.com/common/cat/newspaper1.htm>

資料

第1論文

『中部地方外国人集住地域における共生への歩み：交流のきっかけづくり』で用いられたアンケート（一部）

182

第2論文

『「多文化共生」をめぐる現状と未来：ある韓国系民族学校の事例から』で用いられたアンケート

189

第3章

『大阪における多言語表示の実態：まちかど多言語表示調査、外国人へのアンケート調査、行政・鉄道へのインタビュー調査から』で用いられたアンケート

205

本日はお忙しいところ、このアンケートにご協力いただきありがとうございます。このアンケートによって皆様方のプライバシーを侵害するようなことは一切ございません。どうぞ率直なご意見をお書きください。なお、お忙しいところ恐縮ではございますが、**11 月 30 日（水）**までにお書きいただいたアンケートを同封の封筒に入れて、公団管理事務所までご持参くださいますようお願いいたします。（B 地域用）

この地域に関して

1) 近年、この地域が「外国人集住都市」と呼ばれていることを知っていますか。あてはまるほうに○をつけてください。（はい・いいえ）

それに対して、日頃感じておられることがあれば、自由にお書きください。

2) この地域に住んでいて、良いと思うところ、悪いと思うところなどあれば教えてください。

3) 上記のことに對して、学校や行政に希望することがありますか。

学校：

行政：

4) この地域に、お互いの家（家庭）を行き来するような親しい外国籍の友人はいますか。あてはまるほうに○をつけてください。（はい・いいえ）

「はい」と答えた方にお聞きします。人数とそこそ友人とはどのようにお知りあいになれたのか、そのきっかけを教えてください。

その人とはどのような関係（例えば、旅行に一緒に行ったりなど）ですか。

「いいえ」と答えた方にお聞きします。機会があれば、友人関係を持ちたいですか。あてはまるほうに○をつけてください。（はい・いいえ）

また、その理由を教えてください。

5) この地域で外国籍住民の方と交流する機会がありますか。あてはまるほうに○をつけてください。

（はい・いいえ）

「はい」と答えた方にお聞きします。それはどんな交流ですか。

「いいえ」と答えた方にお聞きします。それはなぜですか。

6) 将来、外国籍住民の方と一緒にいう行事（イベント）を計画したり、実施したり、参加したりしたいですか。理由とともにお答えください。

学校に関して

7) この地域の学校で日本人の子どもと外国籍の子どもがお互いにそれぞれのことばや文化などを学ぶ機会が提供されていることを知っていますか。あてはまるほうに○をつけてください。（はい・いいえ）

「はい」と答えた方にお聞きします。それに関して知っている内容を具体的に書いてください。

家庭に関して

8) 家庭内において、普段、お子さんたちとのコミュニケーションはとれていますか。あてはまるほうに○をつけてください。（はい・いいえ）

「はい」と答えた方にお聞きします。なぜ、コミュニケーションがうまくいっているのですか。

「いいえ」と答えた方にお聞きします。その理由は何でしょうか。

9) お子さんたちとコミュニケーションを十分にとるには何が必要だと思いますか。

年齢（ 歳） 男・女 お子さんの年齢（ 歳）

ご協力、ありがとうございました。

◆このアンケートに関して、ご質問・ご意見などがありましたら、ご遠慮なく下記にお問い合わせください。

大阪大学言語文化研究科 「多文化共生を考える会」

津田 Tel : 06-6850-5883 aoi@lang.osaka-u.ac.jp

高阪 Tel : 06-6850-5924 coe-ra@lang.osaka-u.ac.jp

Apesar de serem ocupados, muito obrigada pela sua colaboração em nossa pesquisa. Com certeza respeitaremos sua privacidade. Os dados adquiridos pela pesquisa não serão usados por outro objetivo além do estudo. Portanto, favor escrever sua opinião verdadeira. Após responder as questões, colocar este papel dentro do envelope menor e apresentar no escritório “**KODAN KANRI JIMUSHO**” até o dia **30 de Novembro**, por favor.

Sobre esta região

- 1) Desde quando você está morando nesta região? (Desde anos atrás)
- 2) Você sabe que esta região é chamada como “a cidade que a cidadão estrangeira mora concentradamente”? Marca um círculo a resposta mais adequada. (Sim / Não)
- O que você está sentindo sobre isto? Escreva sua opinião, por favor.

- 3) Existe pontos bons e maus, morando nesta região?

Pontos bons:

Pontos maus:

- 4) Como um dos moradores desta região, tem algum desejo para a escola ou a órgão governamental?

Para a escola:

Para a órgão governamental:

- 5) Você tem amigos japoneses íntimos(por exemplo você visita a casa deles ou vice-versa, etc)?

Marca um círculo na sua resposta mais adequada. (Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim”, quantos amigos japoneses você tem? Como vocês se conheceram? O que vocês fazem juntos?

O número de amigos japoneses : (pessoas)

Como vocês se conheceram?

O que vocês fazem juntos(por exemplo, viajar, fazer complas etc) ?

Para quem respondeu “Não”, se tiver a oportunidade, você gostaria de fazer amizade com os japoneses?

Marca um círculo na sua resposta mais adequada. (Sim / Não) E por quê?

Razão:

- 6) Voce tem oportunidade de fazer intercâmbio com os japoneses nesta região? Marca um círculo a resposta mais adequada. (Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim”, que tipo de intercâmbio vocês estão fazendo?

Para quem respondeu “Não”, por que não?

7) Quanto ao futuro, você gostaria de planejar, ou realizar e participar dos eventos que fazem algo com os japoneses? Responda com sua razão, por favor.

Sobre a escola

8) Você sabe que uma oportunidade de aprender japonês e a cultura japonesa na escola desta região é dada para os alunos estrangeiros? Marca um círculo na resposta mais adequada. (Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim”, escreva mais concreto o que você sabe sobre isto.

9) Seus filhos estão aprendendo na escola pública do Japão perto da sua casa ou na escola brasileira como “Alegria de Saber”? Por que você escolheu essa escola?

Sobre a família

10) Dentro da sua família, você está se comunicando com seus filhos? Marca um círculo na resposta mais adequada. (Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim”, como você consegue se comunicar com seus filhos melhor?

Para quem respondeu “Não”, qual é a dificuldade em se comunicar com seus filhos?

11) Em que língua você usa para seus filhos? E em que língua seus filhos usam para você?

Você para seus filhos:

Seus filhos para você:

12) O que você precisa para se comunicar melhor com seus filhos? Escreva sua opinião.

13) Você está fazendo algo para manter a língua materna(português) dos seus filhos?

*Sua idade: (anos) Sexo: M / F Idade dos seus filhos: (anos) **Muito obrigada pela sua colaboração!***

◆Se tiver alguma opinião sobre nossa pesquisa, ligue ou me mande um E-mail no endereço abaixo.

Departamento de Língua e Cultura da Universidade de Osaka (associação de pensar na convivência multi-cultural)

Tsuda *Tel:* 06-6850-5883 aoi@lang.osaka-u.ac.jp Kosaka *Tel:* 06-6850-5924 coe-ra@lang.osaka-u.ac.jp

本日はお忙しいところ、このアンケートにご協力いただきありがとうございます。このアンケートによって皆様方のプライバシーを侵害するようなことは一切ございません。どうぞ率直なご意見をお書きください。(D 地域用)

- 1) 近年、この地域では「外国人集住都市」と呼ばれていることを知っていますか。あてはまるほうに○をつけてください。(はい・いいえ)
それに対して、日頃感じておられることがあれば、自由にお書きください。

- 2) この地域に互いの家を行き来するような親しい外国人の友人はいらっしゃいますか。(はい・いいえ)
それぞれ、理由を教えてください。

- 3) この地域で外国籍住民の方と交流する機会がありますか。(はい・いいえ)
「はい」と答えた方にお聞きます。それはどのような交流でしょうか。
「いいえ」と答えた方にお聞きます。それはなぜですか。

- 4) 将来、機会があれば、イベントへの参加等、外国籍住民と何か一緒にしたいですか。
理由とともにお答えください。

- 5) 日頃、地域で生活していて学校や行政に希望することがありますか。
学校に対して：

行政に対して：

年齢(歳) 男・女 お子さんの年齢(歳)

ご協力、ありがとうございました。

◆このアンケートに関して、ご質問・ご意見などがありましたら、ご遠慮なく下記にお問い合わせください。

大阪大学言語文化研究科 「多文化共生を考える会」

津田 TEL : 06-6850-5883 aoi@lang.osaka-u.ac.jp

高阪 TEL : 06-6850-5924 coe-ra@lang.osaka-u.ac.jp

Apesar de serem ocupados, muito obrigada pela sua colaboração em nossa pesquisa. Com certeza respeitaremos sua privacidade. Os dados adquiridos pela pesquisa não serão usados por outro objetivo além do estudo. Portanto, favor escrever sua opinião verdadeira.

- 1) Desde quando você está morando nesta região?
(Mais ou menos anos atrás)
- 2) Existe pontos bons e maus, morando nesta região?
Ponto bons:

Ponto maus:
- 3) Você tem oportunidade de participar dos eventos(festa etc) com japoneses realizados pelos moradores desta região? (Sim/ Não)

Explique o porquê?
- 4) Dentro da sua casa, você está se comunicando com seus filhos? (Sim / Não)
Para quem respondeu “Sim” acima,
Quantas horas vocês estão se comunicando com seus filhos por dia?
(Mais ou menos horas)

Para quem respondeu “Não” acima, explique o porquê?
- 5) Até agora, você tem experiência de não se ter conseguido comunicar(descomunicação) com seus filhos?
(Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim” acima, como você tratou dessa situação?
- 6) Em que língua, você usa para seus filhos? E em que língua seus filhos usam para você?
você para seus filhos:

seus filhos para você:
- 7) Você acha que o que está precisando para se comunicar com seus filhos mais suficiente?
- 8) Você está pensando algo sobre a manutenção da língua materna(português) dos seus filhos? **Se for “sim”,** o qual?

9) Para seus filhos não esquecerem a língua materna(português), você está fazendo algo em casa? **Se for “sim”**, explique o quê?

1 0) Seus filhos estão aprendendo na escola pública no Japão ou escola brasileira(como “Alegria de saber” etc)? Por que você escolheu essa escola?

1 1) Até agora, você tem experiência de aprender a língua japonesa?

(Sim / Não)

Para quem respondeu “Sim”, poderia me explicar o seu objetivo, o temporário, e a maneira de aprender o japonês?

Objetivo:

Temporário:

Maneira de aprender:

1 2) Como um dos moradores desta região, você tem algum desejo para órgão governamental ? Se tiver “sim”, o que é?

Para órgão governamental:

1 3) Você queria morar no Japão para sempre? Ou futuramente você queria voltar para o Brasil? Responda o qual com sua razão.

Japão / Brasil

Razão:

Sua idade: anos Sexo: M / F Idade dos seus filhos: anos

Temporário de morar no Japão (anos)

*Se tiver interesse pela nossa pesquisa, escreva seu endereço de E-mail. Depois de pesquisa, nós mandaremos o resultado.

Muito obrigada pela sua colaboração!!

アンニョンハシムニカ？ わたしたちは、「共生」とは何だろうかということについて、大学院で勉強しています。
××中学校では、社会的・文化的に異なる背景を持つ生徒たちがいっしょに学校生活をしているという話を聞きました。異なる社会的・文化的背景を持つ友だちと学校生活を送っていて、みなさんが感じている点を率直に教えてください。また、このアンケートは研究目的以外には使用することがありません。みなさんのプライバシーが侵害されることはありませんので、率直に教えてください。

☆ 以下の質問に教えてください。

1. あなたが生まれたところはどこですか。①日本 ②韓国 ③その他()
2. (1で②または③と答えた人にお聞きます。日本で生まれた人は3に進んでください。)
日本に来てからどれくらい経ちましたか。()年 また、日本で暮らしているのはなぜですか？
①父/母の仕事のため ②日本に親戚がいるため ③その他()
3. ××にはいつから通っていますか。
①幼稚園から ②小学校()年の時から ③中学校()年の時から
4. (3で③と答えた人にお聞きます。幼稚園や小学校から建国に通っている人は5に進んでください。)
あなたが通っていた幼稚園と小学校について教えてください。
[幼稚園] ①日本にある日本の幼稚園 ②韓国にある幼稚園 ③その他()
[小学校] ①日本の小学校 ②韓国の初等学校 ③他の民族学校 ④その他()
5. あなたが××に入学することは誰が決めましたか。
①父母が決めた ②あなた自身が決めた
また、父母またはあなた自身が建国に入学することに決めたのはなぜですか。
()
6. ××に入学する前は、××はどんな学校だと思っていましたか。
()
7. ××は日本の学校や他の民族学校などと比べて、どんな点が違うと思いますか。
()
8. ××は創立当時、在日韓国人の民族教育のために作られた学校です。しかし、今では韓国から来た駐在員のこどもたちや日本人生徒もいっしょに通っています。互いに異なる背景を持つ生徒たちがひとつの学校でいっしょに勉強することについて、どう思いますか。
①非常によい ②よい ③わからない ④よくない ⑤非常によくない
9. 学校でいっしょに生活していて、それぞれ異なる背景を持つ生徒に、どんなイメージを持っていますか。
①韓国から来た生徒に対して()
②日本人生徒に対して()
③在日韓国人生徒に対して()
10. あなたといちばん仲のいい友だちを5人挙げるとすると、そのうち日本人生徒・韓国から来た生徒・在日韓国人生徒はそれぞれ何人ですか。
日本人()人 韓国から来た生徒()人 在日韓国人()人です。
11. 異なる背景を持つ生徒と友だちになろうとする時、いちばん難しいのはどんな点だと思いますか。
①ことば ②習慣 ③とくに難しい点はない ④その他()

12. あなたが友だちに対して、どのように感じているか、当てはまるものの番号に○をつけてください。

＜在日韓国人生徒と＞

＜在日韓国人生徒と＞		全	あ	わ	や	強			
		く	ま		や	く			
		そ	り	か	そ	そ			
		う	そ	ら	う	う			
		思	う		思	思			
		わ	思	な	う	う			
		な	わ						
		い	な	い					
1. 仲のいい友だちになりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
2. いっしょに何かしたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
3. ゲームのとき同じグループになりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
4. 手伝ってあげたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
5. 信頼したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
6. いっしょに話したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
7. 相手の文化的背景についていろいろ尋ねたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
8. 大切な友だち関係になりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
9. 親切に対したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
10. その友だちの意見に賛成したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5

＜韓国から来た生徒と＞

＜韓国から来た生徒と＞		全	あ	わ	や	強			
		く	ま		や	く			
		そ	り	か	そ	そ			
		う	そ	ら	う	う			
		思	う		思	思			
		わ	思	な	う	う			
		な	わ						
		い	な	い					
1. 仲のいい友だちになりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
2. いっしょに何かしたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
3. ゲームのとき同じグループになりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
4. 手伝ってあげたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
5. 信頼したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
6. いっしょに話したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
7. 相手の文化的背景についていろいろ尋ねたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
8. 大切な友だち関係になりたい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
9. 親切に対したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5
10. その友だちの意見に賛成したい	1	-	2	-	3	-	4	-	5

<日本人生徒と>

全	あ	わ	や	強
く	ま		や	く
そ	り	か	そ	そ
う	そ		う	う
思	う	ら	思	思
わ	思		う	う
な	わ	な		
い	な			
	い	い		

- | | | | | | | | | | |
|------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. 仲のいい友だちになりたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 2. いっしょに何かしたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 3. ゲームのとき同じグループになりたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 4. 手伝ってあげたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 5. 信頼したい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 6. いっしょに話したい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 7. 相手の文化的背景についていろいろ尋ねたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 8. 大切な友だち関係になりたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 9. 親切にしたい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |
| 10. その友だちの意見に賛成したい..... | 1 | - | 2 | - | 3 | - | 4 | - | 5 |

13. あなたが日本人に対して、どのように感じているか、当てはまるものの番号に○をつけてください。

- | | | | | | | |
|-------------|---|---|---|---|---|-------------------|
| | と | や | な | や | と | |
| | て | | い | | て | |
| | も | や | ら | や | も | |
| 1. 嫌いだ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 好きだ |
| 2. 親切だ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 恐ろしい |
| 3. 進んで何かする | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 進んでは何もしない |
| 4. 強い | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 弱い |
| 5. 穏やかだ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 気性が激しい |
| 6. 冷たい | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 暖かい |
| 7. 親しくなりやすい | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 親しくなりにくい |
| 8. 活動的だ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 活動的でない |

14. 修学旅行に行くとしたら、いちばん行きたい国はどこですか。また、その理由は何ですか。

行きたい国()
理由()

15. ××中学校を卒業した後、××高校に進学したいですか。また、その理由は何ですか。

①はい ②いいえ
理由()

16. 将来あなたが住みたいところはどこですか。また、その理由は何ですか。
 ①日本 ②韓国 ③その他()
 理由()
17. あなたの将来の夢は何ですか。
 ()
18. 友だちと話す時、主に何語で話しますか。
 ①韓国語でだけ話す ②日本語でだけ話す ③主に韓国語で話し、日本語も時々使う
 ④主に日本語で話し、韓国語も時々使う ⑤その他()
19. 学校で先生と話す時、主に何語で話しますか。
 ①韓国語でだけ話す ②日本語でだけ話す ③主に韓国語で話し、日本語も時々使う
 ④主に日本語で話し、韓国語も時々使う ⑤その他()
20. 家で父/母と話す時、主に何語で話しますか。
 ①韓国語でだけ話す ②日本語でだけ話す ③主に韓国語で話し、日本語も時々使う
 ④主に日本語で話し、韓国語も時々使う ⑤その他()
21. 学校でよくわからない日本語や韓国語が出てきたら、どうしますか。(当てはまるものすべてに○をつけてください。)
 ①先生に聞く ②友達に聞く ③そのまま放っておく
22. いっしょに勉強している友だちの中で、韓国語または日本語がよくわからなくて困っている人を見た時、あなたならどうしますか。
 ①そばに行って教えてあげる ②しらないふりをして大きな声で教えてあげる
 ③あとでこっそり教えてあげる ④そのまま放っておく ⑤その他()
23. 学校行事のうちでいちばん楽しいものは何ですか。また、その理由は何ですか。
 楽しい行事()
 理 由()
24. あなたが韓国人に対して、どのように感じているか、当てはまるものの番号に○をつけてください。
- | | と | や | な | や | と | |
|-------------|---|---|---|---|---|-------------------|
| | て | | い | | て | |
| | も | や | ら | や | も | |
| 1. 嫌いだ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 好きだ |
| 2. 親切だ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 恐ろしい |
| 3. 進んで何かする | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 進んでは何もしない |
| 4. 強い | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 弱い |
| 5. 穏やかだ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 気性が激しい |
| 6. 冷たい | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 暖かい |
| 7. 親しくなりやすい | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 親しくなりにくい |
| 8. 活動的だ | 1 | - | 2 | - | 3 | - 4 - 5 活動的でない |

★ あなた自身に当てはまるものに○をつけてください。

・[1年生・2年生・3年生] [男性・女性] [本国班・高級班・初級班]

・私(あなた自身)の母語は[韓国語・日本語]です。

ご協力ありがとうございました. 감사합니다!

 안녕하십니까? 저희들은 [더불어 함께 사는 삶]이란 무엇인가에 대하여 대학원에서 공부를 하고 있습니다. ××중학교에 다니는 여러분들은 각각 다른 사회적·문화적 배경을 지닌 친구들과 함께 학교생활을 보내고 있는 것으로 알고 있습니다. 다른 문화적·사회적 배경을 지닌 친구들과 학교생활을 하는 데 있어서 여러분들이 느낀 점들을 솔직하게 말씀해 주십시오. 또한 이 설문지는 연구 목적 이외에는 사용되지 않으며 여러분의 프라이버시가 침해당할 우려는 없으니 안심하고 대답해 주십시오.

1. 당신이 태어난 곳은 어디입니까? 1.일본 2.한국 3.기타()
2. (일본이 아닌 다른 곳에서 태어난 사람의 경우) 일본에 온 지 올해로 몇년째입니까? ()년째
일본에 살고 있는 이유는 무엇입니까?
①부모님의 직장 때문에 ②일본에 친척이 있어서 ③기타()
3. ××학교에는 언제부터 왔습니까?
①유치원 때부터 ②초등학교 ()학년 때 부터 ③중학교 ()학년 때부터
4. (3 번에서 중학교부터라고 대답한 사람의 경우) 당신이 다녔던 유치원과 초등학교에 대해 말씀해 주십시오.
[유치원] ①일본에 있는 일본 유치원 ②한국에 있는 유치원 ③기타()
[초등학교] ①일본공립초등학교 ②한국 초등학교 ③다른 민족학교 ④기타()
5. 당신이 ××학교에 입학하게 된 것은 누구의 결정입니까?
① 부모의 결정이다. ② 본인의 결정이다.
 잠깐만! 부모님 혹은 본인이 입학을하기로 결정한 이유는 무엇인지요?
()
6. ××학교에 들어오기 전에 ××학교는 어떠한 학교라고 알고 있었습니까?
()
7. ××학교는 일본학교나 다른 민족학교 등에 비해 어떤 점이 다르다고 생각합니까?
()
8. ××학교는 개교 당시 재일교포들의 민족교육을 위해서 설립된 학교입니다. 그러나 현재는 한국에서 온 주재원 자녀들과 소수의 일본인 학생들도 같이 다니고 있습니다. 서로 다른 배경을 지닌 학생들이 같은 학교에서 함께 공부를 하는 것에 대해서 어떻게 생각하십니까?
① 아주 좋다 ② 좋다 ③ 잘 모르겠다 ④ 싫다 ⑤ 아주 싫다
9. 학교에서 같이 공부를 하면서 각각 다른 배경을 지닌 학생들에 대해서 어떤 느낌을 갖고 있습니까?
①한국에서 온 학생들에 대하여()
②일본인 학생들에 대하여 ()
③재일교포 학생들에 대하여 ()
10. 당신이 가장 친하게 지내고 있는 친구를 5 명 꼽는다면, 그 중에서 일본인 ()명, 한국에서 온 친구 ()명, 재일교포()명이다.
11. 다른 배경을 지닌 학생들과 친구가 되는 것에 있어서 가장 어려운 점은 무엇입니까?
①언어 ②습관 ③어려운 점이 없다 ④기타 ()

12. 당신이 친구들에 대해서 어떻게 느끼고 있는 지 해당하는 사항에 동그라미를 쳐 주세요.

<재일교포 학생에 대하여>

<재일교포 학생에 대하여>		전 혀	별 로	잘	약 간	아 주
		그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 다	모 르 겠 다	그 런 것 같 다	그 런 것 같 다
1. 친한 친구가 되고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
2. 같이 뭔가를 하고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
3. 게임을 할 때 같은 편이 되고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
4. 도와주고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
5. 믿어주고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
6. 같이 이야기를 하고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
7. 상대방의 문화적 배경에 대해 여러가지 묻고싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
8. 소중한 친구관계가 되고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
9. 친절하게 대해 주고 싶다.....	1	-	2	-	3	- 4 - 5
10. 그 사람의 의견에 찬성하고 싶다	1	-	2	-	3	- 4 - 5

<한국에서 온 학생에 대하여>

<한국에서 온 학생에 대하여>	전 혀	별 로	잘	약 간	아 주				
	그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 다	모 르 겠 다	그 런 것 같 다	그 런 것 같 다				
1. 친한 친구가 되고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
2. 같이 뭔가를 하고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
3. 게임을 할 때 같은 편이 되고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
4. 도와주고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
5. 믿어주고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
6. 같이 이야기를 하고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
7. 상대방의 문화적 배경에 대해 여러가지 묻고싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
8. 소중한 친구관계가 되고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
9. 친절하게 대해 주고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
10. 그 사람의 의견에 찬성하고 싶다	1	—	2	—	3	—	4	—	5

<일본인 학생에 대하여>

<일본인 학생에 대하여>	전 혀	별 로	잘	약 간	아 주				
	그 렇 지 않 다	그 렇 지 않 다	모 르 겠 다	그 런 것 같 다	그 런 것 같 다				
1. 친한 친구가 되고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
2. 같이 뭔가를 하고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5
3. 게임을 할 때 같은 편이 되고 싶다.....	1	—	2	—	3	—	4	—	5

4. 도와주고 싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
5. 믿어주고 싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
6. 같이 이야기를 하고 싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
7. 상대방의 문화적 배경에 대해 여러가지 묻고싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
8. 소중한 친구관계가 되고 싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
9. 친절하게 대해 주고 싶다..... 1 - 2 - 3 - 4 - 5
10. 그 사람의 의견에 찬성하고 싶다 1 - 2 - 3 - 4 - 5

13. 일본인에 대하여 어떤 이미지를 갖고 있습니까? 당신이 느낀 인상을 대답해 주십시오.

- | | 매 | 조 | 잘 | 조 | 매 | |
|--------------------|---|---|-------------|---|---|---------------------|
| | | | 모
르
겠 | | | |
| | 우 | 금 | 다 | 금 | 우 | |
| 1. 싫어하는 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 좋아하는 |
| 2. 친절한 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 무서운 |
| 3. 자발적으로
원가를 하는 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 자진해서 아무 것도
하지 않는 |
| 4. 강한 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 약한 |
| 5. 온화한 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 거친 |
| 6. 차가운 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 따뜻한 |
| 7. 친해지기 쉬운 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 친해지기 어려운 |
| 8. 잘 움직이는 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 잘 움직이지 않는 |
14. 수학여행을 간다면 가장 가고 싶은 나라는 어디입니까?()
 그 이유는 무엇입니까? ()
15. ××중학교를 졸업한 이후 ××고등학교로 진학하고 싶습니까?
 ①예 ②아니오
 <그 이유는 무엇입니까?> ()
16. 장래에 당신이 살고 싶은 곳은 어디입니까? ① 일본 ② 한국 ③기타()
 그 이유는 무엇입니까? ()
17. 당신의 장래의 희망은 무엇입니까? ()
18. 친구들과 이야기를 할 때 주로 어떤 언어로 이야기합니까?
 ①한국어로만 말한다 ②일본어로만 말한다 ③주로 한국어로 말하고 일본어도 간혹 사용한다
 ④주로 일본어를 말하고 한국어도 간혹 사용한다 ⑤기타()
19. 학교에서 선생님과 이야기를 할 때 주로 어떤 언어로 이야기합니까?
 ①한국어로만 말한다 ②일본어로만 말한다 ③주로 한국어로 말하고 일본어도 간혹 사용한다
 ④주로 일본어를 말하고 한국어도 간혹 사용한다 ⑤기타()
20. 집에서 부모님과 이야기를 할 때 주로 어떤 언어로 이야기합니까?
 ①한국어로만 말한다 ②일본어로만 말한다 ③주로 한국어로 말하고 일본어도 간혹 사용한다
 ④주로 일본어를 말하고 한국어도 간혹 사용한다 ⑤기타()
21. 학교에서 잘 모르는 일본어나 한국어가 나오면 어떻게 합니까? (여러 개에 동그라미를 쳐도 됩니다) ①선생님한테 물어본다. ②친구한테 물어본다. ③그냥 가만히 있다.

22. 같이 공부하는 친구 중에서 한국어나 일본어를 잘 이해하지 못해서 어려워하고 있는 친구를 보면 어떻게 합니까?
 ①다가가서 가르쳐 준다. ②모르는 척 하고 큰 소리로 가르쳐 준다. ③나중에 몰래 가르쳐준다.
 ④그냥 가만히 있는다. ⑤기타()
23. 학교 행사 중에서 가장 즐거운 것은 무엇입니까?()
 그 이유는 무엇입니까? ()
24. 한국인에 대하여 어떤 이미지를 갖고 있습니까? 당신이 느낀 인상을 대답해 주십시오.

	매 조 잘 조 매										
	모 르 겠 다										
	우	금	다	금	우						
1. 싫어하는	1	-	2	-	3	-	4	-	5	좋아하는	
2. 친절한	1	-	2	-	3	-	4	-	5	무서운	
3. 자발적으로 원가를 하는	1	-	2	-	3	-	4	-	5	자진해서 아무 것도 하지 않는	
4. 강한	1	-	2	-	3	-	4	-	5	약한	
5. 온화한	1	-	2	-	3	-	4	-	5	거친	
6. 차가운	1	-	2	-	3	-	4	-	5	따뜻한	
7. 친해지기 쉬운	1	-	2	-	3	-	4	-	5	친해지기 어려운	
8. 잘 움직이는	1	-	2	-	3	-	4	-	5	잘 움직이지 않는	

★ 여러분에게 해당하는 곳에 동그라미를 해 주십시오.

- [1학년·2학년·3학년] [남자·여자] [본국반·고급반·초급반]
- 저의 모국어는 [한국어·일본어] 입니다.



협조해 주셔서 정말 감사합니다. 좋은 하루 되세요!!



先生方へのアンケート

本日は、お忙しいところ、アンケートへのご協力、ありがとうございます。私たちは大阪大学21世紀 COE 研究プロジェクト『インターフェイスの人文学』の一環として、「共生を生きる日本社会」というテーマで研究を進めております。この研究では、いわゆる民族学校である××学院××中学校で、先生方がご指導なさるにあたって、日頃の学校生活で感じておられる事柄についてお教えいただきたいと思っております。なお、このアンケートによって、先生方のプライバシーを侵害するようなことは一切ございませんので、率直なご意見をいただければ幸いです。

お忙しいところ恐縮ではございますが、1月17日(月)に回収に参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

☆以下の質問にお答えください。

- 1) 貴校の教育目標は何ですか。また、それに対して学校としてどのような方策がとられているとお考えですか。

[目標]

[方策]

- 2) 異なる背景を持つ生徒たちが学校生活を共に営むために、学校が実際に行っている活動として、とくにどのようなものが挙げられますか。

- 3) 先生ご自身はこれまでに、「共生」について何かお考えになったことがおありでしょうか。

(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合> 先生ご自身が考えていらっしゃる「共生」とは、具体的にどのようなものでしょうか。

- 4) 本国からの生徒や日本人生徒を受け入れることにより、学校運営において生ずる長所あるいは短所があると、先生ご自身はお考えでしょうか。

(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合> どのような点が挙げられるでしょうか。

例:

- 5) 異なる背景を持つ生徒たちが学校生活を共に営むことを円滑にする目的で設けられた空間が校内にありますか。

(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合> 上記の空間を設置するねらいは何ですか。

- 6) 下記の①～③の生徒に対する先生ご自身のイメージはどのようなものですか。思いつくこと、思いつく言葉、なんでも自由にお答えください。なお、これらの分類は最大公約数的な大まかなものとしてお考えください。

①[「在日韓国人」の生徒]

②[「本国からの韓国人」の生徒]

③[「日本人」の生徒]

- 7) 6)で挙げた①～③の生徒間には相互影響があるとお考えでしょうか。(ある・とくにない)

＜「ある」とお答えの場合＞それはどのような面でしょうか、言語面と言語以外の面に分けてお答えください。

[言語面]

[言語以外の面]

- 8) 異なる背景(習慣・言語など)を持つ生徒たちが、校内でいっしょに混在している場合、異なる背景のため、それぞれがグループ化するのではないかということが一般的には考えられます。それについてどのようにお考えでしょうか。先生ご自身の経験からお答えください。

- 9) 異なる背景を持つ生徒たちが共生するためには、これからどのような課題があると先生ご自身はお考えですか。

- 10) 先生ご自身は、日本社会において、民族教育と「共生」はどのような関係にあると思われますか。

- 11) 日本社会における、多言語・多文化共生について、先生ご自身はどのようにお考えですか。

*** 12)～16)については、現在ご担任の、あるいは過去にご担任になったクラスを想定して、[言語面]と[言語以外の面]に分けてお答えください。ご担任のクラスをお持ちになったことがない場合には、17)にお進みください。**

- 12) 異なる背景を持つ生徒たちが混在するクラス内での生徒との関わりにおいて、先生ご自身はどのようになされていますか。

[言語面]

[言語以外の面]

- 13) 「本国班」の生徒に対して、とくに心掛けていることがおありですか。(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合>先生ご自身の経験からお答えください。

[言語面]

[言語以外の面]

- 14) 生徒たちがクラス内で「共生」するようにするための、先生ご自身なりの「ノウハウ」のようなものはおありですか。(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合>先生ご自身の経験からお答えください。

[言語面]

[言語以外の面]

- 15) 韓国語の理解力があまり高くない生徒とのコミュニケーションにおける、先生ご自身なりの「ノウハウ」のようなものはおありですか。(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合>先生ご自身の経験からお答えください。

[言語面]

[言語以外の面]

- 16) 日本語の理解力があまり高くない生徒とのコミュニケーションにおける、先生ご自身なりの「ノウハウ」のようなものはおありですか。(ある・とくにない)

<「ある」とお答えの場合>先生ご自身の経験からお答えください。

[言語面]

[言語以外の面]

- 17) 最後に、先生ご自身についてお答えください。①～④について、あてはまるものをマルで囲んでください。

① 20代・30代・40代・50代・60代・その他()

② 在日韓国人()世・日本人 ③ 男性・女性

④ 担任クラスを、(現在持っている・現在持っていないが過去に持ったことがある・持ったことはない)

ご協力、どうもありがとうございました。

파견 교사용 설문지

안녕하십니까? 저희들은 오사카대학교 21 세기 COE 연구 프로젝트 『인터페이스의 인문학』의 일환으로서 「더불어 사는 일본사회」 라는 테마로 연구를 하고 있습니다. 바쁘신 중에도 불구하고 설문지 조사에 협조해 주셔서 정말 감사드립니다. 선생님들께서 일본 오사카에 소재하고 있는 민족학교인 ××학원 ××중학교에서 평소에 학생들을 지도하시면서 느끼신 점들에 대해 몇가지 묻고자 하오니 느끼신 점들을 솔직하게 말씀해 주시면 감사하겠습니다. 또한 이 설문지는 연구 목적 이외에는 사용되지 않으며 선생님들의 프라이버시가 침해당할 우려는 없으니 안심하고 대답해 주십시오.

☆다음 질문에 대답해 주십시오.

- 1) 일본에 파견교사로 오신 이유는 무엇입니까?
- 2) 일본에 파견교사로 일본에 오기 이전에 생각하던 점들과 온 이후에 실제로 느끼시는 것들간에 차이가 있습니까? ①많이 있다 ②조금 있다 ③별로 없다 ④전혀 없다
(①, ②라고 대답하신 분의 경우)있다면 그것은 어떤 점에 대해서입니까?
- 3) 학교에서 학생들을 지도하시면서 한국과 이런 점들은 다르다고 느끼시는 점들이 있다면 어떤 점들입니까?
- 4) 이 학교의 교육목표는 무엇입니까? 또한 이 목표를 위해 학교에서는 어떠한 방침을 취하고 있습니까?
[목표]

[방법]
- 5) 다른 배경을 지닌 학생들이 학교생활을 원만히 영위하기 위해서 학교측에서 실제로 하고 있는 활동들에는 어떠한 것들이 있는지요?
- 6) 「공생」이라는 말에 대해서 생각을 해보신 적이 있는지요?
① 예 ②아니오
만약, 있다면 선생님이 생각하고 계시는 「공생」이란 구체적으로 어떤 것을 의미하는지 말씀해 주십시오.

- 7) 한국에서 온 주재원 자녀들과 일본인학생들을 받아들임으로서 학교생활에 생기는 장점이나 단점이 있다면 구체적으로 어떤 것들이 있는지 말씀해 주십시오..

<장점>

예 :

<단점>

예 :

- 8) 다른 배경을 지닌 학생들이 학교생활을 원만하게 영위하도록 하기 위한 목적으로 설치된 공간이나 장소가 학교 안에 있습니까?

(있다 · 특별히 없다)

<「있다」고 대답했을 경우> 위의 공간을 설치한 목적은 무엇입니까?

- 9) 다음 ①~④의 학생들에 대해 선생님께서 갖고 계신 이미지는 어떻습니까? 생각나는 것이나 생각나는 말들이 있다면 자유롭게 말씀해 주십시오.

①재일교포학생들에 대하여:

②주재원 자녀들에 대하여:

③일본인 학생들에 대하여:

- 10) 위의 ①~③의 학생들이 함께 학교생활을 하는데 있어서 문제점들이 있다고 생각하십니까?

①있다 ②없다

★그렇게 대답하신 이유는 무엇입니까? 언어면/언어 이외의 면으로 나누어 말씀해 주십시오.

[언어면]

[언어이외의 면]

- 11) 위의 ①~③의 학생들이 교내에서 잘 어울리지 못하고 같은 그룹들끼리만 어울리는 것이 아닌가 하는 가설에 대해서는 어떻게 생각하십니까?

- 12) 다른 배경을 지닌 학생들이 더불어 함께 살기 위해서는 어떻게 해야 한다고 생각하십니까?

- 13) 학교에서 선생님들과 커뮤니케이션을 할 때는 주로 어떤 언어를 사용하십니까?

<그 이유는 무엇입니까?>

14) 학교에서 학생들과 커뮤니케이션을 할 때는 어떤 언어를 사용하십니까?

<그 이유는 무엇입니까?>

15) 일본사회에서 현재 주목받고 있는 키워드인 다언어·다문화공생에 대하여 선생님께서는 어떻게 생각하십니까?

16) 마지막으로 선생님 자신에 대하여 대답해 주십시오.

① 20대·30대·40대·50대·60대·기타 ()

② 현재 (담임·부담임)을 맡고 있다.

협조해 주셔서 정말 감사드립니다.

校長先生へのアンケート

本日は、お忙しいところ、アンケートへのご協力、ありがとうございます。私たちは大阪大学21世紀 COE 研究プロジェクト『インターフェイスの人文学』の一環として、「共生を生きる日本社会」というテーマで研究を進めております。この研究では、いわゆる民族学校である××学院××中学校で、先生方がご指導なさるにあたって、日頃の学校生活で感じておられる事柄についてお教えいただきたいと思っております。なお、このアンケートによって、先生のプライバシーを侵害するようなことは一切ございませんので、率直な意見をいただければ幸いです。お忙しいところ恐縮ではございますが、月 日()に回収に参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

☆以下の質問にお答えください。

- 1) 貴校の教育目標は何ですか。また、それに対してどのような方策がとられていますか。

[目標]

[方策]

- 2) 異なる背景を持つ生徒たちが学校生活を共に営むために、学校が実際に行っている活動として、とくにどのようなものが挙げられますか。

- 3) 民族教育において「共生」ということばがひとつのキーワードとなると思われます。これに関して、どのようにお考えでしょうか。

- 4) 本国からの生徒、および「日本人」生徒の受け入れの契機・現状・展望について教えてください。また、これらの生徒を受け入れることにより、学校運営において生ずる長所あるいは短所があるとお考えでしょうか。またある場合には、どのような点が挙げられるでしょうか。

[契機]

[現状]

[展望]

[長所あるいは短所]

(ある・ない・どちらともいえない)

＜「ある」とお答えの場合＞

例：

- 5) 異なる背景を持つ生徒たちが学校生活を共に営むことを円滑にする目的で設けられた空間が校内にありますか。

(ある・とくにない)

＜「ある」とお答えの場合＞上記の空間を設置するねらいは何ですか。

- 6) 下記の①～④の生徒に対する先生ご自身のイメージはどのようなものですか。思いつくこと、思いつく言葉、なんでも自由にお答えください。なお、これらの分類は最大公約数的な大まかなものとしてお考えください。

①[「在日韓国人」の生徒]

②[「本国からの韓国人」の生徒]

③[「日本人」の生徒]

④[「ダブル」の生徒]

- 7) 6)で挙げた①～④、とりわけ①～③の生徒間には相互影響があるとお考えでしょうか。それはどのような理由からでしょうか、言語面と言語以外の面に分けてお答えください。

(ある・ない・どちらともいえない)

[言語面]

[言語以外の面]

- 8) 6)で挙げた①～④、とりわけ①～③の生徒たちが、校内でそれぞれグループ化するのではないかという仮説について、どのようにお考えでしょうか。

- 9) 異なる背景を持つ生徒たちが共生するためには、これからどのような課題があるとお考えですか。

- 10) 日本社会における、多言語・多文化共生についてどのようにお考えですか。

- 11) 最後に、先生ご自身についてお答えください。

① 年齢()歳代

② 1世・2世・3世・その他()

ご協力、どうもありがとうございました。

رجاء بالاستفتاء

نحن ننتمي إلى الدراسات العليا بجامعة أوساكا (قسم اللغة والحضارة) حيث نبحت في أوضاع تعدد اللغات في اليابان. في هذا الاستفتاء نود أن نستفهم عن العلامات والإشارات التي توضح الاتجاهات وخرائط الطرق في أنحاء مدينة أوساكا.

- ١ - هل تعرف أنه هناك علامات (إشارات) مكتوبة بلغات أخرى غير اللغة اليابانية في أنحاء أوساكا ؟
(أ. نعم ب. لا)
- ٢ - هل تستطيع أن تفهم العلامات (الإشارات) المكتوبة باللغة اليابانية (بحروف الكانجي والكانا) فقط ؟
ex. 「お手洗」 「市バスのりば」
(أ. أستطيع الفهم ب. أستطيع الفهم إلى حد ما ج. لا أستطيع الفهم إلا قليلا د. لا أستطيع الفهم تماما)
- ٣ - هذا السؤال موجه لمن كانت إجابته على السؤال الثاني " ب ، ج ، د " .
وماذا إذا كان مكتوبا على هذه العلامات (الإشارات) المكتوبة بالكانجي طريقة قراءتها بالحروف اليابانية ؟
ex. 「お手洗」 「市バスのりば」
(أ. أستطيع الفهم ب. أستطيع الفهم إلى حد ما ج. لا أستطيع الفهم إلا قليلا د. لا أستطيع الفهم تماما)
- ٤ - هذا السؤال أيضا موجه لمن كانت إجابته على السؤال الثاني " ب ، ج ، د " .
هل تستطيع أن تفهم هذه العلامات (الإشارات) إذا كان مكتوبا عليها باللغة الإنجليزية مع اللغة اليابانية ؟
(أ. أستطيع الفهم ب. أستطيع الفهم إلى حد ما ج. لا أستطيع الفهم إلا قليلا د. لا أستطيع الفهم تماما)
- ٥ - هذا السؤال أيضا موجه لمن كانت إجابته على السؤال الرابع " ب ، ج ، د " .
وإذا كان مكتوبا على هذه العلامات (الإشارات) بلغات أخرى غير اللغة الإنجليزية كالصينية والكورية، هل تستطيع فهمها ؟
(أ. أستطيع الفهم ب. أستطيع الفهم إلى حد ما ج. لا أستطيع الفهم إلا قليلا د. لا أستطيع الفهم تماما)
- ٦ - هل تعتقد أنه من الأفضل أن تكون هذه العلامات (الإشارات) مكتوبة باللغة التي تستطيع أنت أن تفهمها بسهولة ؟
(أ. نعم ب. لا)
- ٧ - وما هي هذه اللغة ؟ ()
- ٨ - السؤال التالي عن العلامات المصورة المستخدمة في اليابان.



- هل العلامات المصورة سهلة الفهم ؟
(أ. سهلة الفهم جدا ب. سهلة الفهم ج. صعبة الفهم د. صعبة الفهم جدا)
- هل تعتقد أنه من الأفضل الإكثار منها ؟
(أ. نعم ب. لا)
- ٩ - هل تعتقد أنه لا بد من إصلاح العلامات (الإشارات) اليابانية ؟
(أ. نعم ب. لا)
- ١٠ - هذا السؤال موجه لمن كانت إجابته على السؤال التاسع " أ. نعم " .
كيف يمكن إصلاحها ؟
()
- ١١ - هل من الممكن أن نعرفنا بنفسك عن طريق ملأ الخانات التالية ؟ بالطبع لن نستخدم هذه المعلومات في غير البحث.
الجنسية () اللغة الأم () النوع (أ. ذكر ب. أنثى)
السن (~ ٢٠ ، ٢١ ~ ٣٠ ، ٣١ ~ ٤٠ ، ٤١ ~ ٥٠ ، ٥١ ~ ٦٠ ، ٦١ ~)
العنوان (أ. مقيم في منطقة الكاناساي (غرب اليابان) لمدة سنة باليابان)
ب. مقيم في غير منطقة الكاناساي (لمدة سنة باليابان)
د. غير مقيم في اليابان (بغرض السياحة إلخ ...)

شكرا لتعاونكم

Permohonan Mengisi Angket

Kami, dari Lembaga Penelitian Bahasa dan Budaya Program Pasca Sarjana Universitas Osaka, sedang mengadakan penelitian tentang kondisi penggunaan beragam bahasa asing di Jepang. Kami ingin bertanya kepada Anda mengenai petunjuk jalan dan juga peta yang mungkin Anda jumpai di sekitar Anda di Osaka.

1. Apakah Anda mengetahui bahwa ada petunjuk-petunjuk dan peringatan yang terpasang di dalam kota di Osaka yang menggunakan bahasa selain bahasa Jepang? (a. ya b. tidak)
2. Apakah Anda bisa mengerti arti petunjuk-petunjuk dan peringatan di dalam kota, baik di stasiun, jalan, pertokoan dll, jika hanya ditulis dalam bahasa Jepang (hanya memakai huruf Kanji dan Kana) saja?
(a. mengerti b. kira-kira mengerti c. tidak begitu mengerti d. sama sekali tidak mengerti)
3. Jika pada nomor 2 Anda menjawab b atau c atau d, jawablah pertanyaan berikut!
Apakah Anda akan mengerti jika seandainya pada petunjuk, peringatan tersebut disertakan huruf Hiragana yang menunjukkan cara baca Kanji yang dipakai?
(a. mengerti b. kira-kira mengerti c. tidak begitu mengerti d. sama sekali tidak mengerti)
4. Jika pada nomor 2 Anda menjawab b atau c atau d, jawablah pertanyaan berikut!
Bagaimana jika petunjuk-petunjuk, peringatan tersebut juga menggunakan bahasa Inggris selain bahasa Jepang? Apakah Anda akan mengerti?
(a. mengerti b. kira-kira mengerti c. tidak begitu mengerti d. sama sekali tidak mengerti)
5. Jika pada nomor 4 Anda menjawab b atau c atau d, jawablah pertanyaan berikut!
Bagaimana jika selain bahasa Inggris, bahasa Cina dan bahasa Korea juga digunakan pada petunjuk-petunjuk dan peringatan? Apakah Anda akan mengerti?
(a. mengerti b. kira-kira mengerti c. tidak begitu mengerti d. sama sekali tidak mengerti)
6. Menurut Anda, apakah petunjuk-petunjuk dan peringatan di dalam kota, lebih baik ditulis juga dalam bahasa yang paling mudah dimengerti oleh Anda? (a. ya b. tidak)
7. Jika pada pertanyaan 6 Anda menjawab "ya", bahasa yang Anda maksud adalah bahasa : ()
8. Pertanyaan berikut adalah mengenai pictogram (gambar) yang digunakan di Jepang.
Apakah menurut Anda pictogram mudah dipahami?
(a. sangat mudah dipahami b. mudah dipahami c. sulit dipahami d. sangat sulit dipahami)

Apakah menurut Anda penggunaannya lebih baik diperbanyak? (a. ya b. tidak)

contoh pictogram†
9. Menurut Anda perlukah diadakan perbaikan terhadap petunjuk-petunjuk, peringatan di dalam kota di Jepang ?
(a. ya b. tidak)
10. Bagi Anda yang menjawab "ya" pada nomor 9, bagaimanakah menurut Anda perbaikan yang perlu dilakukan?
()
11. Apabila Anda tidak keberatan, isilah data pribadi Anda di bawah ini. Kami tidak akan menggunakannya untuk kepentingan lain selain penelitian ini.
Warganegara () Bahasa Ibu () Jenis Kelamin (a. laki-laki b. perempuan)
Umur (...~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~...)
Tempat tinggal (a. Di Kansai (sudah menetap di Jepang selama () tahun)
b. Di luar Kansai (sudah menetap di Jepang selama () tahun)
c. tidak tinggal di Jepang (wisatawan, dsb))
Terimakasih atas kerjasama Anda

Questionnaire

We do research on multilingualism in Japan at Osaka University.

Please respond to the following questions about signs on the streets of Osaka.

1. Do you know that signs are sometimes written not only in Japanese but also in other languages?
(a. Yes b. No)
2. Do you have any difficulty understanding signs if they are written only in Japanese *kanji* and *kana*, with No *furigana*?
<*Furigana* is written above or to the right of *kanji* to show how to pronounce it>
(a. Never b. Rarely c. Sometimes d. Often)
3. If you selected “b.Rarely, c.Sometimes or d.Often” for question No.2.
Do you have any difficulty understanding signs if they are written with *furigana* included?
(a. Never b. Rarely c. Sometimes d. Often)
4. If you selected “b.Rarely, c.Sometimes or d.Often” for question No.2.
Do you have any difficulty understanding signs if they are written in Japanese AND English?
(a. Never b. Rarely c. Sometimes d. Often)
5. If you selected “b.Rarely, c.Sometimes or d.Often” for question No.4.
Do you have any difficulty understanding signs if they are written not only in Japanese and English, but also Chinese and Korean?
(a. Never b. Rarely c. Sometimes d. Often)
6. Do you want signs that are written in the language with which you are most familiar?
(a. Yes b. No)
7. Which language is that?
()



8. The following questions pertain to this pictograph(the icon) in Japan. <pictograph sample>
Is it easy for you to understand the pictograph in Japan?
(a. Very easy b. Easy c. Hard d. Very hard)
Would it be better for you if there were more such pictographs in Japan?
(a. Yes b. No)
9. Do you think that it is necessary to improve signs in Japan? (a. Yes b. No)
10. If you selected “a. Yes” for question No.9.
How should they be improved?
()
11. Please provide us with the following information. It will be used for research purposes only.
Nationality () Mother tongue () Sex (a. Male b. Female)
Age (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)
Address(a. in Kansai area(year(s)) b. outside Kansai area(year(s))
c. You don't live in Japan .(sightseeing etc..)) Thank you for your help!

Petición de la encuesta

Somos estudiantes y docentes investigadores del curso de postgrado del Departamento de Lengua y Cultura de la Universidad de Osaka y estamos realizando una investigación sobre la situación actual del multilingüismo en Japón.

A continuación, por favor, rellene las siguientes preguntas sobre planos e indicadores que están en las calles de Osaka.

- [illegible]



<pictogramas>

- ¿Cree usted que es mejor aumentar el uso de estos símbolos? (a. Sí, b. No)
9. Cree usted que es necesario mejorar los indicadores en Japón? (a. Sí, b. No)
10. (Para el que eligió b, c, d en la pregunta 4.)
¿Cómo se podría mejorar?
()
11. Datos personales (No utilizaremos estos datos para otros fines.)
Nacionalidad (), Lengua materna (), Sexo (a. Hombre, b. Mujer)
Edad (~20, 21~30, 31~40, 41~50, 51~60, 61~)
Lugar de residencia actual
a. Vivo en Kansai.(años de residencia en Japón: años)
b. Vivo fuera de Kansai(años de residencia en Japón: años)
c. No vivo en Japón (turista, etc.))
Gracias por su colaboración.

问卷调查

我们是大阪大学大学院言语文化研究科的研究人员，正在就日本多种语言并存的现状进行调查。这是关于大阪街头的地图和路标指示牌的问卷调查。

1. 你知道大阪街头的地图和路标指示牌上的指示语除了日语以外，还有其他语言吗？
(a. 知道 b. 不知道)
2. 如果指示语只用日语（即日语汉字，假名）表示，你能理解吗？
(a. 能理解 b. 基本能理解 c. 不太理解 d. 完全不理解)
3. 在 2. 中选择 b. c. d. 的请回答。
如果日语指示语标出读法能理解吗？
(a. 能理解 b. 基本能理解 c. 不太理解 d. 完全不理解)
4. 在 2. 中选择 b. c. d. 的请回答。
如果指示语除了日语以外还有英语的话，能理解吗？
(a. 能理解 b. 基本能理解 c. 不太理解 d. 完全不理解)
5. 在 4. 中选择 b. c. d. 的请回答。
如果除了英语以外，还有汉语和韩语的话，能理解吗？
(a. 能理解 b. 基本能理解 c. 不太理解 d. 完全不理解)
6. 你希望指示语中包含自己最容易理解的语言吗？
(a. 希望 b. 无所谓)
7. 是什么语？
()



8. 此项是关于日本的指示图的调查。（即右侧所示图例）
日本的指示图容易理解吗？
(a. 非常容易理解 b. 容易理解 c. 不容易理解 d. 非常不容易理解)
你认为这样的指示图应该再多一些吗？
(a. 是的 b. 无所谓)
9. 你认为日本的指示语有必要进一步改进吗？
(a. 有必要 b. 没必要)
10. 在 9. 中选择 a. 的请回答。
你认为应该如何改进呢？
()
11. 如果不介意的话，请告诉我们关于你的简要情况。这些信息将只用于研究。
国籍 () 母语 () 性别 (a. 男 b. 女)
年龄 (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)
住址 (a. 关西地区（在日本居住了 年） b. 关西地区以外（在日本居住了 年） c. 未在日本居住（观光旅游等）)

感谢你的合作。

일본의 다언어현황 조사서

■저희들은 오사카대학 대학원 언어문화연구과에서 일본의 다언어상황에 대한 연구를 하고 있습니다. 오사카 시내의 지노나 도로 안내 표시에 대해 몇가지 질문을 드리고자 하오니 협조해주시으면 대단히 감사하겠습니다.

1. 오사카 시내에 있는 거리 표시가 일본어 이외의 언어로 쓰여져 있는 경우가 있다는 사실을 알고 계십니까?
(a. 예 · b. 아니오)
2. 귀하는 일본어만으로 된 표시(한자나 일본어 문자만으로 된 표시)를 잘 이해할 수 있습니까?
(a. 잘 이해할 수 있다 b. 대체로 이해할 수 있다 c. 잘 모르겠다 d. 전혀 모르겠다.)
3. 2번 문제에서 b. c. d.라고 대답하신 분들께 여쭙겠습니다. 한자에 일본어 후리가나를 달고 있다면 어떨 것 같습니까?
(a. 잘 이해할 수 있다 b. 대체로 이해할 수 있다 c. 잘 모르겠다 d. 전혀 모르겠다.)
4. 2번 문제에서 b. c. d.라고 대답하신 분들께 여쭙겠습니다.
이 표시에 일본어 이외에 영어가 표시되어 있다면 어떨 것 같습니까?
(a. 잘 이해할 수 있다 b. 대체로 이해할 수 있다 c. 잘 모르겠다 d. 전혀 모르겠다.)
5. 4번 문제에서 b. c. d.라고 대답하신 분들께 여쭙겠습니다.
이 표시에 영어만이 아니라 중국어, 한국어가 함께 쓰여 있다면 잘 이해할 수 있다고 생각하십니까?
(a. 잘 이해할 수 있다 b. 대체로 이해할 수 있다 c. 잘 모르겠다 d. 전혀 모르겠다.)
6. 당신에게 있어서 가장 이해하기 쉬운 언어의 표시도 함께 쓰여 있는 편이 좋다고 생각하십니까?
(a. 예 · b. 아니오)
7. 그것은 어느 나라 말인지 말씀해 주십시오. (가령, 한국어/일본어 등등)
()
8. 일본에서 사용되고 있는 다음과 같은 그림 표지들에 대해 여쭙겠습니다.
이 표지가 무엇을 의미하는지 잘 이해할 수 있습니까?
(a. 아주 알기 쉽다 b. 알기 쉽다 c. 무슨 표시인지 잘 모르겠다 d. 무슨 표시인지 전혀 모르겠다)
이 그림 표지를 좀 더 늘리는 편이 좋다고 생각하십니까? (a. 예 · b. 아니오)
9. 일본의 표지판을 개선할 필요가 있다고 생각하십니까? (a. 예 · b. 아니오)
10. 9번 서 「a.예」라고 대답하신 분께 여쭙겠습니다. 어떻게 개선하는 것이 좋다고 생각하십니까?
()
11. 마지막으로 연구목적 이외에는 사용하지 않겠사오니 다음 질문에 대답해 주시면 대단히 감사드리겠습니다.
국적 () 모국어 () 성별 (a. 남성 b.여성)
연령대 (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)
주소 (a. 일본 간사이 지방에 살고 있다 (일본에 거주한 지 년)
b. 일본 간사이 지방 이외의 지역에 살고 있다(일본에 거주한 지 년)
c. 일본에 살고 있지 않다 (관광 등))

★★협조해주셔서 대단히 감사합니다. 좋은 하루 되십시오!★★

Eine Umfrage

Wir sind SprachwissenschaftlerInnen und an der Universität Osaka tätig. Zurzeit beschäftigen wir uns mit dem Problem der Multilingualität in Japan. Wir bitten Sie höflichst darum, bezüglich der Beschilderungen in Osaka die folgenden Fragen zu beantworten.

1. Wissen Sie, dass die Beschilderungen in Osaka nicht nur in Japanisch, sondern auch in anderen Sprachen geschrieben sind?

(a. Ja b. Nein)

2. Finden Sie es problematisch, wenn die Beschilderungen nur auf Japanisch geschrieben sind?
(a. Kein Problem b. ein bisschen problematisch c. etwas problematisch d. sehr problematisch)

3. Für diejenigen, die bei der Frage 2 „b“, „c“ oder „d“ gewählt haben:

Wie wäre es, wenn die Beschilderungen mit Furigana ergänzt würden?

- (a. Kein Problem b. ein bisschen problematisch c. etwas problematisch d. sehr problematisch)

4. Für diejenigen, die bei der Frage 2 „b“, „c“ oder „d“ gewählt haben:

Wie wäre es, wenn die Beschilderungen auf Englisch geschrieben wären?

- (a. Kein Problem b. ein bisschen problematisch c. etwas problematisch d. sehr problematisch)

5. Für diejenigen, die bei der Frage 2 „b“, „c“ oder „d“ gewählt haben:

Wie wäre es, wenn die Beschilderungen auf Chinesisch und Koreanisch geschrieben wären?

- (a. Kein Problem b. ein bisschen problematisch c. etwas problematisch d. sehr problematisch)

6. Glauben Sie, dass es besser wäre, wenn die Beschilderungen in der Sprache geschrieben wären, die Sie gut verstehen können?

(a. Ja · b. Nein)

7. Welche Sprache wäre das?

()



8. Wir fragen in Bezug auf die Bilder, die Sie hier auf der rechten Seite sehen. Sind solche Bilder verständlich?

< Bilder >

- (a. Sehr verständlich b. verständlich c. weniger verständlich d. unverständlich)

Fänden Sie es besser, wenn es mehr solche Bilder gäbe?

(a. Ja • b. Nein)

9. Glauben Sie, dass die Beschilderungen in Japan verbessert werden sollten?

(a. Ja · b. Nein)

- 1 0. Für diejenigen, die die Frage 9 mit „a“ („Ja“) beantwortet haben: Wie sollten sie verbessert werden?

- 1 1. Wir würden uns freuen, wenn Sie auch die folgenden persönlichen Fragen beantworten könnten:

Nationalität () Muttersprache () Geschlecht (a. Mann b. Frau)

Alter (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)

Wohnort (a. Im Kansai (In Japan Jahre)

b. Außerhalb des Kansai (In Japan Jahre) c. Nicht in Japan (Tourist))

Herzlichen Dank für Ihre Mühe!

アンケートのお願い

私たちは大阪大学の大学院言語文化研究科に所属しており、日本の多言語状況のあり方について調査しています。大阪の街角にある地図や行き方を示す表示について質問します。

1. 大阪の街角の表示が日本語以外の言語で書かれている場合があることをご存知ですか。
(a. はい ・ b. いいえ)
2. あなたは、日本語だけの表示（漢字・かなのみの表示）で理解できますか。
(a. 理解できる b. だいたい理解できる c. あまり理解できない d. 全然理解できない)
3. 2. で b.c.d. と答えた方にうかがいます。
その表示にふりがながあったらどうですか。
(a. 理解できる b. だいたい理解できる c. あまり理解できない d. 全然理解できない)
4. 2. で b.c.d. と答えた方にうかがいます。
その表示に日本語のほかに英語が使われていたら理解できますか。
(a. 理解できる b. だいたい理解できる c. あまり理解できない d. 全然理解できない)
5. 4. で b.c.d. と答えた方にうかがいます。
その表示に英語だけでなく、中国語、ハングルが使われていたら理解できますか。
(a. 理解できる b. だいたい理解できる c. あまり理解できない d. 全然理解できない)
6. あなたにとって一番理解しやすい言語の表示もあった方が良いと思いますか。
(a. はい ・ b. いいえ)
7. その言語は何語ですか。
()



8. 日本で使われているピクトグラム（絵）についてうかがいます。
ピクトグラム(絵)はわかりやすいですか。 <ピクトグラム>
(a. とてもわかりやすい b. わかりやすい c. わかりにくい d. とてもわかりにくい)
もっと多くした方が良いと思いますか (a. はい ・ b. いいえ)
9. 日本の表示は改善の必要があると思いますか。 (a. はい ・ b. いいえ)
10. 9で 「a.はい」と答えた方にうかがいます。どのように改善したら良いと思いますか？
()
11. もし、よろしければあなたのことを教えてください。もちろん、研究目的以外には使いません。
国籍 () 母語 () 性別 (a. 男性 b. 女性)
年齢 (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~) 年
住所 (a. 関西に住んでいる (日本在住 年) ・ b. 関西以外に住んでいる (日本在住 年)
c. 日本に住んでいない (観光など)) ご協力ありがとうございました。

QUESTIONNAIRE

Nous faisons des recherches à l'Université d'Osaka sur le multilinguisme au Japon. Nous vous posons des questions sur les plans et les panneaux qui se trouvent dans les rues d'Osaka.

1. Savez-vous que les plans et les panneaux sont souvent écrits dans les langues autres que le japonais ?
(a. Oui • b. Non)
2. S'ils sont écrits seulement en japonais (caractères chinois et syllabaires japonais), pouvez-vous les comprendre ?
(a. Bien b. Presque c. Pas bien d. Pas du tout)
3. Pour celui qui répond *b*, *c* ou *d* à question 2, s'ils ont accompagnés de petits syllabaires placés à côté des caractères chinois, pouvez-vous les comprendre ?
(a. Bien b. Presque c. Pas bien d. Pas du tout)
4. Pour celui qui répond *b*, *c* ou *d* à question 2, s'ils sont écrits à la fois en japonais et en anglais, pouvez-vous les comprendre ?
(a. Bien b. Presque c. Pas bien d. Pas du tout)
5. Pour celui qui répond *b*, *c* ou *d* à question 4, s'ils sont écrits en chinois et en coréen outre en anglais, pouvez-vous les comprendre ?
(a. Bien b. Presque c. Pas bien d. Pas du tout)
6. Voulez-vous qu'ils soient écrits dans la langue qui vous est la plus familière ?
(a. Oui • b. Non)
7. Quelle langue est la plus familière pour vous ?
()



8. Questions sur les pictogramme (figures) qui se trouve au Japon :
 Trouvez-vous ces pictogramme facile à comprendre ? <ピクトグラム>
 (a. Très compréhensible b. Compréhensible c. Incompréhensible d. Très incompréhensible)
 En voulez-vous plus dans les rues ? (a. Oui • b. Non)
9. Pensez-vous que c'est nécessaire d'améliorer les plans et les panneaux au Japon ?
(a. Oui • b. Non)
10. Pour celui qui répond « a. Oui » à question 9, c'est comment ? Quelle amélioration voulez-vous ?
()
11. Si cela ne vous dérange pas, remplissez les questions suivantes ; dont nous ne nous servons QUE pour nos recherches :
 Nationalité () Langue maternelle () Sex (a. mâle b. femelle)
 Âge (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 60~)
 Domicile (a. à Kansai (depuis an(s)) • b. hors de Kansai (depuis an(s))
 c. Ne pas habiter au Japon (tourisme, etc.)) Merci pour votre aide !

PHIẾU THĂM DÒ Ý KIẾN

Chúng tôi là những nghiên cứu sinh của khoa Ngôn Ngữ – Văn Hóa thuộc trường Đại học Osaka. Hiện chúng tôi đang điều tra về tình trạng đa ngôn ngữ ở Nhật Bản. Vậy xin các bạn vui lòng cho chúng tôi biết ý kiến của các bạn về các biển hiệu hướng dẫn hoặc chỉ đường đặt ở các đường phố của Osaka bằng cách trả lời các câu hỏi sau:

1. Các bạn có biết rằng các biển hiệu ở Osaka trong một số trường hợp được ghi bằng các thứ tiếng khác ngoài tiếng Nhật ra.

- a. Biết b. Không biết
2. Nếu các biển hiệu không có Furigana (tức là chữ phiên âm cách đọc Kanji) thì các bạn có hiểu không?
- a. Hiểu rõ b. Hiểu đại khái c. Không hiểu lắm d. Hoàn toàn không hiểu
3. Nếu các biển hiệu đó có Furigana thì các bạn thấy như thế nào?- Câu hỏi này dành cho các bạn đã chọn câu trả lời b,c hoặc d ở trên.
- a. Hiểu rõ b. Hiểu đại khái c. Không hiểu lắm d. Hoàn toàn không hiểu
4. Nếu các biển hiệu được ghi bằng tiếng Nhật và tiếng Anh thì các bạn thấy như thế nào?- Câu hỏi này dành cho các bạn đã chọn câu trả lời b,c hoặc d cho câu hỏi thứ 2.
- a. Hiểu rõ b. Hiểu đại khái c. Không hiểu lắm d. Hoàn toàn không hiểu
5. Nếu các biển hiệu đó được ghi bằng cả 4 thứ tiếng- Nhật, Anh, Trung Quốc, Hàn Quốc thì các bạn thấy như thế nào?
- a. Hiểu rõ b. Hiểu đại khái c. Không hiểu lắm d. Hoàn toàn không hiểu
6. Các bạn có nghĩ rằng để các biển hiệu đó trở nên dễ hiểu nhất đối với bạn , chúng nên được ghi bằng một thứ tiếng khác không?
- a. Nên b. Không nên
7. Nếu có thì đó là tiếng gì?

8. *Các bạn có cho rằng các ký hiệu đề hướng dẫn, được sử dụng ở Nhật như sau có dễ hiểu không?



- a. Rất dễ hiểu b. Dễ hiểu c. Khó hiểu d. Rất khó hiểu
- * Các bạn có cho rằng cần có nhiều hơn những ký hiệu như trên không? a. Cần b. Không cần
9. Các bạn có cho rằng nên thay đổi các biển hiệu hướng dẫn ở Nhật cho dễ hiểu hơn không?
- a. Nên b. Không nên
10. Các bạn thấy nên thay đổi như thế nào- Câu hỏi này dành cho các bạn đã chọn câu trả lời a ở trên
11. Nếu có thể được, xin các bạn vui lòng cho chúng tôi biết những thông tin sau về các bạn. Chúng tôi chỉ sử dụng những thông tin này cho mục đích nghiên cứu trên.

Quốc tịch _____ Tiếng mẹ đẻ _____ Giới tính(a.Nam b.Nữ)

Tuổi(~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)

Địa chỉ :

- a. Đang sống ở Kansai (Thời gian sống ở Nhật: _____ năm)
b. Sống ở ngoài vùng Kansai (Thời gian sống ở Nhật _____ năm)
c. Đến Nhật với tư cách là khách du lịch, thương gia...

Chân thành cảm ơn ý kiến đóng góp của các ban.

Pedido de colaboração para responder essa enquete

Nós pertencemos à faculdade de língua e cultura, na universidade de Osaka e estamos pesquisando sobre a condição “multilíngüe(vários idiomas)” na sociedade japonesa. Gostaríamos de perguntar sobre os mapas que vemos e as indicações usadas para mostrar a maneira de chegar no destino, a cidade de Osaka.

1. Você sabia que as indicações usadas na cidade de Osaka são às vezes escritas em outras línguas menos o japonês? (a. Sim b. Não)
2. Você consegue entender as indicações expressadas por apenas Kanji ou Kanji com Hiragana? (a. entendo bem b. entendo mais ou menos c. não entendo bem d. não entendo nada)
3. Perguntaremos para quem respondeu b. c. ou d. na questão 2.
Se as indicações forem escritas com “furigana(Hiragana ou Katakana utilizadas para o Kanji)”, você acha que conseguiria entender mais fácil?
(a. entenderia bem b. entenderia mais ou menos c. não entenderia bem d. não entenderia nada)
4. Perguntaremos para quem respondeu b. c. ou d. na questão 2.
Se as indicações forem escritas em inglês, além do japonês, você conseguiria entender?
(a. entenderia bem b. entenderia mais ou menos c. não entenderia bem d. não entenderia nada)
5. Perguntaremos para quem respondeu b. c. ou d. na questão 4.
Se as indicações forem escritas em chinês ou coreano além do inglês e japonês você conseguiria entender?
(a. entenderia bem b. entenderia mais ou menos c. não entenderia bem d. não entenderia nada)
6. Você acha que é melhor ter as indicações escritas em uma língua mais fácil para você entender também?
(a. Sim b. Não)
7. Qual é a língua mais fácil para você entender? ()
8. Perguntaremos sobre os “pictogramas(as ilustrações usadas no Japão)”, abaixo, são para facilitar, para você é fácil de entender esses “pitogramas”?
(a. é muito fácil de entender b. é fácil de entender c. é difícil de entender d. é muito difícil de entender)

Você acha que é melhor aumentar o número dos “pictogramas”?

(a. Sim • b. Não)

9. Você acha que é necessário melhorar as indicações vistas no Japão? (a. Sim b. Não)
10. Perguntaremos para quem respondeu “a. Sim” na questão 9. Como você acha que as indicações vistas no Japão devem ser melhoradas?
()



<pictograma>

11. Se não se incomodar, poderia informar sobre você próprio(a)? Nenhum dado aqui coletado será usado para fins que não o desta pesquisa.

Nacionalidade:() Língua materna:() Sexo:(a. Masculino b. Feminino)

Idade:(~20 21~30 31~ 40 41~ 50 51 ~60 61~)

Endereço:(a. Morar na região de Kansai (morar no Japão temporariamente anos)
b. Morar na região, menos Kansai (morar no Japão temporariamente anos)
c. Não pretendo morar no Japão (ex: agora você está de viagem, etc))

Muito obrigada pela sua atenção e colaboração!!

Анкета

Мы учимся в Школе изучения языка и культуры при аспирантуре Осацкого государственного университета. Мы проводим исследование многоязычной ситуации в Японии.

Мы хотим задать Вам вопросы, связанные с тем, как на улицах города Осака представлены карты и дорожные схемы, указывающие расположение городских объектов и способы достижения их.

1. Вы знаете, что указатели на улице написаны не только по-японски, но и на других языках?

(а. Да б. Нет)

2. Вы можете ориентироваться только по указателям на японском языке (не снабжены фуриганой)?

(а. Могу б. В основном могу в. Почти не могу г. Совсем не могу)

3. Вопрос к выбравшим в качестве ответа на вопрос 2 пункты б, в, г.

Вы понимаете, если указатели снабжены фуриганой?

(а. Понимаю б. В основном понимаю в. Почти не понимаю г. Совсем не понимаю)

4. Вопрос к выбравшим в качестве ответа на вопрос 2 пункты б, в, г.

Вы понимаете, если указатели написаны не только по-японски, но и по-английски?

(а. Понимаю б. В основном понимаю в. Почти не понимаю г. Совсем не понимаю)

5. Вопрос к выбравшим в качестве ответа на вопрос 4 пункты б, в, г.

Вы понимаете, если указатели написаны не только по-английски, но и по-китайски и по-корейски?

(а. Понимаю б. В основном понимаю в. Почти не понимаю г. Совсем не понимаю)

6. Считаете ли Вы, что лучше сделать указатели и на языке, который Вы хорошо понимаете?

(а. Да б. Нет)

7. Какой это язык?

()



8. Вопрос о пиктограммах в Японии.

Вы понимаете, что означают пиктограммы?

< пиктограмма >

(а. Понимаю б. В основном понимаю в. Почти не понимаю г. Совсем не понимаю)

Считаете ли вы, что пиктограмм в Японии должно быть больше? (а. Да б. Нет)

9. Считаете ли вы, что дорожные указатели в Японии нужно улучшить? (а. Да б. Нет)

10. Вопрос к тем, кто выбрал в ответах на вопрос 9 пункт А (Да).

Как, по вашему мнению, следует усовершенствовать указатели?

(_____)

11. Пожалуйста, укажите Ваши личные данные. Разумеется, они будут использованы только в исследовательских целях.

национальность (_____) родной язык (_____)

пол (а. Мужчина, б. Женщина)

возраст (~20 21~30 31~40 41~50 51~60 61~)

место жительства:

а. Живёте в районе Кансай (как долго? _____);

б. Живёте не в районе Кансай (как долго? _____);

в. Не проживаю в Японии (туристическая поездка и т. д.).

Спасибо за сотрудничество.

2005 年度、「COE：言語の接触と混交」津田班活動記録

2005 年 4 月

1 日 B 中学校訪問 [植田・呉]

5 月

7 日 カトリック難民移住移動者委員会 [津田] (於：岡山カトリック教会)

12 日 COE 津田班月例会

6 月

9 日 COE 津田班月例会

18・19 日 移住労働者と連帯する第 5 回ワークショップ参加 [津田、山下、植田、高阪、高野] 於：京都大谷婦人会館

19 日 まちかど多言語表示調査 [布尾、佐藤、新庄] (於：大阪市中央区、みなみ周辺)

25 日 在日朝鮮人研究会西日本部会第 28 回例会参加 [植田] (於ココプラザく大阪市内立青少年文化創造ステーション)

7 月

7 日 COE 津田班月例会

23 日 多文化・多民族をめざす会 [津田] (於：岡山カトリック教会)

24 日 まちかど多言語表示調査 [布尾] (於：大阪市鶴橋周辺)

28 日 COE 津田班ミーティング

30 日 カトリック難民移住移動者委員会 [津田] (於：岡山カトリック教会)

8 月

6～7 日 外国人教育支援全国交流会 [津田、高阪、高野]～中学卒業後の進路保障のため (於：浜松市福祉交流センター)

- 24 日 まちかど多言語表示調査【山下、布尾、佐藤】（於：梅田）
- 27 日 多文化ネット中四国フォーラム第1回総会【津田】（於：福山市市民
参画センター）
- 29 日 COE 津田班月例会
- 9 月
- 9 日 まちかど多言語表示調査【布尾、佐藤】（於：JR 京都駅周辺）
- 25 日 多民族共生教育フォーラム 2005【津田、高阪】（於：兵庫県私学会館）
- 28 日 COE 津田班月例会
- 10 月
- 1 日 第 16 回社会言語科学会「共生を生きる日本社会—学校での取り組み
を中心に—21 世紀 COE 研究プロジェクトから」招待講演【津田】
（於：龍谷大学）
- 9～10 日 カトリック難民移住移動者全国研修会【津田】（於：札幌）
- 10 日 まちかど多言語表示調査【布尾、佐藤】（於：神戸元町、三宮付近）
- 14～16 日 インタビュー調査、参与観察実施【津田、高阪】（於：三重県四日市
市）
- 20 日 COE 津田班月例会
- 21 日 多文化・多民族をめざす会【津田】（於：岡山カトリック教会）
- 22 日 教育サポートボランティア研修会【高阪】（於：高槻市総合センター）
- 11 月
- 7 日 アンケート作成開始【山下、布尾、佐藤】
- 10 日 インタビュー調査、参与観察実施【津田、高阪】（於：三重県四日市
市）
- 11 日 外国人集住都市会議よっかいち 2005 多文化共生をめざして～未来
を担う子どもたちのために～（於：四日市市文化会館第二ホール）
【津田、高阪】
- 12～13 日 インタビュー調査、参与観察実施【津田、高阪】（於：三重県四日市

市)

- 13 日 平成 17 年度文化庁日本語教育大会関西大会「多文化社会の日本語コミュニケーション」(於：立命館大学) [西口・新庄]
- 19 日 カトリック難民移住移動者委員会 [津田] (於：岡山カトリック教会)
- 19 日 『バイリンガル育成と年少者日本語教育』[高阪] 名古屋外国語大学
中島和子氏による講演 (於：京都市国際交流会館)
- 19 日 アンケート調査実施 [山下・布尾・佐藤] (於：梅田)
- 23 日 アンケート調査実施 [布尾・佐藤] (於：梅田)
- 23 日 まちかど多言語表示調査 [布尾、佐藤] (於：梅田周辺)
- 26 日 アンケート調査実施 [山下・布尾・佐藤] (於：梅田)

12 月

- 1 日 津田班月例会
- 3 日 第 32 回多言語社会研究会 (東京例会) 研究発表 [山下]
- 8 日 アンケート調査実施 [山下・布尾・佐藤] (大阪大学吹田キャンパス)
- 9 日 アンケート調査実施 [布尾] (於：大阪大学吹田キャンパス)
多文化・多民族をめざす会 [津田] (於：岡山カトリック教会)
- 10 日 アンケート調査実施 [布尾・佐藤] (於：梅田)
- 16 日 アンケート調査実施 [布尾] (於：大阪大学吹田キャンパス)
- 23 日 第 26 回多言語化現象研究会 研究会 研究発表 [佐藤・布尾]
- 23 日 インタビュー調査、参与観察実施 [津田、高阪] (於：三重県四日市市)

2006 年

1 月

- 12 月 30 日～1 月 7 日 フィールドワーク [津田] (於：三重県四日市市)
- 19 日 大阪府土木部交通道路室へのインタビュー調査実施 [布尾、佐藤]
(於：大阪府庁)
- 21 日 多文化・多民族をめざす会 [津田] (於：岡山カトリック教会)
- 23 日 国土交通省近畿運輸局 (企画振興部観光振興課) へのインタビュー

調査実施【布尾】

25 日 大阪市（ゆとりとみどり振興局文化集客部企画調査課・計画調整局
開発企画部都市デザイン課）へのインタビュー調査実施【布尾、
佐藤】

26 日 津田班月例会

28 日 カトリック難民移住移動者委員会【津田】（於：岡山カトリック教会）

2 月

25 日 カトリック難民移住移動者委員会セミナー【津田、高阪】（於：岡山
カトリック教会）メインテーマ：「子どもとどうかかわればいいのか」